宮城県文化財調査報告書第 134 集
利府町文化財調査報告書第 5 集

利府町郷楽遺跡 II

－仙塩道路関連遺跡発掘調査報告書－

平成 2 年 3 月

宮　城　県　教　育　委　員　会
利　府　町　教　育　委　員　会
建設省東北地方建設局仙台工事事務所

序　　文

仙台湾岸地域の発展を支える動脈ともなる高規格幹線道路計画は国道6号線に接続する亘理町中泉から岩沼市、名取市、仙台市、多賀城市、利府町、松島町、鳴瀬町、矢本町、石巻市、桃生町を経て、岩手県宮古市に至る高速道路建設計画です。そのうち、仙台松島道路は完成して供用を開始しております。この道路の仙台寄りの終点である利府町春日から多賀城市西部を経て、仙台市中野に至る道路が仙塩道路であり、建設省東北地方建設局仙台工事事務所が工事を担当しております。

今回調査の対象となった遺跡は郷楽遺跡等この道路計画に係わる利府圧陵上の諸遺跡です。この地域は古代の陸奥国府である多賀城に近いことから、これまで必ずしも明らかではなかった国府近隣の集落の様相を解明できる地域として、当教育委員会でも注目していたところでした。

調査では縄文時代の集落跡を始め、後期の古墳群、国府多賀城と密接に関連する奈良、平安時代の集落跡を検出でき、多大の成果を挙げることができました。とくに、奈良、平安時代の集落がその地域の先祖の残した古墳群を避けて営まれており、今も昔も、いにしえを大切にする心情に変わりがなかった感を抱かすものでありました。

また、地域文化の創造も最近とくに説かれているところです。県としましても、県内各地の文化遺産の保護伝承と活用と啓蒙に一段と力を注ぐ所存です。

本書を刊行するにあたり、県と共に発掘調査を受託され、執筆刊行で御尽力頂いた利府町教育委員会並びに、長期にわたる発掘調査に御協力を賜った建設省東北地方建設局仙台工事事務所など関係各位に対し、甚大なる感謝の意を表し、巻頭の言葉といたします。

平成２年３月

宮城県教育委員会
教育長　武　田　武　男

序　　文

仙台湾高規格幹線道路(仙塩道路)は、利府町東部から多賀城市を経て、仙台市中田に至る計画道路です。この路線が、郷楽遺跡と関わりがあるために今回の調査となりました。

郷楽遺跡は、昭和61年にも県文化財保護課の手によって発掘調査をしてきています。今回は、3次調査として前回調査の残り部分9,000m^{2}余を調査したものです。これまでの調査では、すでに奈良から平安時代の竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡21棟が発見されていましたが、今回の調査では竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡15棟が新たに発見されており、前回のそれと併せると、住居跡18軒、建物跡36棟におよぶ数となりました。それに加えて、古墳時代の円墳4基も発見されたことは、当初の予想を大きく上回る遺構の存在が明らかになったことを示し、大変喜ばしいことであります。とくに、4基の古墳のうち、1号墳の周溝から多量の埴輪の出土をみましたが、これが円筒埴輪と呼ばれる円柱形の埴輪と、埴輪上部が大きく開いた朝顔形埴輪であり、このような埴輪がこれだけまとまって見つかった例は、県内でも非常に珍しいのとされています。

さらに、4次調査として県文化財保護課の手によって、県道塩竈－吉岡線の南側部分からも縄文時代の竪穴住居跡5軒、吉代の竪穴住居跡25軒、掘立柱建物跡14棟が発見されました。

このように利府町には、私達の先祖が豊かな自然環境と、長い歴史の中で創造し、伝えてきた素晴らしい貴重な文化遺産が数多く存在しています。

「夢いっぱい、伸びよ、羽ばたけ、若い利府」のキャッチフレーズのもと、21世紀を目指した町づくりに努力し、開発事業を推進しながら地域発展に尽すことは、大変結構であります。しかし、これと同じように祖先が残した尊い文化遺産を確認し、これを保存し、大事に後世に伝える努力をすることもまたきわめて大切な事であります。

発掘調査後の整理やまとめに約7ヶ月を費やし、ようやく本書の刊行をみるに至りました。本書が学術研究の場や、郷土を知るうえの資料として、大いに活用され、町長としての誇りや、連帯感を培ううえに、大いに役立つことを期待したいと思います。

最後に、本書刊行までにいろいろ御指導、御助力を戴きました宮城県教育庁文化財保護課の方々、並びに関係各位に深甚なる感謝の意を表し、挨拶といたします。

平成2年3月

利府町教育委員会

教育長　川 名 正 男

例　　言

1. 本書は仙塩道路建設事業にかかわる宮城県宮城郡利府町郷楽遺跡の2冊目の発掘調査報告書である。
2. 本書には郷楽遺跡の第3次調査(利府町主体)、第4次調査(宮城県主体)および第1・2次調査のうち1冊目の宮城県文化財調査報告書第123集に収められなかった縄文時代早期を併せて掲載している。
3. 発掘調査や資料の整理に際し、次の方々から多大の御指導・御助言をいただいた。記して感謝申し上げたい。(敬称略)
   藤沼邦彦・村山斌夫(東地歴史資料館)村田晃一（多賀城跡調査研究部所）佐々木隆(仙台市科学館)藤沢　敦(東北大学大学院)
4. 本書における土色についての記述には『新版標準土色帖』(1973年)を利用した。
5. 本書の第1図は国土地理院発行の1/25,000地図「富谷」「松島」「仙台東北部」「塩竈」を複製して使用した。
6. 発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品については、第3次調査分は利府町教育委員会が、第4次調査分は宮城県教育委員会が保管し求めに応じて公開している。
7. 本書の作成は第3次調査分を利府町教育委員会社会教育課が、第1・2・4次調査分は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、整理・執筆は課員の検討を経て以下のとおり分担して行った。

Ⅰ ..... 進藤　秋輝
Ⅱ、Ⅲ ..... 鈴木真一郎
Ⅳ ..... 庄子　　敦、鈴木真一郎
ⅤおよびⅥ（1） ..... 菅原　弘樹、斎藤　吉弘
ⅤおよびⅥ（2） ..... 阿部　　恵、鈴木真一郎
ⅤおよびⅥ（3） ..... 庄子　　敦
ⅤおよびⅥ（4） ..... 庄子　　敦
ⅤおよびⅥ（5） ..... 菊地　逸夫、吉田雅之、庄子　　敦
Ⅶ ..... 菊地　逸夫

調 査 要 項

1. 遺　跡　名　郷楽遺跡(ごうらくいせき)
　　(宮城県遺跡地名登載番号2206・遺跡記号ＩＴ)
2. 遺跡所在地　宮城郡利府町加瀬字郷楽、森郷字後山ほか

[第3次調査]

3. 調査対象面積　17000m^2
4. 発掘調査面積　9500m^2
5. 発掘調査期間　昭和63年(1988)年5月9日～昭和63年（1988）年7月25日
6. 発掘調査主体　利府町教育委員会
　　建設省東北地方建設局仙台工事事務所
7. 調査協力機関　宮城県教育委員会
8. 発掘調査担当者　利府町教育委員会
　　庄子　敦
　　宮城県教育委員会文化財保護課
　　新庄屋元晴　真山　悟　菊地逸夫　吉田雅之　鈴木真一郎　近藤和夫

[第4次調査区]

9. 調査対象面積　15000m^2
10. 発掘調査面積　10000m^2（7000m^{2}で遺構確認）
11. 発掘調査期間　昭和63年(1988)年7月11日～昭和63年(1988)年10月31日
12. 発掘調査主体　宮城県教育委員会
　　建設省東北地方建設局仙台工事事務所
13. 調査協力機関　利府町教育委員会
14. 発掘調査担当者　宮城県教育文化財保護課
　　新庄屋元晴　阿部恵　真山悟　菊地逸夫　須田良平　吉田雅之
　　鈴木真一郎　近藤和夫

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境およびこれまでの調査結果 3
Ⅲ　調査の方法と経過 7
Ⅳ　基本層位 9
Ⅴ　発見された遺構と出土遺物 12
(1)縄文時代早期の遺構と出土遺物 12
(2)縄文時代中期の遺構と出土遺物 25
A　竪穴住居跡と出土遺物 25
B　土壙と出土遺物 52
(3)弥生時代の遺構と出土遺物 68
(4)古墳時代の遺構と出土遺物 70
(5)古代の遺構と出土遺物 83
A　竪穴住居跡 83
B　掘立柱建物跡 153
C　焼土遺構 171
D　溝　跡 172
Ⅵ　考　　察 174
(1)縄文時代早期の遺構と出土遺物 174
(2)縄文時代中期の遺構と出土遺物 177
(3)弥生時代の遺構と出土遺物 184
(4)古墳時代の遺構と出土遺物 185
(5)古代の遺構と出土遺物 192
Ⅶ　まとめ－集落の構成と遺構の変遷－ 201
写真図版 208

図版目次

第1図　郷楽遺跡とその周辺の遺跡 4
第2図　郷楽遺跡の地形図および調査区位置図 8
第3図　遺構配置図（全） 10
第4図　遺物集中地点（縄文時代早期末葉） 12
第5図　遺物集中地点の土器 13
第6図　第3・4号土壙 13
第7図　遺物集中地点出土土器 14
第8図　第3号土壙出土の縄文土器 15
第9図　第3号土壙出土の石器 15
第10図　第4号土壙出土の土器 16
第11図　沢堆積土（遺物包含層）の平面分布 17
第12図　沢堆積土（遺物包含層）の断面図 17
第13図　沢堆積土出土土器 18
第14図　沢堆積土出土土器（1） 21
第15図　沢堆積土出土土器（2） 22
第16図　表土および遺構外出土の土器・石器（第1・2次調査区） 23
第17図　第3次調査区出土の石器 24
第18図　遺構配置図（第4次調査区） 26
第19図　第115号住居跡 28
第20図　第115号住居跡出土遺物（1） 30
第21図　第115号住居跡出土遺物（2） 31
第22図　第115号住居跡出土遺物（3） 32
第23図　第121号住居跡 34
第24図　第121号住居跡出土遺物（1） 36
第25図　第121号住居跡出土遺物（2） 37
第26図　第121号住居跡出土遺物（3） 39
第27図　第121号住居跡出土遺物（4） 40
第28図　第121号住居跡出土遺物（5） 41
第29図　第126号住居跡 43
第30図　第126号住居跡出土遺物（1） 44
第31図　第126号住居跡出土遺物（2） 45
第32図　第127号住居跡 46
第33図　第127号住居跡出土遺物 47
第34図　第133号住居跡 49
第35図　第133号住居跡出土遺物（1） 50
第36図　第133号住居跡出土遺物（2） 51
第37図　第101号土壙と出土遺物（1） 54
第38図　第101号土壙出土遺物（2） 55
第39図　第101号土壙出土遺物（3） 56
第40図　第102号土壙と出土遺物 57
第41図　第103号土壙と出土遺物 59
第42図　第104号土壙と出土遺物 60
第43図　第104号土壙と出土遺物 62
第44図　第106号土壙と出土遺物 63
第45図　第108・109号土壙 64
第46図　第110号土壙と出土遺物 65
第47図　基本層位出土遺物（縄文時代中期の土器） 66
第48図　1～4号墳付近の遺構配置図（第1・3次調査区） 67
第49図　第19号住居跡 68
第50図　第19号住居跡出土遺物 69
第51図　1号墳 70
第52図　1号墳出土遺物（1） 71
第53図　1号墳出土遺物（2） 72
第54図　1号墳出土遺物（3） 73
第55図　1号墳出土遺物（4） 74
第56図　2・3号墳 75
第57図　2・3号墳出土遺物 76
第58図　4号墳（1） 77
第59図　4号墳（2） 79
第60図　4号墳出土遺物（1） 80
第61図　4号墳出土遺物（2） 80
第62図　4号墳出土遺物（3） 81
第63図　4号墳出土遺物（4） 82
第64図　第8号住居跡 84
第65図　遺構配置図（第1～3次調査区南側） 85
第66図　第8号住居跡出土遺物 86
第67図　第9号住居跡 87
第68図　第9号住居跡出土遺物（1） 88
第69図　第9号住居跡出土遺物（2） 89
第70図　第10号住居跡 90
第71図　第10号住居跡出土遺物 91
第72図　第11号住居跡 93
第73図　第11号住居跡出土遺物（1） 94
第74図　第11号住居跡出土遺物（2） 95
第75図　第12号住居跡と出土遺物 96

第76図　第13号住居跡 97
第77図　第13号住居跡出土遺物 98
第78図　第14号住居跡 100
第79図　第14号住居跡出土遺物（1） 101
第80図　第14号住居跡出土遺物（2） 102
第81図　第15号住居跡と出土遺物 103
第82図　第16号住居跡 104
第83図　第16号住居跡出土遺物 105
第84図　第17号住居跡と出土遺物 106
第85図　第18号住居跡 107
第86図　第101号住居跡と出土遺物（1） 109
第87図　第101号住居跡と出土遺物（2） 110
第88図　第102・103号住居跡と第102号
住居跡出土遺物 111
第89図　第103号住居跡出土遺物 112
第90図　第104号住居跡と出土遺物（1） 113
第91図　第104号住居跡出土遺物（2） 114
第92図　第105A号住居跡 116
第93図　第105A号住居跡出土遺物（1） 117
第94図　第105A号住居跡出土遺物（2） 118
第95図　第105B号住居跡と出土遺物（1） 119
第96図　第105B号住居跡出土遺物（2） 120
第97図　第106号住居跡と出土遺物（1） 121
第98図　第106号住居跡と出土遺物 122
第99図　第107号住居跡 123
第100図　第107号住居跡出土遺物（1） 124
第101図　第107号住居跡出土遺物（2） 125
第102図　第107号住居跡出土遺物（3） 126
第103図　第108号住居跡出土遺物（1） 128
第104図　第108号住居跡出土遺物（2） 129
第105図　第108号住居跡出土遺物（3） 130
第106図　第109号住居跡と出土遺物 131
第107図　第110・116号住居跡と第110号
住居跡出土遺物（1） 133
第108図　第110号住居跡出土遺物（2） 134
第109図　第116号住居跡出土遺物（1） 134
第110図　第111号住居跡出土遺物 135
第111図　第112・118・119住居跡 136
第112図　第112号住居跡出土遺物 137
第113図　第113・117号住居跡と第113号
住居跡出土遺物 139
第114図　第114号住居跡と出土遺物 140
第115図　第120号住居跡と出土遺物 141
第116図　第122号住居跡と出土遺物 142
第117図　第123号住居跡と出土遺物（1） 143
第118図　第123号住居跡出土遺物（2） 144
第119図　第124号住居跡と出土遺物 146
第120図　第125号住居跡 147
第121図　第125号住居跡出土遺物 148
第122図　第128号住居跡と出土遺物 149
第123図　第129号住居跡と出土遺物 150
第124図　第130号住居跡と出土遺物 151
第125図　第13号掘立柱建物跡 153
第126図　第23号掘立柱建物跡 154
第127図　第24号掘立柱建物跡 155
第128図　第24・30・31号掘立柱建物跡
出土遺物 155
第129図　第25号掘立柱建物跡 156
第130図　第26・27号掘立柱建物跡 157
第131図　第28・29号掘立柱建物跡 158
第132図　第30・31号掘立柱建物跡 160
第133図　第32・33号掘立柱建物跡 162
第134図　第34～37号掘立柱建物跡 163
第135図　第33・34・37号掘立柱建物跡
出土遺物 164
第136図　第101号掘立柱建物跡 165
第137図　第102号掘立柱建物跡 165
第138図　第103・104・107・113号
掘立柱建物跡 166
第139図　第105・106号掘立柱建物跡 168
第140図　第108・109・110号掘立柱建物跡 169
第141図　第111号掘立柱建物跡 170
第142図　第112号掘立柱建物跡 171
第143図　第114号掘立柱建物跡 171
第144図　表土およびその他の遺構出土遺物 173
第145図　遺構の変遷（1）県道北側 203
第146図　遺構の変遷（2）県道南側 204
第147図　郷楽遺跡の変遷 206

Ⅰ　調査に至る経過

第4次全国総合開発計画に基づく高規格幹線道路網計画の一環として、仙台湾岸地域の発展を支える動脈ともいえる仙台湾岸高規格幹線道路事業計画が仙塩地区総合交通計画委委員会(東北地方建設局・宮城県・仙台市・日本道路公団・宮城県道路公社で組織)で昭和47年～52年に検討・立案された。路線は国道6号線から連結して、現在の国道45号線の交通緩和を計り、岩手県宮古市にいたるもので、道路区分では仙台東道路(亘理郡亘理町中泉～仙台市中野：26.3km)、仙塩道路(仙台市中野～宮城郡利府町春日：7.1km)、仙台松島道路(利府町春日～宮城郡松島町根廻：11.5km)、鳴瀬道路(松島町根廻～桃生郡鳴瀬町川下：6.8km)、矢本道路(鳴瀬町川下～桃生郡矢本町：9.4m)、石巻道路(矢本町赤井～石巻市蛇田5.6km)、石巻北道路(石巻市蛇田～桃生郡桃生町太田：10km)からなる。

このうち、仙台松島道路については昭和56年～60年に埋蔵文化財の調査が終わり、既に供用を開始している。

今回報告するのは仙台松島道路に連結して、その終点である利府町春日から同町稲葉崎、多賀城市市川を経て仙台市中野に至る仙塩道路にかかわる遺跡のうち、利府町郷楽遺跡を対象として昭和63年度に実施した第3次・4次調査の成果である。調査に至った経過は以下のとおりである。

昭和56年11月に事業主体者である建設省東北地方建設局仙台工事事務所から計画概要の説明と路線敷内の埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。この要請をうけて、宮城県教育委員会は昭和57年3月に利府町教育委員会、多賀城市教育委員会とともに路線敷内の分布調査を実施した。その結果、利府町郷楽遺跡、天神台遺跡、台城B遺跡、天形遺跡、稲葉崎A遺跡、市川橋遺跡(多賀城市に跨る)。多賀城市山王遺跡、六貫田遺跡の8遺跡がかかわることが明らかになった。

路線が確定していたため、確認調査から実施することになり、用地取得などの制約もあって、県教育委員会は昭和61年4月に郷楽遺跡の一部と天神台遺跡の2遺跡に限って発掘調査を受託した。野外調査は郷楽遺跡については昭和61年6月～8月(第1次調査)と同年11・12月(第2次調査)に6800m^2を対象にして確認調査と一部事前調査を実施した。その結果、調査区外の未取得地に奈良平安時代の集落や埴輪の出土する古墳の周溝が広がることがわかり、全面的な調査が必要になった。また、天神台遺跡については2700m^2を対象とした確認調査の結果、土壙18基と溝7条が検出されたにすぎなかったため、事前調査に切り換えて調査を終了させた。これらの成果については宮城県文化財調査報告書第123集にすでに収録されている。

昭和62年度は地権者との用地交渉が成立しなかったため、野外調査ができなかったが、用地

等の条件整備が完了した昭和63年には、天形遺跡、稲葉崎A遺跡、台城B遺跡については確認調査を、郷楽遺跡については事前調査を実施することにした。このうち、郷楽遺跡については県道吉岡塩釜線の北側の地域を利府町教育委員会が受託し(郷楽遺跡第3次調査)、南側の地域(郷楽遺跡第4次調査)と天形遺跡、稲葉崎A遺跡、台城B遺跡の確認調査は宮城県教育委員会が受託することにした。

その結果、郷楽遺跡では8世紀中頃から10世紀後半の掘立柱建物群と竪穴住層群から構成される集落と古墳時代後期(6世紀)の古墳群が検出され、6世紀以降、豪族の墓域として使用されていたこの地域が陸奥府多賀城が特に活発に発展する8世紀中頃に集落として組み込まれていることが確かめられた。8世紀中頃の竪穴住居跡のカマドや暗渠施設に多賀城第Ⅱ期の瓦が多量に使用されていることから、この集落が多賀城またはその生産瓦窯である台の原瓦窯跡群と密接なかかわりをもつことが注目された。天彩遺跡、稲葉崎A遺跡、台城B遺跡については見るべき遺構はなかった。

本調査により、郷楽遺跡については、まだ計画が具体化していない県道吉岡塩釜線の切り回し道路部分および移転交渉が難航している宅地一軒を残して、調査はほぼ終局を迎えることになった。

本書は利府町教育委員会及び宮城県教育委員会がそれぞれ、発見遺構と遺物について整理・執筆し、関係者の検討を経て、一書として刊行したものである。

遺　跡　名	所　在　地	対象面積m²	調査面積m²	調 査 年 月 日
郷楽遺跡（第３次） （第４次）	利府町森郷字後楽・ 加瀬字郷楽ほか	17000 15000	9500 10000	63.5. 9～ 7.25 63.7.11～10.31
天形遺跡	利府町加瀬字天形	4000	2000	63.5.16～ 5.18
稲葉A崎遺跡	利府町加瀬字稲葉崎	3000	1000	63.5. 9～ 5.11
台城B遺跡跡	利府町加瀬字台城	3000	1000	63.5. 9～ 5.16

Ⅱ　遺跡の位置と環境およびこれまでの調査結果

(遺跡の位置と環境)　郷楽遺跡は宮城県利府町加瀬字郷楽ほかに所在する遺跡である。利府町役場から東へ1km余の丘陵上に位置しており、海岸線からも近く、塩竈湾奥から3kmほどである。

利府町東部は、松島から塩竈・多賀城まで続く丘陵地帯（松島丘陵）となっている。丘陵は複雑に開析されて利府町中央部の沖積低地へ樹状に張り出している。本遺跡は加瀬字十三塚付近から森郷字川袋にかけて南北に延びる丘陵の尾根から南～西斜面に立地している。遺跡は西から入り込む沢に沿って設けられた県道吉岡塩竈線によって南北に二分されている。標高は県道北側で55～70m、南側で45～55mである。

第3次調査区は県道北側のうち、第1・2次調査時点において用地問題が未解決のため調査が行われなかった部分である。これまでは梨畑あるいは宅地として利用されている。調査の結果、丘陵斜面では第1・2次調査区に続く古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡を中心とする集落跡のほか、屋根付近には弥生時代の竪穴住居跡や古墳時代の円墳が発見されている。

第4次調査区は第1～3次調査区と沢(県道)を挟んで南側にあたる。これまでは宅地・畑地として利用されていた。調査の結果、第1～3次調査区につながる古代の竪穴住居跡や掘立柱建物を中心とする集落跡のほか、縄文時代中期の竪穴住居跡や土壙が検出されている。

なお、郷楽遺跡および南側に隣接する天神台遺跡の範囲を発掘調査結果等から訂正している。

また、本遺跡に直接係わる文献はないが、吉田東伍の「大日本地名辞書」によれば、「和名抄」所載の宮城郡十郷のうちの「赤瀬郷」は本遺跡のある加瀬地区を含む利府であるとしている。

(周辺の遺跡)当地域では旧石器時代から中近世に到るまで、各時代の遺跡が発見されている。時代ごとに主な遺跡を概観すると、旧石器時代の遺跡には、本遺跡に隣接する後楽東遺跡や山屋敷遺跡のほか、多賀城市志引遺跡がある。

縄文時代の遺跡には前期の集落跡が検出されている六田遺跡、中期の貝塚である加瀬貝塚ほか本遺跡周辺の丘陵上にも洞女喜遺跡、川袋遺跡などの遺物散布地が見られる。また、大木式土器の標識遺跡である七ヶ浜町大木囲貝塚は本遺跡の南東5kmに位置している。

弥生時代の遺跡は当地域では少ないが、利府町内には土器のほか人骨が発見されている、浜田洞窟遺跡がある。

古墳時代には遺跡数の増加がうかがわれる。本遺跡の北側には川袋古墳群があり、横穴式石室を持つ古墳が確認されている。ほかに古墳には法印塚古墳や高崎古墳群などの高塚古墳や、菅谷横穴古墳群や多賀城南門跡付近の横穴古墳がある。また八幡崎B遺跡では末期の集落跡が

検出されているほか、仙台市鴻ノ巣遺跡から多賀城市新田・山王・市川橋遺跡にかけては中期からの集落跡あるいは祭祀に関係するとみられる遺構遺物が発見されている。

古代においては、奈良時代に本遺跡の南2kmの位置に陸奥国府の多賀城跡が造営されており、その周辺には多賀城廃寺、館前遺跡、柏木遺跡や山王・市川橋・高崎遺跡などの多賀城と密接

第１図　郷楽遺跡及び周辺の遺跡の位置図

No	遺跡名	時代	備考	No	遺跡名	時代	備考
1	鍋楽遺跡	縄文・弥生・古墳・古代	集落跡・古墳	51	山下遺跡	古墳・古代	集落跡
2	後楽東遺跡	旧石器		52	明沢遺跡	縄文	
3	天神台遺跡	古代（平安）		53	六面遺跡	縄文（明）	
4	山屋敷遺跡	旧石器・縄文		54	西津守館跡	古代・中世	館跡
5	銅女嬢遺跡	縄文（中・後）		55	根下遺跡	古墳・古代	
6	十三塚遺跡	古代		56	円福寺遺跡	古代	
7	十三本塚遺跡	不明	塚	57	利府城跡	古代・中世	
8	加瀬目塚	縄文（中）・古代		58	鮎ヶ沢A・B遺跡	古墳・古代	
9	北窪遺跡	古代		59	八幡崎B遺跡	縄文・弥生・古墳・古代	
10	天形遺跡	古代		60	深山遺跡	縄文	
11	窪遺跡	古代		61	深山館跡	中近世	館跡
12	加瀬遺跡群	縄文・古代	13～20を含む	62	熊野堂遺跡	古代	
13	台城C遺跡	古代		63	八幡崎A遺跡	古代	
14	台城遺跡	縄文		64	前田遺跡	古代	
15	台城B遺跡	古代		65	大沢楽A遺跡	古代	
16	稲葉崎遺跡	古代		66	山印遺跡	古代	
17	稲葉崎B遺跡	古代		67	大沢楽B遺跡	古代	
18	松崎A遺跡	古代		68	伊豆敢比売神社	古代双陽	神社
19	松崎C遺跡	古代		69	山田代遺跡	古代	
20	松崎B遺跡	古代		70	菅谷横穴古墳群	古墳・中世	横穴墓、石窟
21	多賀城跡　（特別史跡）	古墳・奈良・平安	国府・横穴墓	71	東天神遺跡	古代	
22	市川橋遺跡	縄文・弥生・古墳・古代	集落	72	菅谷館跡　（竹林城跡）	中世	館跡
23	山王遺跡	古墳・古代・中世	集落	73	伏印塚古墳	古墳	
24	六貫田遺跡	古代		74	北熊野前遺跡	古代	
25	高崎古墳群	古墳	古墳	75	馬場崎遺跡	古代	
26	高崎遺跡（水入、井戸沢）	古代・中世	集落	76	馬場崎遺跡	古代	
27	東田中宿前遺跡	古代・中世		77	穴ヶ沢遺跡	古代	
28	志引遺跡	旧石器・古代・中世		78	笠菅沢遺跡	古代	
29	多賀城院寺跡　（特別史跡）	奈良・平安	寺院	79	荒野原遺跡	古墳・古代	
30	智ヶ谷館跡　（特別史跡）	中近世	集落	80	西天神遺跡	古代	
31	福荷殿古墳	古墳（後）	古墳	81	岩切城跡	中世	城館
32	桜井館跡	中世		82	南沢遺跡	縄文	
33	八幡遺跡	古代・中世		83	若宮前遺跡	縄文・古代・近世	集落
34	館前遺跡　（特別史跡）	古代	守りの館跡	84	銅ノ口遺跡	平安・中近世	
35	西沢遺跡	古代		85	鳩ノ巣遺跡	弥生・古墳・古代	集落
36	法性院遺跡	古代		86	内館館跡	中世	
37	高原遺跡	古代・中世		87	新田遺跡	古墳・古代・中世	集落
38	小沢原遺跡	古代		88	安楽寺遺跡	古代・中世	寺院
39	野田遺跡	古代・中世		89	大田北遺跡	古代	
40	矢合ヶ館跡	古代・中世	館跡	90	蓮沼遺跡	古墳・古代	
41	桜本遺跡	中世	館跡？	91	関根遺跡	古代	城館
42	塩竈古館跡	中世		92	石田遺跡	古代	
43	塩竈神社	平安双陽	神社	93	川袋遺跡	縄文	集落
44	清水沢横穴古墳	平安？	横穴墓	94	川袋古墳群	古墳（後）	古墳
45	西津守館跡	中世	館跡	95	山中遺跡	縄文・古墳	集落
46	藤倉館跡	中世	館跡	96	硯沢窯跡	古代	瓦須恵器窯跡
47	中倉窯跡	奈良	須恵器窯	97	南馬場崎横穴古墳群・穴薬師館屋仏	古墳・中世	横穴墓・石窟
48	大沢窯跡	古代・近世	瓦・須恵器窯	98	沢乙遺跡	縄文・古代・中世	
49	春日大沢瓦窯跡	奈良・平安	瓦窯	99	御屋敷館跡	中世	
50	袖沢遺跡	古代		100	伊保石横穴古墳	古墳	横穴墓

に関連する遺跡群がある。本遺跡の北西3kmほどの利府町春日地区には大沢窯跡、硯沢窯跡を初めとする大規模な窯跡群があり、奈良時代には須恵器、平安時代には瓦や須恵器を焼いていた国衙官窯跡群の一つであることが分かっている。本遺跡の位置は多賀城からこの窯跡群へ到る中間地点でもあり、古代の集落跡が検出されている稲葉崎Ｂ遺跡がある加瀬遺跡群をなど、丘陵上には古代の遺物散布地がよく見られる。

中世においても多賀国府の隣接地区として当地域は重要な位置を占める。丘陵上には岩切城

跡や利府城跡など中世城館跡が多く、平地にも多賀城市新田遺跡のように武士の館跡とみられる遺構が発覚されている。また、寺院跡、板碑、石窟、磨崖仏など信仰、供養に関する遺跡も多い。

（これまでの調査結果）　郷楽遺跡は昭和61年に第1・2次調査が行われ、既に報各書が刊行されている(斎藤ほか：1987)。それに基づいてこれまでの調査結果を概括する。

①遺跡は南北に延びる標高50～70mの低い丘陵の尾根から西斜面に立地しており、縄文、古墳、奈良・平安の各時代の遺構遺物が発見されている。

②縄文時代早期末葉の遺構と遺物が第1次調査中県西に集中して分布する。遺構には、土壙2基、遺物包含層1ヵ所、遺物集中地点1か所があり、遺物には縄文土器、石器がある。

③古墳時代の遺構として第1次調査区中県西で古墳を確認している。周溝から壇埴輪が出土している。これとは別に、第1次調査区北側の阿部氏邸内にも横穴式石室の奥壁石と思われる泥岩の切り岩があり、複数の古墳の存在が予想される。なお本調査は第3次調査で実施されている。

④奈良・平安時代の遺構が第1次調査区南側および第2次調査区全域で発見されている。遺構には竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡21棟、埋設土器遺構6基、遺物包含層1か所のほか焼土遺構、溝跡、土壙などがある。出土遺物には土師器坏・碗・甕・耳皿、須恵器坏・高台付坏・盤・蓋・・・鉢・長頸壺面・硯、赤焼土器の坏・甕・灰釉陶器、緑釉陶器、砥石、鉄製品の刀子・紡錘車・かりまた鏃等がある。これらの遺構群は重複・切り合い関係や配置状況、出土遺物により8世紀事中葉から10世紀にわたる大きく3段階の変遷として捉えられている。掘立柱建物跡には柱穴掘り方が一辺が1m前後と大きいものがあり、また周囲に溝を巡らしているものがみられ、竪穴住居跡には一辺が8mを超えるものもある。埋設土器遺構は地鎮儀礼にかかわる遺構と考えられる。また、集落内としての遺構の構成や、豊富な須恵器、緑釉陶器・灰釉陶器・円面硯などの出立は、国府多賀城との近接性を示すものと思われる。

　その他、近世の炭窯等の遺構も検出している。

以上のような遺構群はさらに未調査区や調査区外にまで及ぶものと考えられる。

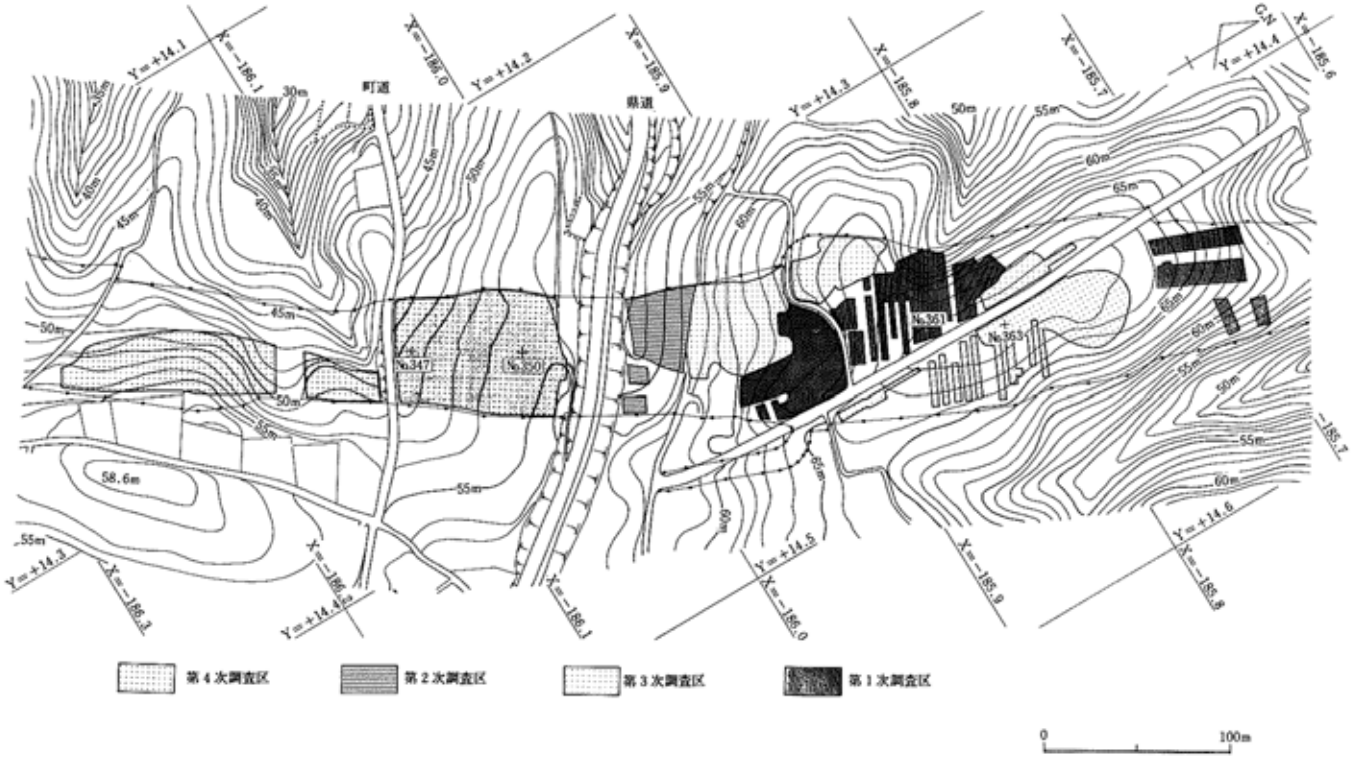
Ⅲ　調査の方法と経過

本遺跡では県道塩竈吉岡線の計画路線敷においては昭和61年度に2度にわる調査が行われており(第1・2次調査)、前述の通り報告書も刊行されている。今回、県道北側の未調査部分を利府教育委員会が主体となって事前調査を行い(第3次調査)、また、県道南側については昭和61年度に調査が行われた天神台遺跡との境まで宮城県教育委員会が主体となって事前調査を行った(第4次調査)。

(第3次調査) 発掘調査は昭和63年5月9日から始まった。まず重機によって表土を除去し、遺構の確認作業を行った。発見された遺構には尾根筋に古墳4基、弥生時代の竪穴住居跡1軒、南西緩斜面に1・2次調査区からつづく竪穴住居跡と掘立柱建物跡および地鎮遺構と考えられる埋設土器遺構によって構成される奈良・平安時代の集落跡がある。3m単位のグリッドを設定して、5月18日から遺構の精査を行い、6月15日から併行して実測作業を行った。それについては、調査区の範囲や古墳・溝跡は平板測量でそれぞれ縮尺1/200、1/100の実測図を作成し、竪穴住居跡や掘立柱建物跡等については遣り方測量で縮尺1/20の実測図を作成した。また適宜断面図を作成し、遺構等の写真撮影による記録も行った。調査成果を公表するため6月25日に現地説明会を開催した。その後、遺構のダメ押し作業等を行い7月25日に野外調査に区切りを付けている。その第4次調査区とともに2度にわたって遺跡の遠景写真を空中から撮影した。その1回目が終了した9月に、4号号古墳の石室のダメ押し作業ならびに旧石器の確認調査を行ったが、後者については新たな発見は得られなかった。

グリッド設定については第1・2次調査の方法を踏襲した。つまり、路線中心杭№.361を原点とし、杭№,363を結ぶ線をX軸に、原点でX軸と直交する線をＹ軸として3m方眼を組んだ。グリッド名はX軸方向が算用数字、Ｙ軸方向がアルファベッド（ＡＡ～ＡＴ・ＢＡ～ＢＴ）で示した。X軸の方向はG．N-24.5°－Ｅである。ただし、古代の遺構が数多く検出された付近のグリッド設定においては基準とする杭の位置を誤り、任意の座標系となってしまった。その仮原点は前述の座標系では原点杭Ｎｏ．361から南へ94.0m西へ6.7mの位置であり、仮の方向杭は南へ123.6m西へ9.7mの位置である。この2点の仮の方眼を組んで座標を設定しており、古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡の図中にも仮原点からの距離（m単位）による座標値で位置を記している。南方方面の軸線の方向はG.N-31.5－Ｅである。
各遺構の番号については種類ごとに1・2次調査に継続する数字を付した。

(第4次調査) 第3次調査が終盤に近づいた昭和63年7月11日から調査を始めた。まず同様に重機によって表土を除去し、遺構の確認作業を行った。発見された遺構には竪穴住居跡と土壙で構成される縄文時代中期の集落跡と1～3次調査区からつづく、竪穴住居跡と掘立柱建



第２図　郷楽遺跡の地形図および調査区位置図

物跡によって構成される奈良・平安時代の集落跡がある。3m方眼を設定して、7月26日から遺構の精査を行い、9月13日から併行して実側作業を行った。その方法については3次調査同様である。ここでも調査成果を公表するため9月17日に現地説明会を開催した。その後、遺構のダメ押し作業や3次調査区と合わせた遺跡の空中写真撮影を2度にわたって行い、10月31日に野外調査の一切を終了している。

グリッド設定については第1～3次調査とは別に、路線中心杭Ｎｏ.350を原点とし、杭Ｎｏ.347と結ぶ線を南北軸に、原点で南北軸と直交する線を東西軸として3m方眼を組んだ。竪穴住居跡や掘立柱建物跡の図中には原点からの距離(m単位)による座標値で位置を記している。南北方向の軸線の方向はG．N-31.5－Eである。

遺構の番号は1～3次調査区と重複しないよう、種類ごとに101番から付している。

Ⅳ　基本層位

(第3次調査区)　本調査区は第1・2次調査区と隣接しており、層位に関してはほぼ同様である。

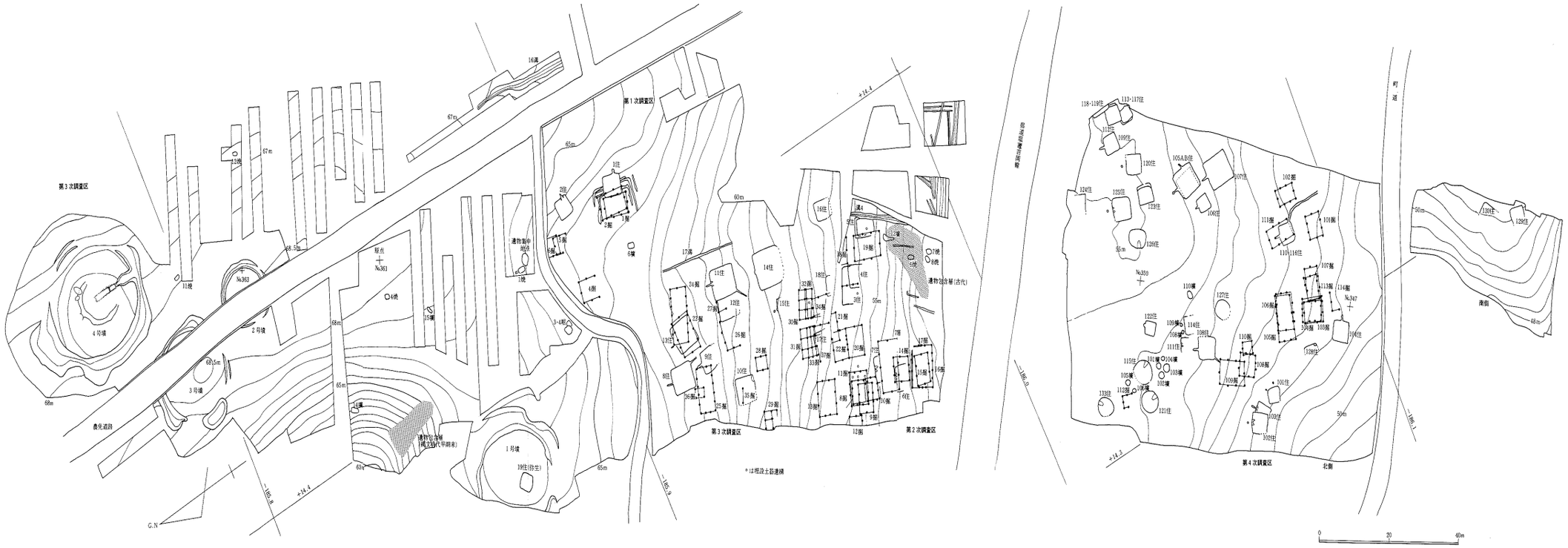
古墳が検出された尾根筋は梨畑確成のため削平をうけるが、泥岩質の岩盤の上に最大数10㎝(ローム)がみられる。その層中には風化したとみられる10㎝前後の岩盤フロック状に混入している。古墳等の遺構は粘土層の上面で確認されているが、その粘土層中には旧石器時代の文化層は確認されなかった。

古代の集落跡が発見された丘陵南向き斜面は畑作のため数段の段差が見られるほど削平が著しく、火山灰起源の粘土層はうすく、すぐ岩盤となっているところも多い。遺構はこの上面で確認されている。遺構の残存状況から南西側に緩く傾斜する地形であったことがうかがわれる。

なお、第1・2次調査で遺構が確認されている基本層位をⅤ層としており、本書もそれにならう。

（第4次調査区）　本調査区は第1～3次調査区と県道(本来は西側へ下る沢地形であった)をはさんで南側に位置し、宅地、屋敷林、畑地となっていたところである。

表土を除去すると、泥岩質の岩盤の上に火山灰起源の黄褐色の粘土層(ローム)がみられるところもあるが、泥岩層が露出する部分が多い。遺構は**ロ**ーム層上面あるいは泥岩層上面で確認されている。



第3図　遺構配置図(全)

Ⅴ　発見された遺構と出土遺物

(1)縄文時代早期の遺構と出土遺物

第1次調査区の中央南区の斜面で遺物集中地点1ヶ所、土壙2基（第3、4号土壙）、中央北区で遺物包含層が検出された。

1　遺物集中地点(第4図)

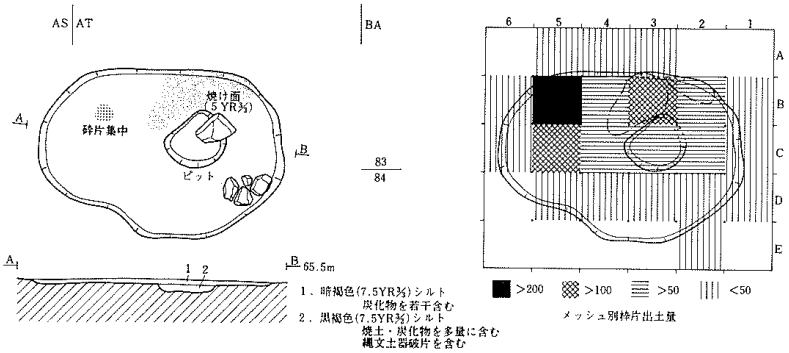
ＡＴ－83・84区の基本層位Ⅳ層面で,炭化物を含む暗褐色土の分布が認められ、これらの分析範囲を中心として遺物が集中して検出された。精査の結果,これは約2.5×1.7m程の窪み状に堆穫しており、層中には縄文土器片、石器、礫、炭化物、焼土が含まれていた。また、この範囲内･同一面上で、炭化物をとくに多く含むピット1基、焼け面も2ヶ所で確認された。しかも石器砕片が径20㎝程の範囲に集中して検出された箇所もあることから、何らかの行為に伴って人為的に埋められた可能性がある。

遺物の取り上げに際しては、石器砕片が多数あることから50㎝のメッシュを組み、50×50㎝を1単位に土ごと資料を採取した。

ピット　平面形は隅丸方形を呈し、約60×50㎝、深さ10㎝前後の皿状に窪むピットである。堆積土は、焼土･炭化物を多量に含む黒褐色土1層のみで、縄文土器を含む。

焼け面　約80×40㎝および約55×20㎝の長楕円形の範囲で、それぞれ焼けている。

石器の分布石器（tool）は、合計14点と少なく器種組成や出土状況について検討を加えることはできないが、石器砕片については出土状況とくにその分布に傾向性が認められた。第4図右図は土壙サンプルを水洗選別し、集計した砕片の疎密を各単位ごと(1単位＝50×50㎝)に示したものである。これによると、砕片は、集中して出土したブロック(Ｂ-5区)を除くと、ピットおよび焼け面付近が密で、その周辺では疎になる傾向がある。

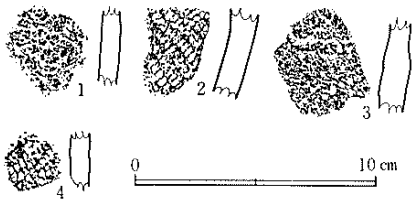


第４図　遺物集中地点

出土遺物

(1) 縄文土器(第5図4～7)

4～7は胎土に繊維を含む深鉢形土器である。斜行縄文が施されている。



番号	出土位置・層位	器種	文様の特徴等
1	チップ集中地点	深鉢	胴部：縄文（LR），内面；ナデ， 胎土；繊維含入
2	チップ集中地点	深鉢	胴部：縄文（RL），内面；ナデ， 胎土；繊維含入
3	チップ集中地点	深鉢	胴部：縄文（LR），内面；粗いナデ， 胎土；繊維含入
4	チップ集中地点	深鉢	胴部：縄文（LR），内面；ナデ， 胎土；繊維含入

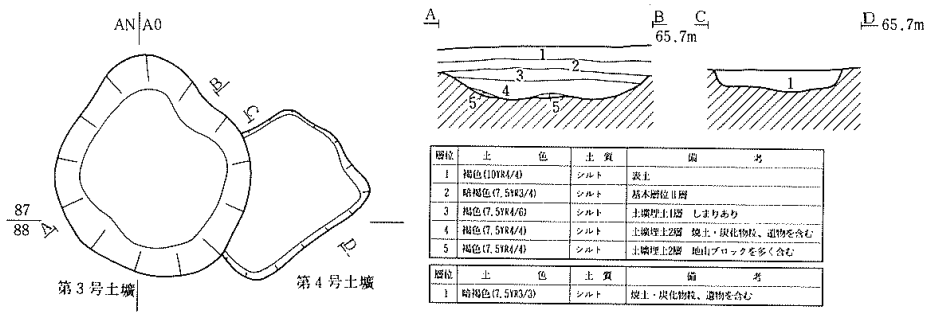
第５図　遺物集中地点出土の縄文土器

(2) 石器（第7図）

石鏃、石錐、箆状石器、ノッチ、スクレイパー、不定形石器および水洗選別により多量のチップが検出された。1の右鏃は、薄い剥片を素材に打面を先端部側に置いて加工を施している。3の石鏃は、一端に折れ面、他の一端に再加工の過程で彫刻刀面が形成され、この部分に細調整が認められる。なお、腹面に打面作出のための急角度の調整、背面に平坦で奥深くまで至る加工が施されるという加工状態から考えて、石匙破損部を再利用したものであると思われる。

2　第3号土壙(第6図)

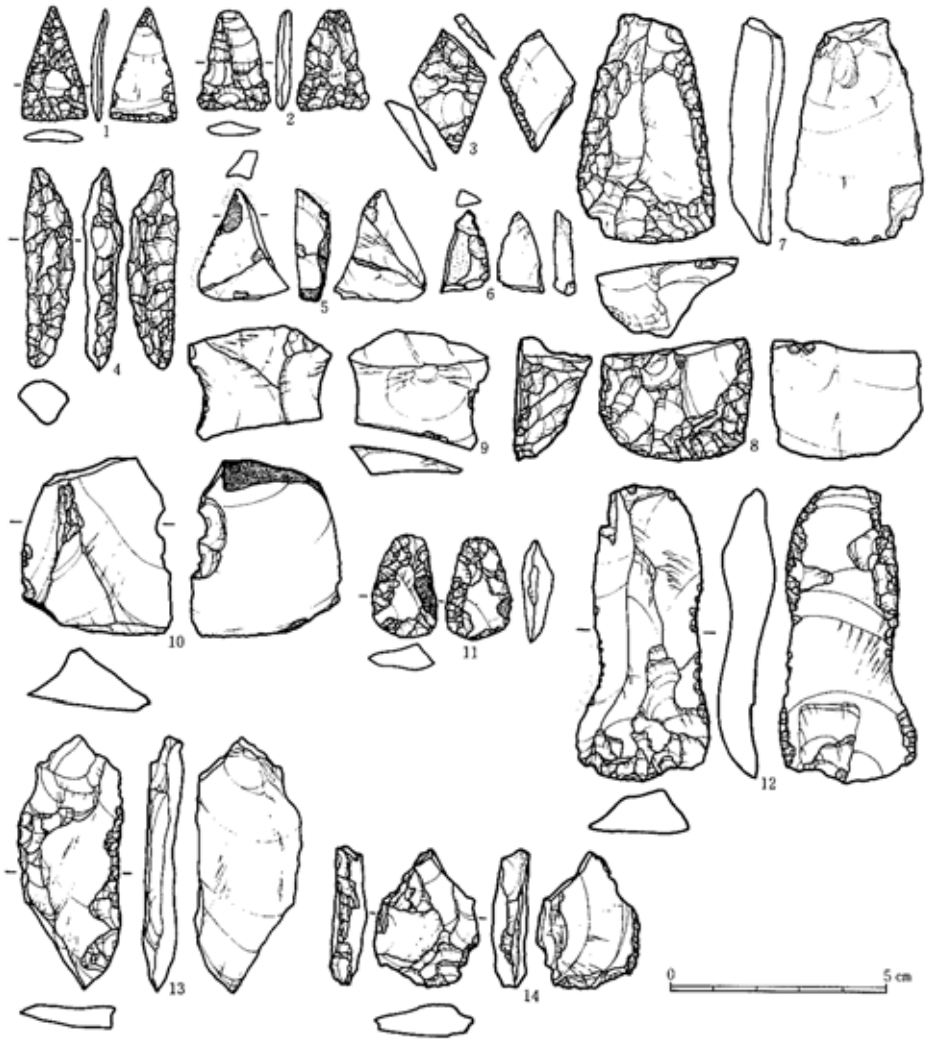
地山面で確認した。第4号土壙を切っている。平面形は不整の円形である。大きさは径約1.8mで、深さは約20cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は皿状になっている。堆積土は2枚あり、層中に木炭粒、焼土粒が含まれる。底面、層中から縄文土器片、剥片石器が出立している。



層位	土　色	土　質	備　考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	表土
2	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	基本層位Ⅱ層
3	褐色(7.5YR4/6)	シルト	土壙埋土1層　しまりあり
4	褐色(7.5YR4/4)	シルト	土壙埋土2層　焼土・炭化物粒、遺物を含む
5	褐色(7.5YR4/4)	シルト	土壙埋土2層　地山ブロックを多く含む

層位	土　色	土　質	備　考
1	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	焼土・炭化物粒、遺物を含む

第６図　第３・４号土壙



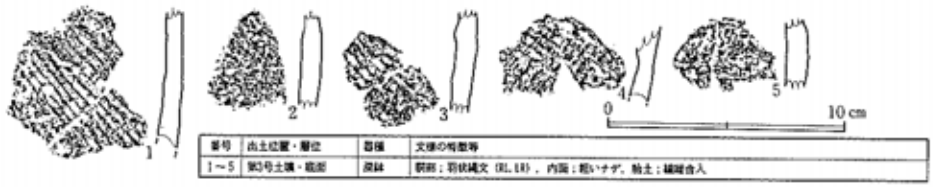
番号	出土位置・層位	器種・分類	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1	遺物集中地点 C-3区	石鏃 Ⅰ類	珪質頁岩	26	15	3	0.8	先端部側に打部がある。
2	遺物集中地点 C-3区	石鏃 Ⅰ類	黒曜石	(27)	17	3	1.1	尖端部一基部に錐状制離。使用時における破損か？
3	遺物集中地点	石鏃 Ⅱ類	珪質頁岩	29	18	4	1.6	石匙破損部を再利用。
4	遺物集中地点	石鏃 Ⅰ類	頁岩	46	15	15	4.4	
5	遺物集中地点 B-3区	石鏃 Ⅱ類	碧玉	25	21	8	4.0	折断による尖端部作出。焼けはじけ著しい（S.T.）。
6	遺物集中地点 A-3~4区	石鏃 Ⅱ類	碧玉	18	10	6	1.0	折断による尖端部作出。
7	遺物集中地点	箆状石器	珪質頁岩	53	(35)	10	19.7	
8	遺物集中地点	箆状石器	珪質頁岩	(27)	35	16	15.7	破損（節理面での折れ）。
9	遺物集中地点 D-4区	ノッチ	頁岩	26	37	10	7.2	
10	遺物集中地点 B-2区	ノッチ	頁岩	(42)	(35)	18	19.8	焼けはじけ著しい（S.T.）。
11	遺物集中地点 C-3区	スクレイパー	頁岩	24	15	7	1.9	焼けはじけ著しい（S.T.）。
12	遺物集中地点	スクレイパー	珪質頁岩	69	35	12	23.4	
13	遺物集中地点	不定形石器	碧玉	50	37	7	12.2	折断後調整。
14	遺物集中地点	不定形石器	玉髄	31	24	8	6.3	折断後調整。

第７図　遺物集中地点出土石器

出土遺物

(1) 縄文土器(第8図)

1は胎土に繊維を含む深鉢形土器である。非結束の羽状縄文が施されている。

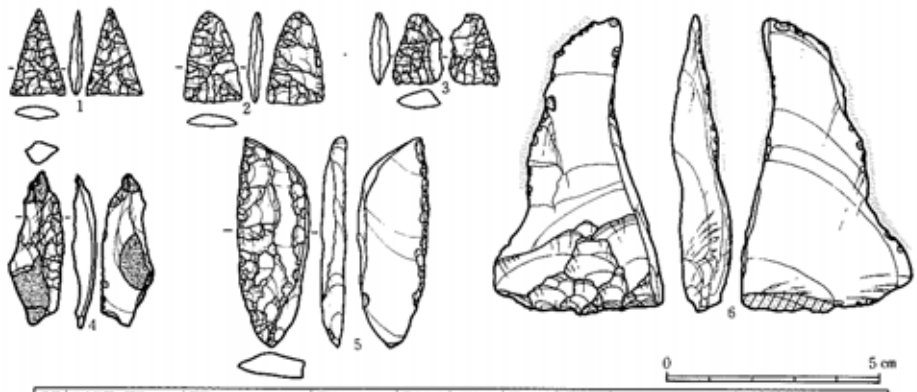


番号	出土位置・層位	器種	文様の有無等
1～5	第3号土壙・底部	深鉢	胴部：羽状縄文（RL.LR），内面：粗いナデ，胎土：繊維含入

第８図　第３号土壙出土の縄文土器

(2)石器(第9図)

石鏃、石錐、不定形石器および彫刻刀面のある石器がある。4には、末端から上方へぬける彫刻刀面があり、末端部に二次加工が施される。ただし、背面左側辺にはこれに切られて平坦で奥深くまで至る加工が施されていることから、再加工したものであると考えられる。腹面側辺には、背面側の加工のための急角度の調整(打面作出)が施されるという特徴を有することから、縦長の石匙が破損したものである可能性が高い。



番号	出土位置・層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1	第3号土壙・4層	石鏃 Ⅰ類	珪質頁岩	20	13	4	0.6	
2	第3号土壙・4層	石鏃 Ⅰ類	珪質頁岩	22	13	3	0.9	未端部破損後再加工？
3	第3号土壙・4層	石鏃 Ⅰ類	珪質頁岩	16	11	4	0.7	破損もしくは未製品。
4	第3号土壙・4層	石錐 Ⅱ類	珪質頁岩	30	(15)	6	2.4	使けはじけ著しい（S.T.）。
5	第3号土壙・底部	彫刻刀面のある石器	珪質頁岩	(43)	(15)	6	5.3	石匙破損後再加工。
6	第3号土壙・4層	不定形石器	珪質頁岩	70	40	12	24.2	両側辺に直線制離痕（S.T.）。

第９図　第３号土壙出土の石器

3　第4号土壙（第6図）

地山面で確認した。第3号土壙に切られている。平面形は隅丸の方形である。大きさは約1.5mで、深さは約20㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がり底面は平坦である。堆積土はシルト層で褐色土、木炭粒、焼土粒を含む。底面の南側で縄文土器**片が出土している。**

出土遺物

石器(第10図)

石匙・両面加工尖頭器?、不定形石器がある。1の石匙は末端部が破損しているが、凸刃と直刃からなり、末端に尖端部を形成する縦長形態のものと考えられる。腹面側辺には、背面側の加工のための急角度の調整(打面作出)が施される。

番号	出土位置・層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1	第4号土壙・底面	石匙 ⅠA類(?)	珪質頁岩	(41)	(18)	6	4.5	腹面側辺に急角度の調整。
2	第4号土壙・4層	両面加工尖頭器?	珪質頁岩	28	22	8	4.4	背腹両面の両縁部に二次加工。
3	第4号土壙・底面	不定形石器	頁岩	48	32	14	17.5	
4	第4号土壙・底面	不定形石器	頁岩	34	45	7	8.5	ノッチ、凸刃、剥離刃面、折断面を有する。

第10図　第４号土壙出土石器

4　遺物包含層（第11・12図）

調査区中央北区の西側沢地沢頭部分(ＡＨ～ＡＪ-69～74区)の浅い窪地で遺物包含層を確認した。包含層の範囲は南北12m、東西6mで、堆積層は3枚認められ、最も厚く堆積していたＡＩ-71区で約40㎝を測る。

出土遺物には縄文土器、石器がある。これらの遺物はすべて層中からの出土で、層理面に並ぶものは認められない。特に土器は摩滅しているものが多く、原位置をとどめるものではない。

出土遺物

(1) 縄文土器

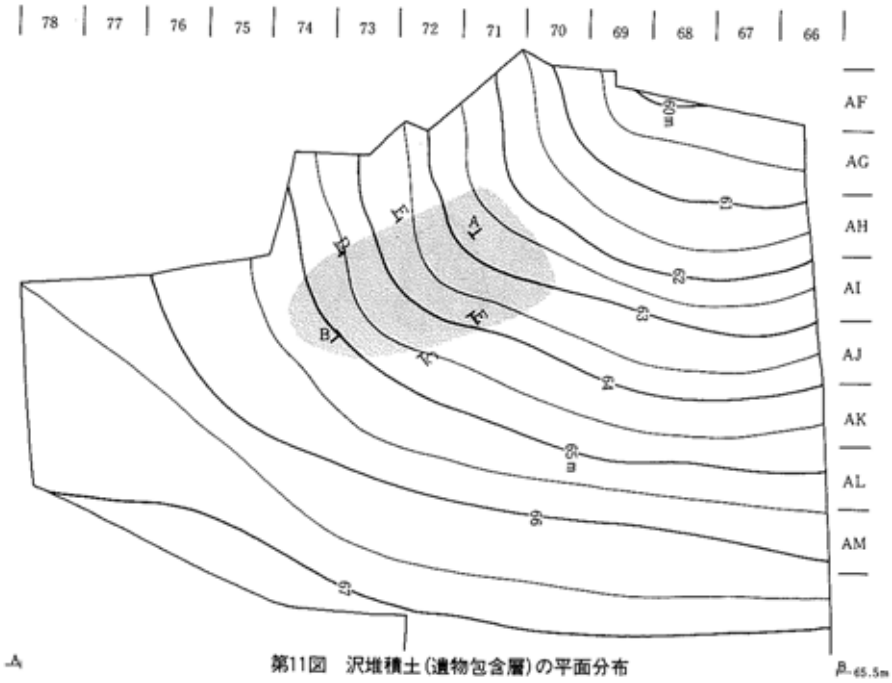
縄文時代早期末葉の土器群である。いずれも深鉢形土器で、すべて胎土に繊維を含んでいる。内面にはミガキ、粗いミガキ、ナデ、粗いナデ調整、貝殻条痕文が施されている。口縁部から胴部外面の施文文様・地文の様相から次のように分類される。

Ⅰ　類(第13図1・2)

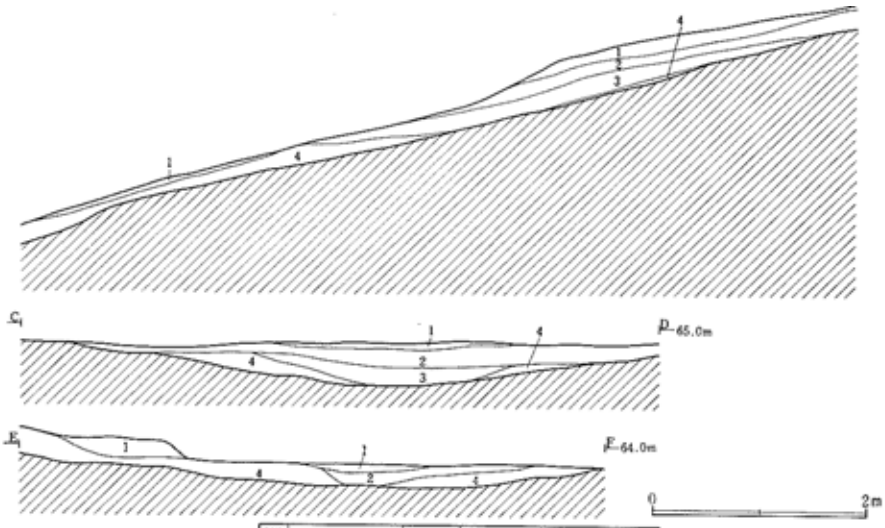
口縁部文様帯が押圧縄文によって構成されるものである。1がＬＲ2段撚り、2がＲ11段撚りの押圧縄文である。

Ⅱ　類(第13図3～57)

口縁部文様帯の構成されないものである。地文の種類によって次の3類に分けることができる

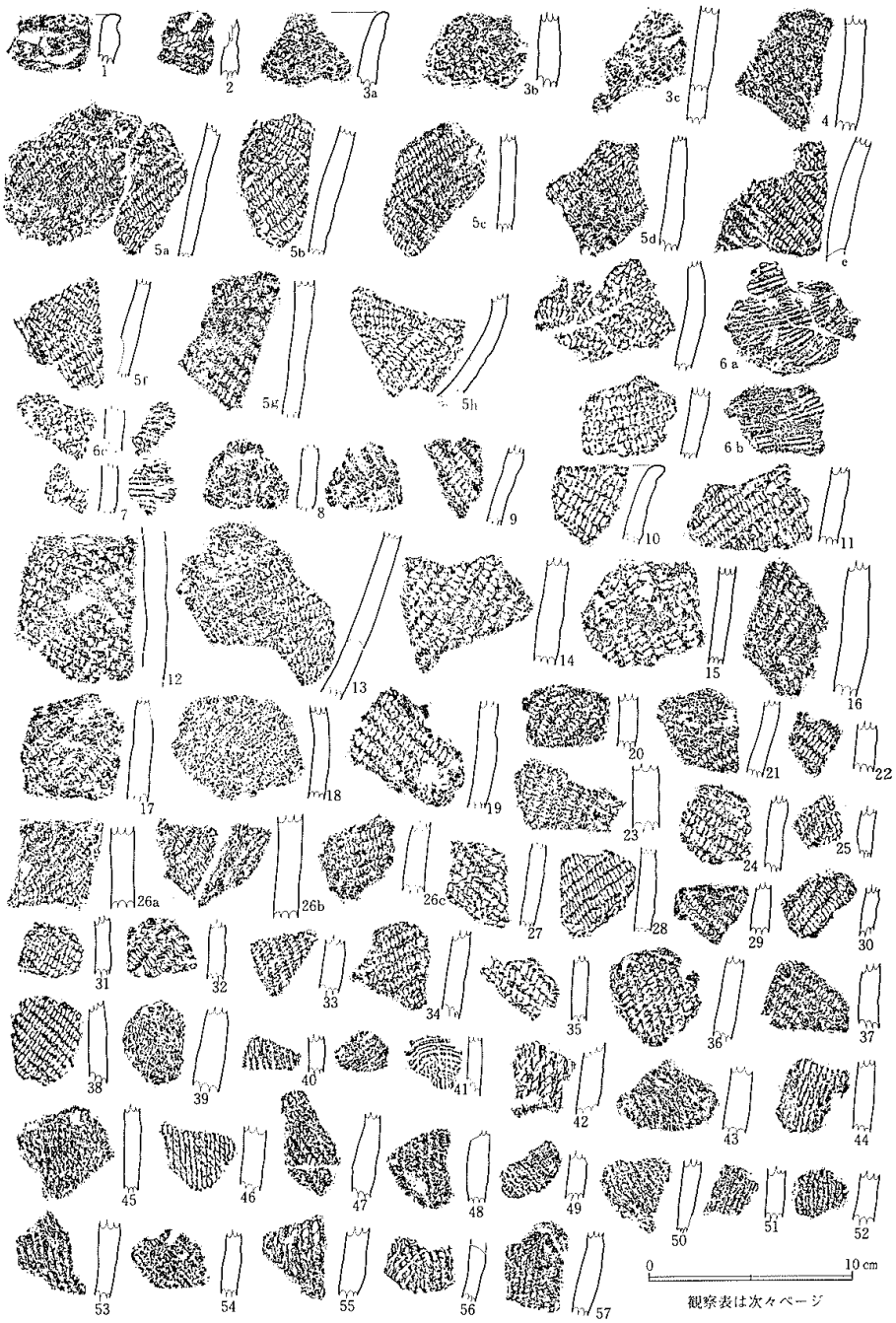


第11図　沢堆積土(遺物包含層)の平面分布



層位	土色	土質	備考
1	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	表土
2	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	遺物包含層1層　わずかに遺物を含む
3	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	遺物包含層2層　比較的多くの遺物を含む
4	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	遺物包含層3層　わずかに遺物を含む

第12図　沢堆積土の断面図



観察表は次々ページ

第13図　沢堆積土出土土器

番　号	出土位置・層位	器　種	文　様　の　特　徴　等
1	遺物包含層・2層	深鉢	口縁部；平縁，押圧縄文（LR），内面；粗いナデ，胎土；繊維含入
2	遺物包含層・2層	深鉢	口縁部；押圧縄文（R1），内面；粗いナデ，胎土；繊維含入
3a-c	遺物包含層・3層	深鉢	口縁部；平縁，羽状縄文（RL,LR-0 段多条），内面；ナデ，胎土；繊維含入
4	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；羽状縄文（RL,LR），内面；粗いミガキ，胎土；繊維含入
5a-h	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；羽状縄文（RL,LR-0段多条），内面；ナデ，胎土；繊維含入
6a-c	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（LR），内面；貝殻条痕文，胎土；繊維含入
7	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（LR），内面；貝殻条痕文，胎土；繊維含入
8	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；摩滅，内面；貝殻条痕文，胎土；繊維含入
9	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；羽状縄文（RL-0段多条），内面；貝殻条痕文（摩滅），胎土；繊維含入
10	遺物包含層・2層	深鉢	口縁部；平縁，縄文（RL），内面；粗いミガキ，胎土；繊維含入
11	遺物包含層・層位不明	深鉢	胴部；縄文（LR-0段多条），内面；粗いナデ，胎土；繊維含入
12	遺物包含層・3層	深鉢	胴部；縄文（RL），内面；粗いナデ，胎土；繊維含入
13	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（LR），内面；粗いナデ，胎土；繊維含入
14	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（LR），内面；粗いミガキ，胎土；繊維含入
15	遺物包含層・3層	深鉢	胴部；縄文（RL），内面；粗いナデ，胎土；繊維含入
16	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（LR），内面；ナデ，胎土；繊維含入
17	遺物包含層・3層	深鉢	胴部；縄文（LR），内面；ナデ，胎土；繊維含入
18	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（LR），内面；摩滅，胎土；繊維含入
19	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（RL），内面；ミガキ，胎土；繊維含入
20	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（LR-0段多条），内面；ナデ，胎土；繊維含入
21	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（LR-0段多条），内面；ナデ，胎土；繊維含入
22	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（RL-0段多条），内面；ナデ，胎土；繊維含入
23	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（LR），内面；ナデ，胎土；繊維含入
24	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（RL），内面；ナデ，胎土；繊維含入
25	遺物包含層・層位不明	深鉢	胴部；縄文（LR-0段多条），内面；ナデ，胎土；繊維含入
26a-c	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（LR-0段多条），内面；ナデ，胎土；繊維含入
27	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（RL），内面；ナデ，胎土；繊維含入
28	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（LR-0段多条），内面；ナデ，胎土；繊維含入
29	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（RL），内面；ナデ，胎土；繊維含入
30	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（LR-0段多条），内面；ナデ，胎土；繊維含入
31	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（RL），内面；ナデ，胎土；繊維含入
32	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（LR-0段多条），内面；ナデ，胎土；繊維含入
33	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（RL），内面；粗いナデ，胎土；繊維含入
34	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（LR），内面；ナデ，胎土；繊維含入
35	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（RL），内面；粗いナデ，胎土；繊維含入
36	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（RL），内面；ナデ，胎土；繊維含入
37	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（RL-0段多条），内面；ナデ，胎土；繊維含入
38	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（RL-0段多条），内面；ナデ，胎土；繊維含入
39	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；縄文（RL-0段多条），内面；ナデ，胎土；繊維含入
40	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；撚糸文（L），内面；貝殻条痕文，胎土；繊維含入
41	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；撚糸文（R），内面；粗いナデ，胎土；繊維含入
42	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；撚糸文（L），内面；ナデ，胎土；繊維含入
43	遺物包含層・3層	深鉢	胴部；撚糸文（L），内面；ナデ，胎土；繊維含入
44	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；撚糸文（R），内面；ナデ，胎土；繊維含入
45	遺物包含層・3層	深鉢	胴部；撚糸文（R），内面；ナデ，胎土；繊維含入
46	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；撚糸文（R），内面；粗いナデ，胎土；繊維含入
47	遺物包含層・3層	深鉢	胴部；撚糸文（L），内面；ナデ，胎土；繊維含入
48	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；撚糸文（R），内面；ナデ，胎土；繊維含入
49	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；撚糸文（R），内面；ナデ，胎土；繊維含入
50	遺物包含層・3層	深鉢	胴部；撚糸文（R），内面；粗いナデ，胎土；繊維含入
51	遺物包含層・3層	深鉢	胴部；撚糸文（L），内面；ナデ，胎土；繊維含入
52	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；撚糸文（L），内面；ナデ，胎土；繊維含入
53	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；撚糸文（L），内面；ナデ，胎土；繊維含入
54	遺物包含層・3層	深鉢	胴部；撚糸文（L），内面；粗いナデ，胎土；繊維含入
55	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；撚糸文（L），内面；ナデ，胎土；繊維含入
56	遺物包含層・2層	深鉢	胴部；撚糸文（R），内面；ナデ，胎土；繊維含入
57	遺物包含層・3層	深鉢	胴部；撚糸文（L），内面；ナデ，胎土；繊維含入

ａ類　非結束の羽状縄文の施されるもの(3〜5)である。

ｂ類　斜行縄文の施されるもの（6〜39）である。うち6〜9の内面には貝殻条痕文が施されている。

ｃ類　撚糸文が施されるもの(40〜57)である。うち40の内面には貝殻条痕文が施されている。

⑵ 石器(第14・15図)

石器は1層と3層から出土している。1、3層は出土している土器から同時期と考えられることから、まとめて示した。剥片石器には定形的なもの(石鏃、石錐、石匙、両面加工石器、スクレイパー)とそれ以外の不定形なものがある。礫石器は磨面や凹み、敲打痕などの使用痕により認定されたもので、これらの組合せにより落石、磨凹石、敲石に分類、呼称した。また石皿については、偏平な礫を素材にしているという点で、これらとは別に分類した。なお、ここでいう磨面とは礫の正面に多くみられる滑らかなもので、ザラ面とは磨面の一種であるが、礫の側面に多くみられるやや粗くざらついたものをさす。

石鏃(第14図1〜8)基部形態が凹基のもの(1、2)と平基のもの（3〜8）がある。1は基部のえぐりが深く、縁辺が鋸歯状を呈する。

石錐(同図９〜１１)９はやや厚手の石鏃の両側辺を再加工して霧としている。10は折断により尖端部を作出している。11は打面を横にし、剥片の側面に尖端部を作出している。

石匙(同図12〜15)つまみ部を上にして縦長になるもの(12〜14)と横長になるもの(15)がある。13、14の腹面側辺には、背面側の加工のための急角度の調整(打面作出)が施されている。

スクレイパー（同図16、第15図1）第　図16は、刃部が縁辺に沿ってやや奥まで入る剥離によって作出される凸刃スクレイパーである。第　図1は2側辺に沿った直刃の刃部が作出される。

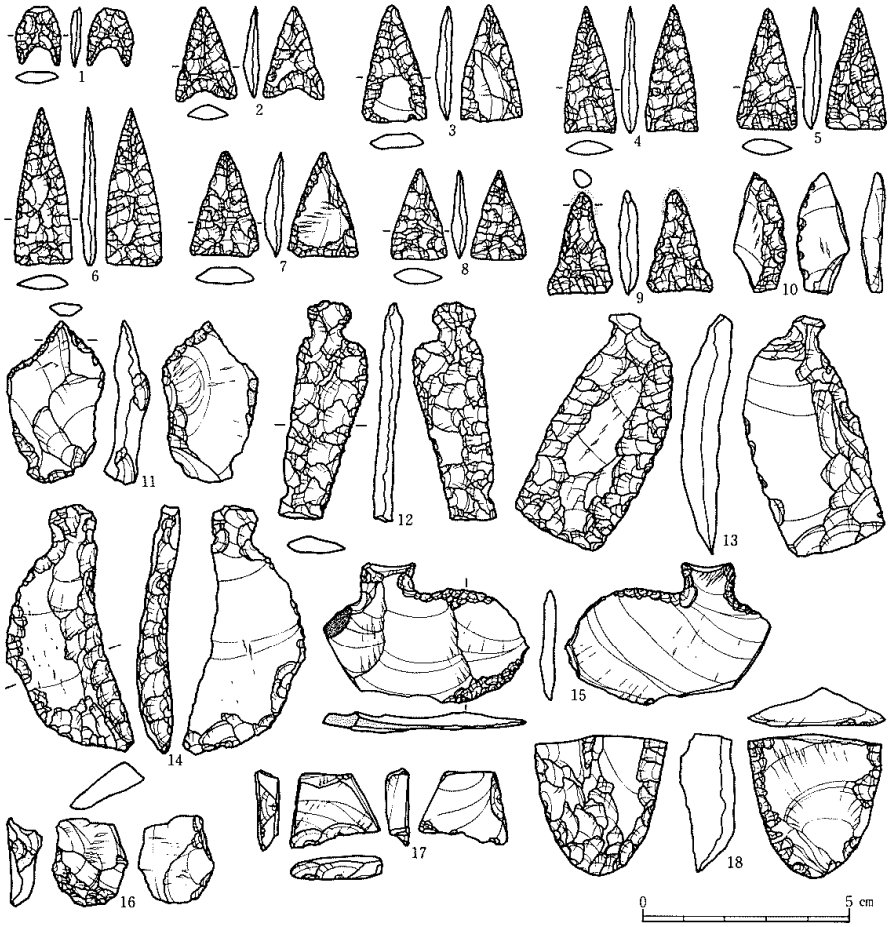
不定形石器(第14図17、第15図2)いずれも折断後急角度の二次加工によって刃部を作り出している。

磨石(第15図3、4、7)3は両面に磨面、片方の側面にはザラ面が認められ、やや平坦な面を形成している。

敲石(同図5)断面がほぼ円形を呈する柱状の礫で、3ヶ所に敲打痕が認められる。

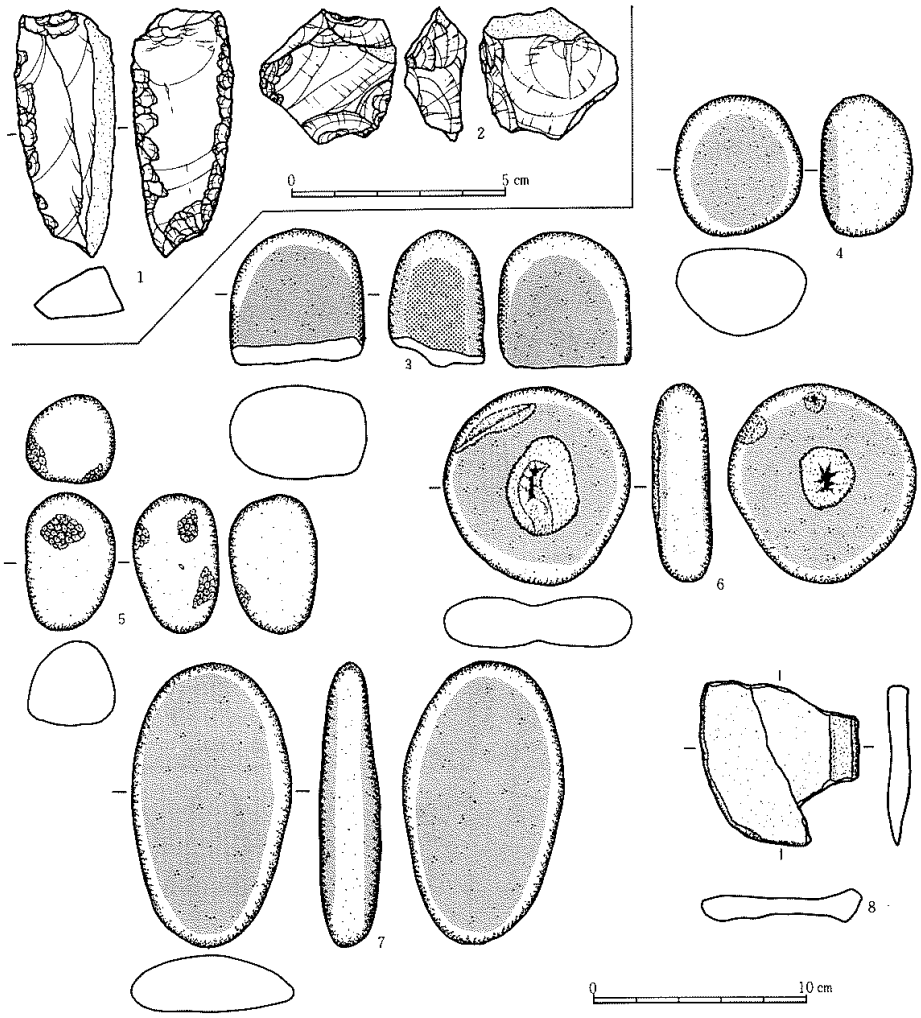
磨凹石（同図6）両面に磨面および顕著な凹みが認められる。

石皿(同図8)小形の偏平な礫の平垣な面全面に磨面が認められる。上端の破損は古く,破損後も使用されている。



番号	出土地区・層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1	遺物包含層・3層	石鏃 Ⅱ類	珪質頁岩？	(14)	11	3	0.2	
2	遺物包含層・3層	石鏃 Ⅱ類	頁岩	23	14	4	0.6	
3	遺物包含層・3層	石鏃 Ⅰ類	流紋岩？	28	15	4	1.2	
4	遺物包含層・3層	石鏃 Ⅰ類	珪質頁岩	31	14	4	1.2	
5	遺物包含層・1層	石鏃 Ⅰ類	珪質頁岩	29	14	4	1.4	
6	遺物包含層・3層	石鏃 Ⅰ類	頁岩	38	13	3	1.6	
7	遺物包含層・3層	石鏃 Ⅰ類	珪質頁岩	25	(17)	4	1.4	
8	遺物包含層・3層	石鏃 Ⅰ類	碧玉	22	13	4	0.9	
9	遺物包含層・3層	石錐 Ⅱ類	珪質頁岩	25	15	5	1.4	尖端部に著しい磨滅（S.T.）。
10	遺物包含層・3層	石錐 Ⅱ類	頁岩	29	13	5	1.8	折断後調整。
11	遺物包含層・1層	石錐 Ⅱ類	頁岩	39	23	8	5.3	パティナが新しい（S.T.）。
12	遺物包含層・3層	石匙 ⅠA類（?）	珪質頁岩	(51)	(21)	5	5.1	末端部は新しい折れ。
13	遺物包含層・2層	石匙 ⅠB類	頁岩	57	39	9	15.5	腹面側辺に急角度の調整。
14	遺物包含層・1層	石匙 ⅠA類	頁岩	61	32	8	10.8	腹面側辺に急角度の調整。
15	遺物包含層・3層	石匙 Ⅱ類	頁岩	34	49	3	5.9	パティナが新しい（S.T.）。焼けはじけあり（S.T.）。
16	遺物包含層・層位不明	凸刃スクレイパー	珪質頁岩	23	18	9	2.3	
17	遺物包含層・1層	不定形石器	珪質頁岩	17	22	5	2.2	折断後調整。
18	遺物包含層・3層	両面加工石器？	頁岩	(34)	(32)	13	11.4	楕状石器の破損品？

第14図　沢堆積土出土石器(1)



番号	出土地区・層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
1	遺物包含層・1層	直刃スクレイパー	珪化凝灰岩？	59	24	14	18.3	
2	遺物包含層・3層	不定形石器	珪質頁岩	31	32	15	11.1	折断後調整。
3	遺物包含層・層位不明	磨石	安山岩	(63)	63	43	270.0	2磨面（細かいS.T.）＋1ザラ面（粗いS.T.）。
4	遺物包含層・層位不明	磨石	細粒石英閃緑岩	65	60	41	235.0	1磨面（S.T.）。
5	遺物包含層・層位不明	敲石	砂質頁岩	64	41	41	155.0	3敲打痕。
6	遺物包含層・層位不明	磨凹石	安山岩	93	87	24	255.0	2磨面（S.T.）＋2凹み。凹み顕著。
7	遺物包含層・層位不明	磨石	安山岩	132	75	25	380.0	2磨面（S.T.）。
8	遺物包含層・層位不明	石皿	安山岩	(75)	74	14	76.5	風化が著しい。上端の破損は古い。

第15図　沢堆積土出土石器(2)

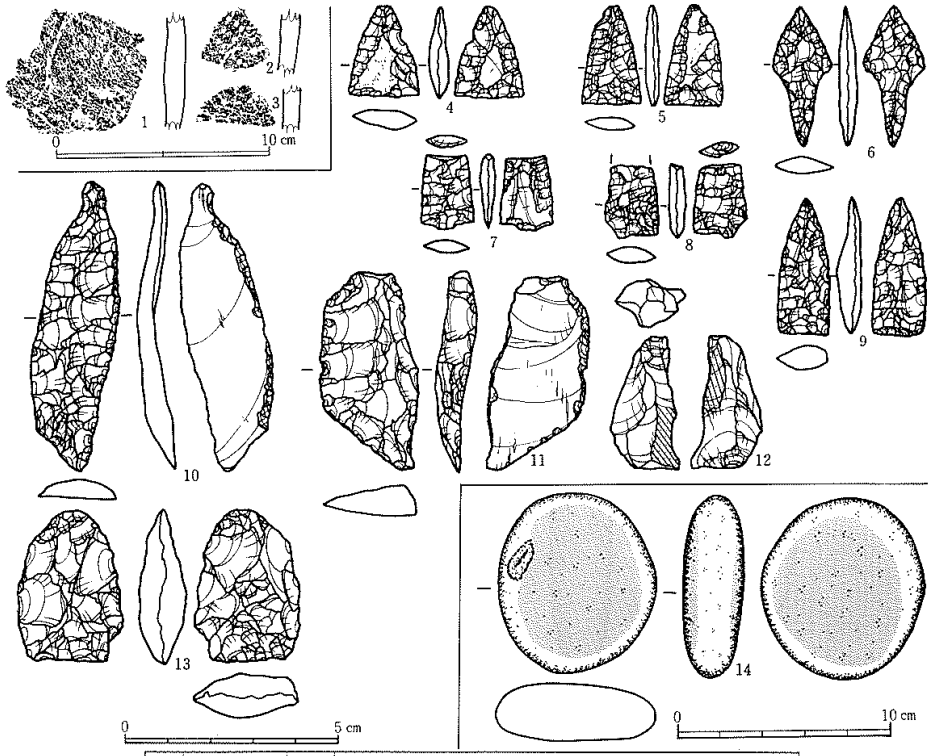
5　表土および遺構外出土の土器・石器(第16図)

⑴ 縄文土器

いずれも胎土に繊維を含む深鉢形土器である。1の内面には貝殻条痕文が施されている。

⑵石器

石鏃、石匙、両極剥離痕ある石器、両面加工石器?、磨石がある。石鏃には、基部形態が平基のもの(4、5、8、9)と凸基のもの(6、7)がある。石匙(10、11)は、いずれも末端に尖端部を形成する縦長形態で、腹面側辺には背面側の加工のための急角度の調整（打面作出）が施される。



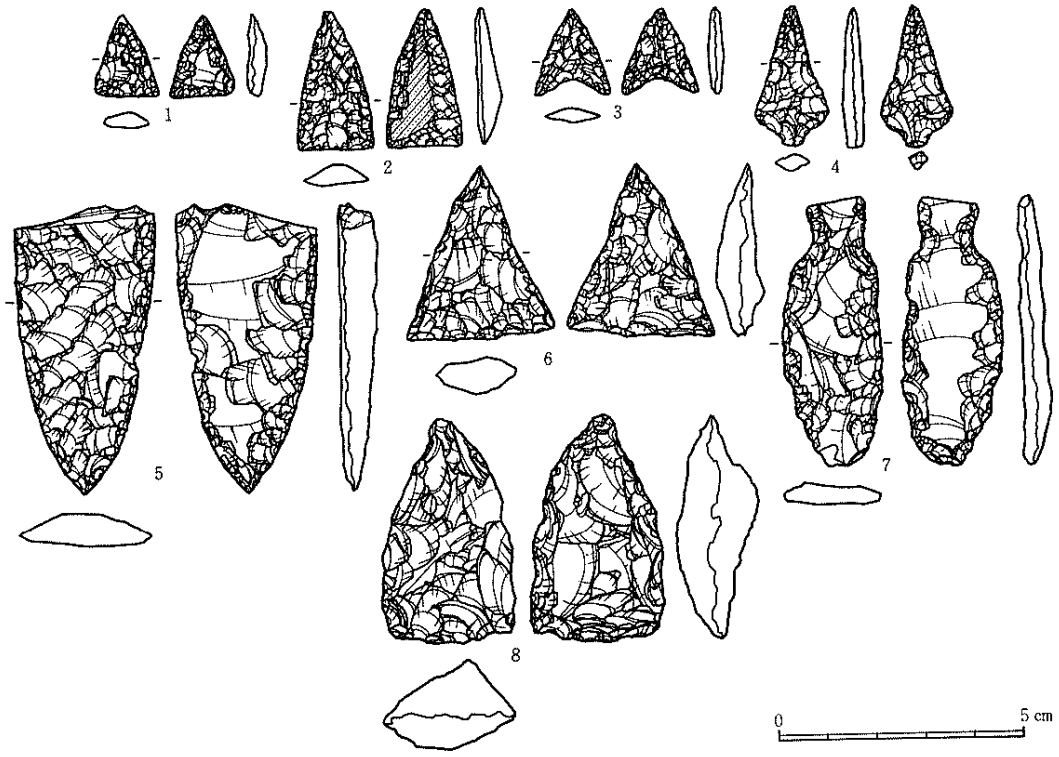
番号	出土位置・層位	器種	文様の特徴等
1・2	中央北区・層位不明	深鉢	胴部；縄文（RL），内面；貝殻条痕文（摩滅），胎土；繊維含入
3	中央北区・層位不明	深鉢	胴部；縄文（LR-0段多条），内面；粗いナデ、胎土；繊維含入

番号	出土地区・層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
4	AK71-72区	石鏃 Ⅰ類	玉髄	(21)	20	4	1.8	
5	1住埋土下部2層	石鏃 Ⅰ類	頁岩	(23)	14	3	1.0	
6	北東部？	石鏃 Ⅲ類	頁岩	33	14	5	1.3	
7	AK71-72区	石鏃 Ⅲ類	頁岩	(17)	12	4	0.8	尖端部・基部破損。
8	AK61-64区	石鏃 Ⅰ類(？)	碧玉	(17)	(13)	4	1.1	尖端部・基部破損。
9	AS-AO61-64区1層	石鏃 Ⅰ類	頁岩	32	12	6	2.3	
10	AK61-64区	石匙 ⅠA類	珪質頁岩	67	23	5	7.1	腹面側辺に急角度の調整。
11	AN-AO63-67区1層	石匙 ⅠA類	頁岩	(47)	(24)	8	7.9	つまみ部破損。腹面側辺に急角度の調整。
12	中央北区	両極剥離痕ある石器	チャート	32	17	11	4.2	両端に両極剥離以前の平坦面を有する。
13	AM64区1層	両面加工石器？	珪質頁岩	36	25	10	9.4	
14	15-16号横周辺	磨石	安山岩	84	74	26	250.0	2磨面（S.T.）。

第16図　表土および遺構外の土器・石器（第1・2次調査区）

（附）石器(第17図)

第3次調査区では縄文時代の遺構は検出されなかったが、古墳の周溝や古代の竪穴住居跡堆積土などから、第1・2次調査区出土のものと同時期の石器が出土している。以下に特徴のあるものを図示した。



番号	出土地区・層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
1	8住　床面	石鏃	珪質頁岩	(17)	13	3	先端部欠損
2	8住　一層	石鏃	チャート	28	15	4	節理面あり
3	13住　旧東側周溝附近	石鏃	珪質頁岩	17	15	3	
4	4号墳周溝埋土4層	石鏃	珪質頁岩	29	15	4	
5	4号墳周溝埋土4層	尖頭器	珪質頁岩	(59)	(28)	7	縦長　片素材か？
6	2号墳周溝埋土1層	尖頭器	珪質頁岩	36	30	10	
7	10住南側掘立附近検出面	石匙	珪質頁岩	54	22	5	先端部欠損　基部切断
8	1号墳周溝	箆状石器	チャート	46	27	16	

第17図　第３次調査区出土の石器

(2)縄文時代中期の遺構と出土遺物

県道南側(第4次調査区)の調査区北側の標高53～54mのところから縄文時代中期の遺構と遺物が発現されている。遺構には竪穴住居跡5軒・土壙9基があり、遺物には縄文土器・土製品・石器・石製品がある。

A　竪穴住居跡と出土遺物

第115号住居跡(第19図)

【遺構の確認】第4次調査区北西よりのW16～22、N-0-S～S5に位置し、地山ローム層上面で確認している。新しい撹乱穴によって、住居跡北西部が壊されている。

【平面形・規模】住居跡北部を欠き、壁の残存状態もよくないが、周溝などから隅丸方形がやや不整の円形を呈するものと考えられる。規模は炉の長軸方向で5.2m、それに直交する方向で5.1m、面積は推定23m^{2}である。

【堆積土】5枚の層が認められる。1～3は住居中央に、4・5は壁ぎわに分布している。

【壁】北東辺から南東辺が検出されている。地山を壁としており、立ち上がりはほぼ垂直である。残存壁高は保存のよい北東壁で約27㎝である。

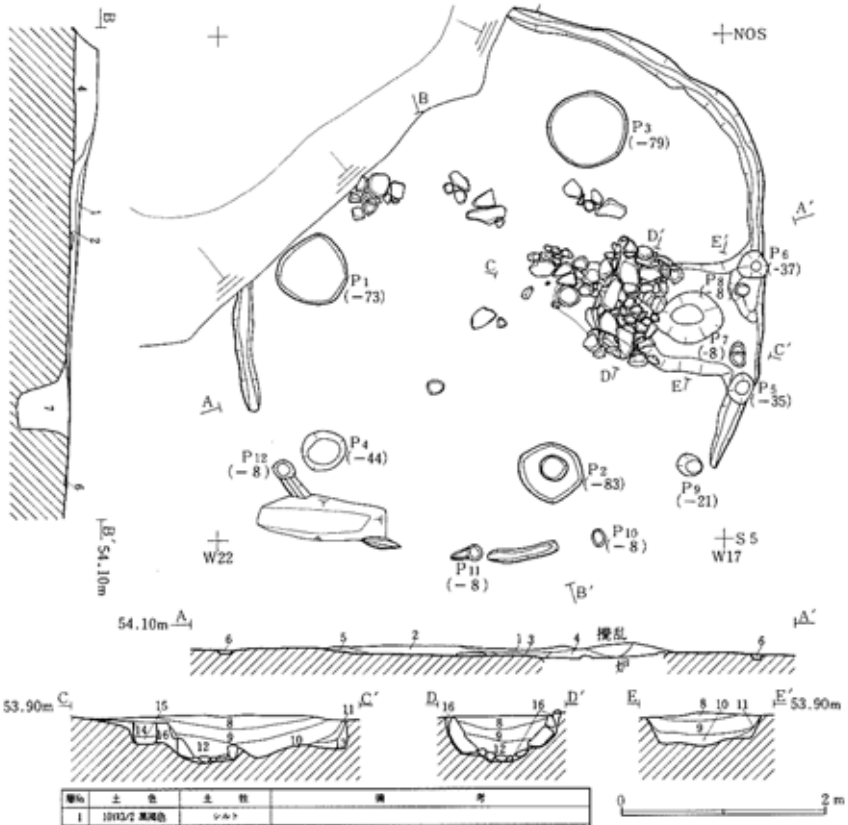
【床面】地山を平坦に削りだして床としている。炉の埋設土器周辺や住居北半の床面には平坦な石を敷き詰めて、敷石床面としている部分が数か所に認められる。

【柱穴】住居内から12個のピットが検出されている。炉の長軸線上の壁寄りに位置するP1と、同じ長軸線上に位置する埋設土器を挟んでほぼ対称の位置にあるP2・P3は、一辺3.2mの正三角形の頂点にあたる配置関係である。柱痕跡はP2でしか見つかっていないが、ピットの規模や深さからこれらが主柱穴と考えられる。西壁ぎわのP4、炉掘り込み部壁ぎわに対になって認められるP5やP6, P2とP4を結ぶ延長線上にあるP9は、前者に比べて規模が小さく、深さも浅いが、主柱穴P1～3に対する補助的な柱穴と考えられる。周溝内に位置するP10～12は壁柱穴の可能性がある。

【周溝】炉掘り込み部を除く北東辺から南東辺にかけての壁ぎわと、断続的ではあるが南辺から西辺にかけても認められる。本来は12～20㎝、深さは最も深いところで10㎝である。本来は炉の部分を除く住居跡を巡っていたものと思われる。

【炉】土器埋設石囲部（石囲部）、敷石石組部（石組部）、掘り込み部からなる複式炉である。埋設土器を大きく囲む石囲部に長方形の石組部が接し、さらに掘り込み部が取り付く形状を呈する。石囲部と石組部には、掘り込み部に続く掘り方が見られる。規模は全長2.4m、面積は2.3m^{2}で、住居全体に占める割合は10%とみられる。炉の長軸方向はN-54°－Wである。

第18図　第４次調査区（県道南側）遺構配置図



層No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	焼土を小量含む
3	10YR3/1 黒褐色	シルト	炭化物・焼土を多く含む
4	10YR3/3 暗褐色	シルト	
5	10YR5/6 黄褐色	シルト	
6	10YR3/4 暗褐色	シルト	周溝内埋土
7	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山粒を含む、P₁ 掘り方埋土
8	10YR3/3 暗褐色	シルト	炉埋土
9	10YR3/4 暗褐色	シルト	炉埋土
10	10YR3/2 黒褐色	シルト	炉埋土
11	10YR4/4 褐色	シルト	地山ブロックを含む 炉埋土
12	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物・焼土を含む 炉埋土
13	10YR4/6 褐色	シルト	地山ブロックを含む 炉埋土
14	10YR3/2 黒褐色	シルト	埋設土器内埋土
15	10YR2/2 黒褐色	シルト	炭化物・灰を多く含む 埋設土器内埋土
16	7.5YR4/6 褐色	シルト	埋設土器・炉掘り方埋土

第19図　第115号住居跡

石囲部：口径21.5㎝、高さ19㎝ほどの底部を欠く深鉢形土器を中心に捉え、その周辺に大小の礫を約80㎝の範囲に並べていたものと思われるが、南西半の石は取り外されている。土器埋設部分の掘り方はピット状に深くなっている。埋設土器内には炭化物、灰を多く含む黒褐色土が底面近くに認められている。埋設土器や石は火熱を受け、赤変しており、特に埋設土

器は取り上げが困難なほどであった。

石組部：平面形は、長辺が炉の長軸方向に直交する長方形を呈し、規模は1.2m×0.7mで、深さは床面から40㎝ほどである。底面には河原石と思われる小ぶりな円礫を敷き、奥壁・両側壁の最下段には方形を呈する扁平で大きな河原石を配し、その上に円礫を積上げている。この奥壁・両側壁の立ち上がりはゆるやかである。側壁、底面の石は共に火熱を受けた痕跡を残している。

掘り込み部：平面形は壁ぎわに向かって開く台形を呈し、規模は1.0～1.2m×1.0mで、深さは床面から30㎝ほどで、石組部底面に比べて10㎝高い。石組部に接する部分の底面には，深さ14㎝の大きなピットがあり、また壁ぎわよりの底面には炉長軸を挟んで対称な位置には、直径15㎝、深さ7㎝ほどの小ピット(P7・P8)がある。いずれも炉の構築に伴う施設と思われる。

なお、側壁･底面とも火熱を受けた痕跡は認められない。

【出土遺物】住居跡堆積土、床面、炉、柱穴から遺物が出土している。遺物には縄文土器、土製品、石器がある。

A土器・土製品

第20図1は炉埋設土器である。深鉢で胴下部から底部を欠き、正位に埋設されていた。表面の剥落が著しい。口縁部が外反し、胴央部が膨らみ、定部に向かってすぼまる器形である。全体の文様構成は不明であるが、曲線を描く稜線が地文部と無文部を区画している。

2は炉の敷石石組部底面から出土した深鉢で、摩滅が著しい。口縁部が強く外反する器形である。文様構成は十分に把握できないが、稜線によって横長の小判形を呈する区画を描き、内部に描き、内部に節が大変細かい単節縄文を施している。さらに、口縁部から稜線区画の端部まで稜線が「ノ」字状に垂下している。文様は方形区画文の一種と考えられる。外面内面ともにミガキ調整がなされている。

3～14は文様のある深鉢の胴部資料で、3～8は稜線、9は稜沈線、10～14は沈線によって地文部と無文部を区画している。

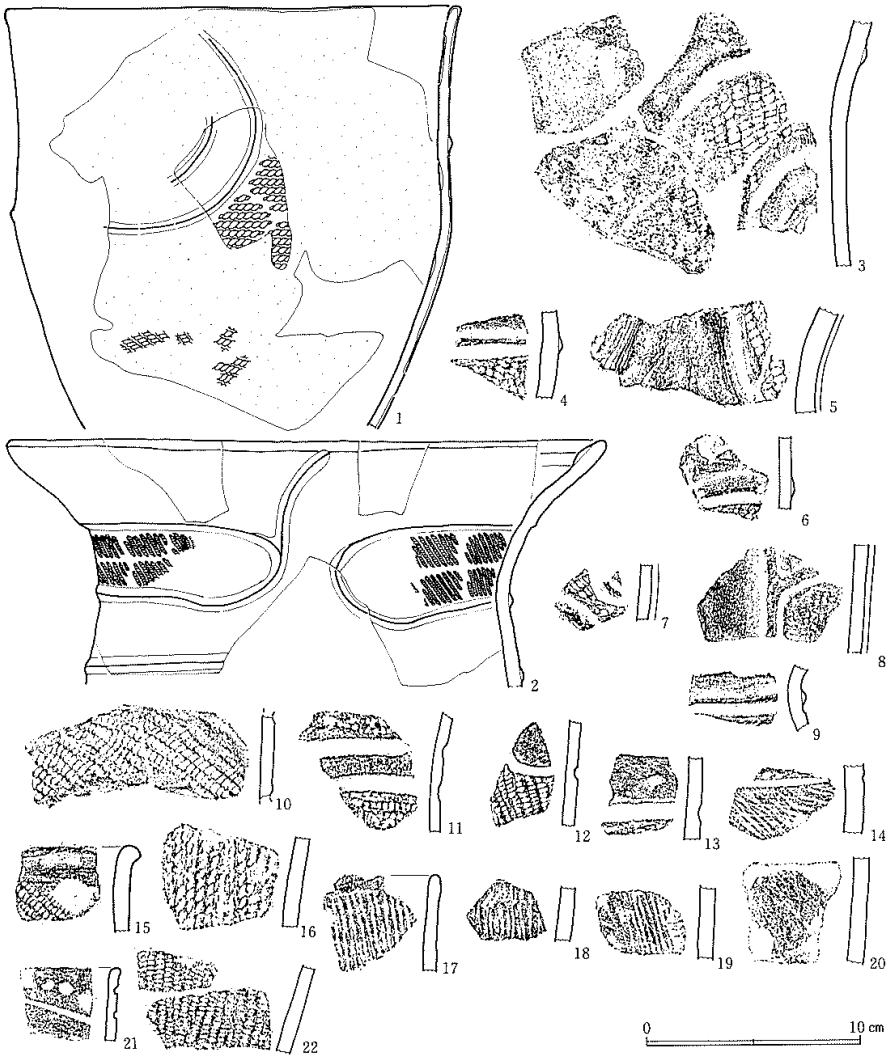
15、17、21は深鉢口縁部資料である。15・17は文様が無く、地文のみが胴上部から施されている。21は沈線とそれに沿った列点状の円形刺突文が施されている。

16、18～20、22は地文のみが施される深鉢の胴部資料である。

地文には単節縄文、0段多条縄文のほか、撚糸文が認められる。

第21図1は丹塗りの土製品である。耳飾あるいは土器の口縁部の突起にも似ているが、破損品のため判然としない。

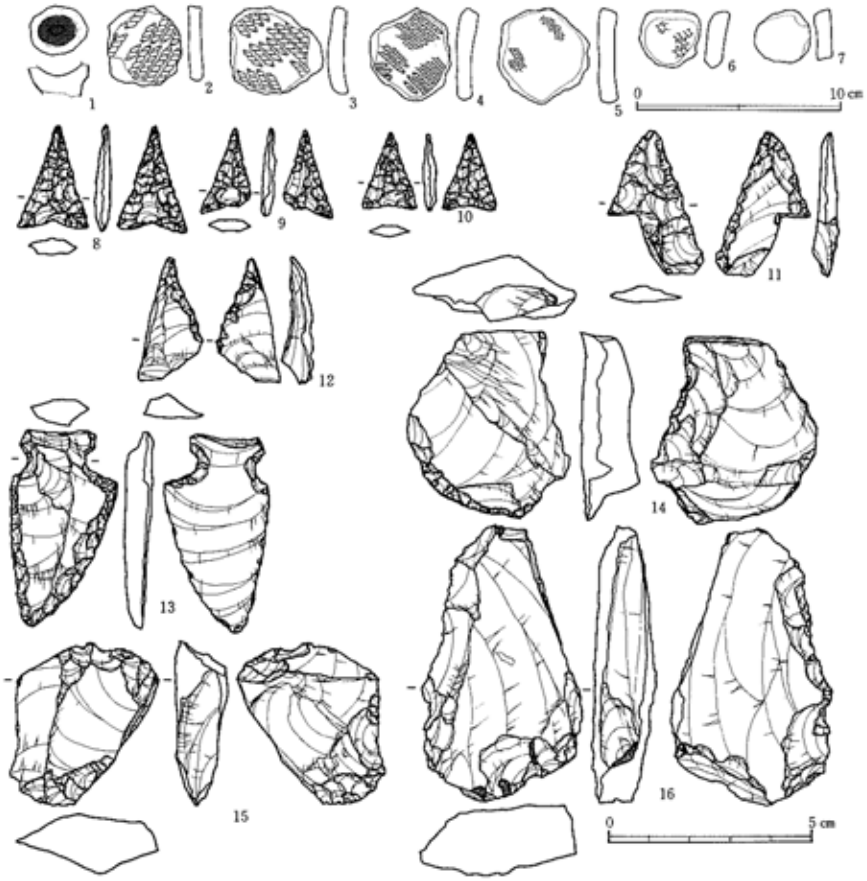
2～7は円盤状土製品である。2～6、は土器の胴部、7は底部を打ち欠いて整形したものである。前者にはいずれも文様はなく、地文のみが施されている。



No.	器種・分類	出土層位	備　　考	登　録	写　真
1	深鉢・A	炉埋設土器	縄文LR 口径21.5cm	115-2	
2	深鉢・A5	炉石組部底	縄文LR 口径28.0cm	115-1	9－1
3	深鉢	炉掘り方	縄文RL	115-9	9－2
4	深鉢	2層	縄文RL	115-16	
5	深鉢	炉掘り方	縄文RL	115-11	9－3
6	深鉢	14層(炉)	縄文RL	115-18	
7	深鉢	8層(炉)	縄文RL	115-14	
8	深鉢	1層	0段多条縄文RL	115-12	9－4
9	深鉢	柱穴P2		115-15	
10	深鉢	2層	縄文LR	115-10	
11	深鉢	2層	縄文LR	115-22	9－8

No.	器　種	出土層位	備　　考	登　録	写　真
12	深鉢	柱穴P3	縄文RL	115-21	9－5
13	深鉢	8～9層 (炉)		115-20	
14	深鉢	1層	網目状撚糸文r?	115-27	9－7
15	深鉢	柱穴P1	縄文LR　ガジリ痕	115-28	
16	深鉢	1層	撚糸文l	115-13	9－6
17	深鉢	8～9層(炉)	撚糸文l	115-25	
18	深鉢	2層	撚糸文r	115-24	
19	深鉢	1層	撚糸文r	115-23	9－10
20	深鉢	2層	網目状撚糸文l	115-19	
21	深鉢	8層(炉)	円形刺突文	115-17	9－9
22	深鉢	2層	0段多条縄文RL	115-29	

第20図　第115号住居跡出土遺物（1）



No.	器種・分類	出土層位	備考	登録	写真
1	円盤状土製品	炉石組周辺		115-26	9－11
2	円盤状土製品	柱穴内	縄文RL 3.5×3.7cm 10.1g	115- 4	9－17
3	円盤状土製品	8～9層(炉)	縄文LR 4.5×4.3cm 17.1	115- 5	9－14
4	円盤状土製品	1層	縄文LR 4.6×4.0cm 18.2g	115- 8	9－12

No.	器種・分類	出土層位	備考	登録	写真
5	円盤状土製品	14層(炉)	縄文RL 4.7×4.5cm 20.2g	115- 7	9－13
6	円盤状土製品	1層	縄文RL 3.0×2.8cm 8.4g	115- 6	9－16
7	円盤状土製品	1層	2.8×2.6cm 5.8g	115- 3	9－15

番号	地区・層位	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考	登録No.	写真
8	1	石鏃	珪質頁岩	25	17	3	0.6	アスファルト痕	115-1	13－1
9	1	石鏃	玉髄	21	12	3	0.3	左脚欠損	115-2	13－2
10	1	石鏃	玉髄	19	13	3	0.4		115-3	13－3
11	P 6	石匙	玉髄	(25)	(23)	5	2.5	尖頭器?	115-4	13－4
12	2	石匙	玉髄	31	15	5	2.0		115-7	13－5
13	炉埋設土	石匙	珪質頁岩	50	26	5	7.6		115-5	13－6
14	2	スクレーパー	頁岩	46	41	15	23.5		115-6	13－7
15	炉	不定形石器	頁岩	43	(30)	11	14.7		115-8	13－8
16	炉	不定形石器	玉髄	36	(56)	14	39.9		115-11	13－9

第21図　第115号住居跡出土遺物（2）

番号	地区・層位	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考	登録No.	写真
1	B－2	不定形石器	黒曜石	(9)	(20)	6	0.9		115-9	13－10
2	B－2	不定形石器	頁岩系	28	22	6	3.5		115-12	13－11
3	炉	不定形石器	黒曜石	32	32	10	6.0		115-13	13－12
4	P3	不定形石器	黒曜石	(12)	(12)	2	0.3		115-10	13－13

第22図　第115号住居跡出土遺物（3）

b　石　器

石鏃（第21図8～10）いずれも凹基で、側縁が直線的な種類である。基部の作り出しは浅い。8は9、10に比べて長大で、基部と長軸に沿う部分には黒褐色の付着物が認められる。着柄に完形するものと思われる。

石錐（第21図11）打点側を切断した縦長の剥辺の左側縁に交互剥離状の加工が施され、下端に先端部が作り出されているものである。

石匙(第21図12・13)いずれも縦長の剥片を使用し、12は打点側を折断してからつまみ部を作り出している。背面の右側縁にはスクレイパー状の刃部、左側縁には鋸歯状の剥離が加えられ、刃部が作り出されている。13は打点側が大きく折損しており、つまみ部の形態などを知ることはできない。刃部は交互剥離状の加工が施されており、尖頭器の先端部の可能性もある。

スクレイパー(第21図14)縦長の剥片を腹面左末端方向から半截し、背面末端から両側縁下半までと腹面両側縁に刃部が作り出されている。

不定形石器(第21図15・16、第22図1～4)大小の剥片の両面または片面に剥離が認められるもので、すべて折損している。15・16・1は両面に加工が施されるものである。15は右下半を末端からの最終的な剥離で欠くが、上端と末端に交互剥離が施され、末端の剥離は腹面にまで及んでいる。15は14と同一母岩である。16は大形の剥片で打面側を大きく欠いている。末端部に交互剥離状の大きな剥離が認められる。1は上下両端が折れているもので、左側縁にはスクレイパー状の剥離が認められる。2～4は主として片面に加工が施されているものである。2は末端と右側縁上半を欠くもので背面左右側縁と腹面打点側に剥離が認められる。3は打点側に再剥離が加えられるもので、左右両側縁に鋸歯状の剥離が認められる。4は打点側が大きく欠ける小破片で、腹面末端に鋸歯状の剥離が認められる。

第121号住居跡(第23図)

【遺構の確認】第115号住居跡の西隣のW23～28、S2～8に位置し、地山ローム層、部分的

に泥岩層上面で確認している。新しい撹乱穴によって、壊されている部分がある。

【平面形・規模】住居跡東半が削平され、壁が検出されなかったが、残存している壁や周溝などから直径4.8mほどの円形を呈するものと考えられる。面積は17.6m²程度に推定される。

【堆積土】3枚の層が認められる。1は住居中央に、2・3は壁ぎわに分布している。

【壁】北辺から西辺にかけて検出しているが、東辺から南辺にかけては削平により残存していない。地山を壁としており、立ち上がりは緩やかである。残存壁高は保存のよい北壁で8㎝である。

【床面】地山を床としている。ほぼ平坦であるが、住居中央でやや窪む傾向が認められる。地山の礫が床面上に頭を出している部分もある。

【柱穴】住居内から13個のピットが検出されている。炉の長軸線上の壁寄りに位置するP1と、同じ長軸線上に位置する埋設土器を挟んでほぼ対称の位置にあるP2・P3は、一辺2.4mの正三角形の頂点にあたる配置関係にある。柱痕跡は見つかっていないが、ピットの規模や深さからこれらが主柱穴と考えられる。P1と共に北壁ぎわにあるP4・P5、炉石囲部にあるP9・P10、炉掘り込み部の壁ぎわに位置するP11・P13は、それぞれ炉の長軸線を挟んでほぼ対称の位置にある。住居西寄りにあるP6～8も含め、これらは主柱穴P1～3に対する補助的な柱穴と考えられる。P9～13は炉に伴う施設の可能性もある。

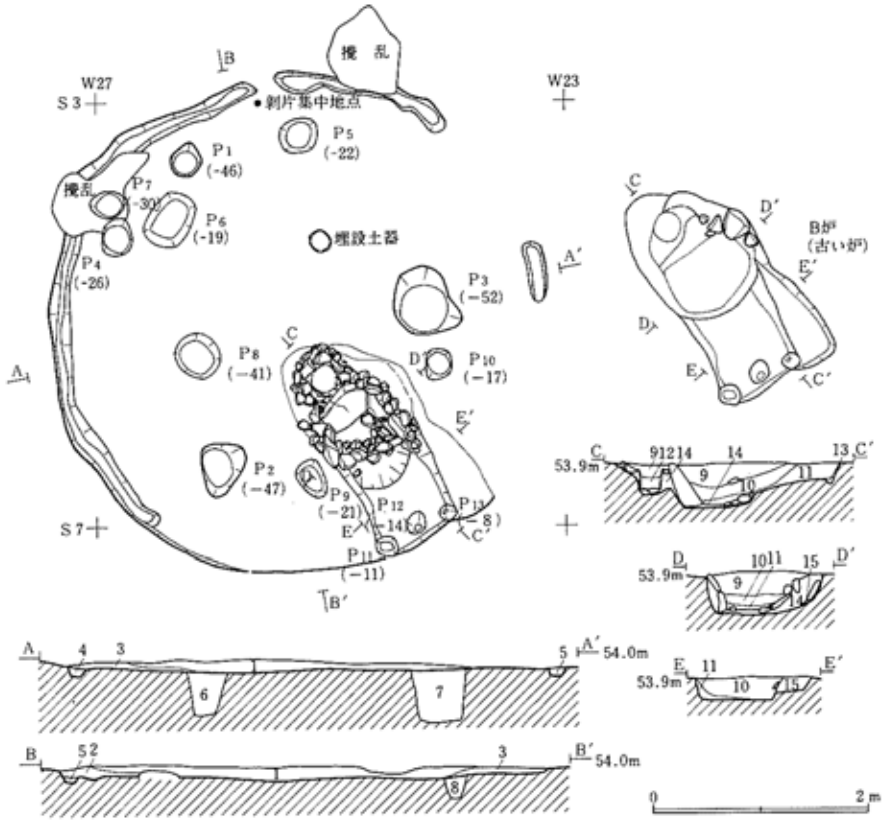
【周溝】南辺の炉掘り込み部側には認められないが、北辺から西辺にかけての壁ぎわと、東辺の一部に認められる。土幅は15～25㎝、深さは最も深いところで16㎝である。

【炉】土器埋設石囲部(石囲部)、敷石石組部(石組部)、掘り込み部からなる複式炉である。新しい炉(A炉)の下から、作り替えられた古い炉(B炉)の一部が検出されている。

(A炉)平面形は南西にやや屈曲する細長い二等辺三角形を呈している。埋設土器を半円形に囲む石囲部に長方形の石組部が接し、さらに縦長の掘り込み部が取り付く形状である。石囲部と石組部には、掘り込み部に続くやや大きい掘り方が見られる。規模は全長2.1m、面積は1.6m²で、住居全体に占める割合は9%とみられる。炉の長軸方向はN-0°－Wである。

石囲部：口径24㎝、高さ24㎝ほどの底部を欠く深鉢形土器を囲むように、石組部と接するところでは1列に、他は半円状に2列に大小の河原石を並べている。およそ長軸0.7m×短軸0.5mの範囲で長軸方向は炉の長軸線に直交している。石囲部の周縁部は炉埋設土器口縁部より高くなっている。その埋設土器内は焼土、木炭粒を含む灰状の土が認められ、底面には石や土器片が敷いてあった。埋設土器や石は共に火熱を受け、赤変している。

石組部：平面形は長軸0.9m、短軸0.8mの長方形を呈し、長軸方向は石囲部と同じである。深さは床面から35㎝ほどである。底面には小ぶりな円礫をほぼ水平に敷き、奥壁には大きく扁平な一枚岩を据え、両側壁の最下段には方形を呈する扁平で大きな河原石を奥壁側から順次手



層No	土色	土性	備考	
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	木炭粒を少量含む	
2	10YR3/2 暗褐色	シルト	地山小礫を多く含む	
3	10YR3/1 黄褐色	シルト	地山粒を多く含む	
4	10YR3/3 暗褐色	シルト	地山小礫を多く含む	周溝埋積土
5	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山小礫を多く含む	周溝埋積土
6	10YR4/4 褐色	シルト	P₁ 埋積土	
7	10YR3/3 暗褐色	シルト	P₁ 掘り方埋土？	
8	10YR3/3 暗褐色	シルト	P₁ 埋積土	
9	10YR3/3 暗褐色	シルト		炉埋積土
10	10YR2/3 黒褐色	シルト	焼土・木炭粒を少量含む	炉埋積土
11	10YR2/3 黒褐色	シルト	焼土・木炭粒を多量に含む	炉埋積土
12	10YR2/2 黒褐色	シルト	焼土・木炭粒を多量に含む。炭状	埋設土器内埋積土
13	10YR2/3 黒褐色	シルト	P₁₁ 埋積土	
14	10YR3/3 暗褐色	シルト	新しい炉掘り方埋土	
15	10YR3/4 暗褐色	シルト	古い炉掘り方埋土	

第23図　第121号住居跡

前に並べてその上に大小の礫を積上げている。この奥壁・両壁側の立ち上がりは直線的で縦・横断面形は逆台形を呈している。側壁・低面の石は共に火熱を受けた痕跡を残している。

掘り込み部：平面形は長軸0.9m、短軸0.8mの長方形を呈し、長軸方向は炉の長軸線に一致

している。深さは床面から15㎝ほどで、石組部底面に比べて20㎝高く、壁ぎわにむかって次第に浅くなっている。壁ぎわの底面には、直径約20㎝、深さ7～14㎝のピットが3個(P11～P13)並んでおり、前述のように、炉の構築に伴う施設の可能性がある。なお、側壁・底面とも火熱を受けた痕跡は認められない。

(B炉)平面形はA炉より横広の二等辺三角形を呈している。金長は2.1m程度である。A炉の構築にともなって大きく壊されており、埋設土器の3分の1、石組部の石の一部掘り込み部の東側の側壁が、わずかに残るだけである。炉の長軸方向はN-3°－Wである。

B炉埋設土器の破片の一部は、A炉の土器埋設部分の底面に敷かれており、また、A炉の石組部と掘り込み部は、B炉のそれに比べて、幅はせまく、他方深さが深くなるように作り直されていることがわかる。

【床面土器埋設遺構】住居中央部北東寄りの床面で土器埋設遺構を検出している。掘り方は直径22㎝の円形を呈し、深さは30㎝、断面形は砲弾形である。その中に口径20㎝、高さ25㎝の深鉢形土器を正位に埋設している。

【出土遺物】住居跡堆積土、炉堆積土、床面、炉掘り方、柱穴、周溝から遺物が出土している。遺物には縄文土器、石器がある。

ａ　土　器

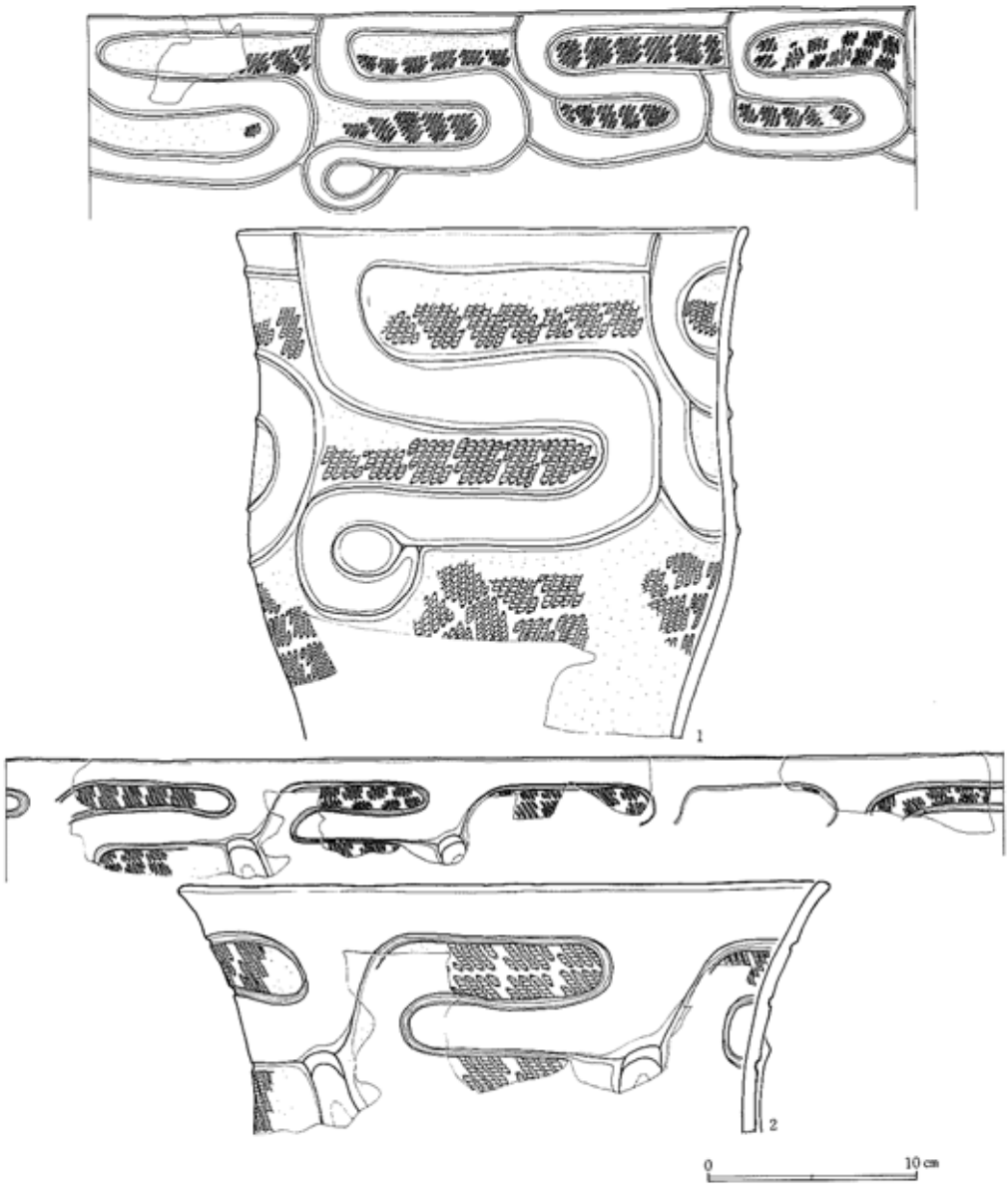
第24図は新しい炉(A炉)埋設土器である。底部を欠き、正位に埋設されていた。口縁部が外反し、胴央部がわずかに膨らみ、底部に向かって直線的にすぼまる深鉢である。高さに比べ基底幅の広い稜線による4単位の連結「S」字状文が施される。連結のありかたはそれぞれ異なっており、特に正面図の部分のみが玉抱き連結となっている。無文部が閉じる部分では稜線がとりわけ高まっている。

2は古い炉(B炉)埋設土器である。口縁部から胴上部まで部分的に残っており、正位に埋設されていた。口縁部が強く外反する深鉢である。沈線による5単位の連結波涛文が描かれ、波涛の立ち上がる部分から隆帯が垂下しているが、どのように文様が展開するのか不明である。外面内面ともにミガキ調整がなされている。

第25図1は深鉢の胴部資料で、稜線によって横位波涛文類の文様が描かれている。

2は口縁部が外反し、頚部でくびれ、胴上部が膨らむ深鉢である。胴上部に隆線がめぐり、その下に地文が施されている。土器の摩滅がひどい。

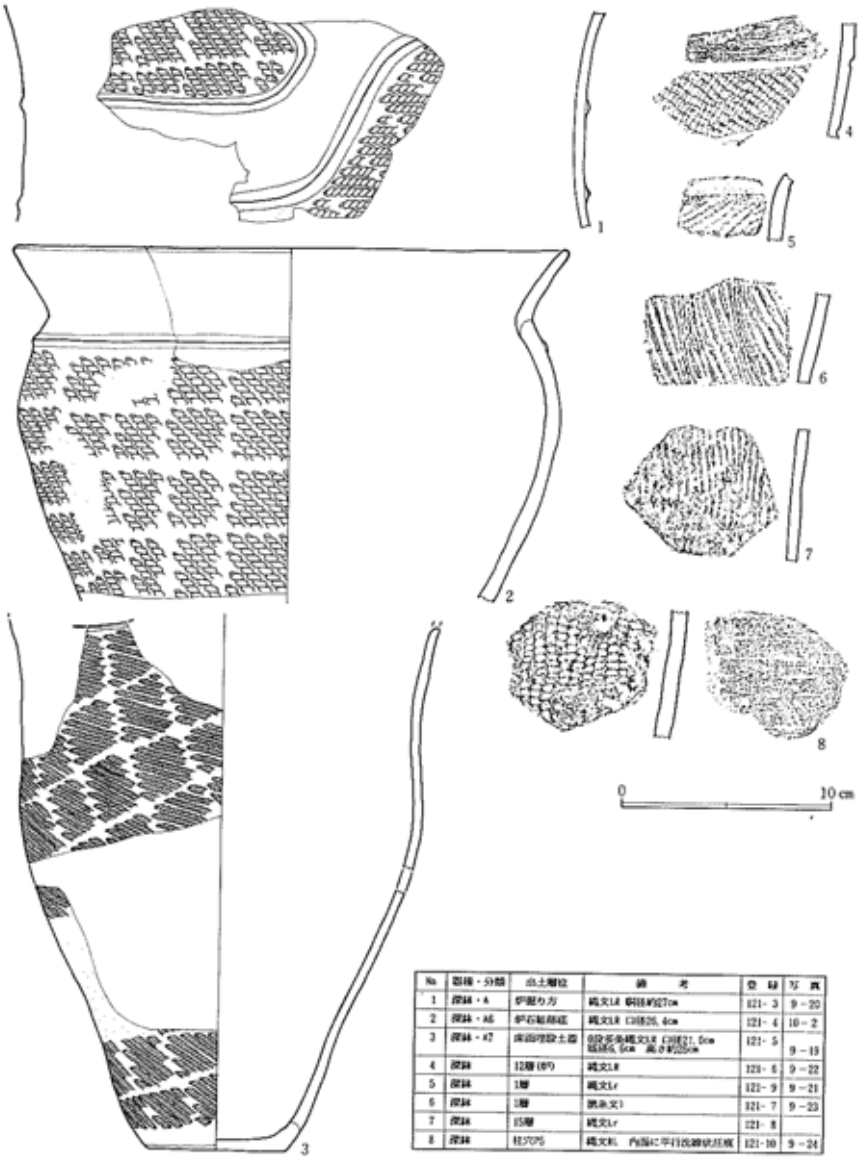
3は床面埋設土器である。口縁部がわずかに外反し、胴央部が膨らみ、底部に向かって直線的にすぼまる深鉢である。口縁部は部分的にしか残っていないが、波状縁になる可能性がある。ほぼ口縁部から胴下部まで地文(0段多条縄文)が施されており、内面はミガキ調整がなされている。



No.	器種・分類	出土層位	備考	登録	写真
1	深鉢・A1	A炉埋設土器	縄文RL 口径24.6cm	121-1	9-18

No.	器種・分類	出土層位	備考	登録	写真
2	深鉢・A3	B炉埋設土器	縄文LR 口径31.1cm	121-2	10-1

第24図　第121号住居跡出土遺物（1）



No.	器種・分類	出土層位	備　考	登　録	写　真
1	深鉢・A	炉掘り方	縄文LR 胴径約27cm	121-3	9-20
2	深鉢・A6	炉石組部底	縄文LR 口径26.4cm	121-4	10-2
3	深鉢・A7	床面埋設土器	0段多条縄文LR 口径21.0cm 底径6.6cm 高さ約25cm	121-5	9-19
4	深鉢	12層(炉)	縄文LR	121-6	9-22
5	深鉢	1層	縄文Lr	121-9	9-21
6	深鉢	3層	撚糸文l	121-7	9-23
7	深鉢	15層	縄文Lr	121-8	
8	深鉢	柱穴P5	縄文RL 内面に平行沈線状圧痕	121-10	9-24

第25図　第121号住居跡出土遺物（2）

4〜8は深鉢の胴部資料である。4、5は沈線によって地文部と無文部を区画している。6〜8は地文のみが施されている。また、8の内面には、土器製作時のものと思われる横位等行沈線状の圧痕が認められる。

地文には単節縄文、無節縄文のほか、撚糸文がある。

b　石　器

石鏃（26図1・2）1は右脚部の先端を欠くが、細長い二等辺三角形状の凹基のもので、基部の抉りは浅い。基部と長軸に沿う部分には黒褐色の付着物が認められ、着柄に関係するものと思われる。2は凸基のものと考えられるが、茎はあまり発達していない。

尖頭器(第26図3・4)3は形態的には凹基の石鏃を大形にしたもので、両側縁は湾曲し、基部の抉りは浅い。4は右側縁に打面部を残すが、形態は二等辺三角形状となり、先端部は鋭い。

石錐(第26図5)自然面を残す不定形の小剥片の一辺に急角度の調整を施し、錐部を作り出している。

石匙(第26図6)つまみ部の破片で、縦長の剥片の打点側に近いところにつまみ部を作り出している。

不定形石器(第26図7〜11)7は背腹両面に急角度の小剥離が加えられ尖端部を作り出している。8〜10は剥片が折断されているもので、8は打点側を切断した後、両面に2次加工を施している。9は左上面を折断しており、打面部背面と腹面右側縁に剥離が施されている。10は上下両端を背面側から折断し、右側縁に切り出し状の刃部を作り出している。11は分厚い剥片の背面から腹面にかけて樋状剥離が2か所に認められる。

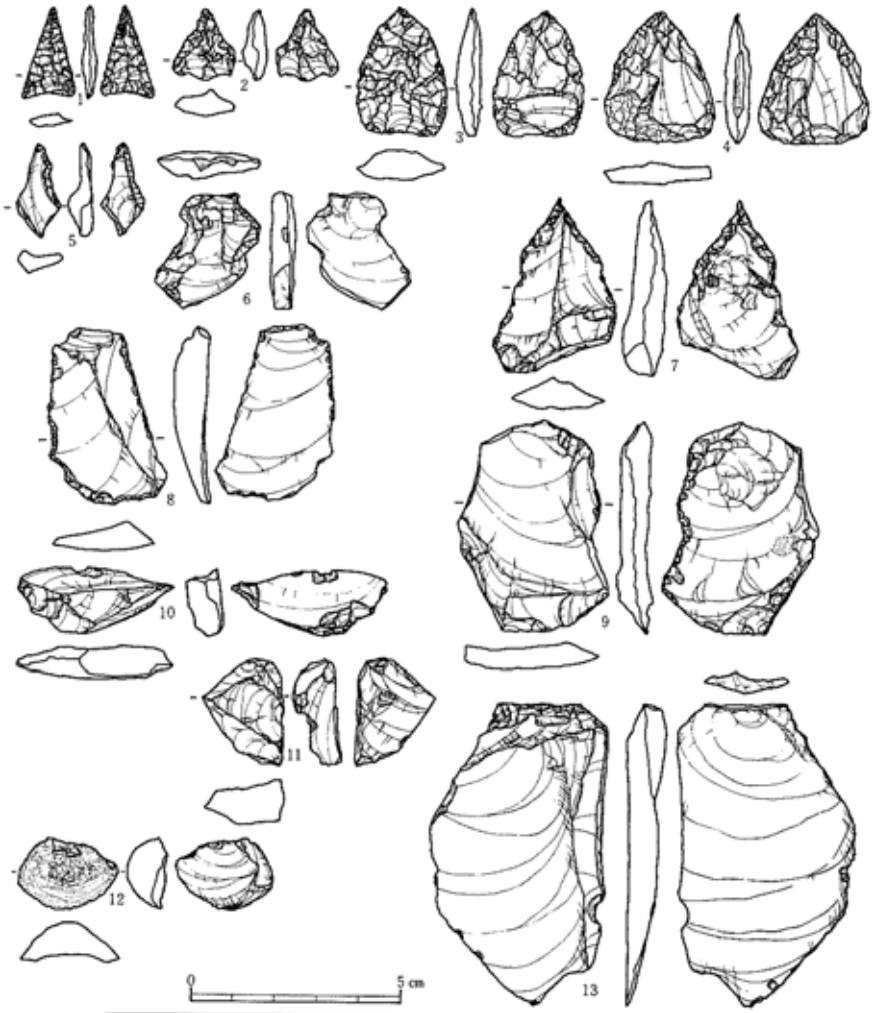
石核(第26図12)自然面を残す黒曜石の小礫を、両面剥離によって剥片を剥離しているものである。

剥片(第26図13、第27図1〜7)13、1〜4の5点は住居跡北端の床面上でまとまって発見されたものである。4以外は同一母岩と思われる。13は打点背面に剥離が加えられ、3は打面部が除去されている。4の背面末端部に2次加工と思われる小剥離が認められるほか、すべての縁辺に使用痕と考えられる微細剥離痕が認められる。

5〜7は使用痕が認められる剥片で、6は下半が、7は上半と右側縁が折断されている。

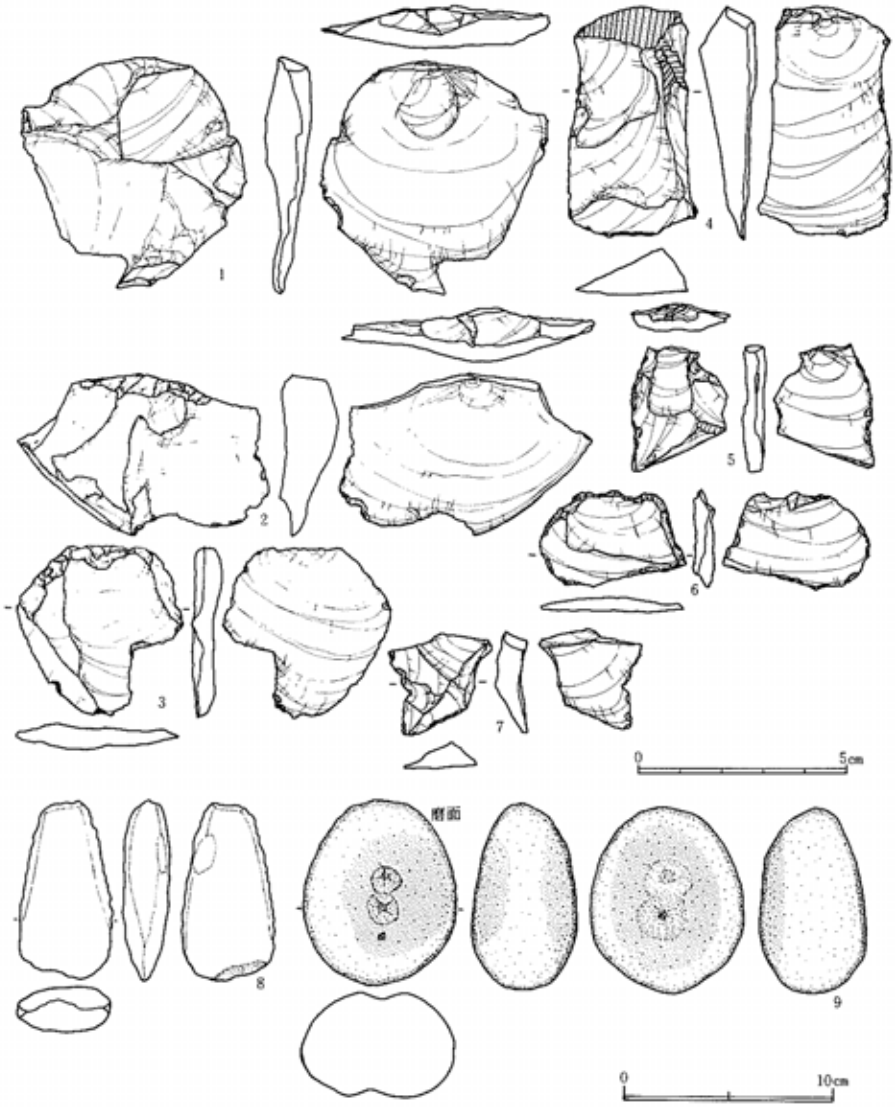
磨製石斧(第27図8)床埋設土器内底部から出土している。全面風化剥離が著しい。やや扁平で主面と側面の間に緩い稜線が通る。刃部は片側が破損している。

磨凹敲石類(第27図9,第28図1〜3)すべて複式炉の敷石石組部に用いられたもので、かなり火熱を受けたものと思われる。9は二磨面、二凹部を有する。1は二磨面を有する。数片に割れていた。2は一凹部、一敲打面を有する。3は二面に浅い凹部が認められる。材質は多孔質でもろい。



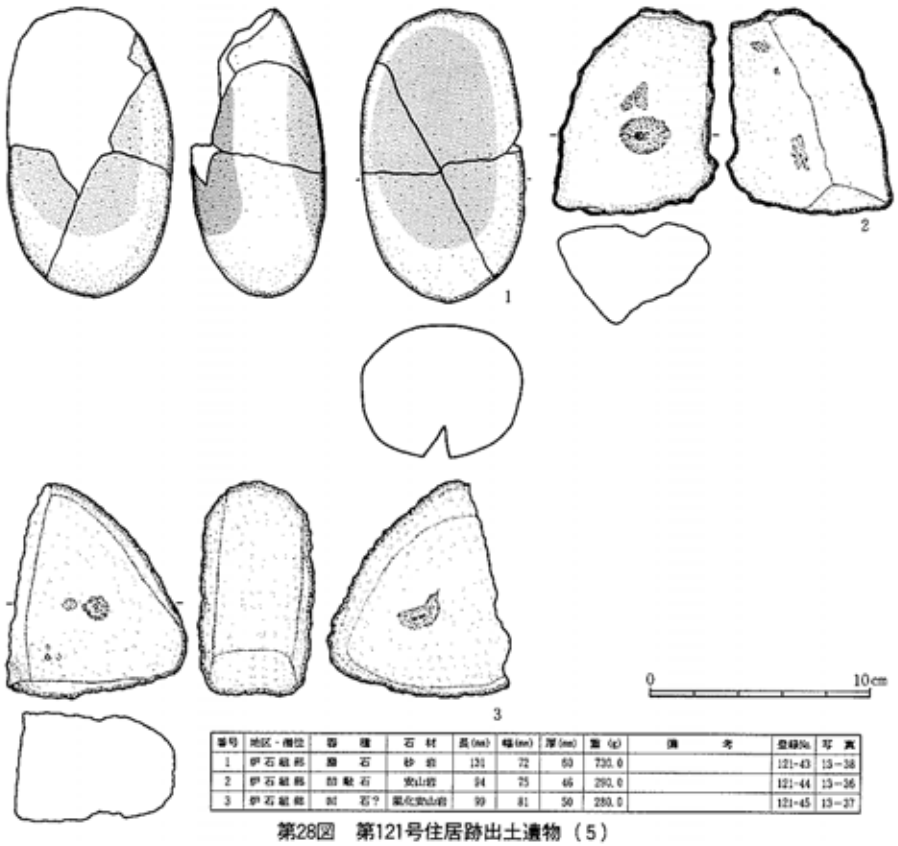
番号	地区・層位	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考	登録No.	写真
1	床	石鏃	珪質頁岩	21	12	3	0.8		121-1	13-14
2	床	石鏃	玉髄	17	15	6	1.0		121-2	13-15
3	1	尖頭器	珪質頁岩	30	22	6	3.5		121-3	13-16
4	1	尖頭器	珪質頁岩	31	26	6	4.8		121-5	13-17
5	古炉埋設土	石錐	珪質頁岩	22	10	5	0.5		121-6	13-18
6	床	石匙	珪質頁岩	22	10	5	0.5		121-4	13-19
7	1	不定形石器	黒曜石	42	29	10	8.2		121-12	13-20
8	1	不定形石器	珪質頁岩	44	26	7	5.1		121-13	13-21
9	周溝	不定形石器	珪質頁岩	51	37	7	10.2		121-14	13-22
10	床	不定形石器	珪質頁岩	16	37	6	4.0		121-15	13-23
11	1	不定形石器	結石英	26	19	11	4.0		121-49	13-25
12	床	石核	黒曜石	23	17	7	3.2		121-16	13-24
13	集中地点	剥片	珪質頁岩	72	42	8	23.4		121-7	13-27

第26図　第121号住居跡出土遺物（3）



番号	地区・層位	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考	登録	写真
1	集中地点	剥片	頁岩	56	56	9	21.1	同一母岩	121－8	13－28
2	集中地点	剥片	頁岩	39	61	10	17.8	同一母岩	121－9	13－29
3	集中地点	剥片	頁岩	42	38	4	6.0	同一母岩	121－10	13－26
4	集中地点	剥片	頁岩	55	23	14	18.8		121－11	13－30
5	床	剥片	玉髄	23	34	3	2.3	u. f.	121－17	13－31
6	P 3	剥片	頁岩	31	23	3	2.9	u. f.	121－18	13－32
7	P 2	剥片	頁岩	25	23	5	2.2	u. f.	121－19	13－33
8	埋設土器底	磨製石斧	安山岩質凝灰岩	86	45	21	120.0		121－41	13－34
9	炉跳込部床	磨凹石	安山岩	89	73	50	350.0		121－42	13－35

第27図　第121号住居跡出土遺物（4）



番号	地区・層位	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考	登録No.	写真
1	炉石組部	敲石	砂岩	131	72	60	730.0		121-43	13-38
2	炉石組部	敲磨石	安山岩	94	75	46	290.0		121-44	13-36
3	炉石組部	剥 石?	風化安山岩	99	81	50	280.0		121-45	13-37

第28図　第121号住居跡出土遺物（5）

第126号住居跡（第29図）

【遺構の確認】第4次調査区北端中よりのE6～11、N4～S1に位置し、地山泥岩層上面で確認している。住居跡北西部が、新しい撹乱穴によって壊されている。

【平面形・規模】住居跡北西部を欠き、壁もほとんど検出されなかったが、残存している周溝などから、平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。規模は炉の長軸方向で4.1m、それに直交する方向で4.8m、面積は15.7m^{2}と推定される。

【堆積土】1枚の層が認められる。黒褐色土で、住居体に薄く分布している。

【壁】削平により、ほとんど検出されなかった。

【床面】地山を床としている。ほぼ平坦であるが、全体的に南にやや傾斜している。

【柱穴】住居内から11個のピットが検出されている。このうち5個のピット(P1～P5、P8)から、柱痕跡が見つかっている。炉の長軸線上の東壁寄りに位置するP1と、同じ長軸線上に位

置する埋設土器を挟んでほぼ対称の位置にあるP2・P3は、一辺2～2.5mのほぼ正三角形の頂点の配置関係にある。ピットの規模からも、これらが主柱穴と考えられるが、P1は深さが11㎝と浅い。むしろ、P1を挟んでほぼ対称の位置にあるP4・P5が30～40㎝の深さを有しており、P1～3と共に主柱穴である可能性が強い。P8は炉の石組部の南側に位置している。石組部を挟んだ対称の位置には新しい撹乱穴があり、対になる堅穴の存在は不明であるが、主柱穴に対する補助的な柱穴、あるいは炉に伴う施設の可能性が考えられる。周構内に位置するP9～11は壁柱穴の可能性がある。

【周溝】撹乱穴と重複し、削平も著しい北西側には認められないが、東辺から南辺にかけてと、炉掘り込み部を除く西辺の一部に認められる。上幅は10～25㎝、深さは最も深いところで12㎝である。

【炉】土器埋設石囲部（石囲部）、敷石石組部(石組部)、掘り込み部からなる複式炉である。埋設土器を半円形に囲む石囲部に長方形の石組部が接し、さらに掘り込み部が取り付く形状を呈する。石囲部と石組部には、掘り込み部に続くやや大きい掘り方が見られる。規模は全長1.9m、面積は1.5m^{2}で、住居全体に占める割合は約10%である。炉の長軸方向はE-16°－Sである。

石囲部：口径30㎝、高さ25㎝ほどの口縁部と胴半部を欠く深鉢形土器を中心に据え、その周囲には小さな礫を、さらに外側にやや大きな礫を環状に並べているが、西半の石は取り外されている。土器埋設部分の掘り方はピット状に深くなっている。その埋設土器内には炭化物、焼土粒を多く含む黒褐色土が認められる。壊設土器や石は共に火熱を受け、赤変している。

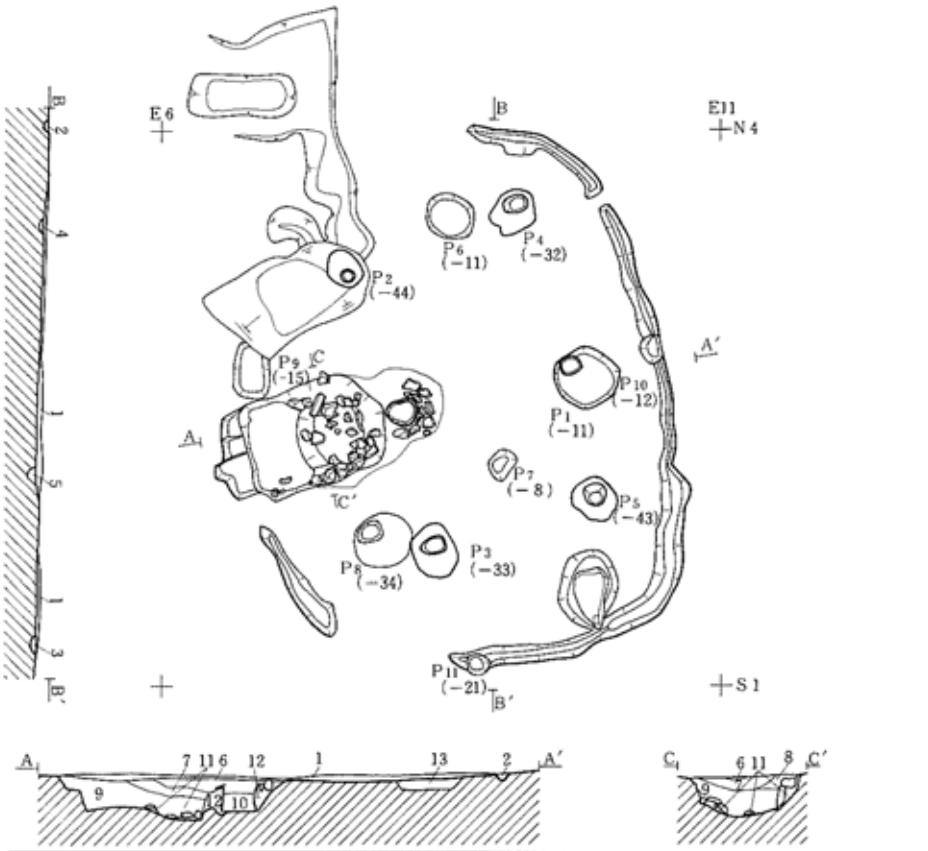
石組部：壁面・底面の石の約半分が取り外されているが，平面形は長軸0.9m，短軸0.8mの長方形を呈していたと思われる。長軸方向は炉長軸線に直交している。深さは床面から40㎝ほどで、石組部低面には小ぶりな礫を敷き、側壁の最下段には方形を呈する扁平で大きな河原石を並べて、その上に大小の礫を積上げている。南側側壁の石は残存するが、、奥壁から左側壁にかけては石が抜き取られている。側壁・低面の石は共に火熱を受けた痕跡を残している。

掘り込み部：平面形は長軸0.9m、短軸0.8mの長方形を呈し、長軸方向は石組部と同じである。深さは床面から30㎝ほどで、石組部底面に比べて10㎝高い。壁ぎわに、低面より20㎝高い段が設けられている。側壁・底面とも火熱を受けた痕跡は認められない。

【出土遺物】住居跡堆積積土、床面、柱穴、周溝から遺物が出土している。遺物には縄文土器、土製品、石器がある。

A　土器・土製品

第30図1は炉埋設土器である。胴下部から底部を欠き、正位に埋設されていた。胴上部から口縁部にむかって外反し、胴央部がわずかに膨らむ深鉢である。稜線「ノ」よる状を呈する4単位の分節波涛文が描かれる。胴央部には波形の稜線が巡り、地文部と無文部を区画している。



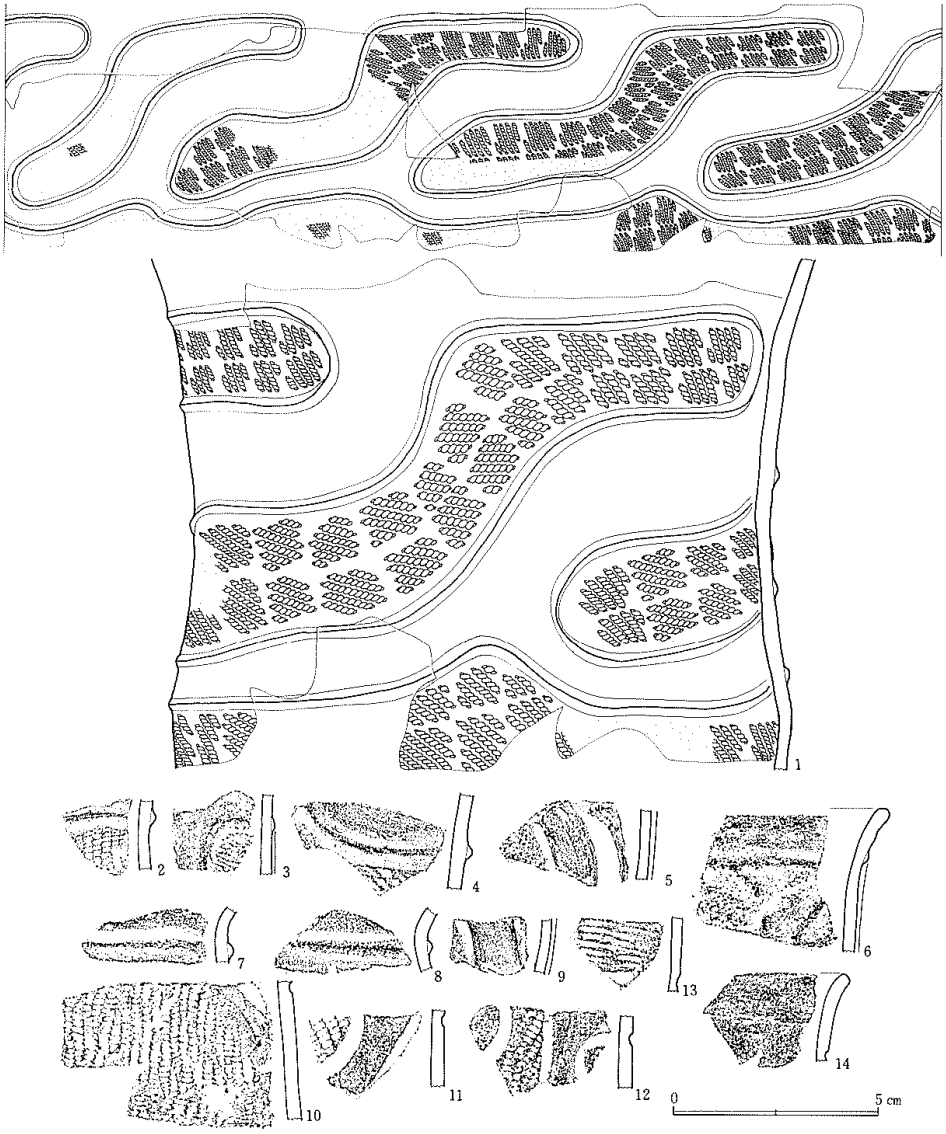
層No.	土色	土性	備考	
1	10YR2/3 黒褐色	シルト		
2	10YR3/3 暗褐色	シルト		周溝埋積土
3	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山粒を多く含む	
4	10YR3/2 黒褐色	シルト	地山粒を多く含む　P₁ 掘り方埋土	
5	7.5YR3/3暗褐色	シルト	P₁ 埋積土	
6	5YR2/3極暗赤褐色	シルト	焼土層	炉埋積土
7	10YR2/2 黒褐色	シルト	木炭を多く含む	
8	5YR2/6極暗赤褐色	シルト	焼土層	
9	10YR3/3 暗褐色	シルト	地山粒を多く含む	
10	10YR2/3 黒褐色	シルト	木炭・焼土粒を多く含む	埋設土器内埋積土
11	10YR3/2 黒褐色	シルト	焼土・炭化物を多く含む	炉掘り方埋土
12	10YR3/3 暗褐色	シルト	地山土を多く含みしまりあり	埋設土器掘り方埋土

第29図　第126号住居跡

2～14は文様が施されている深鉢の破片資料で、2～9は稜線、10～14は沈線によって地文部と無文部を区画している。

第31図は1～3は深鉢の口縁部資料である。1・2は文様が無く、地文のみが胴上部から施されている。3は半截竹管による横位列点状刺突文が口縁部下に施されている。4～6は地文のみが施される深鉢胴部資料、7は深鉢資料である。

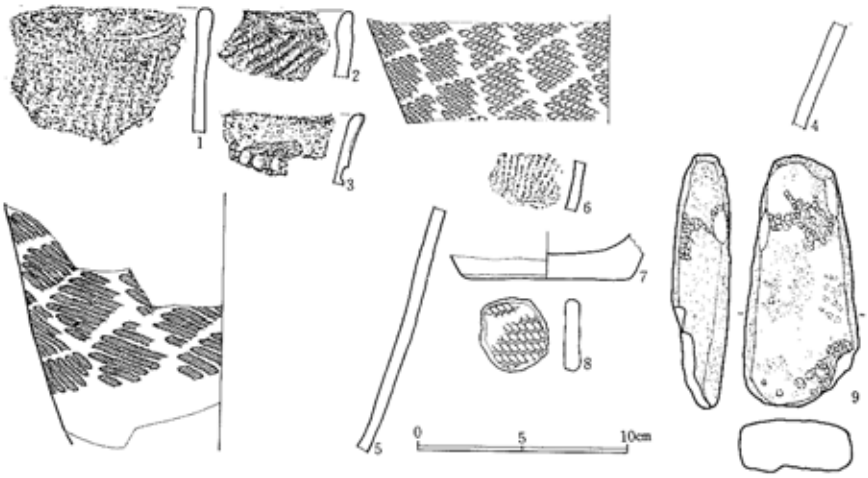
地文には単節縄文のほか、無節縄文、複節縄文、0段多条縄文が認められる。



No.	器種・分類	出土層位	備　　考	登　録	写　真
1	深鉢・A2	炉埋設土器	縄文LR 胴径約28cm	126- 1	10－3
2	深鉢	柱穴P1	縄文RL	126- 8	10－4
3	深鉢	10層(炉)	縄文LrRLR	126-11	10－1
4	深鉢	6層(炉)	縄文Lr	126-10	10－5
5	深鉢	6層(炉)	縄文？	126-15	10－6
6	深鉢	堆積土	縄文？	126- 3	
7	深鉢	6層(炉)		126-18	

No.	器種・分類	出土層位	備　　考	登　録	写　真
8	深鉢	6層(炉)		126-13	
9	深鉢	6層(炉)	縄文？	126-17	
10	深鉢	6層(炉)	縄文RL	126- 9	10－8
11	深鉢	6～7層(炉)	縄文RL	126-16	10－7
12	深鉢	床面	縄文RL	126-14	10－12
13	深鉢	6層(炉)	縄文LR	126- 4	
14	深鉢	6層(炉)		126- 6	

第30図　第126号住居跡出土遺物（1）



No	器種・分類	出土層位	備　考	登　録	写　真
1	深鉢	堆積土	縄文RL	126-5	
2	深鉢	柱穴P7	縄文LR	126-12	10-10
3	深鉢	6層(炉)	半截竹管による刺突文	126-7	10-11
4	深鉢	柱穴P7	縄文LR	126-22	

No	器種・分類	出土層位	備　考	登　録	写　真
5	深鉢	6層(炉)	0段多条縄文LR	126-21	
6	深鉢	6層(炉)	縄文RLR	126-20	
7	深鉢	床面	底部7.8cm	126-2	
8	円盤状土製品	堆積土	縄文LR 4.6×4.0cm 18.3g	126-19	12-12

番号	地区・層位	器　種	石　材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備　考	登録No	写　真
9	炉-1	磨製 石斧	安山岩	129	53	25	280.0		126-2	14-1

第31図　第126号住居跡出土遺物（2）

8は円盤状土製品である。胴部を打ち欠いて整形したものである。文様はなく、地文のみが施されている。

b　石　器

磨製石斧(第31図9)炉堆積土1層から出土しており、風化している。扁平で主面と側面の間に稜線が通る。基部、刃部が破損している。

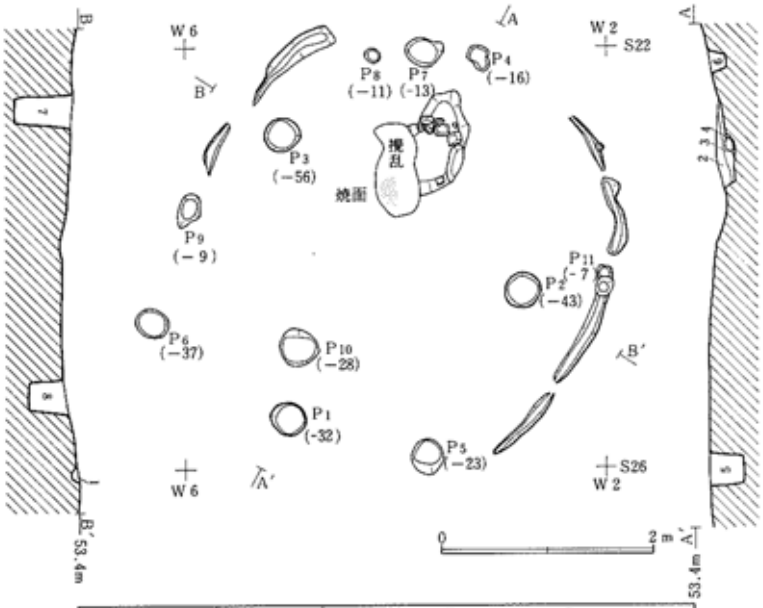
第127号住居跡(第32図)

【遺構の確認】第4次調査区中央北側よりのW2～6、、S22～26に位置し、地山泥岩層上面で確認している。遺構確認時の掘り過ぎと新しい撹乱のため、残存状況は全体的によくない。

【平面形・規模】平面形を知る手がかりは少ないが、周溝の残存状況や柱穴と思われピットの配置などから、隅丸長方形を基調とするものと考えられる。規模は短軸方向で4.0mであることがうかがわれる。面積は14m^{2}ほどに推定される。

【床面】削平されているが、地山を床としているものと思われる。

【柱穴】住居内と考えられる範囲から11個のピットが検出されている。どのピットからも柱痕跡は見つかっていないが、炉を挟んでほぼ対称の位置にあるP2・P3と、それらと一辺2.7mのほぼ正三角形の頂点にあたる配置関係にあるP1とは、ピットの規模や深さから主柱穴と考



層No.	土色	土性	備考	
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	現表土層土	
2	5YR4/6 赤褐色	シルト	焼土層	炉埋積土
3	7.5YR3/3暗褐色	シルト	灰を非常に多く含む	
4	7.5YR4/6褐色	シルト	炉掘り方埋土	
5	7.5YR3/4暗褐色	シルト	P1 掘り方埋土	
6	10YR3/4 暗褐色	シルト	P4 掘り方埋土	
7	10YR2/3 黒褐色	シルト	P8 掘り方埋土	
8	10YR3/3 暗褐色	シルト	P9 掘り方埋土	

第32図　第127号住居跡

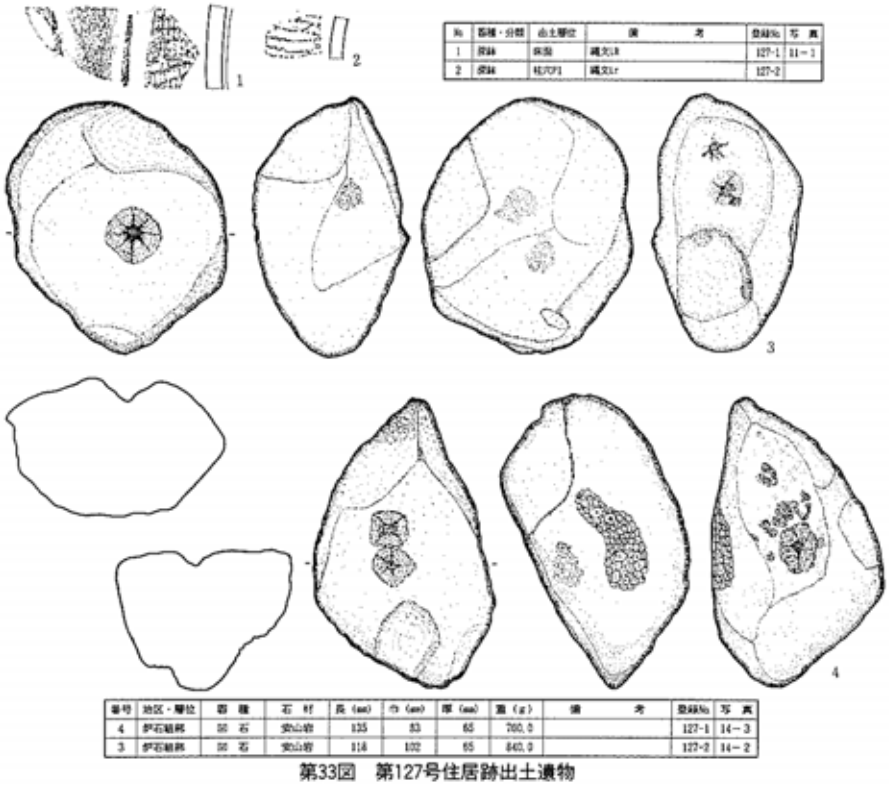
られる。また、P1を挟んでほぼ対称の位置にあるP5・P6は20㎝以上の深さを有しており、主柱穴に対する補助的な柱穴である可能性が考えられる。周溝内に位置するP11は壁柱穴の可能性がある。

【周溝】北辺の一部と、東辺から南辺にかけて断続的に認められる。土幅6～20㎝、深さは最も深い東辺部分で7㎝である。

【炉】削平が著しく、また新しい撹乱穴と重複しているため全体形は不明であるが、石組部と掘り込み部が認められ、石組部の南西部に焼け面があることから、複式炉の可能性がある。焼け面の部分には、本来埋設立土器が捉えていたものと思われる。石組部は南側壁と掘り込み部の最下段の石組を残すだけで、平面形や規模は不明である。石には火熱を受けた痕跡が認められる。掘り込み部も削平によって本来の形態を残していないと思われる。その底面は石組部底面に比べて10㎝高くなっている。炉の長軸方向はほぼW-30°－Sと推定される。

【出土遺物】住居跡床面、柱穴から遺物が出土している。遺物には縄文土器、石器がある。

a　土　器



No	器種・分類	出土層位	備考	登録No	写真
1	深鉢	床面	縄文II	127-1	11－1
2	深鉢	柱穴P1	縄文Ir	127-2	

番号	地区・層位	器種	石材	長(mm)	巾(mm)	厚(mm)	重(g)	備考	登録No	写真
4	炉石組部	凹石	安山岩	135	83	65	760.0		127-1	14－3
3	炉石組部	凹石	安山岩	114	102	65	840.0		127-2	14－2

第33図　第127号住居跡出土遺物

第33図1・2は深鉢の胴部資料である。1は稜線によって地文部と無文部を区画している。2は地文のみが施されている。地文には単節縄文、無節縄文がある。

b　石　器

凹敲石(第33図3・4)いずれも複式炉の敷石石組部に用いられたもので、かなり火熱を受けたものと思われる。3は一凹部、一敲打面を有するほか、二面にも敲打痕らしきものが認められる。4は二凹部、一敲打面を有する。

第133号住居跡(第34図)

【遺構の確認】第4次調調査区北西端のW25～30、N5～10に位置し、地山泥岩層上面で確認している。住居跡西側では、大木の抜根により遺構が部分的に失われている。

【平面形・規模】住居跡東側では削平が著しく、壁は検出されなかったが、残存している壁や周溝などから、平面形はやや角ばった円形を呈するものと考えられる。規模は炉の長軸方向で4.4m、それに直交する方向で4.1m、面積は14.6m^{2}に推定される。

【堆積土】3枚の層が認められる。1・2は住居中央に分布し、2がほぼ床面全体を覆って

いる。3は壁ぎわに分布している。

【壁】東壁が削平により、また西壁の一部が木の根により失われているが、それ以外は検出されている。地山を壁としており、立ち上がりは緩やかである。壁高は最も残りのよい北壁部分で11㎝である。

【床面】地山を床としている。ほぼ平坦で、住居中央がやや窪む傾向が認められる。地山の礫が床面上に頭を出している部分もある。

【柱穴】住居内から12個のピットが検出されている。炉の長軸線上の西壁寄りに位置するＰ1と、同じ長軸線を挟んでほぼ対称の位置にあるＰ2・Ｐ3は、一辺2.6mのほぼ正三角形の頂点にあたる配置関係にある。このうち柱痕跡が見つかっているのはＰ2だけであるが、ピットの規模や深さから、これらが主柱穴と考えられる。Ｐ4は南西側の壁ぎわに位置しており、規模や深さは主柱穴と思われたＰ1～Ｐ3に匹敵する。炉長軸線を挟んだ対称の位置には新しい撹乱穴があり、対になる柱穴の存在は不問であるが、主柱穴に対する補助的な柱穴と考えられる。そのほかＰ6・Ｐ8、Ｐ7・Ｐ9はそれぞれ炉長軸線を挟んでほぼ対称の位置にあるピットで、これらも主柱穴に対する補助的な柱穴と考えられる。周構内に位置するＰ12や壁ぎわに位置するＰ5・Ｐ10・Ｐ11は、壁柱穴の可能性がある。

【周溝】西辺から南辺にかけての壁ぎわに認められる。上幅は13～22㎝、深さは最も深い西辺部分で14㎝である。

【炉】土器埋設石囲部(石囲部)、敷石石組部(石組部)、掘り込み部からなる複式炉である。埋設土器と一部の石が欠落する石囲部に長方形の石組部が接し、さらに掘り込み部が取り付く形状を呈する。石囲部と石組部には、掘り込み部に続くやや大きい掘り方が見られる。規模は全長2.1m、面積は1.4m^{2}で、住居全体に占める割合は約10%である。炉の長軸方向はW-14°－Sである。

石囲部：残存状況から直径60㎝ほどの円形の範囲と思われる。埋設土器は取り外され、一部がピット状の掘り方底面から一括出土している。土器は胴部破片しかないが、深鉢形土器と思われる。また、土器の周囲に配した石も部分的に取り外されている。増設土器や石は共に火熱を受け、赤変している。

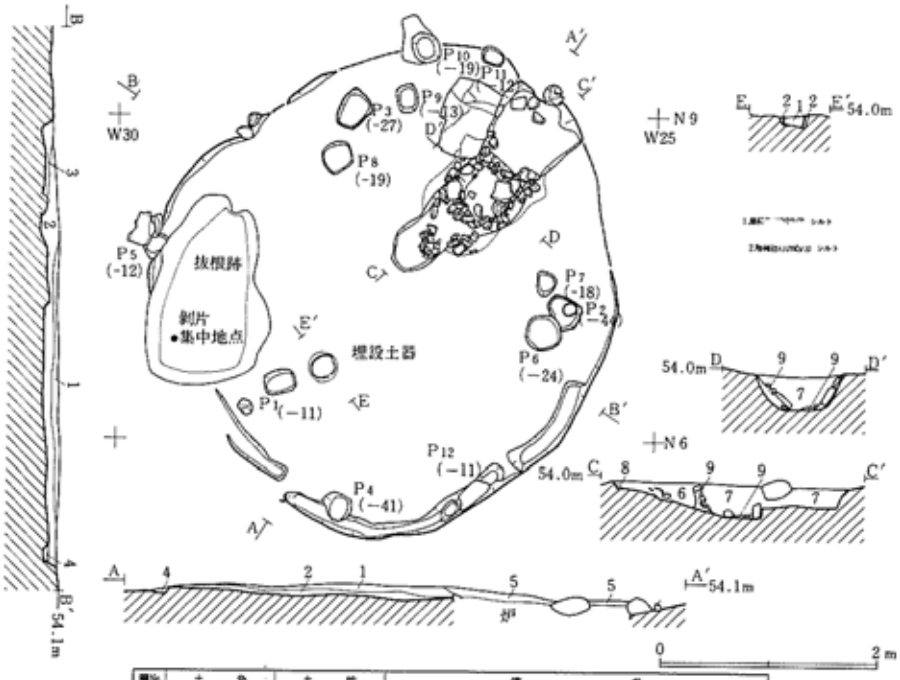
石組部：平面形は長軸0.8m、短軸0.7mの長方形を呈し、長軸方向炉長軸線に直交している。深さは床面から30㎝ほどである。底面には小ぶりな礫を敷いたと思われるが、大部分は取り外されている。奥壁、両側壁の最下段には方形を呈する扁平で大きな礫を並べて、その上に大小の礫を積上げている。この奥壁、側壁の立ち上がりは直線的で、横断形は逆台形を呈している。側壁・底面の石は共に火熱を受けた痕跡を残している。

掘り込み部：平面形は壁ぎわにむかって開く台形を呈しており、その規模は0.6～0.8m×0.

8mである。深さは床面から20cmほどで、石組部底面に比べて10mほど高くなっている。石組部から掘り込み部にかけての北壁には地山の大きな礫が露出しており、この礫をそのまま壁としている。掘り込み部の底面や側面には少数の礫が認められるが、これが本来そこに配されたものか、あるいは2次的に移動したものかは判断しがたい。側壁・底面とも火熱を受けた痕跡は認められない。

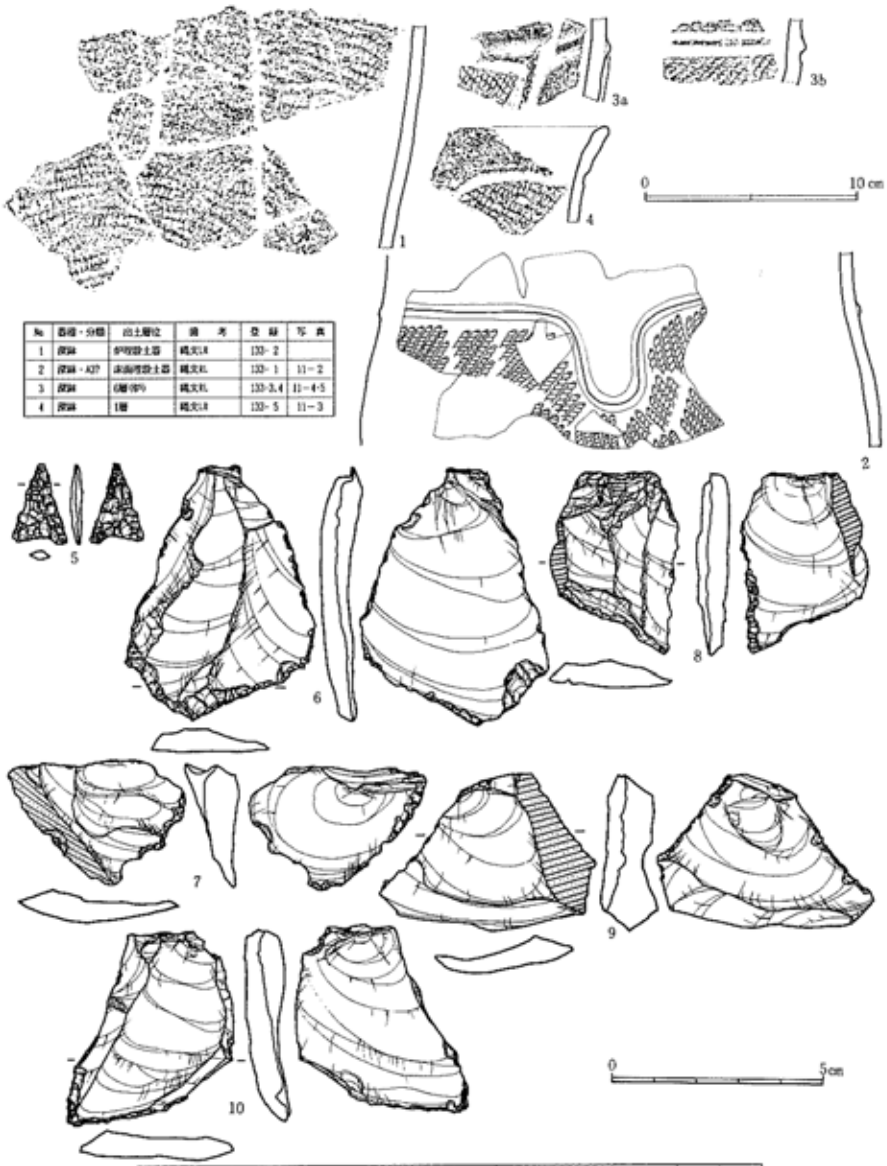
【床面土器埋設遺構】炉の長軸線上の西壁寄りに位置し、主柱穴と考えられたP1の東隣の床面上で土器埋設遺構を検出している。掘り方は直径28cmの円形を呈し、深さは14cmである。その中に直径22cm、高さ12cmほどの胴下半部を欠く深鉢形土器を埋設している。

【出土遺物】住居跡堆積土、床面、炉、柱穴、周溝から遺物が出土している。遺物には縄文土器、石器がある。



層No.	土色	土性	備考	
1	10YR3/4 暗褐色	シルト		
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色(10YR5/8) の地山礫を多く含む	
3	10YR3/4 暗褐色	シルト	2層より地山礫の含有率高い	
4	10YR3/3 暗褐色	シルト	周溝埋積土	
5	10YR2/3 黒褐色	シルト	木炭・焼土粒を含む	炉埋積土
6	10YR3/3 暗褐色	シルト	焼土粒を含む	
7	10YR2/3 黒褐色	シルト	焼土・木炭粒を含みかたい	
8	10YR3/6 暗赤褐色	シルト	焼土層	
9	10YR2/3 極暗赤褐色	シルト	炭化物を含む	炉掘り方埋土

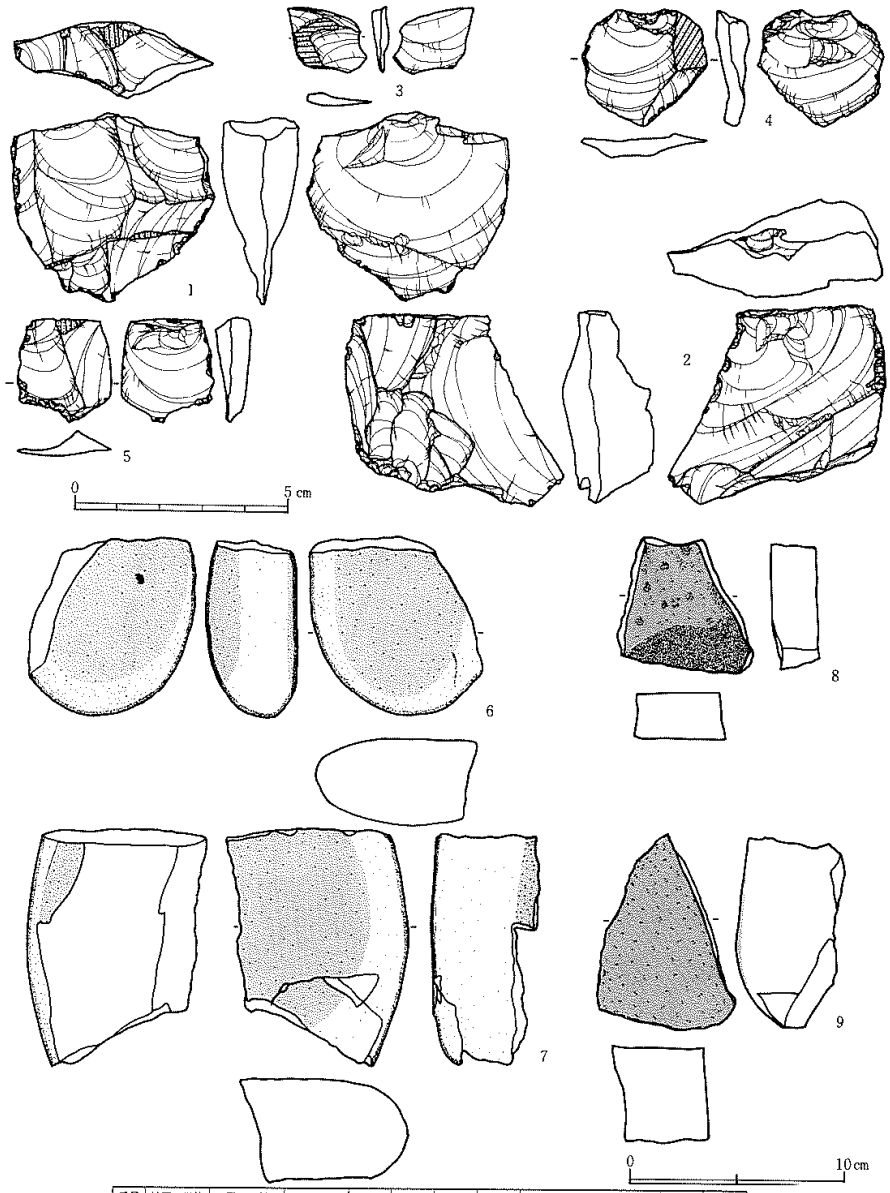
第34図　第133号住居跡



No.	器種・分類	出土層位	備　考	登録	写真
1	深鉢	炉型設土器	縄文IA	133-2	
2	深鉢・A37	床面型設土器	縄文IL	133-1	11-2
3	深鉢	6層(炉)	縄文IL	133-3,4	11-4·5
4	深鉢	1層	縄文IA	133-5	11-3

番号	地区・層位	器　種	石　材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備　考	登録No.	写真
5	炉掘込部	石　鏃	流紋岩	18	13	3	0.2		133-1	14-4
6	集中地点	不定形石器	珪質頁岩	60	45	7	18.5		133-2	14-5
7	集中地点	不定形石器	珪質頁岩	42	30	7	9.0		133-3	14-7
8	集中地点	不定形石器	珪質頁岩	54	36	10	15.5		133-4	14-6
9	集中地点	剥　片	珪質頁岩	29	42	5	6.0		133-5	14-8
10	集中地点	剥　片	珪質頁岩	36	52	10	15.1		133-6	14-9

第35図　第133号住居跡出土遺物（1）



番号	地区・僧位	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考	登録No.	写真
1	集中地点	剥片	頁岩	44	47	18	27.0		133-7	14-10
2	集中地点	剥片	頁岩	46	48	20	37.6		133-8	14-11
3	集中地点	剥片	頁岩	14	20	2	0.9		133-9	14-12
4	集中地点	剥片	頁岩	27	30	5	4.6		133-10	14-13
5	集中地点	剥片	頁岩	24	22	6	3.0		133-11	14-14
6	炉石組部	磨石	砂岩	(84)	74	40	410.0		133-14	14-18
7	炉石組部	磨石	細粒砂岩	(110)	(80)	(47)	530.0	同一のもの?	133-15	14-15
8	炉石組部	磨石	細粒砂岩	(50)	(60)	(23)	150.0		133-16	14-17
9	P2	磨石	細粒砂岩	(92)	(64)	(47)	300.0		133-17	14-16

第36図　第133号住居跡出土遺物（2）

ａ　土　器

第35図1は炉埋設土器である。埋設状態にはなく、壊されていた。胴下部は底部に向かって直線的にすぼまる深鉢である。地文のみが施されている。

2は床面埋設土器である。胴下部以下を欠き、正位に埋設されていた。胴上部から口縁部にむかって外反し、胴央部がわずかに膨らむ深鉢である。胴上部に稜線が巡っているが、垂下したり波涛状になったりしている。(波涛文状になる部分は小片のため復元して図示できなかった。)稜線から下に地文が施される。

3は深鉢の胴部資料で、稜沈線によって部文部と無文部を区画している。4は深鉢の口縁部資料で、沈線によって縄文部と無文部を区画している。

地文は単節縄文のみである。

ｂ　石　器

石鏃(第35図5)先端と左側縁の一部を欠いている。細長い凹基のもので直線である。は直線的である。基部の抉りは浅い。

不定形石器(第35図6～8)この不定形石器3点と次に述べる剥片7点はともに、住居跡西壁ぎわの床面上から出土したものである。右は両側縁と末端の両面に剥離が施されているものである。7は階段状剥離で、背面の打面を剥離するもので、末端が折断されている。右側縁腹面には折断前に、また折断部こは折断後に、剥離が施されている。8は左側縁から末端の背面に急角度の剥離を加え、先端部を作り出している。

剥片(第35図9・10、第36図1～5)小剥片の3を含め、ほとんどに使用痕と思われる微細剥離痕が認められる。9・2・5には2次調整が施されている。10は末端を折断している。1は打面に側縁からの大きな剥離が施されている。4も末端を折断しており、打面部背面にスクレイパー状の剥離が施されている。

磨石(第36図6～9)すべて大きく破損しており、全体の形状は不明である。6～8は複式炉の敷石石組部に用いられたもので、かなり火熱を受けたものと思われる。6は二磨面を有する。7は二磨面を有する。8は二磨面を有する。9は柱穴Ｐ2堆積土から出土したもので、一磨面を有する。なお7～9は材質が似ており、同一個体の可能性がある。

Ｂ　土壙と出土遺物

第101号土壙(第37図)

【遺構の確認】第115号竪穴住居跡の南側、W17・Ｓ7に位置し、地山ローム層面で確認している。

【形態・規模】平面形は円形を呈し、大きさは直径約1.3mである。断面形は底面に向かって径がやや大きくなる台形を呈する。いわゆるフラスコ状土壙である。底径は1.5m、深さは80㎝

である。さらに底面には、中央にピット、壁ぎわを一周する溝、両者を結ぶようにピットから放射状にのびる溝が認められる。ピットはやや角ばる円形を呈し、大きさは直径約40㎝、深さ20㎝である。溝はいずれも断面形がU字形を呈し、上幅10㎝、深さ5㎝程度である。

【堆積土】17枚の層に分けられ、いずれも堅くしまっている。中央上半部(1〜9層)には炭化物・焼土に縄文土器・石器を含んだ人為的な廃棄土が認められるが、壁ぎわから下半部にかけて(10〜16層)は地山の崩落土を中心とする流入土が認められる。底面のピットや溝にはみな同じ褐色土(17層)が堆積している。

【出土遺物】堆積土1層、2〜3層、4〜6層、底面、ピット底面から遺物が出土している。遺物には縄文土器、石器がある。

ａ土　器

いずれも深鉢形の土器である。第37図1は口縁部が外反し、胴央部が比較的強く膨らみ、胴下部がすぼまる器形である。口縁は波状縁になるものと思われる。沈線による3単位の「〜」状を呈する分節波涛文が描かれている。さらに、胴央部に沈線が巡り、波涛間下でJ字状に垂下する。これより下に見られる地文は、波涛内部の地文とともに、縦走するよう丁寧に施されている。

2〜5は文様がある破片資料である。2は稜線、3〜5は沈線によって縄文部と無文部を区画している。2は楕円形区画文と思われる文様が施されている。

6〜8は口縁部資料である。いずれも文様が施されず、地文のみが胴上部から施されている。第38図1は胴部から口縁部まで直線的に立ち上がる器形である。胴上部に稜線が巡る。

2は口縁部が内弯し、胴上部から胴下部にむかってすぼまる器形である。口縁部から縦走撚糸文が施され後、青海波文状に櫛目状条線文が施されている。

3〜6は地文のみが施されている胴部資料である。6は胴部が強く内弯する器形である。4の内面には被膜上の炭化物が付着している。

7〜14は底部資料である。7には木葉痕が認められる。

地文には単節縄文、複節縄文、0段多条縄文のほか、撚糸文が認められる。

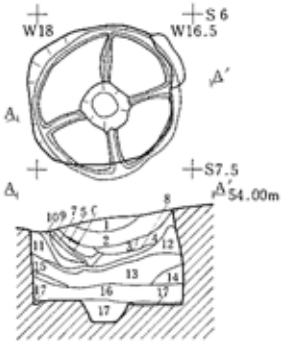
ｂ　石　器

石鏃(第38図15)焼けはじけが各所に見られ、基部を欠いている。2辺に粗雑な剥離が施されており、その形態から石鏃と考えられる。

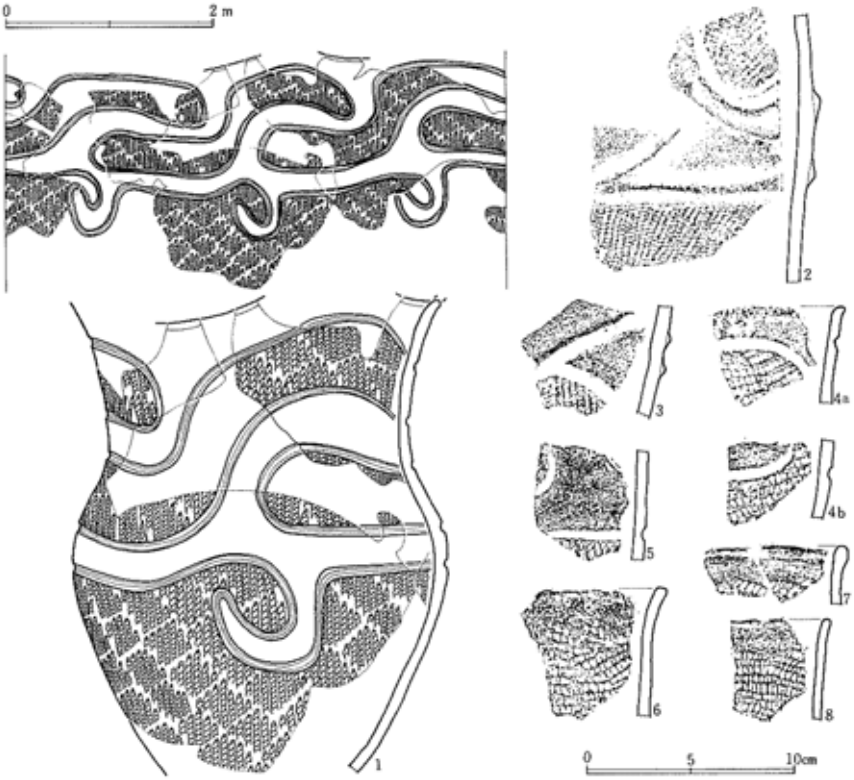
楔形石器(第38図14)黒曜石製で、両極剥離痕が認められる。

不定形石器（第38図17・第39図1）17は上半と右側縁を折断することによって先端部を作り出し、そこに2次加工を施している。1は全体に交互状の剥離が施されている。

磨石（第39図2・3）5は磨石の破片がと思われる。風化している。6は破損しており全体

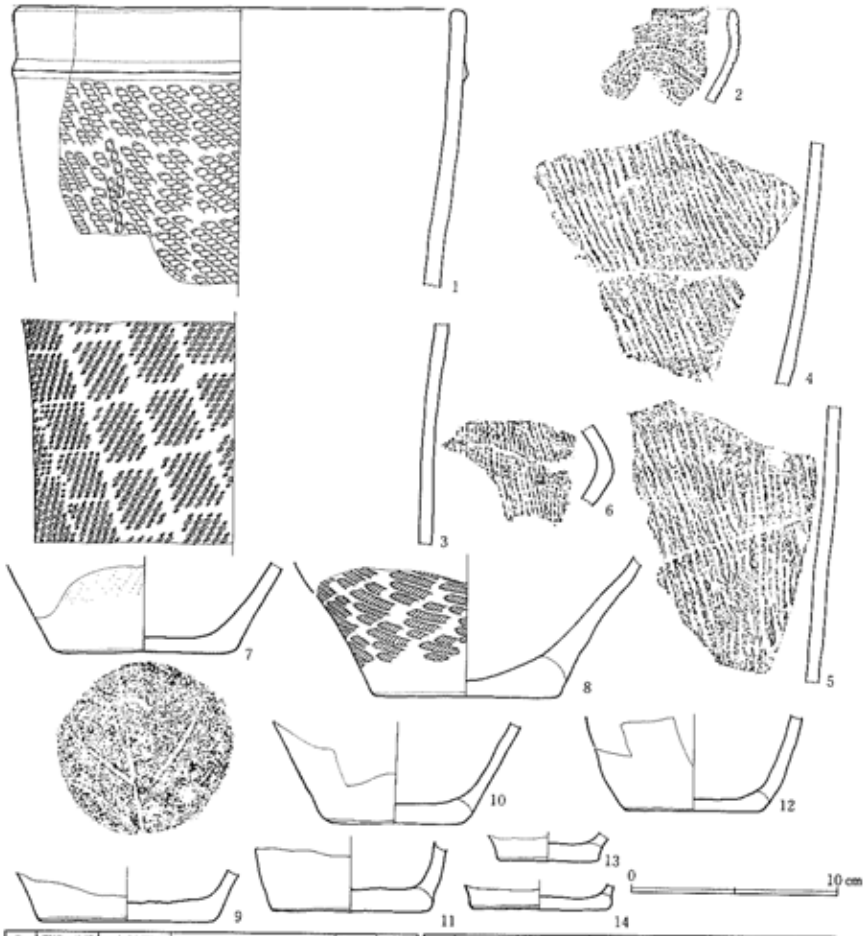


層No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	しまりあり
2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物・地山粒を多く含む、しまりあり
3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
4	5YR4/3 にぶい赤褐色	シルト	地山粒を含む
5	5YR4/3 にぶい赤褐色	シルト	地山粒を含む
6	2.5YR4/6赤褐色	シルト質粘土	地山粒を含む
7	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	地山粒を含む
8	10YR3/3 暗褐色	シルト	地山粒を含む
9	7.5YR5/6明褐色	シルト	地山崩落土
10	10YR3/3 暗褐色	シルト	しまりあり
11	2.5YR4/6赤褐色	シルト	
12	5YR2/2 黒褐色	砂質シルト	焼土質のものを含む
13	7.5YR3/4暗褐色	砂質シルト	
14	10YR5/8 黄褐色	粘土	地山崩落土
15	10YR5/8 黄褐色	粘土	
16	10YR4/4 褐色	砂質シルト	地山粒を含む
17	7.5YR4/3褐色	砂質シルト	固くしまる　ピット・周溝埋土



No.	器種・分類	出土層位	備考	登録	写真
1	深鉢・A2	4～6層	縄文RL　口径16.0cm	K1-1	11-6
2	深鉢	2～6層	縄文RLR	K1-12、13	11-8
3	深鉢	4～6層	縄文RL	K1-22	11-10
4	深鉢	4～6層	縄文LR	K1-23	
5	深鉢	4～6層	撚糸文1	K1-11	
6	深鉢	2～3層	縄文LR	K1-14	11-9
7	深鉢	2～3層	縄文LR	K1-16	
8	深鉢	4～6層	縄文LR	K1-15	

第37図　第101号土壙と出土遺物（1）

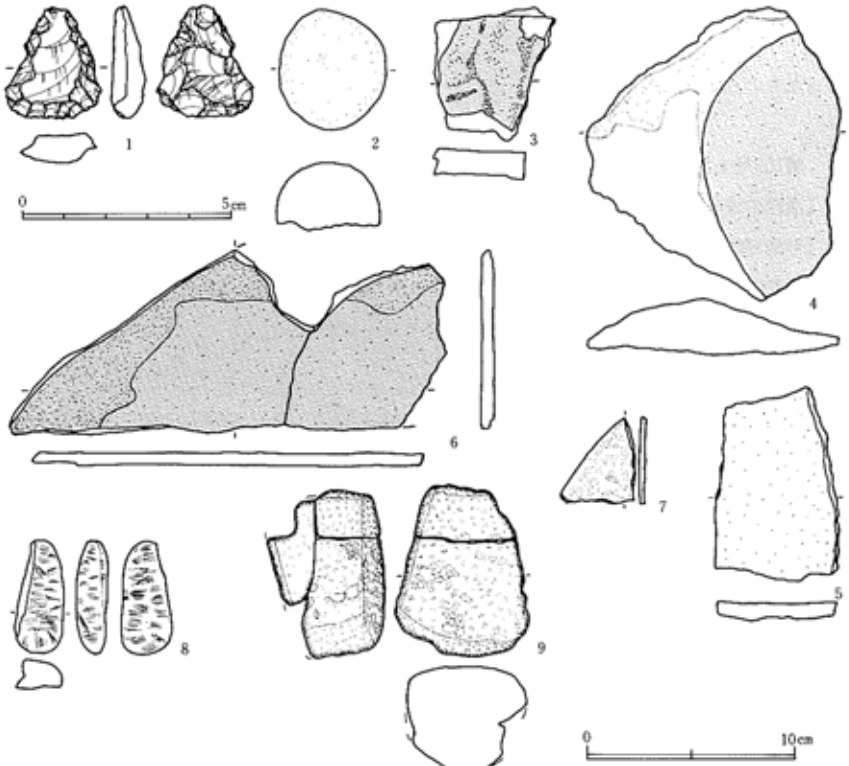


No.	器種・分類	出土層位	備　考	登録	写真
1	深鉢	2～3層	縄文LR　口径22.0cm	K1-9	11-7
2	鉢？	4～6層	横目状沈線文	K1-10	11-11
3	深鉢	2～3層	縄文RL	K1-21	11-13
4	深鉢	4～6層	撚糸文r　内面に炭化物付着	K1-17	
5	深鉢	2～3層	撚糸文r	K1-18	11-16
6	深鉢	4～6層	撚糸文l	K1-19	11-12
7	深鉢	4～6層	縄文RRL　木葉痕　底径8.5cm	K1-2	

No.	器種・分類	出土層位	備　考	登録	写真
8	深鉢	2～3層	2段多条縄文LR　底径8.1cm	K1-20	11-15
9	深鉢	底面	底径8.5cm	K1-6	
10	深鉢	4～6層	底径6.2cm	K1-7	
11	深鉢	4～6層	底径7.6cm	K1-3	
12	深鉢	2～3層	底径6.6cm	K1-8	
13	深鉢	底面	底径4.8cm	K1-5	
14	深鉢	2～3層	底径6.6cm	K1-4	

番号	地層・層位	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備　考	登録No.	写真
15	4～6層	石鏃	玉髄	(21)	11	6	1.3	欠けはじけ	K1-2	14-19
16	4～6層	楔形石器	黒曜石	26	19	10	4.7	両極剥離痕	K1-3	14-20
17	2・3層	不定形石器	頁岩	19	32	8	2.9		K1-4	14-21

第38図　第101号土壙出土遺物（2）



番号	地区・層位	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考	登録	写真
1	2・3層	不定形石器	硬質頁岩	2 8	2 3	8	4.6	破片	K 1 − 5	14−22
2	表面	磨 石	安山岩	(31)	5 0	5 6	105.0		K 1 −11	15− 1
3	2・3層	磨 石	細粒砂岩	6 2	5 7	1 4	63.0		K 1 −15	15− 4
4	4〜6層	石 皿	安山岩	1 4 1	1 2 1	2 6	400.0	焼けて脆い	K 1 −10	15− 2
5	表面	石 皿	安山岩	9 1	5 8	9	70.0	4の破片か	K 1 −14	15− 3
6	2・3層	石 皿	細粒砂岩	2 1 1	8 7	5	152.0		K 1 −12	15− 6
7	2・3層	石 皿	細粒砂岩	4 9	3 1	4	11	6の破片か	K 1 −13	15− 7
8	4〜6層	頁岩製石製品	頁岩？	5 5	2 4	1 5	29.9		K 1 − 1	15− 5
9	2・3層	軽石製石製品	浮 石	8 0	6 6	5 3	70		K 1 − 9	14−23

第39図　第101号土壙出土遺物（3）

の形状は不明であるが、一磨面を有する。

石皿(第39図4〜7)　いずれも大きく破損しており、全体の形状は不明である。7は緩い凹面の部分に磨面を有する。5は4と同一個体と思われる凸6は扁平な盤状のものであるが、全体の形状は不明である。一磨面を有し、縁辺部分も二辺が丸みを帯びる。材質は層理面が発達している細粒砂岩である。7は6と同一個体と思われる。

頁岩製石製品(第39図8)　全体が丁寧に磨かれ、線条痕が認められる。石材は剥片石器に用いられる頁岩と異質のものである。類似品が菅生田遺跡(丹羽・阿部・小野寺1982；P187、不明磨製石器)から出土している。

軽石製石製品(第39図9)　材質が多孔質でもろく、加工痕は明瞭でないが、磨いて拳大に整

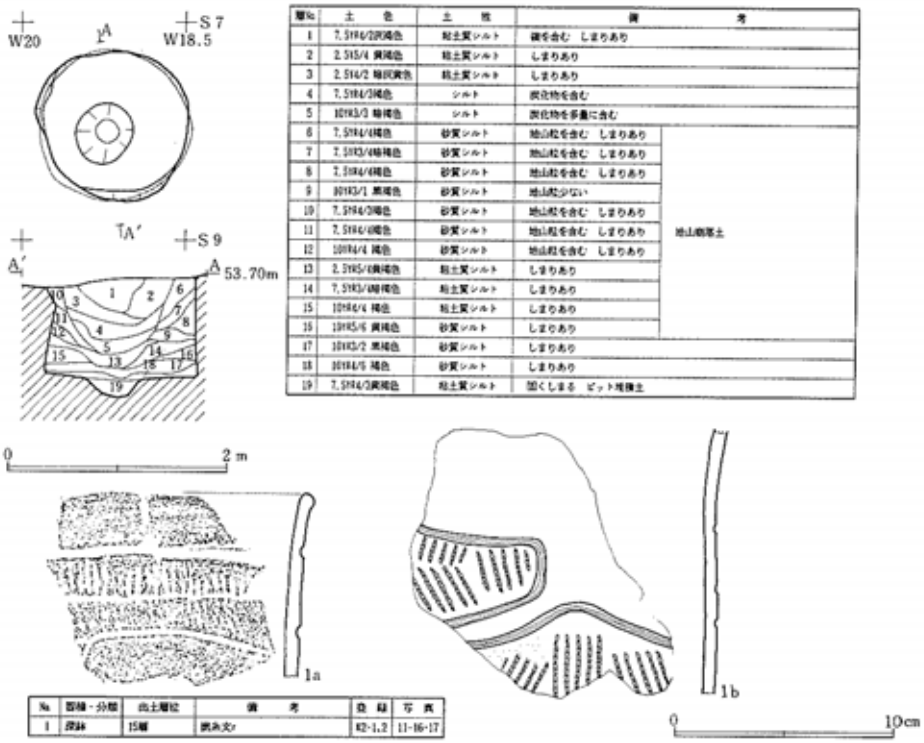
形したものと思われる。

第102号土壙(第40図)

【遺構の確認】第101号土壙の西側、W19・S8に位置し、地山ローム層上面で確認している。

【形態・規模】平面形は円形を呈し、大きさは直後約1.3mである。断面形は底面に向かって径がやや大きくなる台形を呈する。いわゆるフラスコ状土壙である。底径は1.4m、深さは90cmである。底面はほぼ平坦で、中央やや西寄りにピットが認められる。ピットは円形を呈し、大きさは直径約60cm、深さ20cm弱である。

【堆積土】19枚の層に分けられ、いずれも堅くしまっている。中央上半部(2～5層)には炭化物・焼土が多量に混じる人為的な廃棄土が認められるが、壁ぎわから下半部にかけて(7～18層)は地山の崩落土を中心とする流入土が認められる。ピットにはマンガン粒を含む褐色



層No	土色	土性	備考	
1	7.5YR6/2灰褐色	粘土質シルト	礫を含む しまりあり	
2	2.5Y5/4 黄褐色	粘土質シルト	しまりあり	
3	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	しまりあり	
4	7.5YR4/3褐色	シルト	炭化物を含む	
5	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物を多量に含む	
6	7.5YR4/4褐色	砂質シルト	地山粒を含む しまりあり	地山崩落土
7	7.5YR3/4暗褐色	砂質シルト	地山粒を含む しまりあり	
8	7.5YR4/4褐色	砂質シルト	地山粒を含む しまりあり	
9	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	地山粒少ない	
10	7.5YR4/3褐色	砂質シルト	地山粒を含む しまりあり	
11	7.5YR4/6褐色	砂質シルト	地山粒を含む しまりあり	
12	10YR4/4 褐色	砂質シルト	地山粒を含む しまりあり	
13	2.5YR5/6黄褐色	粘土質シルト	しまりあり	
14	7.5YR3/4暗褐色	粘土質シルト	しまりあり	
15	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	しまりあり	
16	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	しまりあり	
17	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	しまりあり	
18	10YR4/6 褐色	砂質シルト	しまりあり	
19	7.5YR4/3黄褐色	粘土質シルト	固くしまる ピット堆積土	

No	器種・分類	出土層位	備考	登録	写真
1	深鉢	15層	撚糸文?	82-1,2	11-16-17

第40図　第102号土壙と出土遺物

土（19層）が堆積している。

【出土遺物】堆積土19層(底面ピット堆積土)から遺物が出土している。遺物には縄文土器がある。

ａ　土　器

第40図1は口縁部がわずかに外反する深鉢である。沈線によって地文部と無文部を区画しており、横位波涛文類の文様が描かれている。地文は縦走撚糸文である。

第103号土壙（第41図）

【遺構の確認】第10号土壙の南西側、W18・Ｓ9に位置し、地山ローム層上面で確認している。

【形態・規模】平面形は円形を呈し、大きさは直径約1.5mである。断面形は底面に向かって径が大きくなり、底面近くでさらに膨らむ形状を呈する。いわゆるフラスコ状土壙である。底径は2.0m、深さは1.0mである。底面はほぼ平坦である。

【堆積土】13枚の層に分けられ、いずれも堅くしまっている。上部(1～5層)では炭化物・礫を含む地山粒が混じる人為的な廃棄土が認められ、下部(6～13層)では地山の崩落土を中心とする流入土が認められる。9、12層には炭化物が混じっている。

【出土遺物】堆積土1層、3層、8層、9層、12層および底面から遺物が出土している。遺物には縄文土器、石器がある。

ａ　土　器

第41図1は口縁部が外傾する深鉢である。粘土帯を口縁部分に付着させ、波頂部下に円窓を形成している。外面には円窓を取り囲むように稜線が巡る。口縁部内面が肥厚している。

2は口縁部にむかって外反し、頚部がくびれ、胴上部が膨らむ深鉢である。稜線によって文様が施されているが、最も膨らんだ部分で稜線が交差するところは隆帯状になっている。

3は深鉢の口縁部資料、4～6は胴部資料である。3～5には稜線による文様が施される。
6は沈線によって地文部と無文部を区画している。

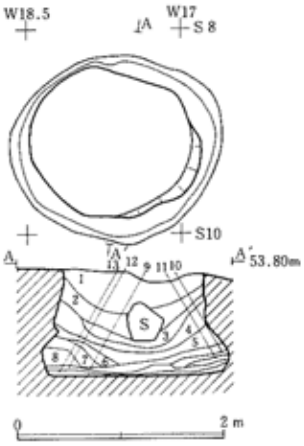
7・8は深鉢の口縁部資料である。文様はなく、地文のみが胴上部から施されている。10・11は深鉢の底部資料である。

12は胴部がわずかに内弯する鉢形の器形である。円形刺突文が同心円状に2条認められる。
土製品の可能性もある。

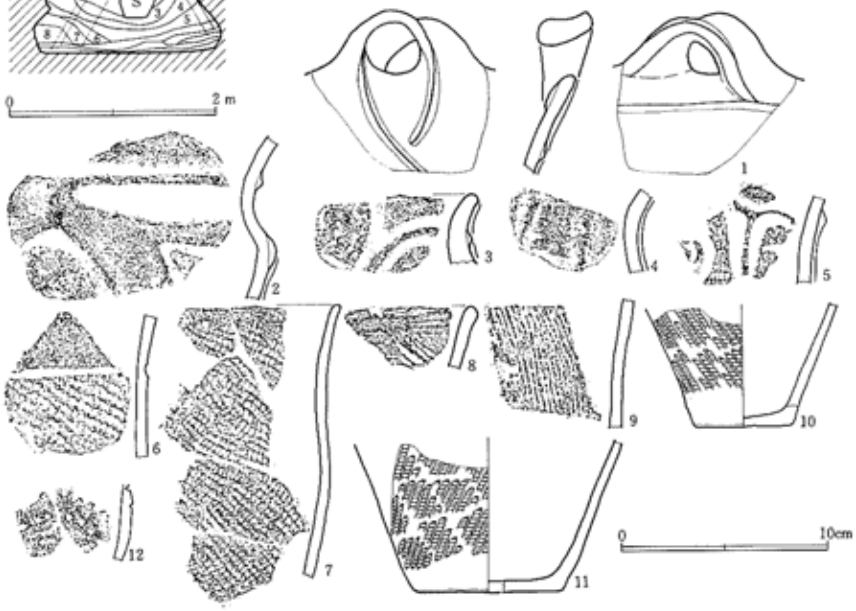
地文には単節縄文、無節縄文のほか撚糸文がある。

ｂ　石　器

不定形石器(第41図13)上半を折断し、腹面の両側縁にスクレイパー状の剥離が施されている。

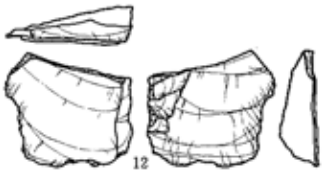


層No	土色	土性	備考
1	7.5YR3/4暗褐色	シルト	しまりあり　地山粒・炭化物を少し含む
2	7.5YR3/4暗褐色	シルト	しまりあり　炭化物を少し含む
3	7.5YR3/4暗褐色	シルト	しまりあり　地山粒・炭化物を少し含む
4	7.5YR3/4暗褐色	シルト	炭化物を少し多く含む
5	10YR3/3 暗褐色	シルト	粘性あり　炭化物を含む
6	10YR4/4 褐色	シルト	粘性あり
7	10YR3/4 暗褐色	シルト	粘性あり　地山を含む
8	10YR4/4 褐色	シルト	粘性あり
9	10YR4/4 褐色	シルト	粘性・しまりあり　炭化物を含む
10	10YR5/6 黄褐色	シルト	粘性あり　地山を含む
11	10YR3/4 暗褐色	シルト	粘性・しまりあり　地山粒混土
12	10YR3/4 暗褐色	シルト	粘性・しまりあり　炭化物を含む
13	10YR5/8 黄褐色	シルト	粘性あり



No.	器種・分類	出土層位	備考	登録	写真
1	深鉢	5層	円盆	K3-1	12-1
2	深鉢	12層	縄文？	K3-4	12-6
3	深鉢	5層		K3-6	
4	深鉢	暗褐土		K3-5	12-5
5	深鉢	5層	縄文RL	K3-10	
6	深鉢	5層	縄文Lr	K3-9	12-2

No.	器種・分類	出土層位	備考	登録	写真
7	深鉢	12層	縄文LR	K3-12	
8	深鉢	2層	縄文Lr	K3-7	12-3
9	深鉢	2層	撚糸文R	K3-8	
10	深鉢	8層	縄文LR　底径6.8cm	K3-3	12-7
11	深鉢	2層	縄文RL　底径7.2cm	K3-2	
12	深鉢？	3層	刺突文	K3-11	12-5



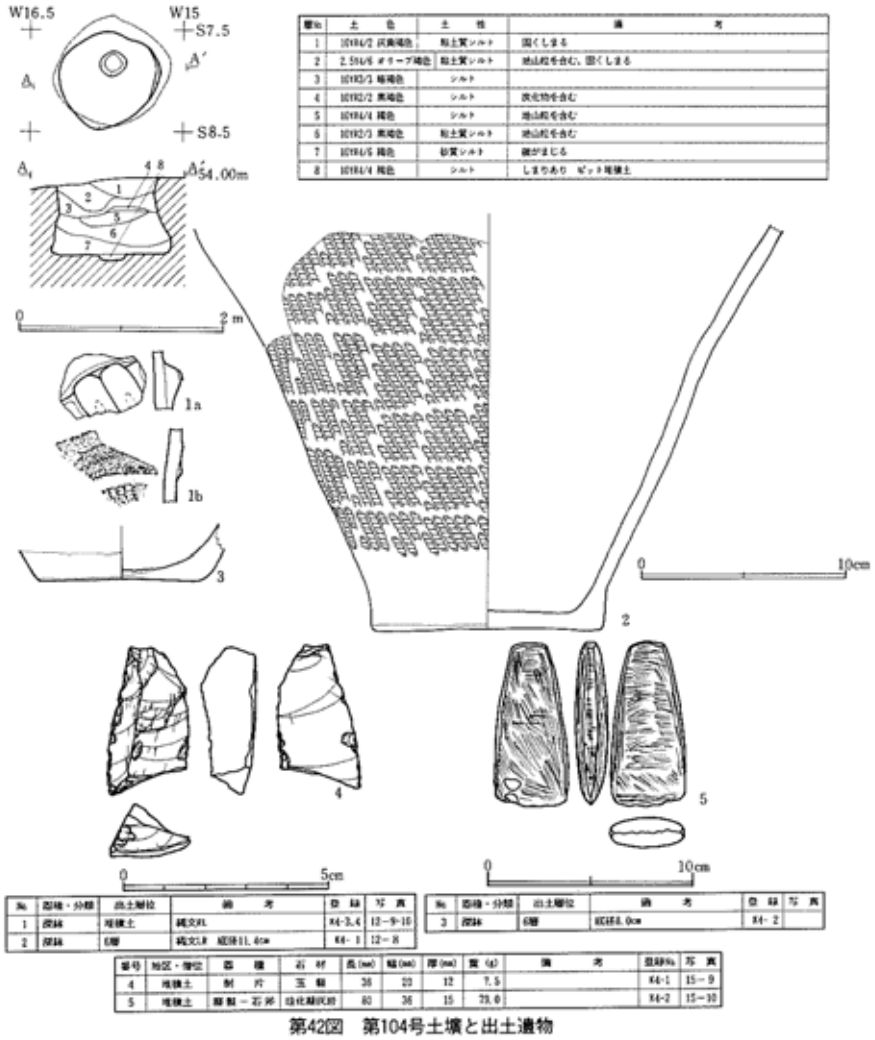
番号	地区・層位	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	登録	写真
1	1層	不定形石器	頁岩系	28	31	9	6.4	K3-1	15-8

第41図　第103号土壙と出土遺物

第104号土壙(第42図)

【遺構の確認】第101号土壙の南側、W16・S8に位置し、地山ローム層上面で確認している。

【形態・規模】平面形は円形を呈し、大きさは直後0.9m強である。断面形は底面に向かってわずかにくびれ、くびれ部分から底面までは径が大きくなる形状を呈する。いわゆるフラスコ状土壙である。底径は1.2m弱、深さは80cmである。底面はほぼ平坦であり、中央北東寄りにピットが認められる。ピットはほぼ円形を呈し、大きさは直径25cm、深さ5cm弱である。



層No	土色	土性	備考
1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	固くしまる
2	2.5Y4/6 オリーブ褐色	粘土質シルト	地山粒を含む、固くしまる
3	10YR3/3 暗褐色	シルト	
4	10YR2/2 黒褐色	シルト	炭化物を含む
5	10YR4/4 褐色	シルト	地山粒を含む
6	10YR3/3 黒褐色	粘土質シルト	地山粒を含む
7	10YR4/6 褐色	砂質シルト	硬がまじる
8	10YR4/4 褐色	シルト	しまりあり　ピット埋積土

No.	器種・分類	出土層位	備考	登録	写真
1	深鉢	埋積土	縄文RL	K4-3,4	12-9-10
2	深鉢	6層	縄文LR　底径11.4cm	K4-1	12-8

No.	器種・分類	出土層位	備考	登録	写真
3	深鉢	6層	底径8.0cm	K4-2	

番号	地区・層位	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考	登録No.	写真
4	埋積土	剥片	玉髄	36	20	12	7.5		K4-1	15-9
5	埋積土	磨製一石斧	珪化凝灰岩	80	36	15	73.0		K4-2	15-10

第42図　第104号土壙と出土遺物

【堆積土】8枚の層に分けられ、いずれも堅くしまっている。4層は炭化物を含む人為的な廃棄土であるが、他は地山の崩落土等の流入土と思われる。ピットには褐色土(8層)が堆積している。

【出土遺物】堆積土6層から遺物が出土している。遺物には縄文土器、石器がある。

ａ　土　器

第42図1は深鉢胴部資料で、稜線による文様が施されおり、稜線は部分的にひれ状の隆帯になっている。

2は胴央部から底部までほぼ直線的にすぼまる深鉢である。地文のみが施されている。

3は深鉢底部資料である。

ｂ　石　器

剥片(第42図4)下半が折断されており、両側縁に使用痕が認められる。

磨製石斧(第42図5)小形のもので、扁平で主面と側面の間に稜線が通る。全体が大変丁寧に磨かれている。刃部片側が破損(歯こぼれ)している。

第105号土壙(第43図)

【遺構の確認】第115号竪穴住居跡の北側、W22・N4に位置し、地山泥岩層上面で確認している。南側は新しい攪乱によって大きく抉られている。

【形態・規模】平面形は円形を基調とするもので、大きさは直径1.4mである。壁は急角度に立ち上がっていたものと思われる。底面は南側が一段深くなっており、深さは北側が15㎝、南側が35㎝である。

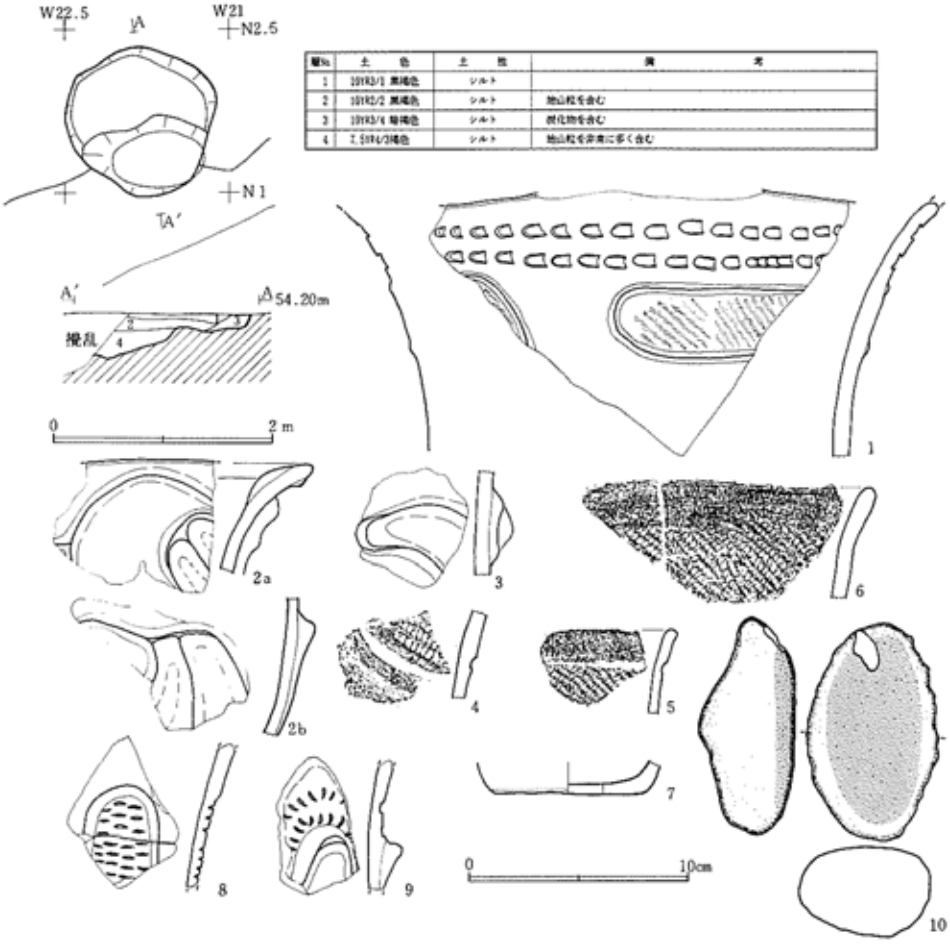
【堆積土】4枚の層に分けられ、いずれも堅くしまっている。1～2層は土器を多量に含む黒褐色の人為的な廃棄土、壁ぎわに分布する3層は炭化物を含む流入土である。一段深くなった部分には地山粒を多量に含む褐色土(4層)が堆積している。

【出土遺物】堆積土1層、2層、4層から遺物が出土している。遺物には縄文土器、石製品がある。

ａ　土　器

第43図1は口縁部が強く外反する深鉢である。口縁は波状縁になるものと思われる。口縁部下に、先の鋭利な竹篦による横位列点状刺突文が2条巡り、その下に稜線によって地文部と無文部を区画する横位波涛文系の文様が描かれている。

2～5は文様が施されてい深鉢の破片資料である。2は口縁部が外反する器形で、口縁部内面が肥厚している。3とともに稜線、ひれ状の隆帯が施される。4・5は沈線によって地文部と無文部を区画している。



層No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	地山粒を含む
3	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物を含む
4	7.5YR4/3褐色	シルト	地山粒を非常に多く含む

No.	器種・分類	出土層位	備考	登録	写真
1	深鉢・A4	1層	刺突文、縄文Lr	KS-1	12-11
2	深鉢	4層		KS-2,3	12-12-13
3	深鉢	2層		KS-10	12-14
4	深鉢	4層	縄文LR	KS-11	
5	深鉢	2層	縄文LR	KS-6	

No.	器種・分類	出土層位	備考	登録	写真
6	深鉢	4層	縄文LR	KS-7	12-15
7	深鉢	2層	底径6.8cm	KS-5	
8	深鉢?	2層	刺突文	KS-9	12-16
9	深鉢?	2層	刺突文	KS-8	12-17

番号	地区・層位	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考	登録No.	写真
10	1層	軽石製石製品	浮岩石	100	60	30	55.0	ガジリ痕あり	45-3	15-11

第43図　第105号土壙と出土遺物

6は深鉢の口縁部資料であるが，文様は無く、地文のみが胴上部から施されている。

7は深鉢の底部資料である。

地文には単節縄文、無節縄文がある。

8・9は土器（部下は地）の胴部は辺として掲げたが、土製品の可能性もある。いずれもわずかに外反している。8は段状の区画のなかに先の鋭利な竹箆状のものによる刺突文が数列に認め

られる。刺突はかなり深めである。内面はミガキ調整がなされている。9は隆帯状の突起の上に、先の鋭利な竹箆状のものによる刺突文が二重に巡っている。内面はミガキ調整がなされている。

b　石製品

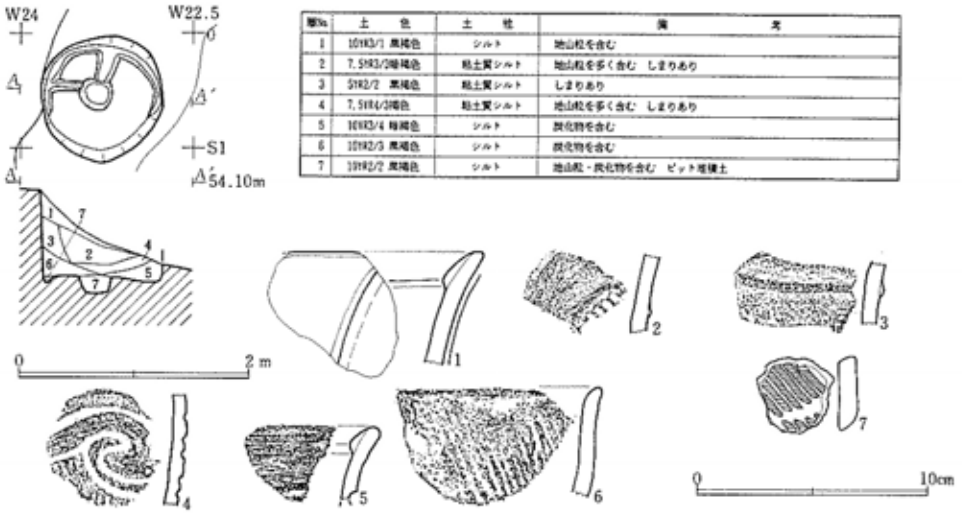
軽石製石製品(第43図10)材質が多孔質でもろく、加工痕は明瞭でないが、磨いて拳大に整形したものと思われる。

第106号土壙(第44図)

【遺構の確認】第115号竪穴住居跡の北西側、W23・S0.5に位置し、地山泥岩層上面で確認している。南側は新しい撹乱によって大きく抉られている。

【形態・規模】平面形は円形を呈し、大きさは直径0.1mである。壁がほぼ垂直に立ち上がり、円筒状の土壙である。底径も1.0m、深さは80cm弱である。さらに底面には、中央にピット、北から東側の壁ぎわをめぐる溝、両者を結ぶようにピットから放射状に延びる溝が認められる。ピットはほぼ円形を呈し、大きさは直径約30cm、深さ25cmである。溝はいずれも断面形がU字形を呈し、大きさは深さ5cm程度である。

【堆積土】7枚の層に分けられ、いずれも堅くしまっている。上部には地山粒を多く含む褐



層No	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	地山粒を含む
2	7.5YR3/2暗褐色	粘土質シルト	地山粒を多く含む　しまりあり
3	5YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	しまりあり
4	7.5YR4/3褐色	粘土質シルト	地山粒を多く含む　しまりあり
5	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物を含む
6	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物を含む
7	10YR2/2 黒褐色	シルト	地山粒・炭化物を含む　ピット堆積土

No	器種・分類	出土層位	備考	登録	図版
1	深鉢	底面		K5-3	
2	深鉢	底面	撚糸文か	K5-6	
3	深鉢	底面	縄文RL	K5-4	
4	深鉢	底面	撚糸文rか	K5-5	12-19

No	器種・分類	出土層位	備考	登録	図版
5	深鉢	7層		K5-2	
6	深鉢	底面	撚糸文r	K5-1	12-18
7	円盤状土製品	底面	0段多条縄文LR 3.3×3.3cm　8.9g	K5-7	12-20

第44図　第106号土壙と出土遺物

色～黒褐色土(1～4)、下部には炭化物を含む黒褐色土(5～6)、ピットや溝状の落ち込みには地山粒を含む黒褐色土(7)が堆積している。人為による廃棄土は顕著に認められていない。

【出土遺物】底面、7層(底面ピット堆積土)から遺物が出土している。遺物には縄文土器、土製品がある。

ａ　土器・土製品

第44図1～5は文様の施されている深鉢の破片資料である。1は口縁部が外反する器形である。口縁部から稜線文が垂下しており、口縁部内部が肥厚している。2は稜線、4は沈線によって、地文部と無文部を区画している。3も稜線による文様が施されている。5は口縁部が外反する器形で、口縁部内面が肥厚している。沈線が認められる。

6は深鉢口縁部資料である。文様はなく、地文だけが胴上部から施されている。

地文には単節縄文のほか、撚糸文がある。

7は円盤状土製品である。土器の胴部を打ち欠いて整形したもので、地文のみが施されている。

第108号土壙(第45図)

【遺構の確認】W10・Ｓ13に位置し、地山ローム層上面で確認している。

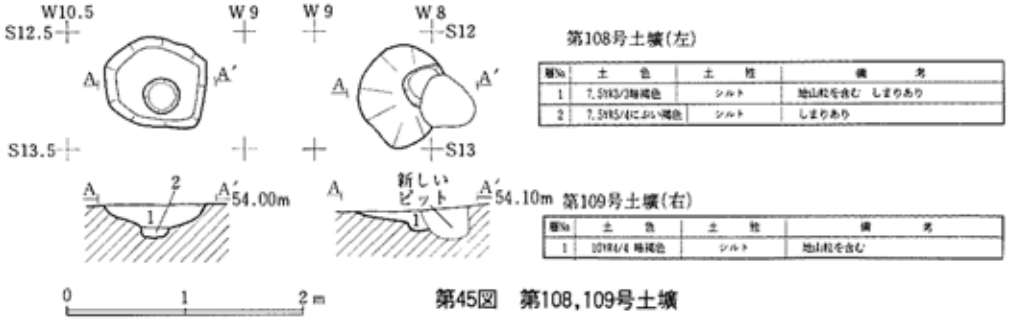
【形態･規模】平面形は角ばった楕円形を呈し、大きさは長軸90㎝短軸70㎝である。壁は緩くが立ち上がり、断面形は皿状を呈する。深さは20㎝である。さらに底面には、中央南寄りにピットが認められる。ピットは円形を呈し、大きさは直径約30㎝、深さは10㎝である。

【堆積土】2枚の層に分けられ、いずれも堅くしまっている。地山の崩落上等の流入土である。

【出土遺物】底面のピット(2層)から縄文土器が出土している。小片のため図示できない。

第109号土壙(第45図)

【遺構の確認】第108号土壙の東隣W8・Ｓ12.5に位置し、雄山ローム層上面で確認している。東側は新しいピットに切られている。

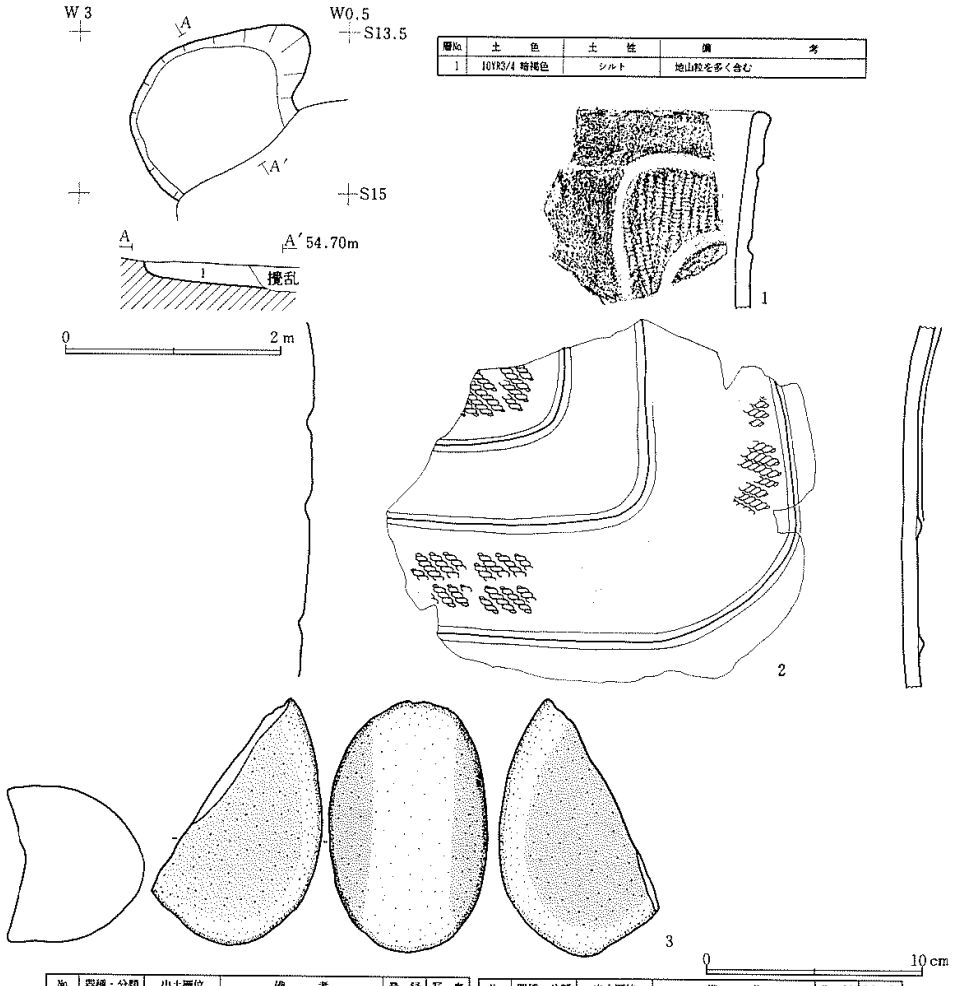


第45図　第108,109号土壙

【形態・規模】平面形は楕円形を基調とするもので、大きさは長軸90㎝短軸70㎝である。壁は緩く立ち上がり、断面形は皿状を呈する。深さは10㎝である。さらに底面には東壁際にピットが認められる。ピットは角ばった円形を呈するものと思われ、大きさは直径約30㎝、深さ6㎝である。

【堆積土】1層認められ、堅くしまっている。地山の崩落土等の流入土である。

第110号土壙（第46図）



層No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山粒を多く含む

No.	器種・分類	出土層位	備考	登録	写真
1	深鉢	1層	0段多条縄文RL	K10-1	12-22

No.	器種・分類	出土層位	備考	登録	写真
2	深鉢	1層	縄文LR	K10-2	12-21

番号	地区・層位	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考	登録	写真
1	1層	磨石?	安山岩	115	(80)	73	620.0	焼けはじけ	K10-1	15-12

第46図　第110号土壙と出土遺物

【遺構の確認】W2・S14に位置し、地山泥岩層上面で確認している。南側は新しい撹乱によって抉られている。

【形態・規模】平面形は不整な楕円形を呈し、大きさは長軸1.9m短軸1.2mである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは20㎝である。

【堆積土】1層認められるが、土壙のように堅くしまっていない。地山の崩落上等の流入土ある。

【出土遺物】堆積土1層から遺物が出土している。遺物には縄文土器、石器がある。

a　土　器

第46図1は口縁部がわずかに外反する深鉢である。地文部と無文部を区画する沈線文が描かれている。地文は0段多条縄文である。

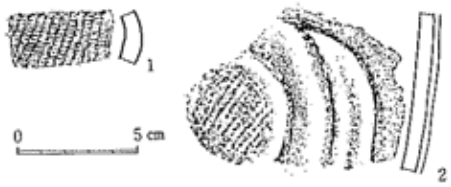
2は胴央部がわずかに膨らむ深鉢である。地文部と無文部を区画する隆線文が描かれている。地文は単節縄文である。

b　石　器

磨石（第46図3）二磨面を有する。全体が滑らかである。焼けはじけによる破損がある。

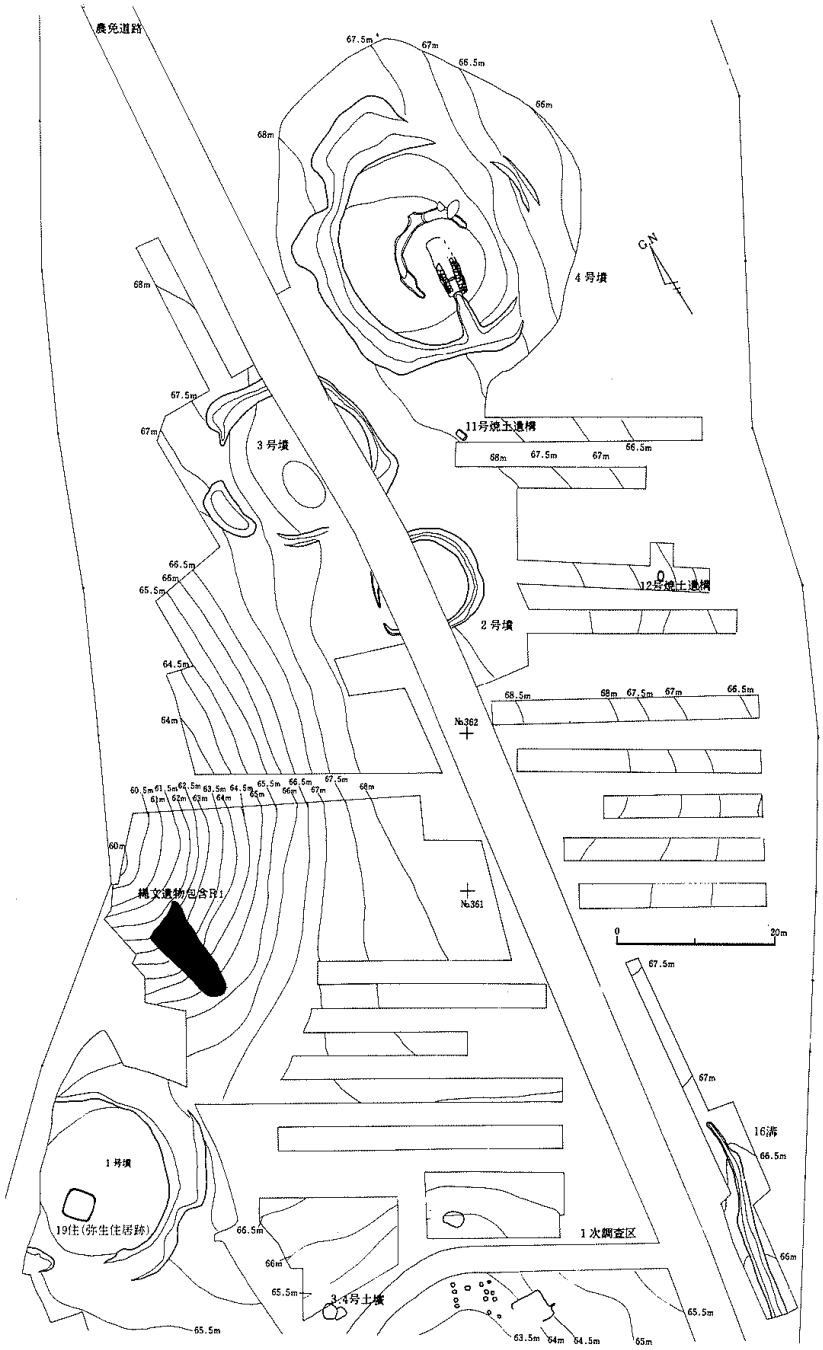
基本層位出土の縄文土器（第47図）

1は胴部が強く内弯する深鉢で、地文のみ施されている。地文は0段多条縄文である。2は深鉢の胴部資料で、地文部と無文部を区画する隆線文が描かれている。文様は楕円形区画文と思われる。。地文は撚糸文である。



No	器種・分類	出土層位	備　考	登録	写真
1	深鉢	1層	0段多条縄文RL	X-1	12-23
2	深鉢	1層	撚糸文1r	X-2	12-24

第47図　基本層位出土土器（縄文時代中期の土器）



第48図　1～4号墳付近の遺構配置図(第1・3次調査区)

(3)弥生時代の遺構と出土遺物

第3次調査区の西側の丘陵頂部から竪穴住居跡1軒が発見されたもので、1号墳周溝区画内にある。付近の人の話では昭和20年代の初めまで墳丘が残存していたとされることから、本来は墳丘の下にあったものである。

第19号住居跡（第49・50図）

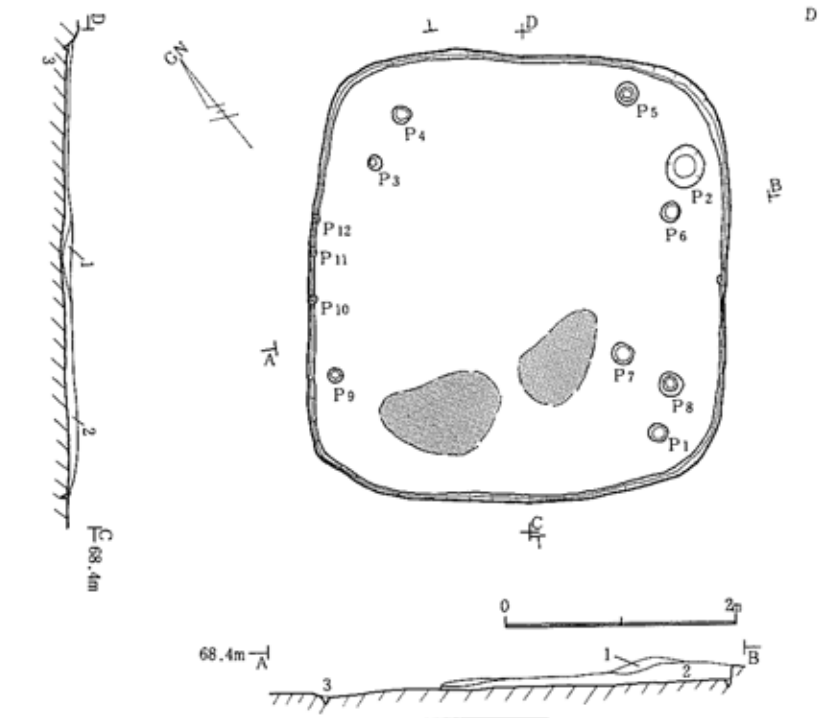
【遺構の確認】確認面は基本層位面である。

【重複】近年まで1号墳が残存していたことから、これよりも古い。

【平面形・規模】東西3.6m、南北3.8mの隅の丸い長方形を呈する。

【堆積土】3層からなる。すべて自然流入土と見られる。

【壁】壁は床面から急激に立ち上がる。壁高は7～8cm平均である。



層位	色調	土性	備考
1	黄褐色 (10YR 5/6)	シルト	
2	灰黄褐色 (10YR 4/2)	シルト	非常にかたい。層の下位に炭化物、焼土を含む
3	黒褐色 (7.5YR 2/2)	粘質シルト	

P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
2	11	4	5	3	9	—	1	—	—	8	—

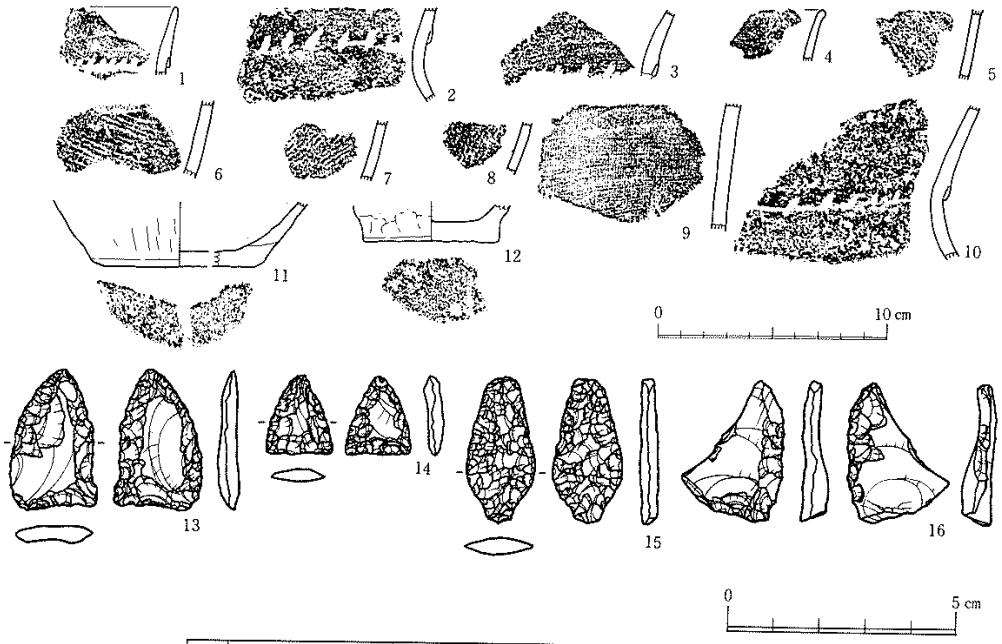
第49図　第19号住居跡

【床】地山をそのまま床としている。なお、住居南寄りの地点に焼け面が2ケ所検出された。その広がりは1.1m×0.7m、0.7m×0.7mである。地床炉と見られる。

【柱穴】床面上で検出されたピットは12個あり(P1～P12)、円形である。柱痕跡が認められるものもあり、位置関係からP2. P3. P8. P9が主柱穴と考えられる。

【溝】壁下に沿って全周する幅約5㎝、深さ10㎝を平均とする断面「V」字状の溝が認められた。

【出土遺物】出土遺物は弥生土器のほか石器・石鏃がある。床面、特に地床と見られる焼け面付近に遺物が集中して発見された。



No.	器種・器形	法量	備考
1	弥生土器・甕		おり返し口縁　下端に刺突文
2	弥生土器・甕		体部上端に列点刺突文
3	弥生土器・甕		体部上端に列点刺突文
4	弥生土器・甕		
5	弥生土器・甕		縄文ＲＬ
6	弥生土器・甕		縄文ＲＬ
7	弥生土器・甕		縄文ＬＲ
8	弥生土器・甕		縄文ＬＲ
9	弥生土器・甕		
10	弥生土器・甕		体部上端列点刺突文
11	弥生土器・甕	底 7.0cm	外：ナデ　内：マメツ
12	弥生土器・甕	底 6.0cm	
13	石鏃	長 3.1cm　幅 1.5cm　厚 0.5cm	珪質頁岩製
14	石鏃	長 1.7cm　幅 0.8cm　厚 0.4cm	珪質頁岩製
15	石鏃	長 3.2cm　幅 1.0cm　厚 0.4cm	珪質頁岩製
16	不定形石器	長 3.1cm　幅 1.1cm　厚 0.3cm	珪質頁岩製

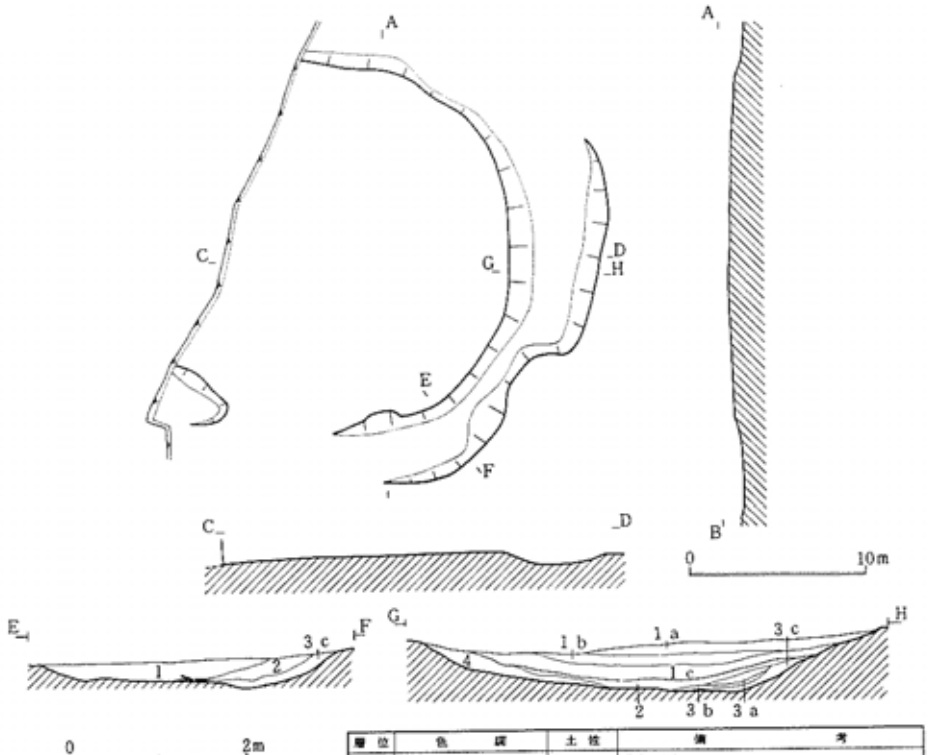
第50図　第19号住居跡出土遺物

(4)古墳時代の遺構と出土遺物

古墳は1～4号墳の4基が発見された。古墳が位置するのは丘陵頂部・尾根上であり、意図的に場所を選定し築造しているようである。調査区の尾根は「L」字状を呈して西から東方向、北から南方向へ延びている。1号墳は西から東方向へ延びる尾根上に位置し、2～4号墳は南から北方向へ延びる尾根上先端部、本遺跡が所在する丘陵の最も高い位置にある。

ただし、墳丘自体は戦後の開墾等で既に削平を受けており、現存しておらず、4号墳の主体部の一部がかろうじて現存する以外は周溝のみが検出された(第48図)。

1次調査発掘トレンチにおいて検出されていた埴輪を出す溝跡は古墳(1号墳)の周溝であることが確認された。また、1次調査において灰白色火山灰を含む遺構(2土壙)が報告(県教委：1986)されているが、2号墳の周溝の一部であり、出土遺物は古墳に伴うものと考えられる。



層位	色調	土性	備考
1 a	にぶい黄褐色 (10YR 5/4)	シルト	非常にかたい
1 b	褐色 (10YR 4/4)	シルト	
1 c	黒色 (10YR 2/1)	シルト	しまりなくパサパサ
2	にぶい黄褐色 (10YR 4/3)	シルト	上面に灰色火山灰
3 a	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	地山ブロック含む
3 b	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	遺物多く含む　墳丘の崩壊土
3 c	褐色 (10YR 4/4)	シルト	
4	暗褐色 (10YR 3/4)	シルト	

第51図　1号墳

1号墳（第51図）

現　状

1号墳の位置するのは、2～4号墳の位置する尾根よりわずかに低く、標高66m付近である。

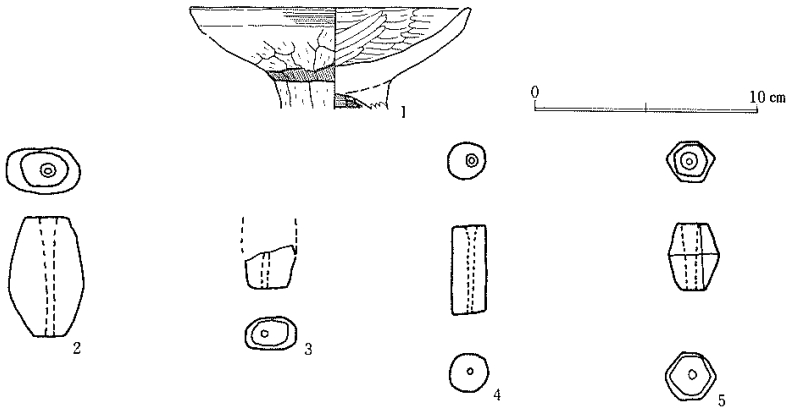
墳丘自体の盛り土は既に損なわれており、わずかに旧表土が認められているに過ぎない。主体部は現存していない。形態については墳丘の一部が調査区外に延びるため断言はできないが、円墳の可能性が高いものと推測する。

周溝の墳丘北側が削平を受け、明確ではないが、周溝底面に立ち上がりの直径24cmの規模であった。

周　溝

周溝は上端幅1.5～5.0m、下端幅1.0～2.5mで、断面形は逆台形状である。墳丘東側（尾根部分）が幅、深さともにあり、顕著であるが、丘陵斜面にあたる墳丘北側及び南側は明確でない。周溝上端の形態は墳丘側では整然とした弧を描くのに対して、外側では不整合になる。

堆積土は4層に大別される。1層は表土及び墳丘の崩壊上、4層は全域で認められ灰白色火山灰がブロック状に認められる。3層は墳丘の崩壊土、4層は古墳外部からの堆積層である。



No	出土地区・遺構	器種・器形	口径	底径	器高	特徴	登録No
1	1号墳　周溝4層	土師器　高坏	——	——	——	外面：ヘラケズリ→ヘラナデ、横ナデ，内側：ヘラミガキ	88

No	出土地区・遺構	器種・器形	長さ	巾	穿孔径
2	1号墳周　1層	ナツメ玉（コハク製）	2.7	1.7	0.15
3	1号墳周　4層	ナツメ玉（コハク製）	(残) 0.8	1.2	0.1
4	1号墳周　4層	管　玉（碧玉製）	2.0	0.8	0.1
5	1号墳周　1層	切子玉（水晶製）	1.5	1.1	0.15

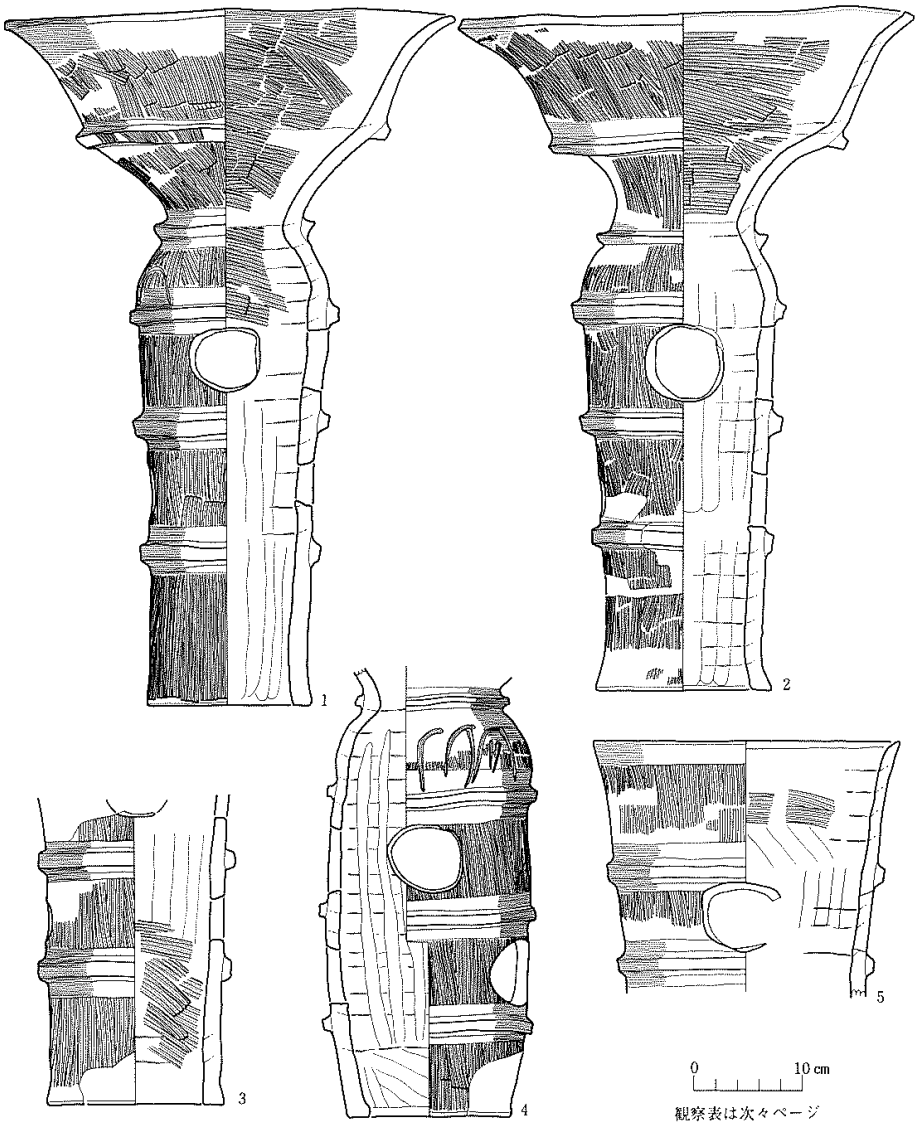
第52図　1号墳出土遺物(1)

遺物の出土状況

出土した遺物には石製品(切子玉、管玉、棗玉)、埴輪(円筒埴輪、朝顔型円筒埴輪)、土師器、須恵器がある。すべて、周溝内から出土したものである(第52～55図)。

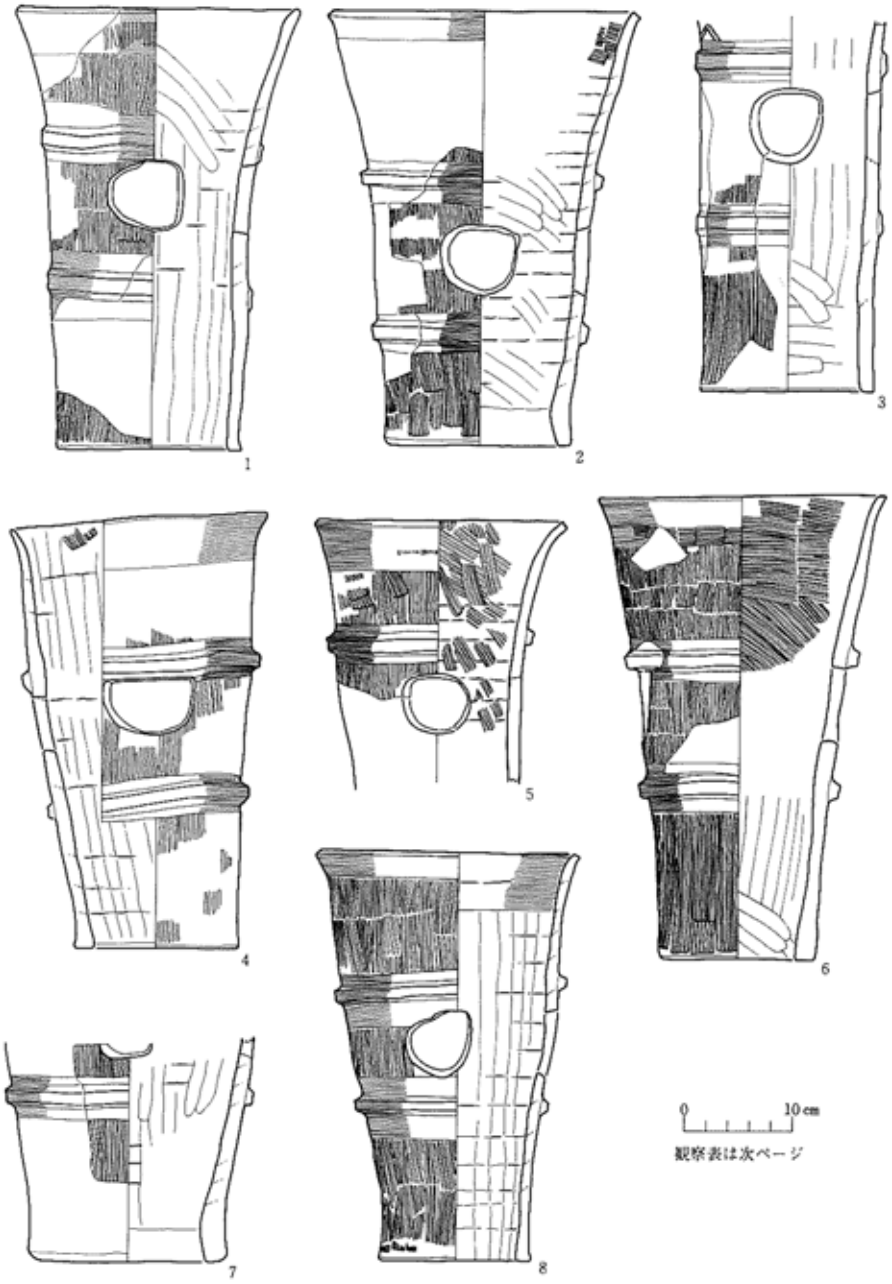
埴輪は周溝底面に足の踏み場がないほど敷きつめられるような状態で出土した（写真図版参照）。その出土した密度をみると、周溝内東側から南側にかけてが特に多く出土している。

この他3層からは須恵器坏が3点出土したが、位置的なまとまりは認められなかった。



観察表は次々ページ

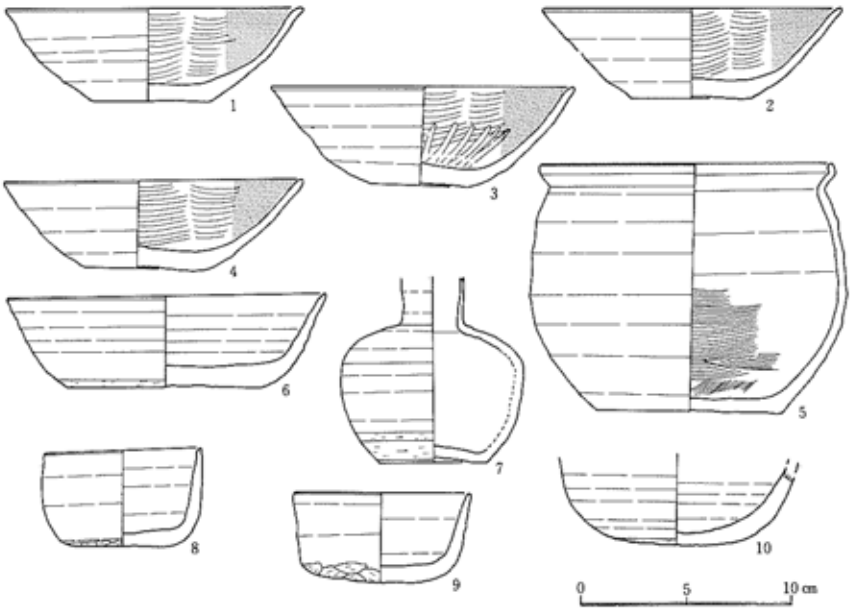
第53図　1号墳出土遺物(2)



第54図　1号墳出土遺物(3)

No.	出土位置	種類	口径 (cm)	器高	底径	凸帯の間隔 (cm)	調整	写真番号
53-1	周溝底部	朝顔型埴輪	41.4	63.1	15.2	14.12.10 (1.2.3 段)	(外) ハケメ→横ナデ、(内) ハケメ、ナデ	5352
53-2	周溝底部	朝顔型埴輪	41.6	62.1	16.0	14.11.10 (1.2.3 段)	(外) ハケメ→横ナデ、(内) ハケメ、ナデ	5353
53-3	周溝底部	朝顔型埴輪	——	22.5 (現)	16.0	12.10 (1.2 段)	(外) タテハケメ→横ナデ、(内) ナデ、ハケメ	5350
53-4	周溝底部	朝顔型埴輪	——	40.2 (現)	15.0	8.10.11 (1.2.3 段)	(外) タテハケメ→横ナデ、(内) ナデ	5353
53-5	周溝底部	円筒埴輪	28.0	23.0 (現)	——	8 (2 段)	(外) タテハケメ→横ナデ、(内) ナデ、ハケメ	5350
54-1	周溝底部	円筒埴輪	24.5	40.8	17.0	15.13 (1.2 段)	(外) タテハケメ→横ナデ、(内) ナデ	5450
54-2	周溝底部	円筒埴輪	27.8	39.5	17.0	10.14 (1.2 段)	(外) タテハケメ→横ナデ、(内) ナデ、ハケメ	5450
54-3	周溝底部	円筒埴輪	——	34.2 (現)	16.0	15.15 (1.2 段)	(外) タテハケメ→横ナデ、ヘラ書きあり、(内) ナデ、ハケメ	5450
54-4	周溝底部	円筒埴輪	23.7	38.6	15.2	14.12 (1.2 段)	(外) タテハケメ→横ナデ、(内) ナデ、ハケメ	5450
54-5	周溝底部	円筒埴輪	22.6	23.2 (現)	——	——	(外) タテハケメ→ヨコハケメ、(内) ハケメ	5450
54-6	周溝底部	円筒埴輪	26.5	42.5	14.0	16.12 (1.2 段)	(外) タテハケメ→ヨコハケメ→横ナデ、(内) ハケメ	5450
54-7	周溝底部	円筒埴輪	——	20.0 (現)	17.0	15 (1 段)	(外) タテハケメ→横ナデ、(内) ナデ、ケズリ?	5450
54-8	周溝底部	円筒埴輪	23.2	37.6 (現)	13.8	14.10 (1.2 段)	(外) タテハケメ→横ナデ、(内) ナデ	5450

(埴輪観察表)



No.	出土地区・遺構	種類・器種	分類	口径	底径	器高	特徴 (外、内、底部)	登録No.
1	1号墳 周溝1層	土師器 坏		14.2cm	5.7cm	4.4cm	底部：回転糸切り	84
2	1号墳 周溝1層	土師器 坏		14.3	5.8	4.4	底部：回転糸切り	83
3	1号墳 周溝1層	土師器 坏		14.6	4.8	5.0	内面：くガキ→黒色処理、底部：回転糸切り	81
4	1号墳 周溝1層	土師器 坏		14.3	5.2	4.5	内面：くガキ→黒色処理、底部：回転糸切り	82
5	1号墳 周溝1層	土師器 甕		14.0	8.8	11.8	内面：ナデ	96
6	1号墳 周溝1層	須恵器 坏		15.4	9.4	4.4	外面：体部下端回転ヘラケズリ、底部：回転ヘラケズリ	85
7	1号墳 周溝1層	須恵器 壺		——	5.2		外面：体部下端回転ヘラケズリ、底部：回転糸切り	47
8	1号墳 周溝3層	須恵器 坏		7.6	——	4.5	外面：体部下端手持ちヘラケズリ、底部：手持ちヘラケズリ、丸底風	94
9	1号墳 周溝1層	須恵器 坏		8.5	——	4.3	外面：体部下端手持ちヘラケズリ、底部：手持ちヘラケズリ、丸底風	95
10	1号墳 周溝1層	須恵器 坏?		——	——	4.2	底部：回転ヘラケズリ	87

第55図　1号墳出土遺物(4)

2号墳（第56図）

2号墳は南北に延びる尾根上に位置する。

墳丘自体は削平を受けており、残存してない。周溝のみが検出された。周溝は幅が1.8m～2.0m、断面形「U」字形である。周溝外周、内周は整えられており、きれいな円となっている。周溝底面墳丘の立ち上がりが直径12mの円墳である。

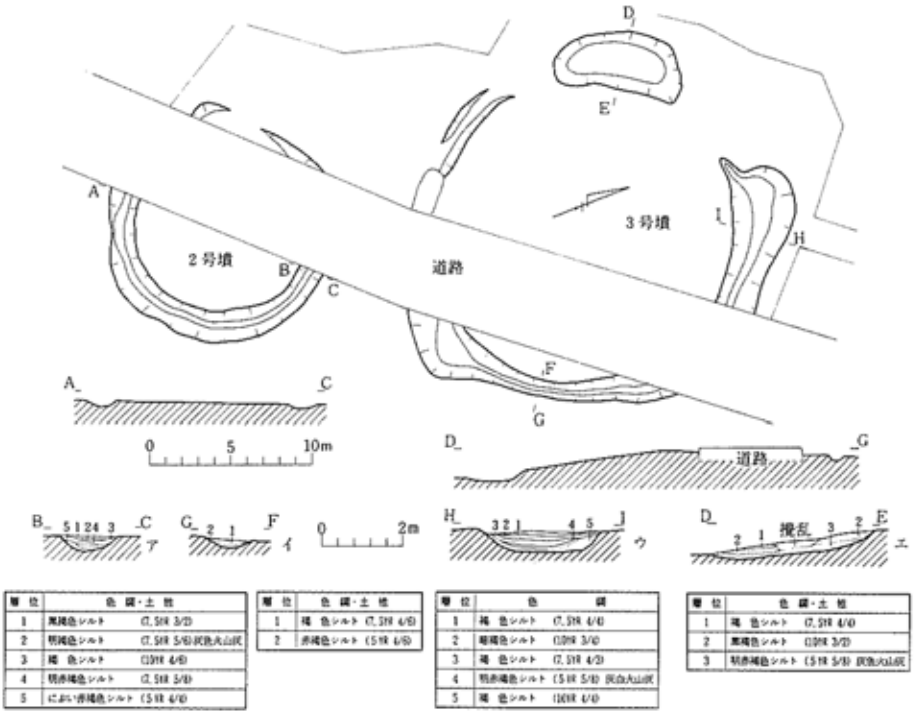
周溝堆積土は5層認められ、1層が表土の堆積土、2層が灰白色火山灰層、3～5層墳丘崩壊土と見られる。

出土遺物には、須恵器坏、高坏、甕がある(第57図)。これらは周溝南東部底面に一括して認められた。なお、高坏は脚部片で4号墳出土高坏(第61図2)に接合した。

3号墳

3号墳は南北に延びる尾根上から西向き斜面にかけて認められた。

墳丘自体は削平を受けており、残存していない。周溝のみが検出されるが、斜面では断続的となっている。周溝底面墳丘の立ち上がりが直径18mの円墳である。



層位	色調・土性
1	黒褐色シルト (7.5YR 3/2)
2	明褐色シルト (7.5YR 5/6) 灰色火山灰
3	褐色シルト (10YR 4/6)
4	明赤褐色シルト (2.5YR 5/8)
5	にぶい赤褐色シルト (5YR 4/6)

層位	色調・土性
1	褐色シルト (7.5YR 4/6)
2	赤褐色シルト (5YR 4/6)

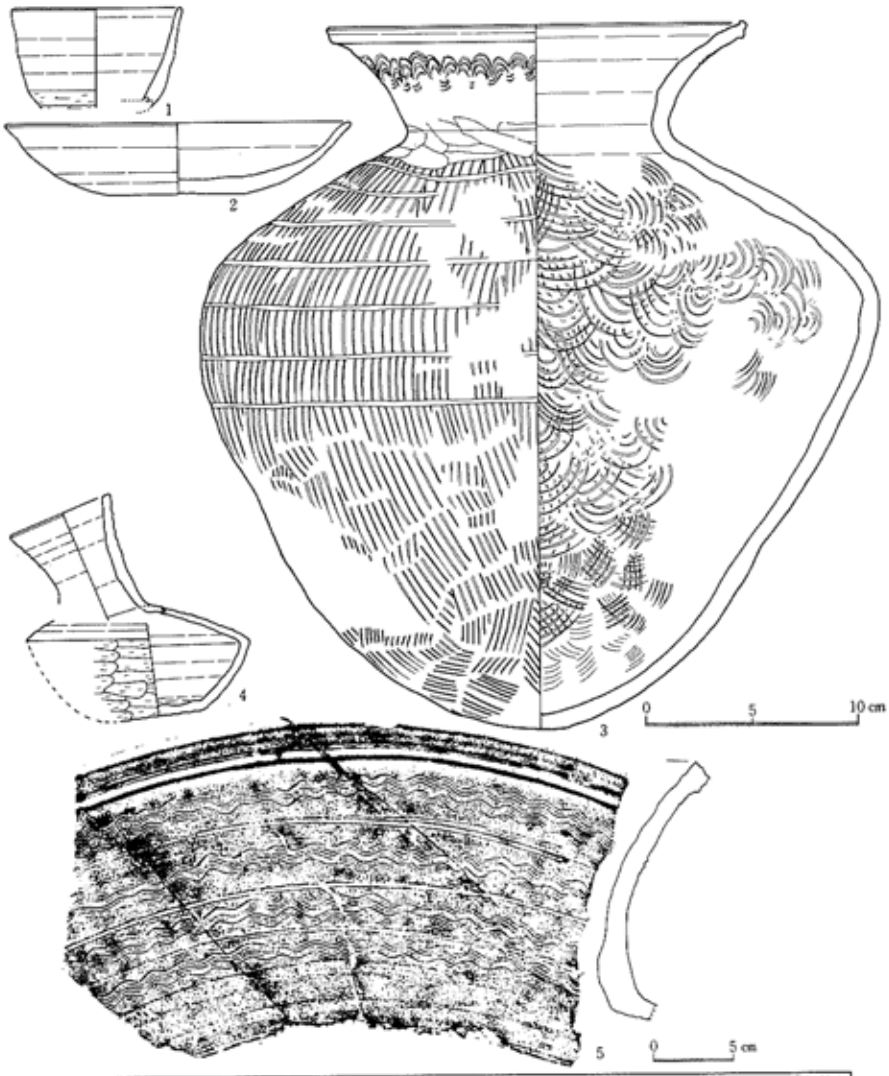
層位	色調
1	褐色シルト (7.5YR 4/4)
2	暗褐色シルト (10YR 3/4)
3	褐色シルト (7.5YR 4/3)
4	明赤褐色シルト (5YR 5/8) 灰色火山灰
5	褐色シルト (10YR 4/4)

層位	色調・土性
1	褐色シルト (7.5YR 4/4)
2	黒褐色シルト (10YR 3/2)
3	明赤褐色シルト (5YR 5/8) 灰色火山灰

第56図　2・3号墳

周溝堆積土は大きく3層に大別され、部分的に堆積の仕方に違いがあるものの灰白色火山灰を挟んで、上層が1層で表土の堆積層、2層は灰白色火山層、下層が墳丘崩壊土と見られる。

遺物には、古墳南部周溝底面から出土した須恵器坏、甕がある(第57図)。



No	出土地区・遺構	器種・器形	分類	口径	底径	器高	特徴（外面・内面・底部）	登録No
1	2号墳（周溝東面） 4号墳（周溝3層）	須恵器・坏					外面：回転ヘラケズリ	98
2	2号墳（周溝1層）	須恵器・坏			6.0	3.4	底部：回転糸切り	99
3	2号墳（周溝底面）	須恵器・甕		19.4		33.5	外面：平行叩き目→平行沈線、櫛状工具による波状文、ナデ 内面：同心円押さえ痕	105-4
4	3号墳（周溝底面）	須恵器・平瓶		5.2	3.6		外面：体部下半手持ちヘラケズリ	105-8
5	3号墳周溝	須恵器・甕					外面：櫛状工具による波状沈線、平行沈線	

第57図　2・3号墳出土遺物

4号墳(第58・59図)

墳　丘

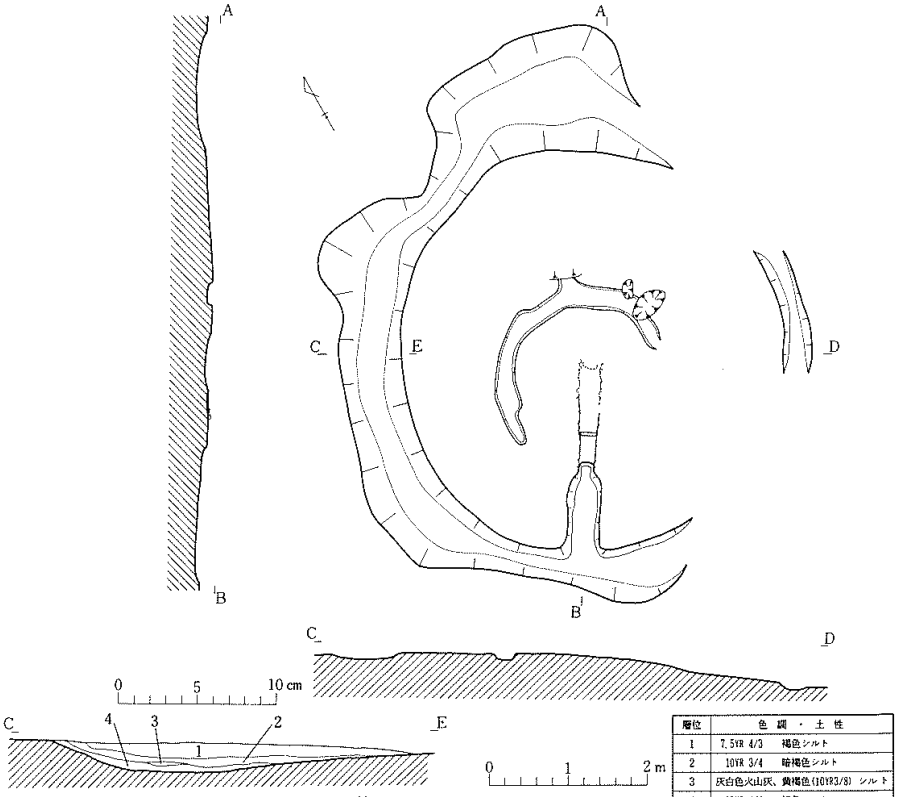
4号墳の位置するのは、1号の位置する尾根よりわずかに高く、標高68㎝付近の南北に延びる尾根上から東向きの斜面に位置している。

近接する位置には2・3号墳がある。墳丘自体の盛り土は既に損なわれており、わずかに表土が認められるに過ぎない。周溝底面墳丘の立ち上がりが直径27mの円墳である。

主体部

主体部は石室の一部が残存するのみで、奥壁は既に後世の撹乱を受け残存せず、それと思われる長さ約2m、幅1mの自然岩が岩室近くに倒れていた。

主体部である石室は国家座標南北軸に対し11度東に偏しており、南向きに開口する横穴式石室である。また、側壁下平面形は羨道部から玄室奥壁に向かって直線的に拡がる「バチ」状を呈している



層位	色調・土性
1	7.5YR 4/3　褐色シルト
2	10YR 3/4　暗褐色シルト
3	灰白色火山灰、黄褐色(10YR3/8) シルト
4	10YR 4/4　褐色シルト

第58図　4号墳(1)

主体部は玄室、羨道部、墓道によって構成されている。

玄室と羨道部は凝灰岩の梱石(しきみ石、長さ1m、幅20㎝、厚さ20㎝)によって区画されており、玄室内のみに約10～20㎝の自然石(安山岩)を敷詰めている。羨道部にはそうした敷石施設はなく、約5㎝の粘土を貼り底面としている。非常に固く締まっていた。この粘土を貼ることによって、石室中軸線上梱石部分がわずかに高く(2～3㎝)、側壁及び墓遺に向かって下り勾配をつくっている。

規模は、奥壁から梱石までの玄室で長さ4.10m、幅奥壁部で1.32m、梱石部分で1.10m、羨道部で長さ1.83m、幅0.88mである。

羨道部と墓道との接点付近には閉塞石の一部と見られる自然石(約40～50㎝)が積まれていた。

墓道は玄室、羨道部より一段低く設けられており、周溝に向かって下り傾斜となっている。形態は周溝から羨道部に向かってすぼまる形となっている。

墓道は周溝底面の墳丘の立ち上がりから羨道部との接点までの長さ6.19m、幅は羨道部との接点で1.0m、墓道中央付近で2.05mを計る。

主体部の規模は、周溝底面の墳丘の立ち上がりから奥壁の抜き取り痕跡までの長さ12.12m、同様に梱石までが8.02mである。

構築方法

主体部の構築方法については、現存部位が少ないので主体部の下部構造についてのみ、記述しておきたい。

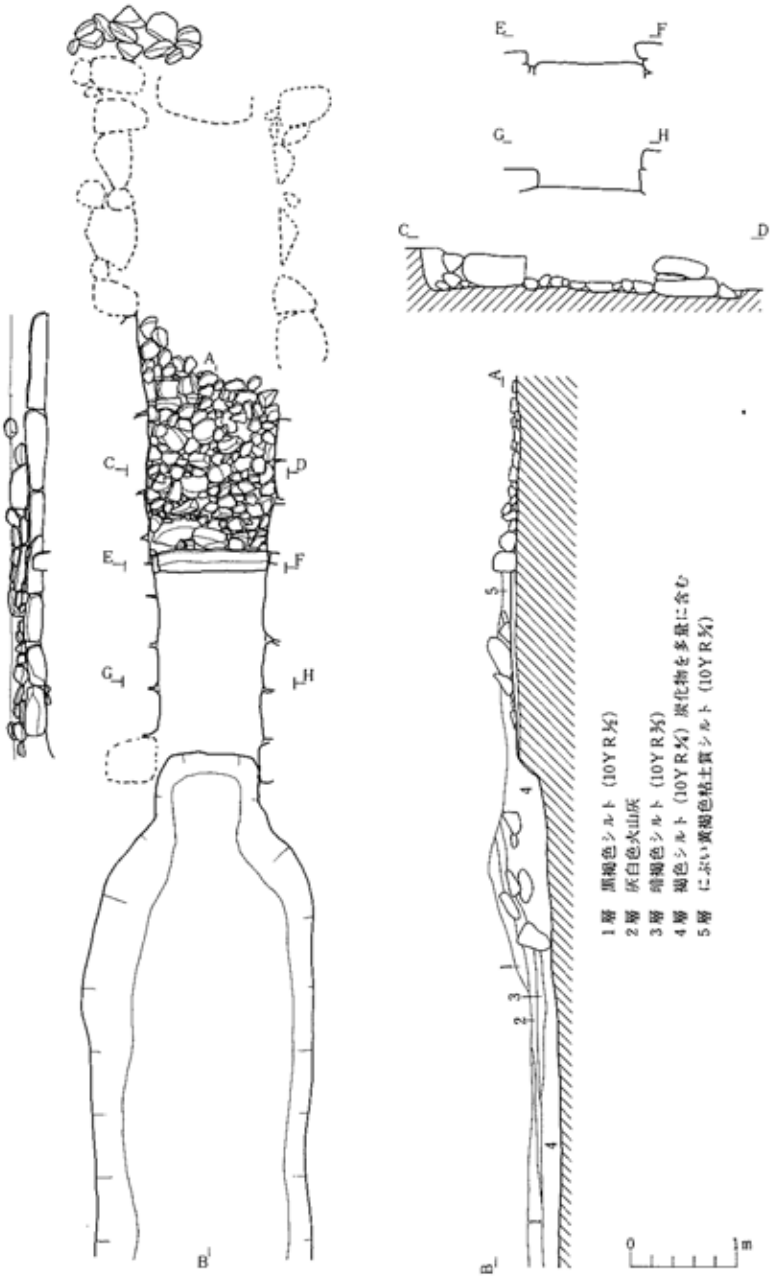
①掘り方を設ける。規模は主体部よりひとまわり大きく、この際に旧表土を切っている。また、地山層(ローム層)を約5㎝掘り下げている。

②側壁を積む。奥壁は現存していないが、おそらくはこの時点では既でに設けられていたものと思われる。精査の結果、奥壁の据え方(玄室底面をさらに20～30㎝掘り下げている)を確認した。側壁に使用している石は長さが約30～100の自然石(安山岩)を使用している。

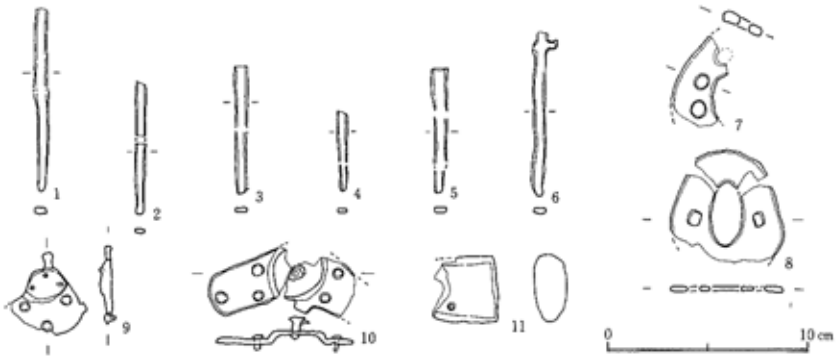
③凝灰岩の切り石、しきみ石を設け、玄室と先導部を区画する。この際にしきみ石と側壁との隙間に小礫を入れて安定させている。

④玄室に小礫を敷きつめる。また、羨道部に厚さ約5㎝の炭化物粒を含む粘土を貼る。という構築順序であった。

なお、③の側壁を積み上げていく際には、掘り方と側壁との間に15㎝大の自然礫と粘土の裏込めを行っている。

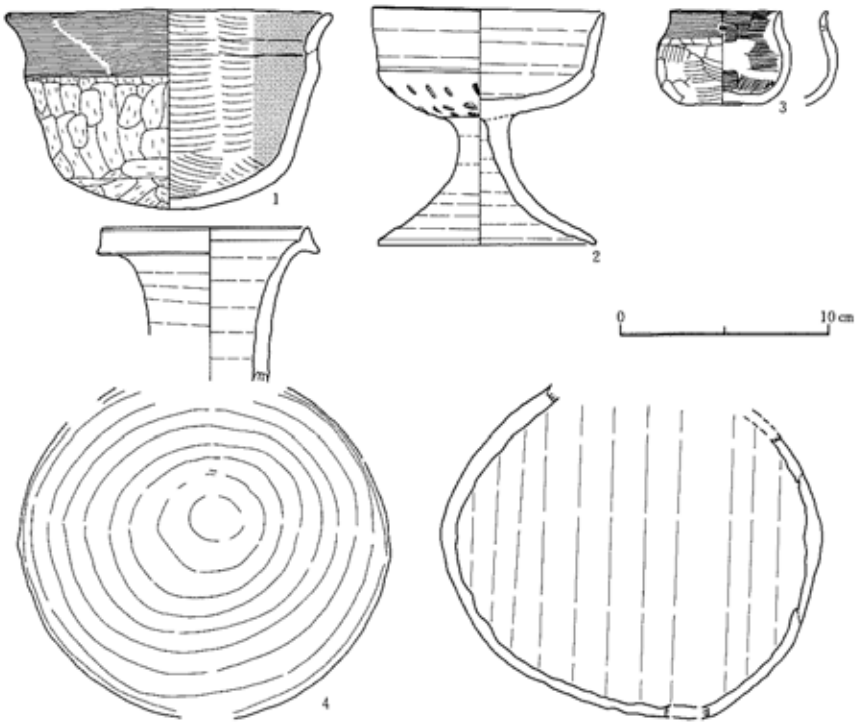

A
B
C
D
E
F
G
H
1層　黒褐色シルト（10YR3/2）
2層　灰白色火山灰
3層　暗褐色シルト（10YR3/3）
4層　褐色シルト（10YR4/4）炭化物を多量に含む
5層　にぶい黄褐色粘土質シルト（10YR5/4）
0
1m

第59図　4号墳(2)



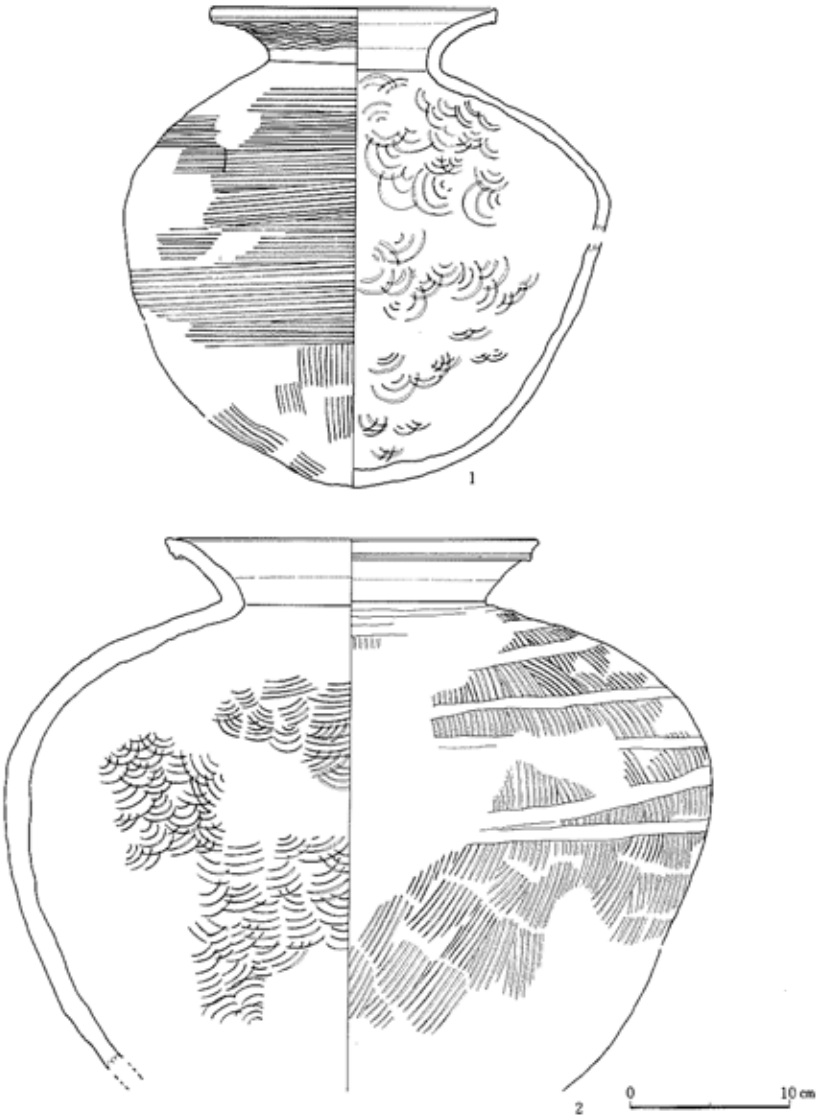
No.	出土地区・遺構	種類	長さ	巾	厚さ	登録No.
1	4号墳石室内部	鉄製品・鉄鏃	(現) 4.2	0.6	0.3	4－6
2	4号墳石室内部	鉄製品・鉄鏃	6.8	0.5	0.2	4－7
3	4号墳石室内部	鉄製品・鉄鏃	6.4	0.6	0.2	4－8
4	4号墳石室内部	鉄製品・鉄鏃	4.0	0.5	0.2	4－9
5	4号墳石室内部	鉄製品・鉄鏃	6.2	0.6	0.3	4－10
6	4号墳石室内部	鉄製品・鉄鏃	8.3	0.6	0.3	4－11
7	4号墳石室内部	鉄製品・ツバ	(現) 4.5	1.9	0.4	4－1
8	4号墳石室内部	鉄製品・ツバ	(現) 5.6	5.6	0.3	4－2
9	4号墳石室内部	鉄製品	4.1	3.4	0.5	4－3
10	4号墳石室内部	鉄製品	(現) 7.2	2.3	0.2	4－4
11	4号墳玄室底面	鉄製品・製鉄所頭	(現) 3.25	3.35	1.6	4－5

第60図　4号墳出土遺物(1)



1	4号墳（裏道底面）	土師器・鉢	15.8		9.6	外面：ヘラケズリ→横ナデ，内面：ミガキ→黒色処理	103
2	4号墳（裏道底面）	須恵器・高坏	11.3	脚部 10.5	11.5	坏部内面に掃状工具による刺突あり	101
3	4号墳周（4層）	須恵器・フラスコ形広口壺	9.4	2.4	25.0		102
4	4号墳周（底）	土師器・ミニチュア土器	5.4	3.8	4.5	外面：ヘラケズリ→ミガキ，横ナデ，　内面：ヘラナデ ※口縁部下端に2ケ所の穿孔(1.5mm) あり	104

第61図　4号墳出土遺物(2)



No	出土位置	器種	口径	器高	特徴
1	4号墳（同濃底面）	須恵器・甕	18.0	30.4cm	外面：カキ目、波状沈線文、　内面：円形押さえ目
2	4号墳（同濃底面）	須恵器・甕	23.6	34.0（残）	外面：平行叩き目　　内面：円形押さえ目

第62図　4号墳出土遺物(3)

周　溝(第16図)

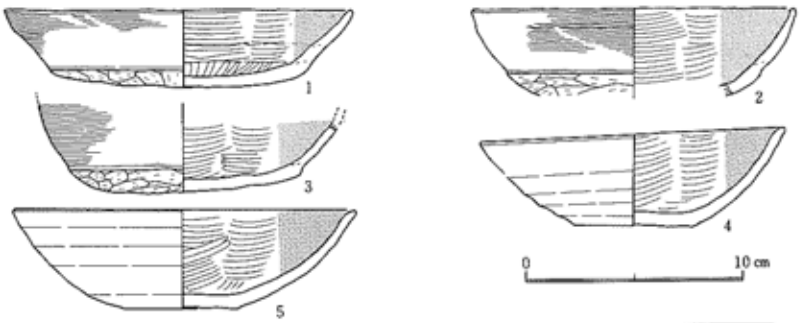
上端幅3～8m、下端幅2～4mの逆台形を呈する。周溝の内周(墳丘側)はきれいに整えられた円を描くのに対して、外周は不整合の円形である。また、尾根を切断している部分(北側)は幅8mあり、深さ1mを計る。東向き斜面では断続的に認められた。

周溝堆積土は大きく3層に大別され、部分的に堆積の仕方に違いがあるものの灰白色火山灰を挟んで、上層が1層で自然堆積土層、2層は灰白色火山灰層、下層の4層が墳丘崩壊土である。

その他の遺構

墳丘内部に主体部を回る溝跡（周跡2）が認められる。幅が0.8～1m、深さ50～60㎝である。堆積土に地山ブロック(10㎝大)を含むもので、旧表土を切っている。堆積の仕方は自然流入ではなく、埋め戻したものと見られる。墳丘を積み上げる以前の主体部構築に係わる遺構ではないかと見られる。このような類例は色麻町色麻古墳群調査例にある（古川、1983）。

また、墓道において、火を焚いた痕跡と見られる炭化物(炭)層を検出した。この層は墓道部分にのみ認められ、1.5×2mの範囲である(3層)。これに伴って、非ロクロ土師器坏が3点出土した(第63図1～3)。



No	層　位	種類・器種	分　類	口　径	底　径	器　高	調　整　の　特　徴
1	墓道3層	土師器　坏		16.2	――	2.6	外面：横ナデ＋ヘラケズリ、内面：ミガキ＋黒色処理
2	墓道3層	土師器　坏		15.0	――	(現)4.1	外面：横ナデ＋ヘラケズリ、内面：ミガキ＋黒色処理
3	墓道3層	土師器　坏		――	――	(現)4.2	外面：横ナデ＋ヘラケズリ、内面：ミガキ＋黒色処理
4	墓道1層	土師器　坏		14.2	5.5	4.2	底部：回転糸切無調整　内面：ミガキ＋黒色処理
5	墓道1層	土師器　坏		16.0	5.3	4.6	底部：回転糸切無調整　内面：ミガキ＋黒色処理

第63図　4号墳出土遺物(4)

遺物とその出土位置

出土遺物は、玄室から鉄製品(柄頭、鍔、馬具、鉄鏃等)が散乱する状態で単発的に出土している(第60図)。墓道部では層位的に分れて、低面及び4層から土師器内黒鉢、須恵器無蓋高坏、周溝からは、周溝南東部底面及び墓道との接点からフラスコ形長頸壺、須恵器甕がある。
古墳周溝北側底面から土師器ミニチュア土器、須恵器甕が出土した(第61・62図)。

(5)古代の遺構と出土遺物

竪穴住居跡41軒、掘立柱建物跡27棟、埋設土器遺構、焼土遺構、溝跡があり（第67、68図）、各種の遺物が出土している。古代の遺構に関しては、先に実施されている1・2次調査を踏まえて、遺構番号を第3次調査では竪穴住居跡が8～18号、掘立柱建物跡が23～35号、第4次調査では、竪穴住居跡101号～130号、掘立柱建物跡が101号～114号と記し、竪穴住居跡、掘立柱建物跡の順に説明することとする。

A　竪穴住居跡

第8号住居跡(第64図)

【遺構の確認】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。検出区はW-20～26、N-3～10区である。

【平面形・規模】東西5.4m、南北5.8mのほぼ正方形を呈する。

【堆積土】7層からなり、すべて自然流入土と見られる。

【壁】壁は周溝底面から急激に立ち上がる。壁高は約20㎝である。

【床】全体にわたり厚さ約5㎝の貼床を施している。南側に内かい緩やかに傾斜している。凹凸が認められる。

【カマド】住居北辺中央部に設けられている。煙道部のみ検出された。長さは1.84mで煙出しピットに向かって緩やかに立ち上がる。

【柱穴】床面上で検出されたピットは30個あり(P1～P30)、円形ある。柱痕跡が認められるもの、認められないものがあるが、位置関係からP2、3、4、8が新しい主柱穴、P1、10、12,16が古い主柱穴と見られる。また、周溝内には壁柱穴(P1～P18)が設けられている。

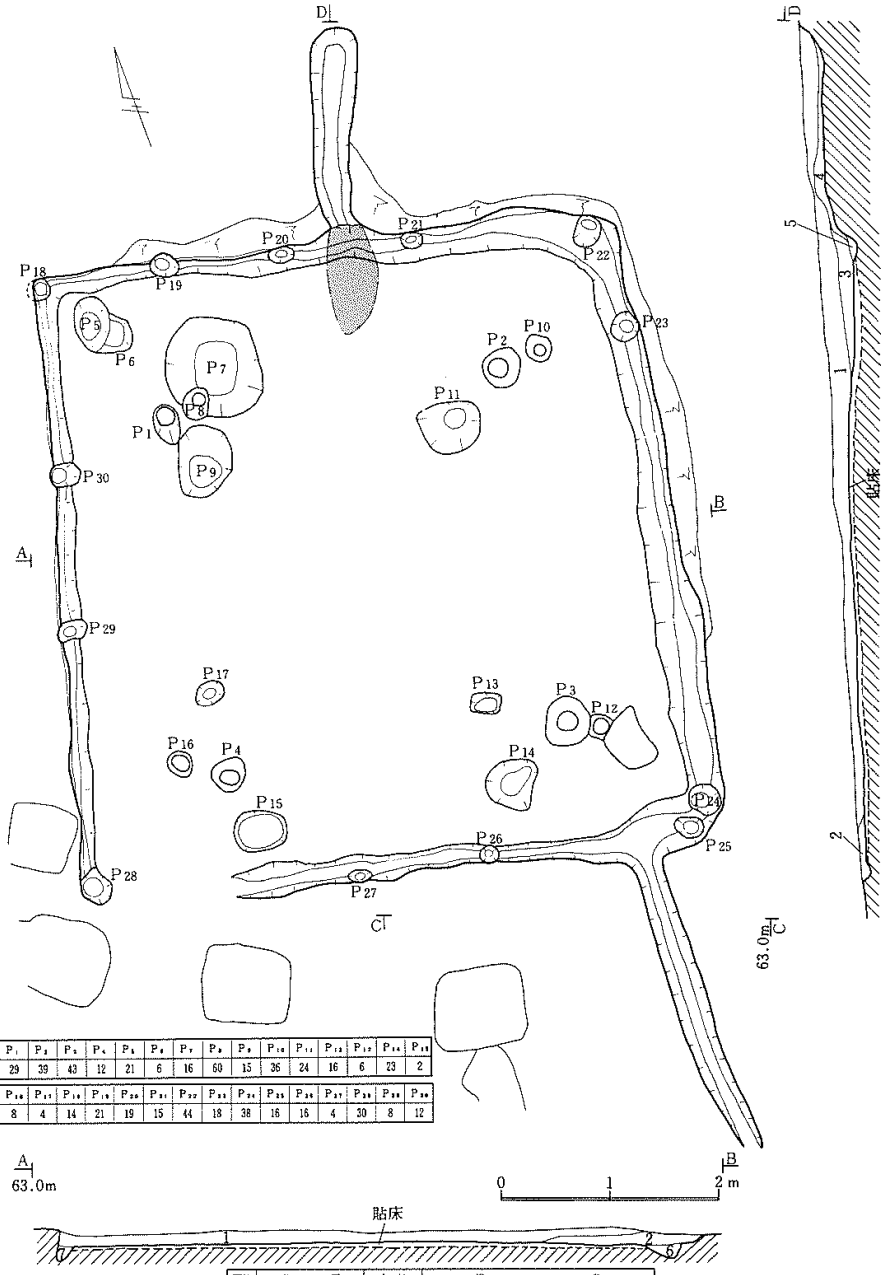
【溝】住居内を全周する周溝と住居外へと延びる外延溝とがある。周溝は幅30㎝、深さ8㎝の断面「U」字形を呈する。5、6、7層がその堆積土である。外延溝は長さ2.8m、幅30㎝、深さ15㎝の断面「U」字形である。

【出土遺物】土師器、須恵器、鉄製品がある。特に鉄製品が多く認められ、鋤先、鎌、刀子がある(第66図)。

第9号住居跡(第67図)

【遺構の確認】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。検出区はW－11～17、N-0、S-3区である。

【重複】25号掘立柱建物跡に切られる。

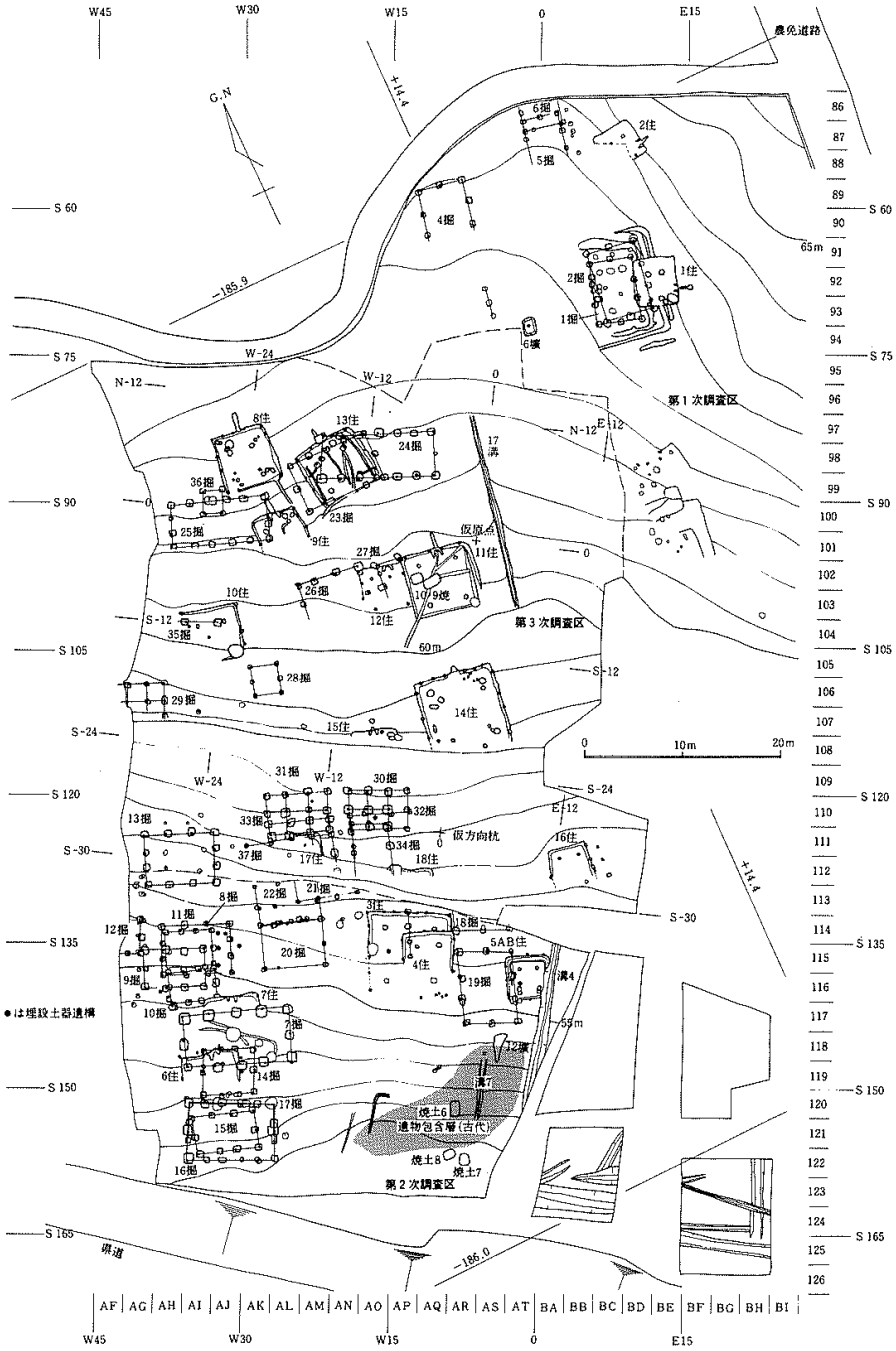


ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15
深さ(cm)	29	39	43	12	21	6	16	60	15	36	24	16	6	23	2

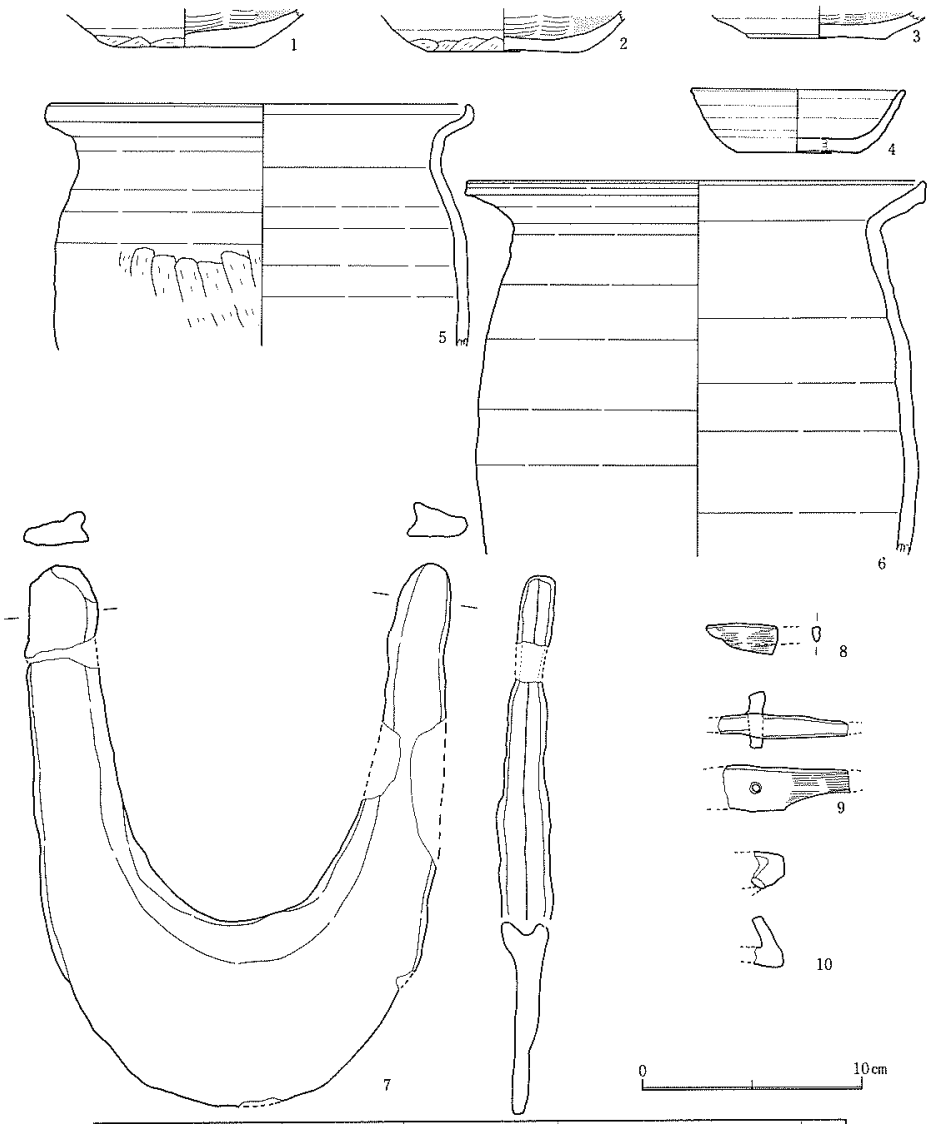
P16	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30
8	4	14	21	19	15	44	18	38	16	16	4	30	8	12

層位	色調	土性	備考
1	暗褐色（10YR3/4）	砂質シルト	炭化物、焼土、地山粒を微干含む
2	暗褐色（10YR3/4）	砂質シルト	地山をブロック状に含む
3	暗褐色（10YR3/4）	砂質シルト	焼土、炭化物を多く含む。地山粒も微干含む
4	暗褐色（10YR3/4）	砂質シルト	3層より多量に含む。特に煙道部には炭化物が多い
5	暗褐色（10YR3/4）	砂質シルト	焼煙土と地山を若干含む
6	暗褐色（10YR3/4）	砂質シルト	地山をまだら状に含む
7	暗褐色（10YR3/4）	砂質シルト	地山をまだら状に含む

第64図　第８号住居跡

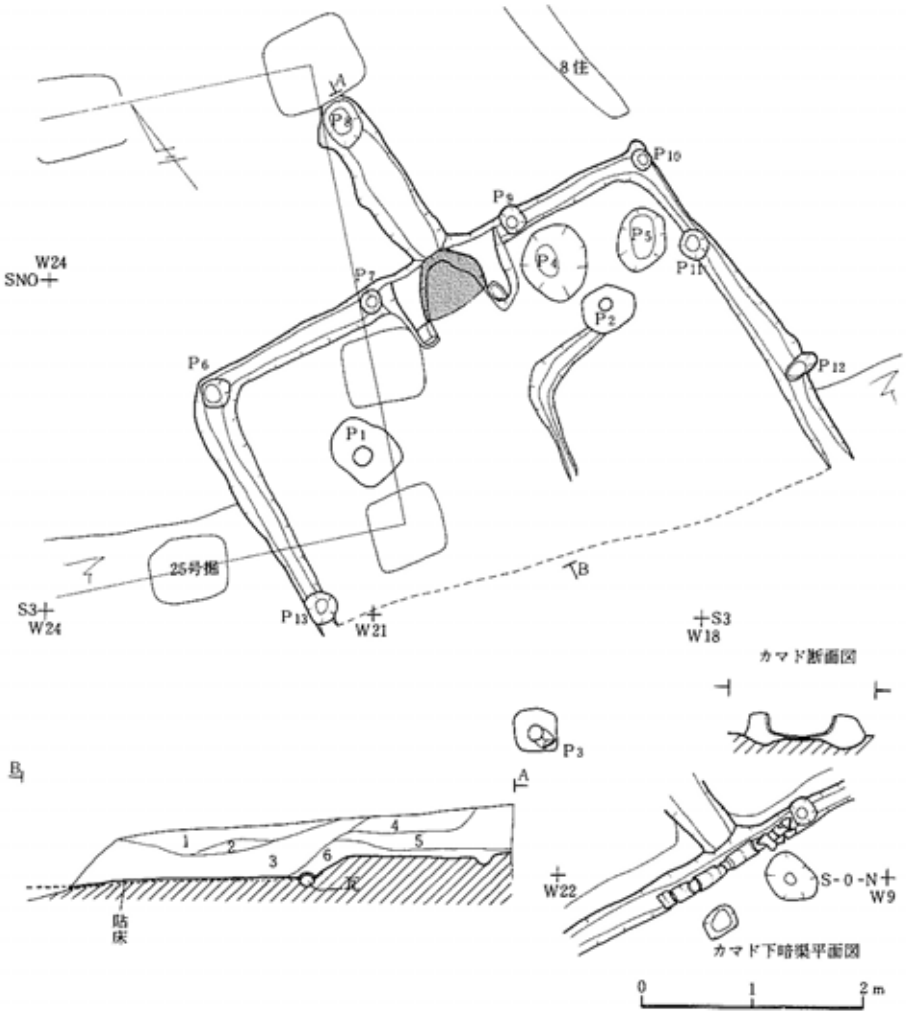


第65図　遺構配置図（第１～３次調査区南側）



No	出土地区・遺構	器種	分類	口径	底径	器高	特徴（外面・内面・底部）	登録No
1	8住 （床）	土師器・坏	BⅠb		6.1	（残） 1.8	底部及び体下端手持ちヘラケズリ調整	
2	8住 （1層）	土師器・坏	BⅠb		7.0	（残） 1.9	底部：回転ヘラ切り（？）＋手持ちヘラケズリ	
3	8住 （1層）	土師器・坏	BⅠa		6.3	（残） 1.3	底部：回転糸切り＋無調整	
4	8住 （P7）	須恵器・坏		9.6	5.6	2.9	底部：回転ヘラ切り（？）	52
5	8住 （1層）	土師器・甕	BⅠb	18.6		11.1	外面：縦位ケズリ	41－A
6	8住 （周溝）	土師器・甕	BⅠb	20.6		17.2		41－B
7	8住 （床）	鉄製品・鋤先		長 25.3	巾 18.0	厚 刃部 0.6 装着部2.4		㉙
8	8住 （1層）	鉄製品・刀子		長 3.3			刃部	⑩
9	8住 （床）	鉄製品・鎌		長 5.9	巾 2.6	厚 0.8	刃部と柄部の接点	⑦
10	8住 （床）	鉄製品・刀子		長（残）5.3	巾 2.1	厚 0.8		⑧

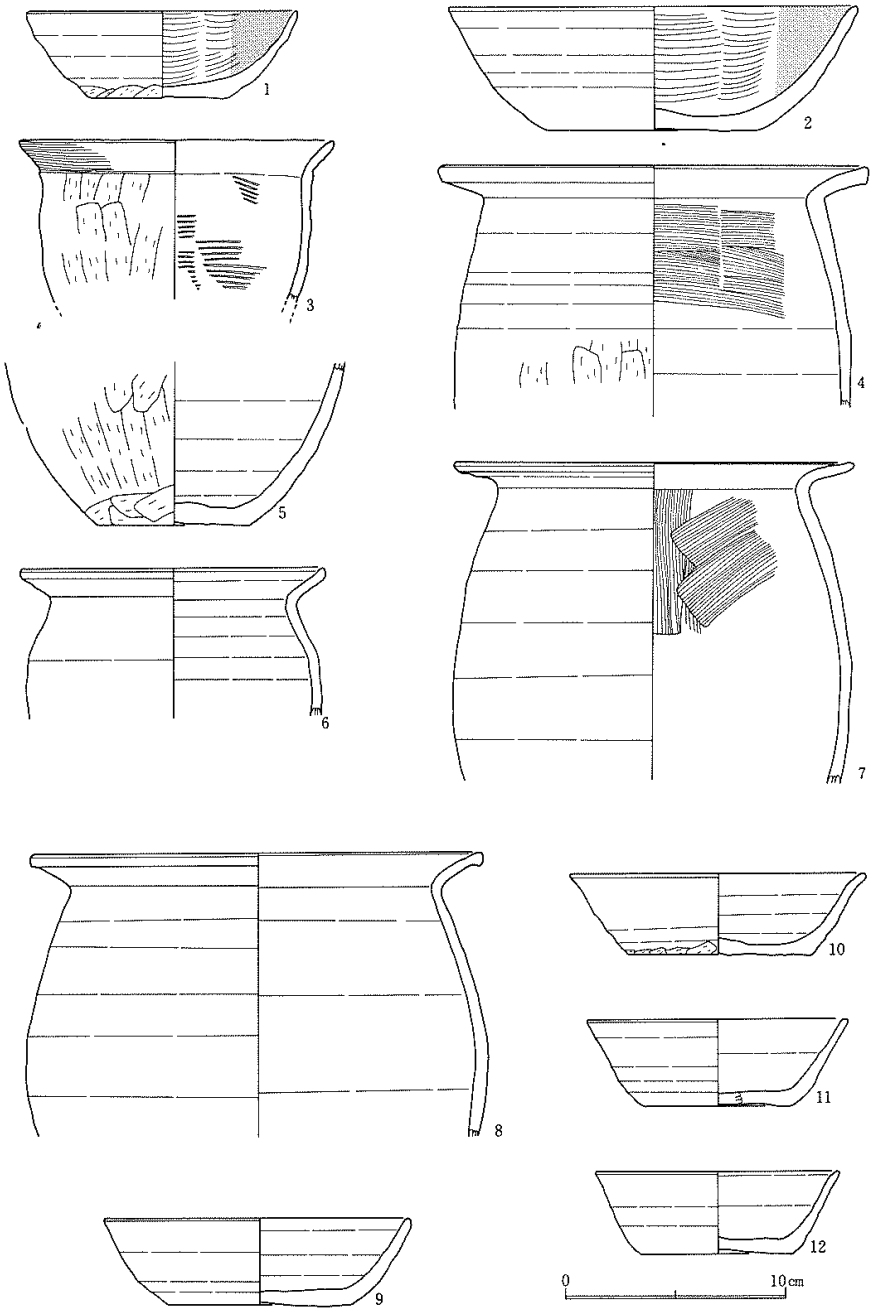
第66図　第８号住居跡出土遺物



層位	色調	土性	備考
1	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	地山を斑状に含む
2	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	地山を斑状に若干含む
3	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	
4	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	地山粒混土
5	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	地山をブロック状に含む
6	極暗赤褐色 (5YR2/3)	砂質シルト	焼土層

9住	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13
深さ(cm)	50	40	16	29	7	16	30	53	40	12	32	7	15

第67図　第９号住居跡



第68図　第９号住居跡出土遺物（１）

【平面形・規模】南半部が削平されているが、平面形は方形を基調とするとみられ、規模は東西4.7m、南北(残存)2.6mを計る。

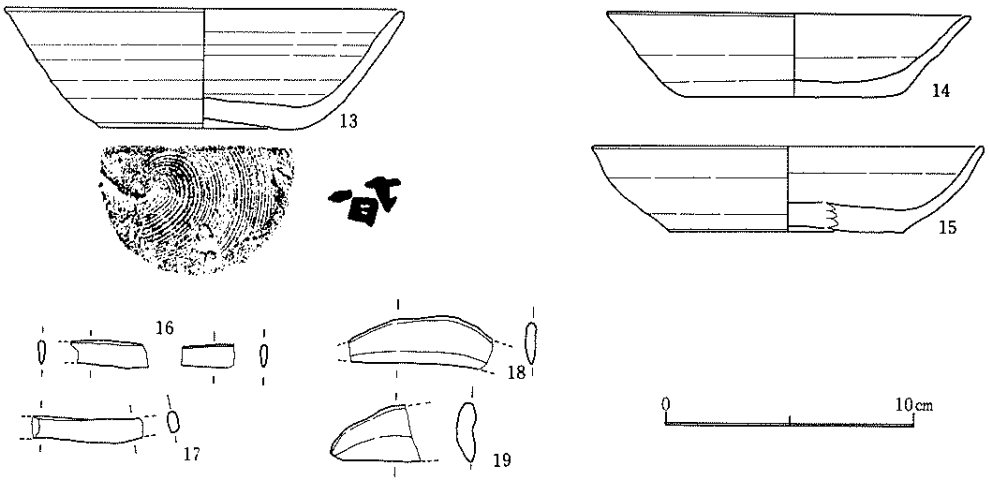
【堆積土】6層からなり、すべて自然流入土と見られる。

【壁】壁は層溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は約30㎝である。

【床】カマドを中心に貼床が施されている。南側に向かい緩やかに傾斜している。

【カマド】住居北辺中央部に設けられている。燃焼部は、カマド構築にあたり湿気を防止する施設として溝を掘り、3個の丸瓦で被い暗渠としている。暗渠瓦の上を粘土で貼り、底面とし、さらに、粘土を積み上げて側壁を構築している。煙道は1.68mあり、先端部に直径40×30深さ約70㎝の煙出しピットがある。

【柱穴】床面上で検出されたピットは12個あり(P1～P12)、円形である。柱痕跡が認められ



No.	出土地区・遺構	器種	分類	口径	底径	器高	特徴（外面・内面・底部）	登録No.
1	9住 （1層）	土師器・坏	BⅠb	12.3	6.3	4.0	外面：体下手持ちヘラケズリ、底部：手持ちヘラズリ	
2	9住 （床）	土師器・坏	BⅠb	18.6	9.6	5.7	内面：ミガキ→黒色処理、 底部：手持ちヘラズリ	62
3	9住 （1層）	土師器・甕	AⅡb	14.5		（残） 7.3	外面：ヘラケズリ→横ナデで 内面：ハケメ	
4	9住 （床）	土師器・甕	BⅠ	19.8		11.0	外面：縦位ヘラケズリ 内面：ナデ	79
5	9住 （1層）	土師器・甕	BⅠ		6.8	（残） 7.5		80
6	9住 （貯穴）	土師器・甕	BⅠb	14.0		6.9	外面：	39
7	9住（煙出pit）	土師器・甕	BⅠa	18.4		14.8	内面：ヘラナデ	38
8	9住 （6層）	土師器・甕	BⅠa	20.6		13.1		40
9	9住 （床）	須恵品・坏	BⅡb	8.4	13.5	4.0	底部：回転ヘラ切り＋ヘラケズリ整	14
10	9住 （2層）	須恵品・坏	BⅡa	13.7	8.4	3.5	底部：手持ちヘラケズリ（回転ヘラ切り）、体部下端手持ちヘラケズリ	6
11	9住 （1層）	須恵品・坏	AⅠa	12.0	6.8	4.0	底部：回転糸切り	53
12	9住 （6層）	須恵品・坏	DⅠa	11.2	7.0	3.8	底部：手持ちヘラケズリ	51
13	9住 （2層）	須恵品・坏	AⅠa	16.2	8.0	4.8	底部：回転糸切り（縁辺部ナデ）底部に墨書あり	5
14	9住 （床）	須恵品・坏	DⅡb	15.0	8.9	3.4	底部：手持ちヘラケズリ	13
15	9住 （床）	須恵品・坏	DⅡa	16.0	9.4	3.5	底部：手持ちヘラケズリ	54
16	9住 （1層）	鉄製品・刀子		長（残）4.4	巾 刀部 0.8	厚 刀部 0.25		⑤
17	9住 （1層）	鉄製品・刀子			巾 柄部 0.8	厚 柄部 0.45		⑥
18	9住 （1層）	鉄製品・鎌		長（残）5.8	巾 1.7	厚 0.4		③
19	9住 （1層）	鉄製品・鎌		長（残）3.5	巾 2.2	厚 0.8		④

第69図　第９号住居跡出土遺物（２）

るもの、認められないものがあるが、位置関係からP1～P3が主柱穴と考えられる。南東隅のものは検出できなかった。なお、周溝内には壁柱穴(P5、6、8～12)が設けられている。

【溝】　住居内を全周する。周溝は幅25㎝、深さ8㎝の断面「U」字形である。

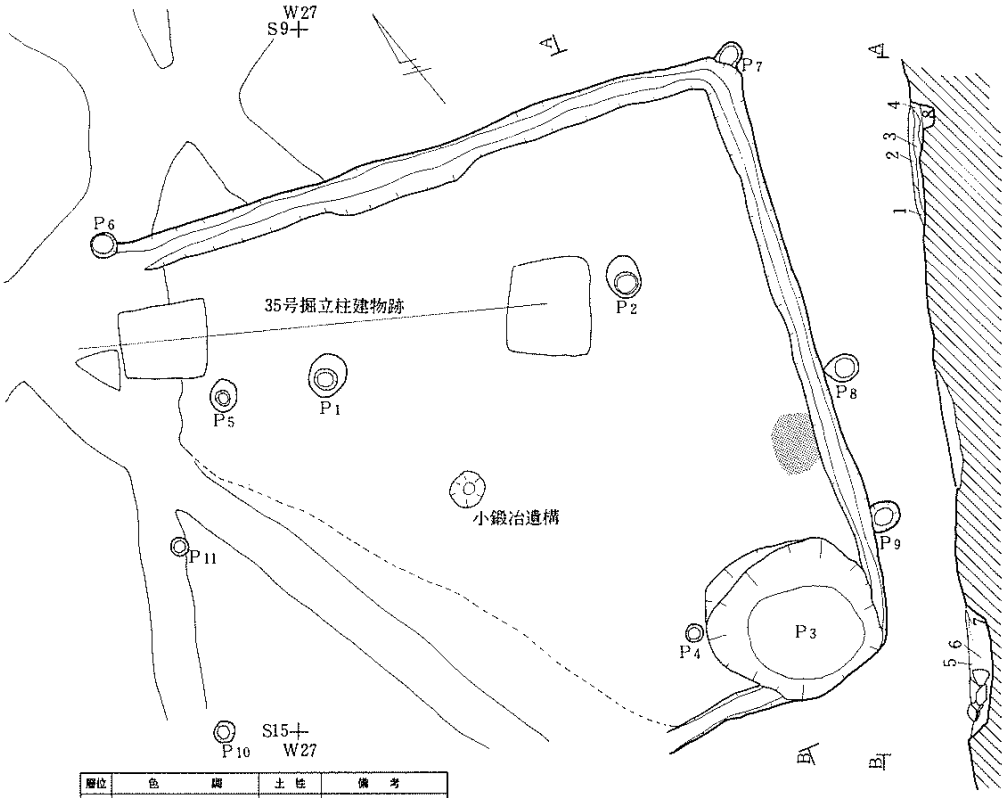
【床面施設】　ピット(P4)は位置的に見て貯蔵穴の可能性がある。

【出土遺物】　土師器、須恵器、瓦、鉄製品がある。特に、須恵器坏底部に「背?」と墨書されているものである(第68・69図)。

第10号住居跡(第70図)

【遺構の確認】　確認面は基本層位Ⅴ層上面である。検出区はW-22～26、S-9～15区である。

【重複】　35号掘立柱建物跡に切られる。



層位	色調	土性	備考
1	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	炭化粒、焼土粒含む
2	赤褐色 (7.5YR4/6)	シルト	焼土多量
3	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	地山ブロック多量
4	明黄褐色 (2.5Y 6/6)	粘質シルト	地山粒含む
5	褐色 (7.5YR4/4)	シルト	貯穴状ピット堆積土
6	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	粘質シルト	貯穴状ピット堆積土
7	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	貯穴状ピット堆積土
8	褐色 (7.5YR4/3)	粘質シルト	周溝堆積土

10住	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11
深さ(cm)	86	18	17	10	20	10	60	24	12	15	11

第70図　第10号住居跡

【平面形・規模】　南半部が削平されているが、残存部から、方形を基調とするものと見られ、模東西5.2m南北(残存)5.4mである。

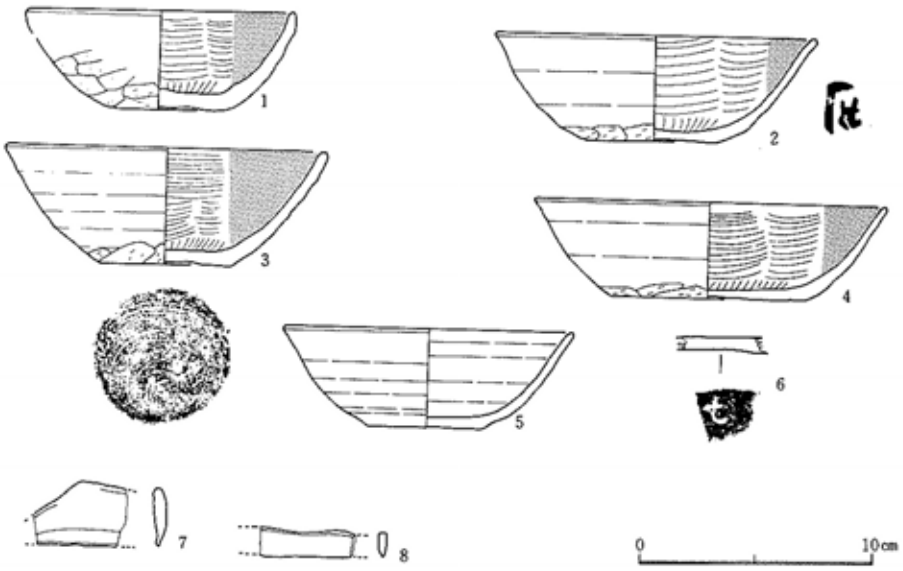
【堆積土】　5層からなる。すべて自然流入土と見られる。

【壁】　壁は周溝底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約15㎝である。

【床】　床面は南側に向かい緩やかに傾斜している。

【カマド】　住居北辺中央部と東辺部南寄りの部分に微弱な焼け面が検出されたが、カマドであったかどうかは不明である。

【柱穴】　床面上で検出されたピットは11個あり(P1～P11)、円形である。柱痕跡が認められるもの、認められないものがあるが、位置関係からP1・P2が主柱穴と考えられる。南半部は削平されており、検出できなかった。また、周溝の外に接して壁柱穴（P6～9）が設けられている。P10・11位置関係から見て壁柱穴と推定される。



No.	出土地区・遺構	器種	分類	口径	底径	器高	特徴（外面・内面・底部）	登録No.
1	10住	土師器・坏	B Ⅲ b	11.6	4.8	4.3	外面：（細い）ケズリ、　内面：（ガキ→黒色処理	2
2	10住	土師器・坏	B Ⅰ b	14.9	5.6	4.6	外面：手持ちヘラズリ、　内面：黒色処理　、　底部：回転糸切り「殺」の墨書あり	1
3	10住	土師器・坏	B Ⅰ b	13.9	5.8	5.1	外面：回転糸切り→縁辺ナデ、　内面：（ガキ→黒色処理	3
4	10住　（貯穴）	土師器・坏	B Ⅱ b	15.4	8.4	4.5	外面：手持ちヘラズリ、　内面：（ガキ→黒色処理　底部：回転糸切り	37
5	10住　（1層）	須恵器・坏	A Ⅰ d	12.6	5.0	4.3	底部：回転糸切り	48
6	10住	土師器・坏		－	－	－	底部：「七」のヘラ書き	
7	10住　（床）	鉄製品・鎌		長　3.9	巾　2.1	厚　0.5		⑦
8	10住　（床）	鉄製品・刀子		長（残）4.1	巾　1.0	厚　0.4		⑧

第71図　第10号住居跡出土遺物

【溝】住居内を全周すると見られる周溝がある(堆積土5)がある。周溝は幅25㎝、深さ10㎝の断「U」字形である。

【床面施設】貯蔵穴と見られるピット(P3)がある。また、住居跡中央部に強い熱作用を受けたと見られる酸化、還元された痕跡があり、小鍛冶遺構と見られる。これは住層跡堆積土除去後に床面上で確認されたものであり、10号住居跡に伴う施設と考えられる。

【出土遺物】土師器、須恵器、瓦、鉄製品がある。特に、貯蔵穴(P3)から多量に出土している。（第71図）

第11号住居跡(第72図)

【遺構の確認】確認面は基本層位　層上面である。検出区はW-0～7、S-0～7区である。

【重複】12号住居跡を切り、27号柱建物跡、9・10号焼土遺構に切られる。なお、本住居跡は東・西辺部の拡張を行っている。

【平面形・規模】南半部を削平されているが、周溝から平面形を捉えると東西7.1m、南北6.1mの長方形である。また、改築前の平面規模は東西6.4m、南北6.1mである。

【堆積土】13層からなり、いずれも貼床上に堆積した自然流入土である。

【壁】壁は周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は北壁で約40㎝を平均としている。

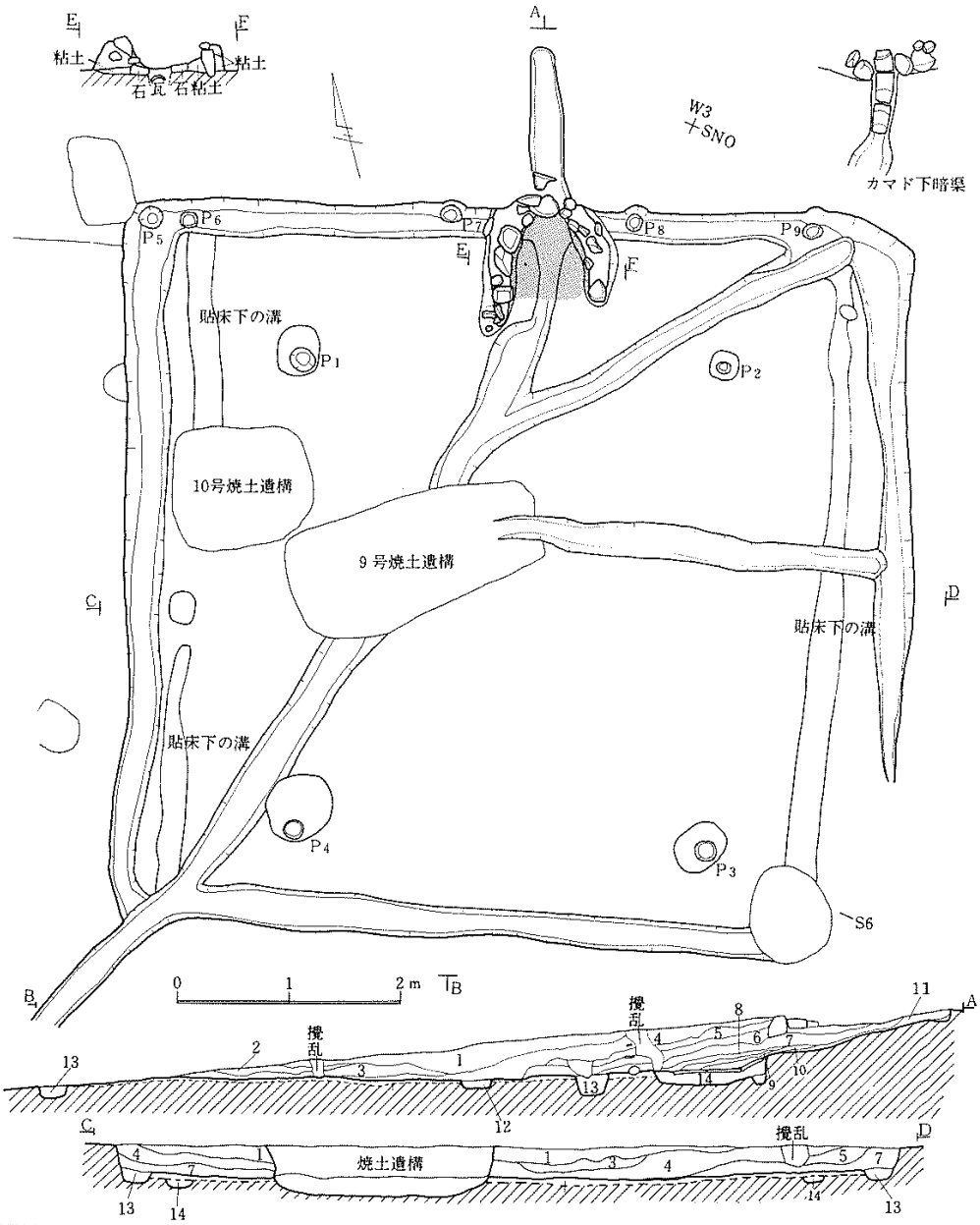
【床】全体にわたり厚さ5㎝の貼床が施されている。南側に内かって緩やかに傾斜している。

【カマド】住居北辺中央部に設けられている。カマド構築にあたり4個の丸瓦を周溝に、さらに、2個の丸瓦を住居中央部をとおる溝に被せて暗渠をつくり、その上に構築している。側壁は20㎝大の礫、凝灰岩の切り石を芯とし、それに粘土を貼って補強している。燃焼部内部は非常に固く焼き締まっている。燃焼部と煙道部の接点は礫が積まれてあり、天井部が残存していた。煙道部は長さが1.18㎝を計り、底面は先端に向かい上り傾斜している。

【柱穴】床面上で検出されたピットは19個あり(P1～P19)円形である。柱痕跡が認められるもの、認められないものがあるが、位置関係からP1～P4が主柱穴と考えられる。また、周溝内には壁柱穴（P5～P9）が設けられている。

【溝】住居内を全周する周溝と住居内を南北に横切る溝、住居外に延びる外延溝がある。周溝は幅26㎝、深さ12㎝の断面「U」字形を呈する。住居内を南北に横切る溝は幅36㎝、深さ20㎝の断面「U」字形を呈する。外延溝は幅36㎝、深さ6㎝の断面「U」字形である。なお、貼床除去後に東、西辺住居内において溝が検出された。これは本住居跡の改築前の東西辺周溝と見られ、東、西辺部のみを拡張したものと考えられる。

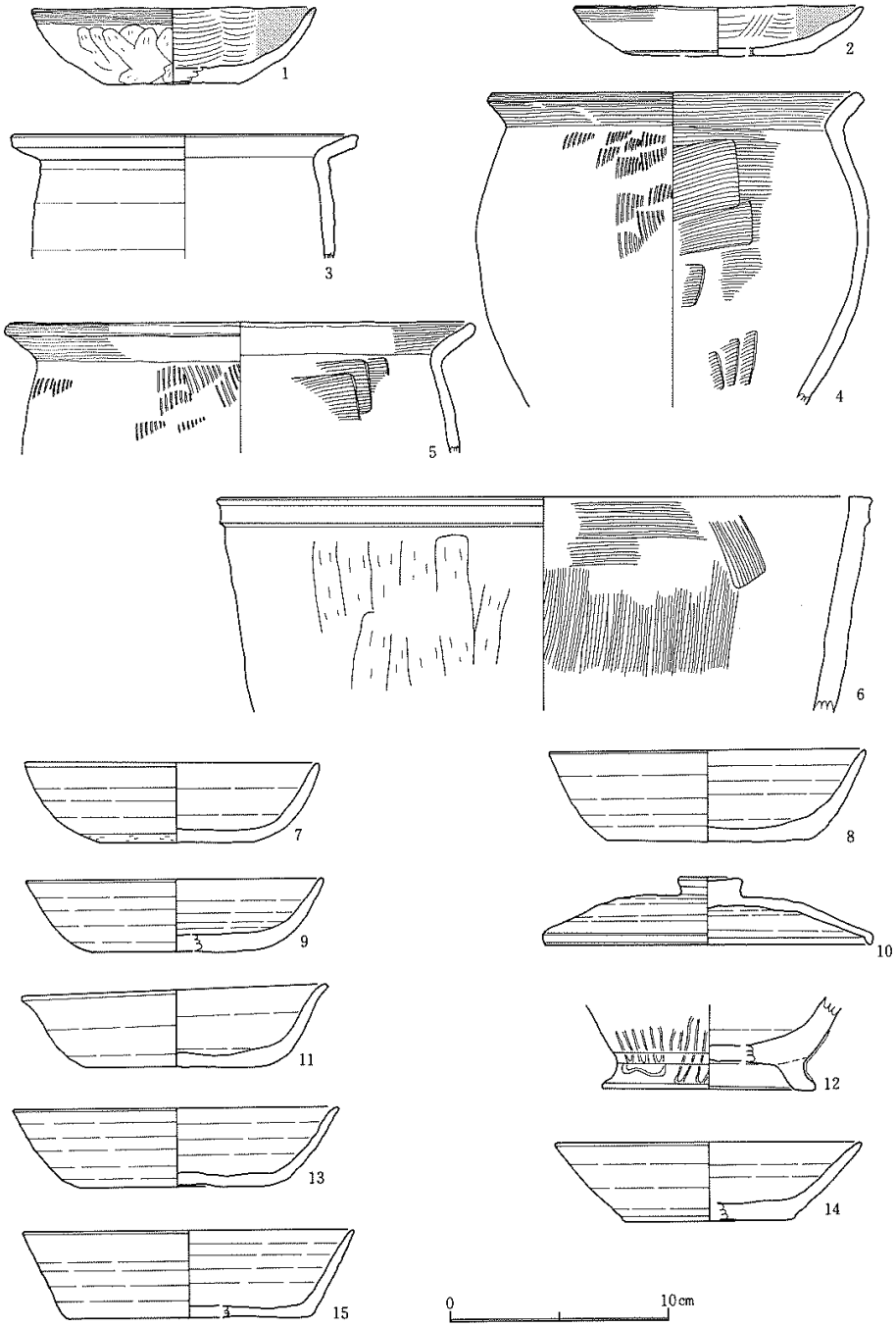
【出土遺物】土師器、須恵器、瓦、鉄製品がある。特に、須恵器坏、鉄製品が比較的に多く出土している(第73・74図)。



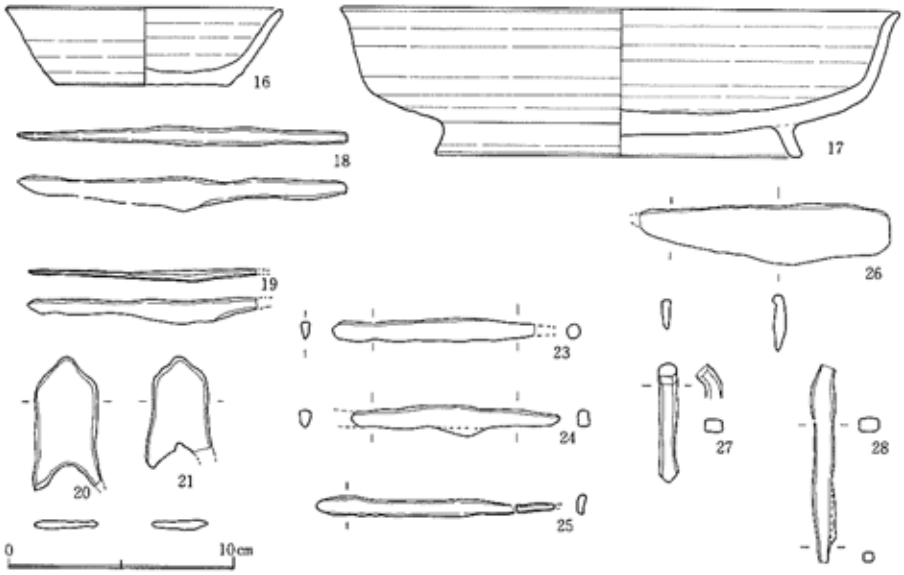
層位	色調	土性	備考	層位	色調	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒、炭化粒含む	8	暗赤褐色 (5YR3/3)	シルト	焼土多量に含む
2	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山ブロック含む	9	黒褐色 (5YR2/2)	粘質シルト	焼土、炭化粒多量
3	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	粘質シルト	炭化粒含む	10	暗赤褐色 (10YR3/6)	粘質シルト	焼土、炭化粒多量
4	褐色 (2.5Y 4/6)	シルト	地山ブロック含む	11	暗褐色 (7.5YR3/3)	粘質シルト	焼土、炭化粒多量
5	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山ブロック多量に含む	12	黒褐色 (10YR3/2)	粘質シルト	焼土含む
6	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘質シルト	遺物多量に含む	13	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	周溝堆積土
7	黄褐色 (10YR5/6)	シルト		14	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	地山粒多量に含む

11住	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
深さ(cm)	49	19	38	47	3	11	6	13	9

第72図　第11号住居跡



第73図　第11号住居跡出土遺物（1）



No	出土地区・遺構	器種	分類	口径	底径	器高	特徴（外面・内面・底部）	登録No.
1	11住 (IR)	土師器・坏	A Ⅱ b	13.1	6.0	3.5	底部：ヘラケズリ	55
2	11住 (IR)	土師器・坏	A Ⅰ	13.4	2.3		外面：マメツ（横ナデ）、　内面：ミガキ→黒色処理	56
3	11住 (3層)	土師器・甕		16.0		(残) 5.7		64
4	11住 (IR)	土師器・甕		17.2		(残) 14.4	外面：ハケメ→横ナデ　内面：ヘラナデ・横ナデ	63
5	11住 (IR)	土師器・甕		21.6		(残) 6.0	外面：ハケメ→横ナデ　内面：ヘラナデ・横ナデ	65
6	11住 (BJR)	土師器・製塩土器		30.0		(残) 9.9	外面：ヘラケズリ　内面：ヘラナデ	
7	11住 (IR)	須恵器・坏	B Ⅱ b	13.4	7.2	3.7	底部：回転ヘラ切り→回転ヘラケズリ、体下端回転ヘラケズリ	11
8	11住 (2層)	須恵器・坏	B Ⅰ b	14.6	9.6	5.2	底部：回転ヘラ切り＋ナデ	24
9	11住 (3層)	須恵器・坏		13.8	8.2	3.5	底部：不明	15
10	11住 (3層)	須恵器・甕		15.2		3.1	つまみ部断片	23
11	11住 (7層)	須恵器・坏	B Ⅰ c	14.2	9.0	3.8	底部：回転ヘラ切り	12
12	11住 (IR)	灰釉陶器			9.8	4.3		
13	11住 (IR)	須恵器・坏	B Ⅰ b	15.0	8.6	3.6	底部：回転ヘラ切り	17
14	11住 (IR)	須恵器・坏	B Ⅱ a	14.1	7.6	3.7	底部：ヘラ切り→縁辺ナデ	27
15	11住 (2層)	須恵器・坏	C E	15.3	11.4	4.0	底部：静止糸切り＋縁辺手持ちヘラケズリ	16
16	11住 (2層)	須恵器・坏		12.2	7.8	3.5	底部：回転ヘラ切り＋手持ちヘラケズリ	30
17	11住 (IR)	須恵器・盤状坏		25.0	16.4	6.6	底部：回転ヘラ切り→回転ヘラケズリ→台部貼付	33
18	11住 (IR)	鉄製品・刀子		長 14.9	巾 0.8	厚 0.4		①
19	11住 (2層)	鉄製品・刀子		長 (残)10.3	巾 0.6	厚 0.25		②
20	11住 (3層)	鉄製品・鉄族		長 6.0	巾 2.8	厚 0.3		③
21	11住 (3層)	鉄製品・鉄族		長 5.0	巾 2.5	厚 0.3		④
22	11住 (IR)	鉄製品・刀子		長 (残) 4.2	巾 1.0	厚 0.6	柄部	⑤
23	11住 (IR)	鉄製品・刀子		長 9.1	巾 刃部0.8 / 柄部0.67	厚 刃部0.3 / 柄部0.6		⑥
24	11住 (原水溝)	鉄製品・刀子		長 (残) 9.3	巾 刃部0.7 / 柄部0.7	厚 刃部0.4 / 柄部0.5		⑦
25	11住 (IR)	鉄製品・鉄族		長 (残)10.2	巾 0.8	厚 0.3		⑧
26	11住 (原水溝)	鉄製品・鎌		長 11.2	巾 2.5	厚 0.5		⑨
27	11住 (IR)	鉄製品・釘		長 5.35	巾 0.8	厚 0.5		⑩
28	11住 (IR)	鉄製品・釘		長 4.9	巾 0.9	厚 0.6		⑪

第74図　第11号住居跡出土遺物（2）

第12号住居跡(第75図)

【遺構の確認】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。検出区はW-5～12、Ｓ-3～7区である。

【重複】11号住居跡、26,27号掘立柱建物跡に切られる。

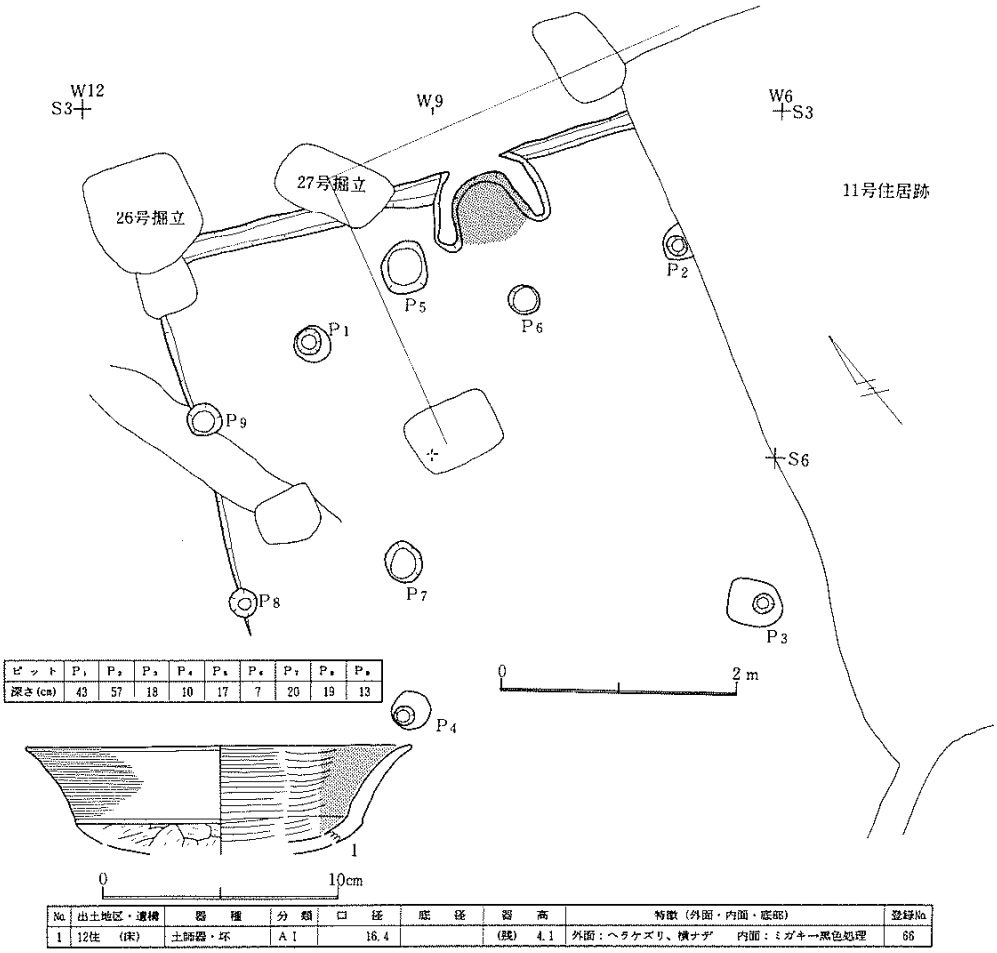
【平面形・規模】住居東辺部を11号住居跡に切られ、南半部が削平されており、明確な平面形は捉えられない。規模は残存部で東西4.3m、南北3.6mを計る。

【壁】壁は床面から急激に立ち上がり、壁高は残存部で約10cmである。

【床】地山をそのまま床面としている。南側に向かい緩やかに傾斜している。

【カマド】住居北辺中央部に設けられている。燃焼部のみ検出された。側壁は粘土積み上げによって構築している。底面は非常に固く焼き締まっている。

【柱穴】床面上で検出されたピットは9個あり(Ｐ1～Ｐ9)、円形である。柱痕跡が認められる



ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
深さ(cm)	43	57	18	10	17	7	20	19	13

No.	出土地区・遺構	器種	分類	口径	底径	器高	特徴(外面・内面・底部)	登録No.
1	12住 (床)	土師器・坏	A I	16.4		(残) 4.1	外面：ヘラケズリ、横ナデ　内面：ミガキ→黒色処理	66

第75図　第12号住居跡と出土遺物

もの、認められないものがあるが、位置関係からP1～P4が主柱穴と考えられる。

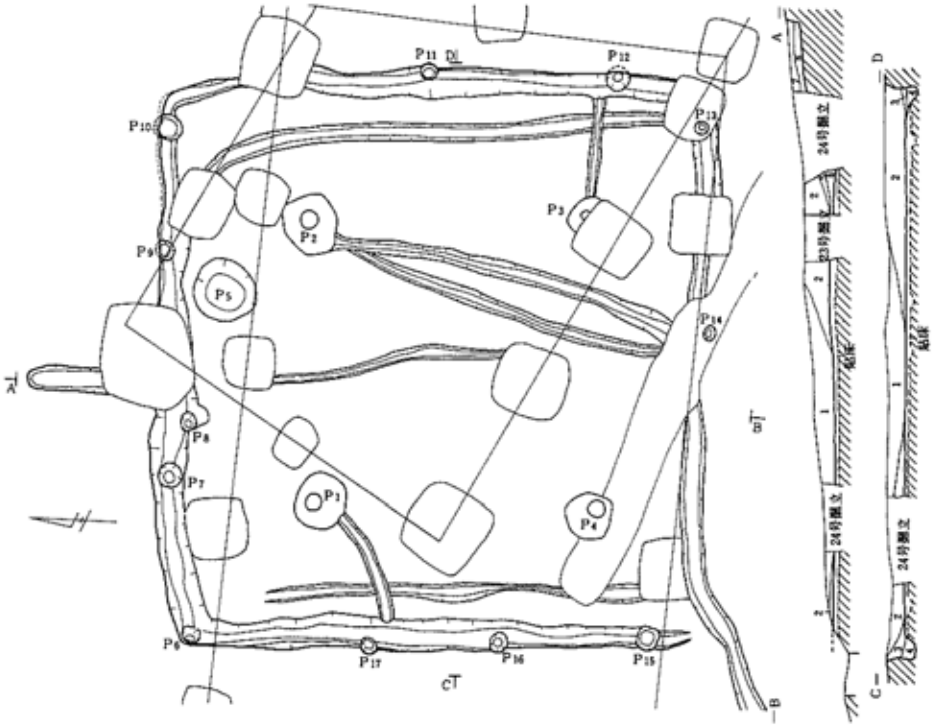
【溝】残存部位がすくないが住居内を全周すると見られる周溝が北壁下で認められる。周溝は幅20㎝、深さ8㎝の断面「U」字形を呈する。

【出土遺物】土師器坏がある(第75図)。

第13号住居跡(第76図)

【遺構の確認】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。検出区はW-11～17、N-2～10である。

【重複】23、24号掘立柱建物跡に切られる。なお本住居跡は東、西辺部の拡張を行っている。



層位	色調	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	5㎝大の地山ブロック多く含む
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	小細粒の地山ブロック含む
3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	周溝内堆積土
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	周溝内堆積土
5	褐色 (10YR4/4)	シルト	焼土粒を多く含む
6	明褐色 (7.5YR5/6)	シルト	炭化物、焼土を多量に含む
7	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	細粒の地山ブロック、焼土を含む
8	褐色 (10YR4/3)	シルト	焼土、炭化物を多量に含む

ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
深さ(cm)	25	55	51	46	17	25	27	25
P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17
15	14	12	23	27	9	27	14	19

第76図　第13号住居跡

【平面形・規模】南半部を削平されているが、周溝から平面形を捉えると東西6.4m、南北5.8m方形である。なお、改築前の平面規模は東西5.9m、南北5.8mの正方形である。

【堆積土】新しい住居跡には3～4層の堆積層がある(1・2・5・6層)。いずれも自然流入土である。古い住居跡に伴う堆積土はない。

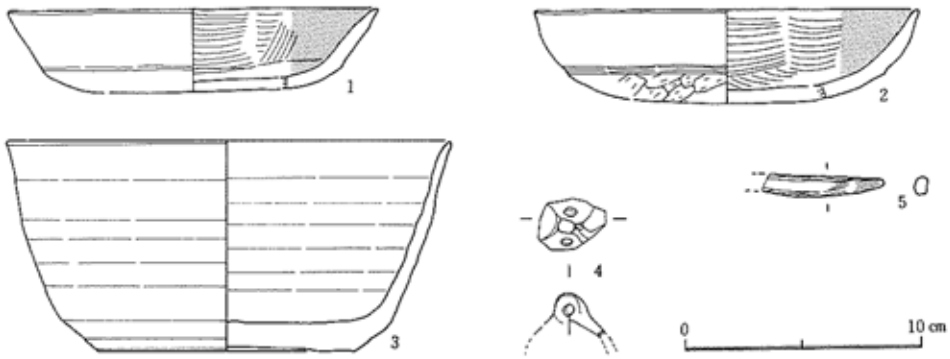
【壁】壁は周溝底面から急激に立ち上がる。壁高は北壁部で約40㎝を平均としている。

【床】床面全体にわたり5㎝前後の貼床が施されている。南側に向かい緩やかに傾斜している。特に拡張部分においては約10㎝と厚い。

【カマド】住居北辺中央部に設けられている。燃焼部の施設は２４号靴縦柱建物跡に切られており残存していない。底面は非常に固く焼き締まっている。煙道部は長さが0.86mを計る。

【柱穴】床面上で検出されたピットは17個あり(P1～P17)、円形である。柱痕跡が認められるもの、認められないものがあるが、位置関係からP1～P4が主柱穴と考えられる。また、周溝内には壁柱穴(P6～P17)が設けられている。

【溝】住居内を全周する周溝と住居内を南北に横切る溝、主柱穴から周溝に接続する溝、住居外に延びる外延溝がある。周溝は幅30㎝、深さ30㎝の断面「U」字形を呈する。主柱穴から周溝に接続する溝は幅10㎝、深さ5㎝断面「U」字形を呈する。また、住居内を南北に横切る



No	出土地区・遺構	器　種	分　類	口　径	底　径	器　高	特徴（外面・内面・底部）	登録No
1	13住　（2層）	土師器・坏	AⅡ	15.8		(残) 3.5	外面：マツメ・不明　内面：くガキ→黒色処理	57
2	13住　（1層）	土師器・坏	AⅠ	16.4		(残) 3.8	外面：ケズリ・その他マツメ・不明　内面：くガキ→黒色処理	56
3	13住　(床)	須恵器・坏		18.2	11.0	9.0	底部：回転ヘラケズリ	26
4	13住　(貼床)	土製品・土鈴						78
5	13住　(周溝)	鉄製品の刀子		長 (残) 5.2	幅 0.8	厚 0.5	木質部が残存	
6	13住1層	石製品・砥石		長 4.9	幅 3.9	厚 2.5	43g 変成凝灰岩	

第77図　第13号住居跡出土遺物

溝は幅20㎝、深さ8㎝の断面「U」字形を呈する。外延溝は幅28㎝、深さ12㎝の断面「U」字形である。

なお、貼床除去後に東、西辺住居内において溝が検出された。これは本住居跡の改築前の東西辺周溝と見られ、東、西辺部のみを拡張したものと考えられる。

【出土遺物】土師器、須恵器、鉄製品、土製品(土鈴)砥石がある(第77図)。

第14号住居跡(第78図)

【遺構の確認】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。検出区はW-3～E-3、S－12～20区である。

【重複】重複する主柱穴の存在から、新旧の住層跡が重複していることが分かる。

【平面形・規模】南半部を削平されているが、残存部から平面形は東西7.8m、南北(残存)5.7mの長方形と見られる。

【堆積上】新しい住居跡の堆積土で2層からなる。いずれも自然流入土と見られる。

【壁】壁は周溝底面から急激に立ち上がる。壁高は北壁部で30㎝を平均としている。

【床】床面は部分的に貼床を施しているほかは地山をそのまま床としている。また、南に向かい緩やかに傾斜している。

【カマド】住居北辺中央部に設けられている。燃焼部は、カマド構築にあたり4個の丸瓦及び大甕の破片を周溝に被せ、さらに大甕の破片を住居中央部をとおる溝に被せ暗渠をつくっている。底面は非常に固く焼き締まっている。煙道部は長さが0.64mを計る

【柱穴】床面上で検出されたピットは32個あり(P1～P32)、円形である。柱痕跡が認められるもの、認められないものがあるが、位置関係からP1～P4、P5～P7が主柱穴と考えられる。

切り合い関係からP1～P4が古く、P5～P7は新しい。また、壁柱穴は(P18～27、29～32)壁際で認められた。

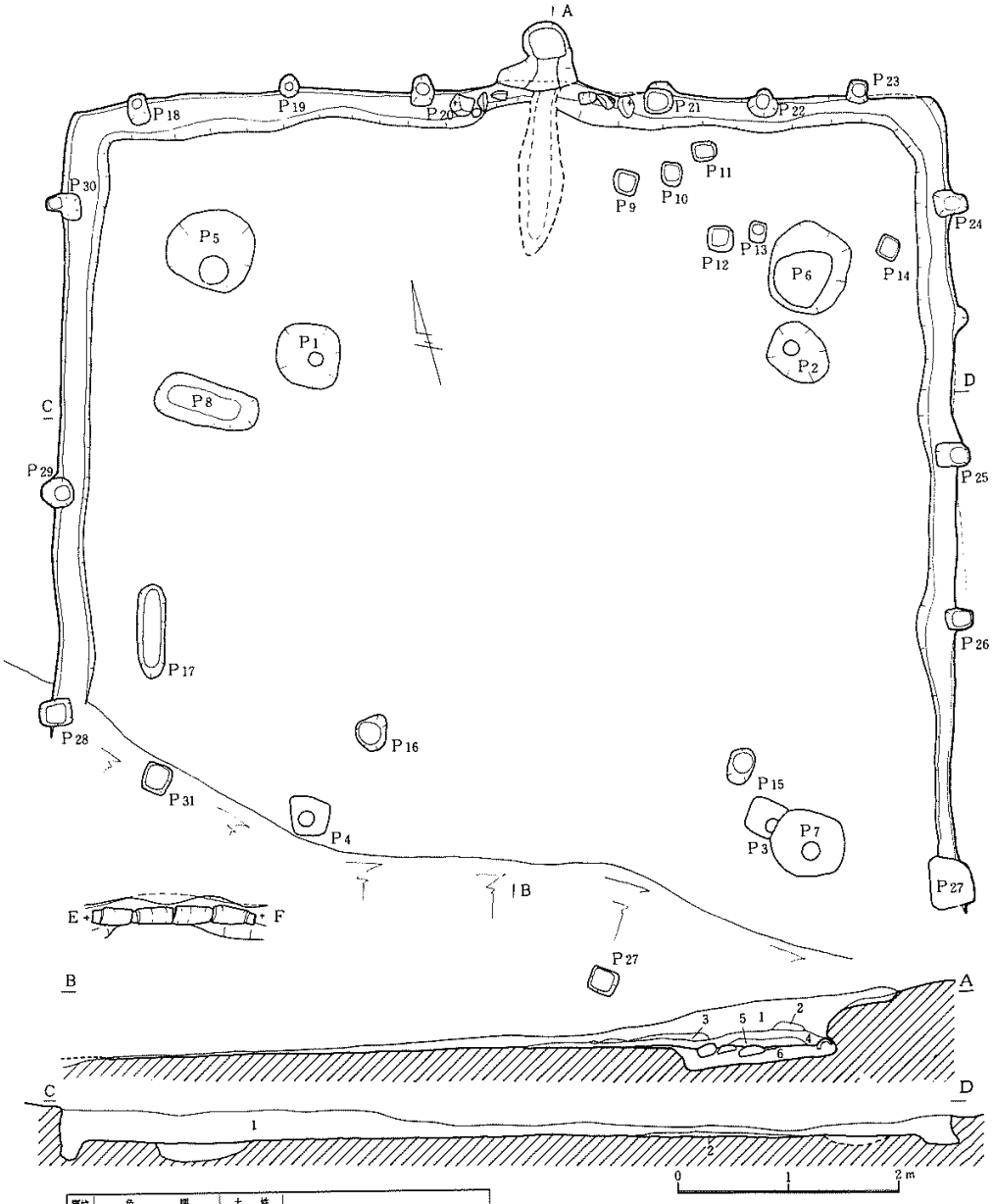
【溝】住居内を全周する周溝とカマド燃焼部下の暗渠捉え方がある。周溝は幅30㎝、深さ25㎝の断面「U」字形を呈する。住居内を南北に横切る暗渠捉え方の溝は幅38㎝、深さ35㎝の断面「U」字形を呈する。

【出土遺物】土師器、須恵器、瓦、鉄製品がある。特に、須恵器坏、鉄製品が多量に出土している(第79・80図)。

第15号住居跡(第81図)

【遺構の確認】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。検出区はW-5～10、S20～21区である。

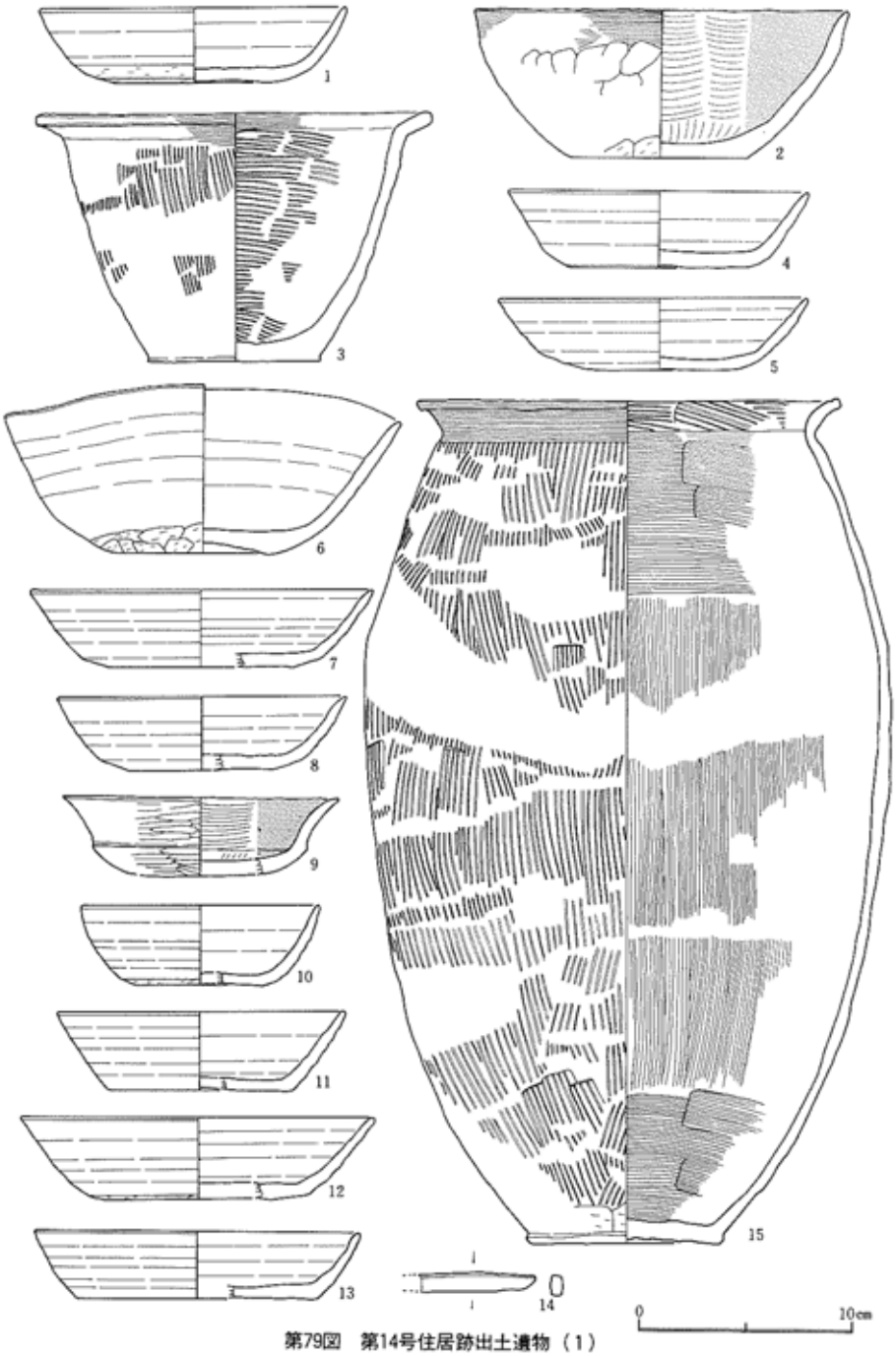
【平面形・規模】南半部を削平されている。規模は残存部で、東西4.4m、南北0.4mを計る。



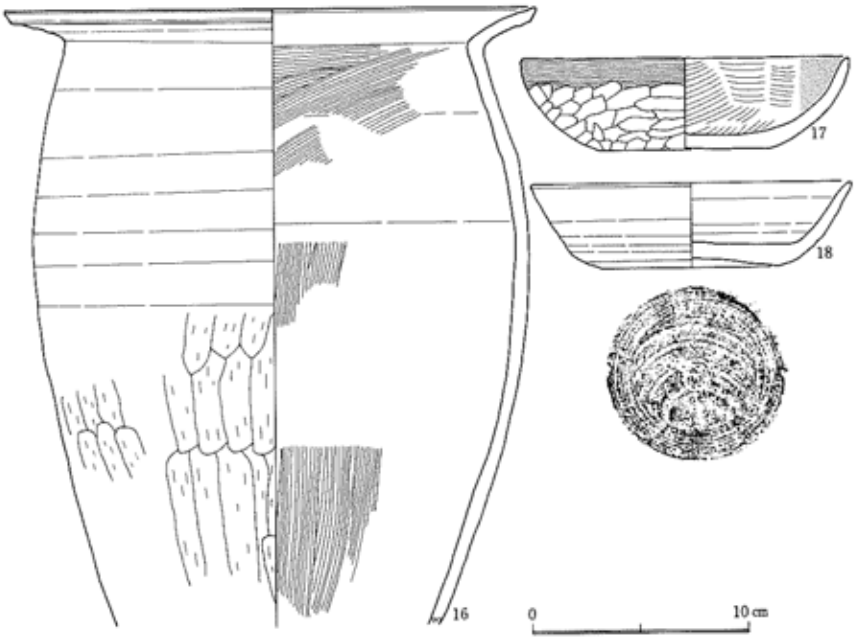
層位	色調		土性	
1	暗赤褐色	(10YR3/3)	粘土質シルト	地山粒炭火物を含む（下方ほど多い）
2	黒褐色	(10YR2/2)	粘土質シルト	床面上炭化物層
3	黄褐色	(10YR5/6)	粘土	褐色粘土層
4	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	炭火物層
5	暗赤色	(10YR3/4)	シルト	焼土
6	褐色	(7.5YR4/4)	シルト	かまど下の暗渠、石や土器が混入、炭化物粒含む
7a	褐色	(7.5YR4/6)	シルト	地山粒、炭化物少ない } P4 堆積土
7b	黒色	(10YR2/1)	粘土質シルト	炭化物多い

ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11
深さ(cm)	53	56	45	31	68	14	36	19	14	21	15
	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20	P21	P22
	26	24	21	14	14	16	83	73	82	59	65
	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31		
	43	63	47	35	22	50	40	82	22		

第78図　第14号住居跡



第79図　第14号住居跡出土遺物（1）



No	出土地区・遺構	器種	分類	口径	底径	器高	特徴（外面・内面・底部）	整理No.
1	14住（周溝）	須恵器・坏	B類	17.4	7.2	3.6	外面：体部下端回転ヘラケズリ　底部：回転ヘラ切り＋回転ヘラケズリ	10
2	14住（床）	土師器・坏	A類b	17.6	8.4	7.0	外面：ケズリ→ミガキ→横ナデ　内面：ミガキ→黒色処理	21
3	14住（床）	土師器・甕		18.6	7.6	11.8	外面：ハケメ→横ナデ　内面：ハケメ・横ナデ　底部：木葉痕	24
4	14住（床）	須恵器・坏	A2	14.2	8.6	3.7	底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ（縁辺）	8
5	14住（床）	須恵器・坏	B3b	15.2	8.0	3.4	底部：回転ヘラ切り＋手持ちヘラケズリ	9
6	14住（床）	須恵器・坏		19.2	7.4	6.4	外面：手持ちヘラケズリズリ　底部：手持ちヘラケズリズリ	25
7	14住（床）	須恵器・坏		16.2	8.8	3.7	底部：回転糸切り＋縁辺手持ちヘラケズリ	31
8	14住（床）	須恵器・坏		13.6	7.2	3.5	底部：手持ちヘラケズリ	29
9	14住（2層）	土師器・坏	A1	（推）13.0		（推）3.7	外面：ミガキ　内面：ミガキ→黒色処理	22
10	14住（2層）	須恵器・坏		18.2	6.0	3.8	外面：体下→回転ヘラケズリ　底部：回転ヘラケズリ	61－B
11	14住（2層）	須恵器・坏		12.6	8.8	2.8	底部：ヘラケズリ	61－A
12	14住（2層）	須恵器・坏		16.8	5.2	3.9	底部：回転ヘラケズリ	60
13	14住（2層）	須恵器・坏		15.4	（推）11.6	3.2	底部：手持ちヘラケズリ	32
14	14住（2層）	鉄製品・刀子		長（残）5.4	0.9	厚 0.6	柄部	
15	14住	土師器・甕	A1	18.9	9.0	28.9	外面：ハケメ→横ナデ・ケズリ　内面：口縁部ハケメ・ヘラナデ	106
16	14住	土師器・甕	B1b	24.5		29.0	外面：縦位ケズリ　内面：ナデ（ヘラ）	57
17	14住	土師器・坏	A類a	15.4	8.6	4.3	外面：ケズリ（ヲ）→横ナデ→ミガキ　内面：ミガキ→黒色処理　底部：ヘラケズリ	20
18	14住（1層）	須恵器・坏	B2	15.0	8.2	4.0	底部：回転ヘラ切り→回転ヘラケズリ	7

第80図　第14号住居跡出土遺物（2）

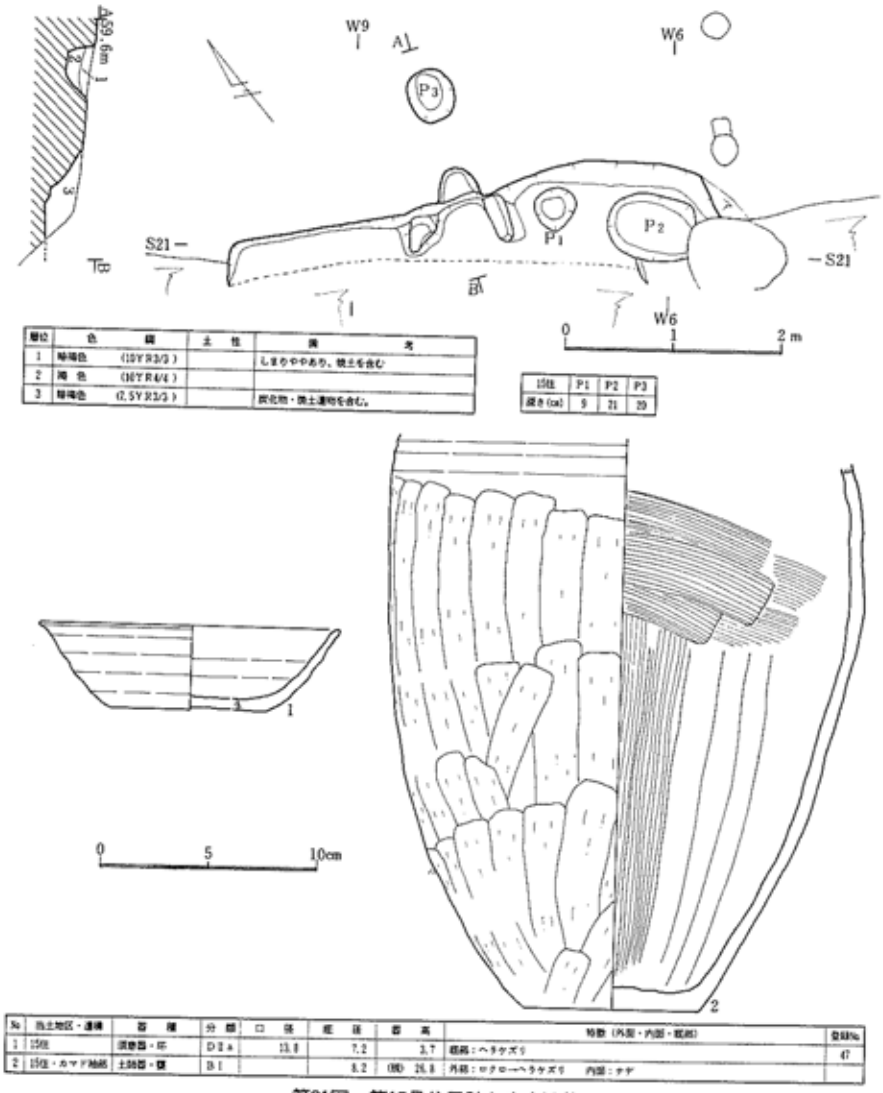
【堆積土】3層からなり、すべて自然流入土と見られる。

【壁】壁は床面から急激に立ち上がり、壁高は約25㎝である。

【床】地山面をそのまま床面としており、南側に緩やかに傾斜している。

【カマド】住居北側中央部に設けられている。燃焼部側壁は西側部分ではロクロ使用の甕を、東側では切り石を芯にして粘土を貼り付けて構築している。煙道部は削平を受け残存していないが、先端には44㎝×32㎝、深さ25㎝の煙出しピットが設けられている。

【出土遺物】土師器、須恵器がある（第81図）。



層位	色調	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)		しまりややあり。焼土を含む
2	褐色 (10YR4/4)		
3	暗褐色 (7.5YR2/3)		炭化物・焼土遺物を含む。

15住	P1	P2	P3
深さ(cm)	9	21	29

No	出土地区・遺構	器種	分類	口径	底径	器高	特徴（内面・内面・底部）	登録No
1	15住	須恵器・坏	D Ⅱa	13.8	7.2	3.7	底部：ヘラケズリ	47
2	15住・カマド地区	土師器・甕	B Ⅰ		8.2	(現) 26.8	外部：ロクロ→ヘラケズリ　内面：ナデ	

第81図　第15号住居跡と出土遺物

第16号住居跡(第82図)

【遺構の確認】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。検出区はE-11～16、S33～36区である。6区である。

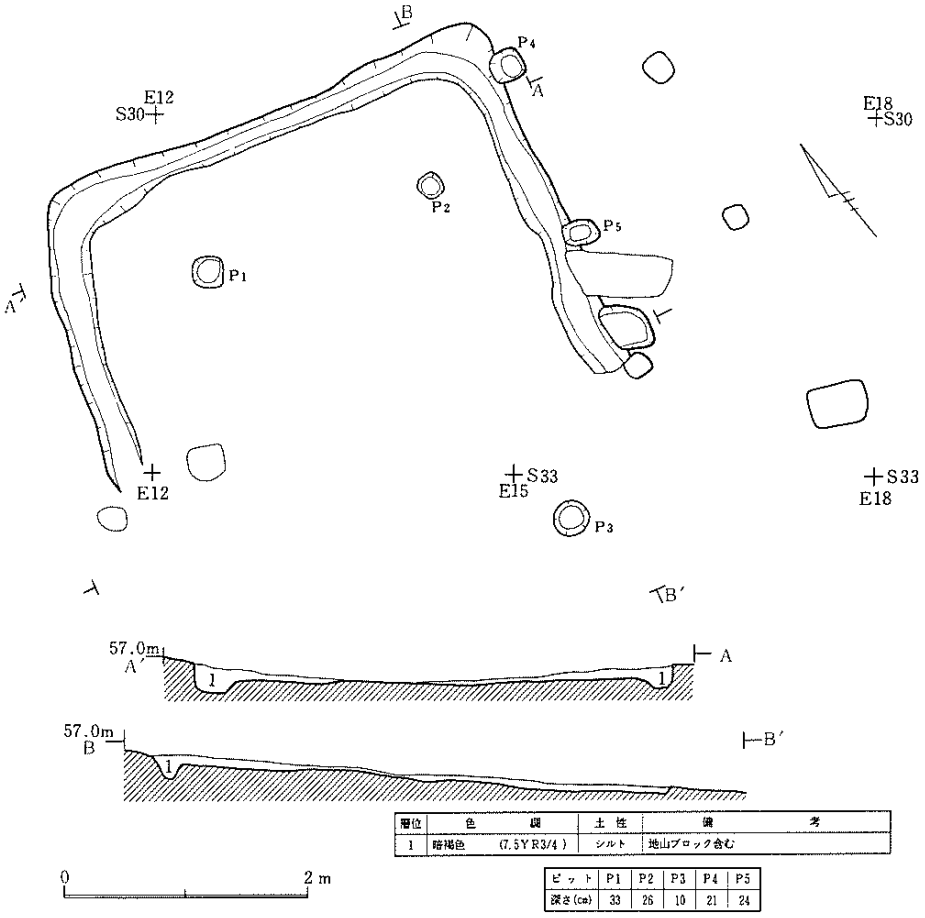
【平面形・規模】南北に長い長方形を基調としている。平面規模は東西3.3m、南北3.8mを計る。

【堆積土】1層からなり、自然流入土と見られる。

【壁】壁は床面から急激に立ち上がる。壁高は約15cmである。

【床】床面は地山をそのまま床としている。南側に向かい緩やかに傾斜しており、非常に凹凸がある。

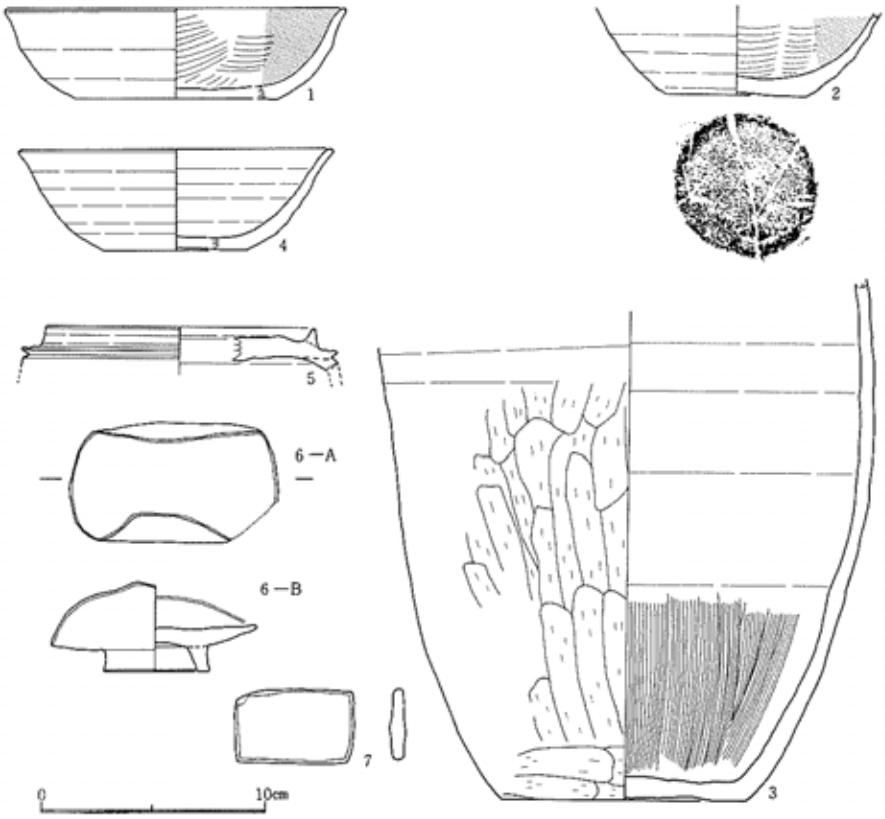
【カマド】側壁や煙道部は検出されなかったが、東壁中央部付近の床面に焼け面が認められ、本来はこの部分に設けられていたものと推定される。



層位	色調	土性	備考
1	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	地山ブロック含む

ピット	P1	P2	P3	P4	P5
深さ(cm)	33	26	10	21	24

第82図　第16号住居跡



No	出土地区・遺構	器　種	分　類	口　径	底　径	器　高	特徴（内面・内面・底部）	登録No.
1	16住　(床)	土師器・坏	B Ⅱ b	17.4	9.2	4.1	内面：ミガキ→黒色処理　底部：手持ち～ケズリ	58
2	16住　(床)	土師器・坏	B I a		6.2	(残) 3.5	内面：ミガキ→黒色処理　底部：回転糸切り	59
3	16住（カマド埋土）	土師器・甕	A I c		11.0	23.5	外面：ケズリ　内面：ナデ	36
4	16住　(床)	須恵器・坏		14.2	6.4	4.5	底部：回転糸切り	49
5	16住　(1層)	須恵器・内面硯		12.0				
6－A	16住　(床)	赤焼耳皿		長 9.3	4.8	4.0		77
6－B		赤焼耳皿		短 5.4				
7	16住（周溝埋積土）	帯金具（？）		長 5.9	巾 3.3	厚 0.7		

第83図　第16号住居跡

【柱穴】床面上で検出されたピットは5個あり（P1～P5）円形である。柱痕跡が認められるもの、認められないものがあるが、位置関係からP1～P3が主柱穴と考えられる。なお、壁柱穴は壁上(P4～P5)で認められた。

【溝】住居内を全周するとみられる周溝がある。周溝は幅28㎝、深さ29㎝の断面「U」字形を呈する。

【出土遺物】土師器、須恵器、赤焼土器、鉄製品がある。特に、須恵器円面硯、赤焼土器(耳皿)が出土している(第83図)。

第17号住居跡(第8図)

【遺構の確認】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。検出区はW-0～5、S34～35区である。

【重複】31、33号掘立柱建物跡に切られる。

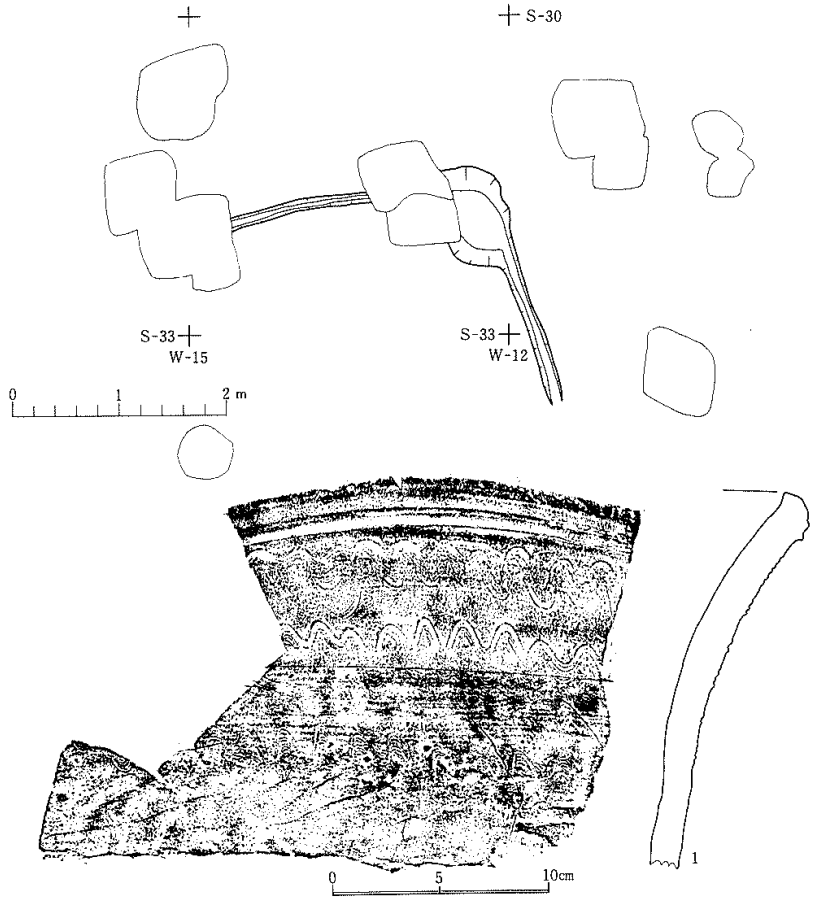
【平面形・規模】南半部を削平されている。残存部で東西4.4m、南北(残存)0.7mを計る。

【壁】壁は残存部で周溝底面から緩やかに立ち上がり、壁高は約5cmである。

【床】床面は地山をそのまま床としており、南側に向かい緩やかに傾斜している。

【床面施設】住居跡中央部に強い熱作用を受けたと見られる酸化、還元された小鍛冶遺構がある。

【出土遺物】土師器、須恵器がある。



No.	出土地区・遺構	器種	分類	口径	底径	器高	特徴（外面・内面・底部）	登録No.
1	17住周溝	須恵器・甕		－	－	－	外面：横櫛を波状文	

第84図　第17号住居跡

第18号住居跡(第85図)

【遺構の確認】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。検出区はW-0～5、Ｓ34～35区である。

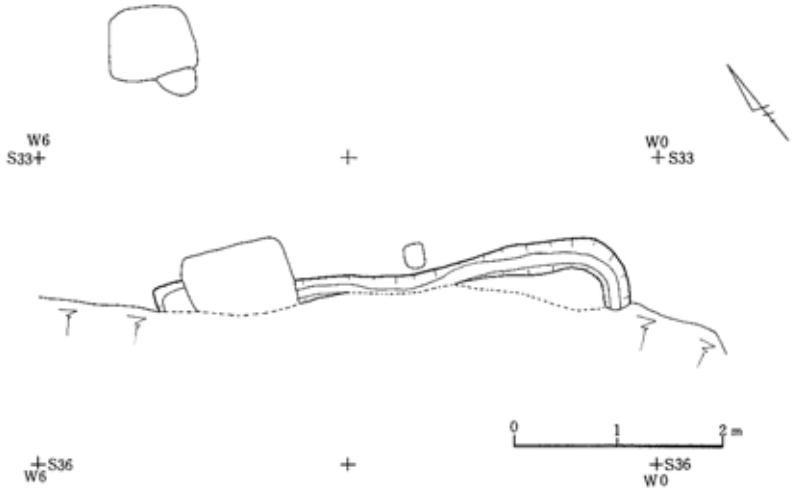
【重複】31・33号掘立柱建物跡に切られる。

【平面形･規模】南半部を削平されている。残存部で東西4.4m、南北(残存)0.7mを計る。

【壁】壁は残存部で緩やかに立ち上がる。壁は残存部で5㎝である。

【床】床面は地山をそのまま床として、南側に向かい緩やかに傾斜している。

【出土遺物】土師器、須恵器がある。



第85図　第18号住居跡

第101号住居跡(第86図)

【遺構の確認】北区中央西寄りのW18～23・Ｓ38～42付近に位置する。地山ローム面で確認された。

【平面形・規模】住居の南西隅は削平を受けているが、残存する部分から東西辺が長い不整の方形を呈すると考えられる。規模は、南北軸約4.0、東西軸約3.0mである。

【堆積土】2枚からなる。いずれも自然流入土で1は壁ぎわに、2は住居全体に厚く分布する。

【床面・壁】地山面を床としている。ほぼ平坦で北から南に向かって緩やかに傾斜している。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は保存のよい東壁で約30㎝ほどである。

【カマド】東壁中央部と北東隅の部分の2ヶ所から検出された。東壁中央部(カマド1)のものは煙道部のみを残し破壊されており、北東隅(カマド2)よりも古い時期のものと考えられる。カマド2は住居北東隅の壁をそのまま側壁として燃焼部を構築し、隅を奥壁としてその部分から煙道が延びる。

【柱穴】北壁と南壁の壁ぎわからピットが検出されているが、柱穴と認められるものはない。

【出土遺物】床面及び堆積土から土師器(甕)、須恵器(坏)が出土している。この中で、3はカマド2の焚き口部付近の床面に直立して、5は中央寄りの床面に伏せた状態で出土した。6は砥石で床面から出土した。砥面は2面あり、多数の擦痕が確められた。

第102号住居跡（第88図）

【遺構の確認】北区中央西端のW24～29･S33～39付近に位置し、地山の岩盤上で確認された。削平が著しく南半については周溝が残存するのみである。

【重複】第103号住居跡を切っており、これよりも新しい。

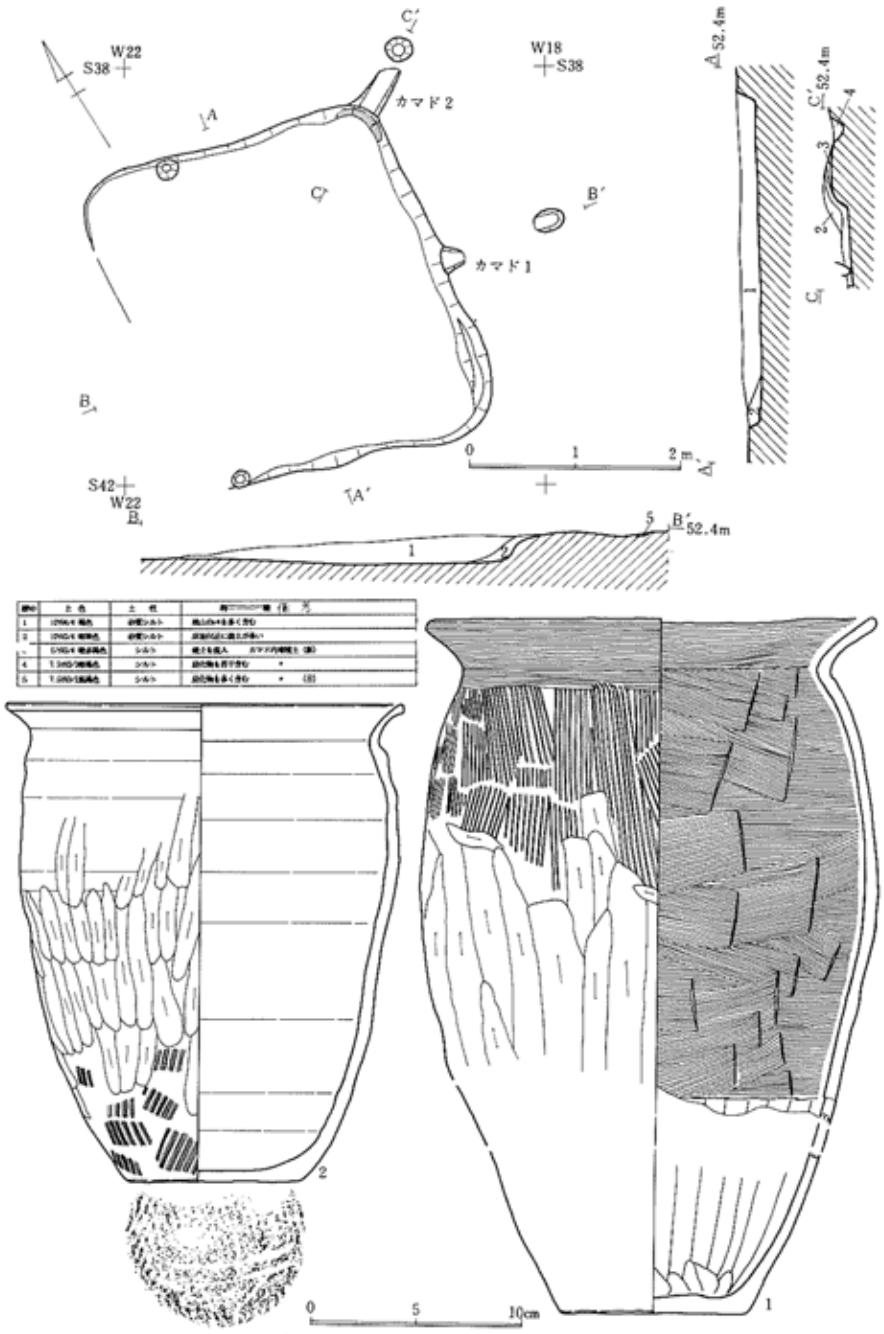
【平面形･規模】住居の南西隅に撹乱を受けているが、残存する部分から、ほぼ正方形を呈すると考えられる。規模は、南北軸約4.3m、東西軸約4.6である。

【堆積土】自然流入土で、北半に厚くそれ以外の部分では床面をわずかに覆うのみである。

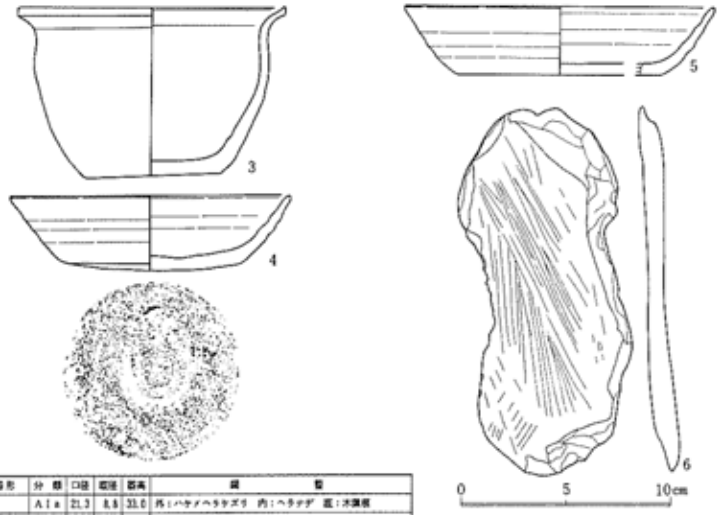
【床面･壁】地山面を床としている。ほぼ平坦で北から南に痢向かって傾斜し、その高低差は約30㎝ある。壁は局溝底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は保存のよい北壁で床面から約10㎝ほどである。

【溝】壁直下を全周し、かまどの部分は燃焼部を取り囲むようにコ字状に張りだしている。カマドの部分は床面を外した段階で、その他の部分は床面を精査する段階で検出された。断面形は逆台形で幅15～30㎝、深さは約10㎝ある。

【カマド】北壁中央部から検出された。凝灰岩の切石を左右に据え、それに粘土を張り付け



第86図　第101号住居跡と出土遺物（1）



No	層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	調整
1	床	土師器・甕	A I a	21.3	8.8	33.0	外：ハケメ＋ヘラケズリ　内：ヘラナデ　底：木葉痕
2	床	土師器・甕	B I a	18.9	8.2	22.7	外：ナデキ＋ロクロ＋ヘラケズリ　内：ロクロ　底：ロクロ
3	1	土師器・甕	B II b	12.7	6.5	8.1	内外：ロクロ　底：不明
4	床	須恵器・坏	B I b	13.4	6.5	3.6	内外：ロクロ　底：ヘラ切り
5	1	須恵器・坏	B	14.7	9.7	3.6	内外：ロクロ　底：ヘラ切り？

第87図　第101号住居跡出土遺物（2）

て側壁としている。煙道部では先端にとりつく煙出しのピット(楕円形で深さ約25㎝のみが検出された。また、カマドの湿気を除く施設として前述した焚き口を取りかこむ暗渠が検出されている。

【柱穴】床面から基本の主柱穴(P1～P4)と、撹乱により破壊されている南西隅を除く他の隅、およびカマド側壁の両側から壁柱穴(P7～P9)が、また南辺周溝の外側から周溝に隣接して2つのピット(P5・P6)が検出されている。

【床面の施設】カマド燃焼部左側と北東隅に皿状に窪む落ち込みが検出された。これらの中でP・は位置的に貯蔵穴であった可能性もある。

【出土遺物】住居の保存状況がよくなく、遺物の量も少ない。図示したものの他に堆積土中から体部下半と底部に回転ヘラ削りを施した土師器坏が出土している。

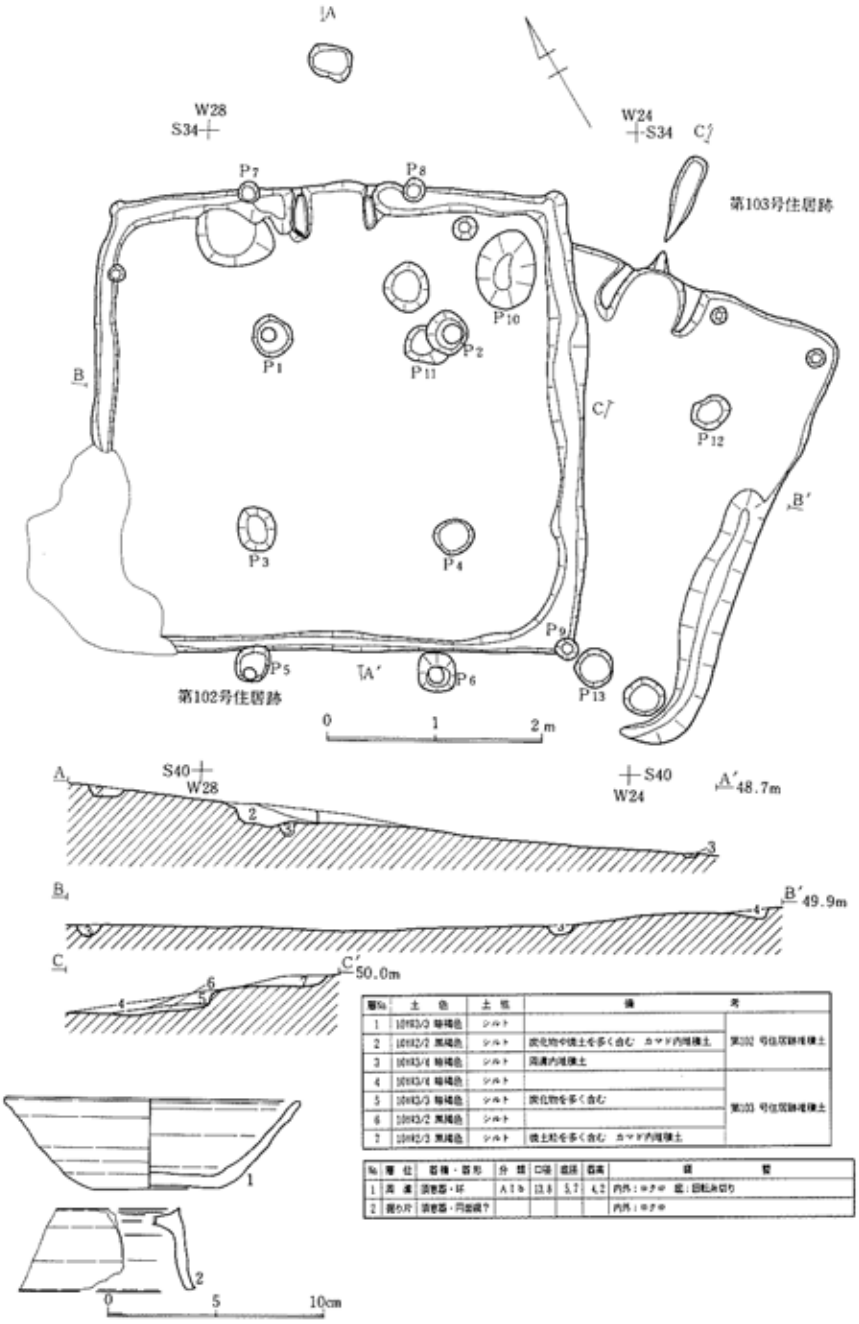
第103号住居跡(第88図)

【遺構の確認】北区中央西寄りのW22～27・S34～40付近に位置する。地山の岩盤上で確認された。

【重複】第102号住居跡に切られており、これよりも古い。

【平面形・規模】住居の西半はすでに失われているが、残存する部分から方形を基調とするものと考えられる。規模は、南北軸で約4.2mある。

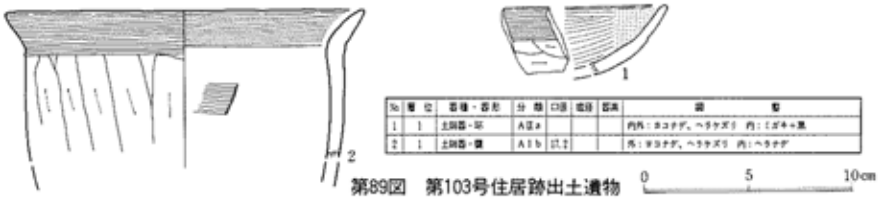
【堆積土】自然流入土で、北半にのみ分布する。



層No.	土色	土質	備考	
1	10YR3/3 暗褐色	シルト		第102号住居跡埋土
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	炭化物や焼土を多く含む　カマド内埋土	
3	10YR3/4 暗褐色	シルト	周溝内埋土	
4	10YR3/4 暗褐色	シルト		第103号住居跡埋土
5	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物を多く含む	
6	10YR3/2 黒褐色	シルト		
7	10YR2/3 黒褐色	シルト	焼土粒を多く含む　カマド内埋土	

No.	層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	観察
1	周溝	須恵器・坏	A1b	13.8	5.7	4.2	内外：ヨコナデ　底：回転糸切り
2	掘り方	須恵器・円面硯?					内外：ヨコナデ

第88図　第102・103号住居跡と第102号住居跡出土遺物



第89図　第103号住居跡出土遺物

【床面・壁】地山面を床としている。ほぼ平坦で北から南に向かってわずかに傾斜する。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は保存のよい北壁で床面から約10㎝ほどである。

【溝】東壁中央部から南東隅にかけてと、床面を外した段階で北壁のカマド燃焼部奥壁直下から西に延びる溝が検出された。断面形はU字状で東壁のものは幅約40㎝、深さ約10～15㎝、北壁のものは幅10～15㎝、深さ約5㎝ある。

【カマド】北壁から検出された。燃焼部と煙道部からなり、燃焼部の側壁は粘土を積み上げて構築している。底面は、ほぼ平坦で奥壁直下に湿気を除く施設として暗渠が作られている。煙道部は約1mあり、底面は先端に向かって緩やかに上がっている。

【柱穴】床面から6個、第102号住居跡の床面下から1個のピットが検出された。これらの中でＰ10・Ｐ12は柱痕跡や位置や深さから主柱であったと考えられる。

【出土遺物】住居の保存状況がよくなく、堆積土中から少量出土しているにすぎない。

第104号住居跡(第90図)

【遺構の確認】北区南寄りのW2～8・Ｓ56～61付近に位置する。地山ローム面で確認された。

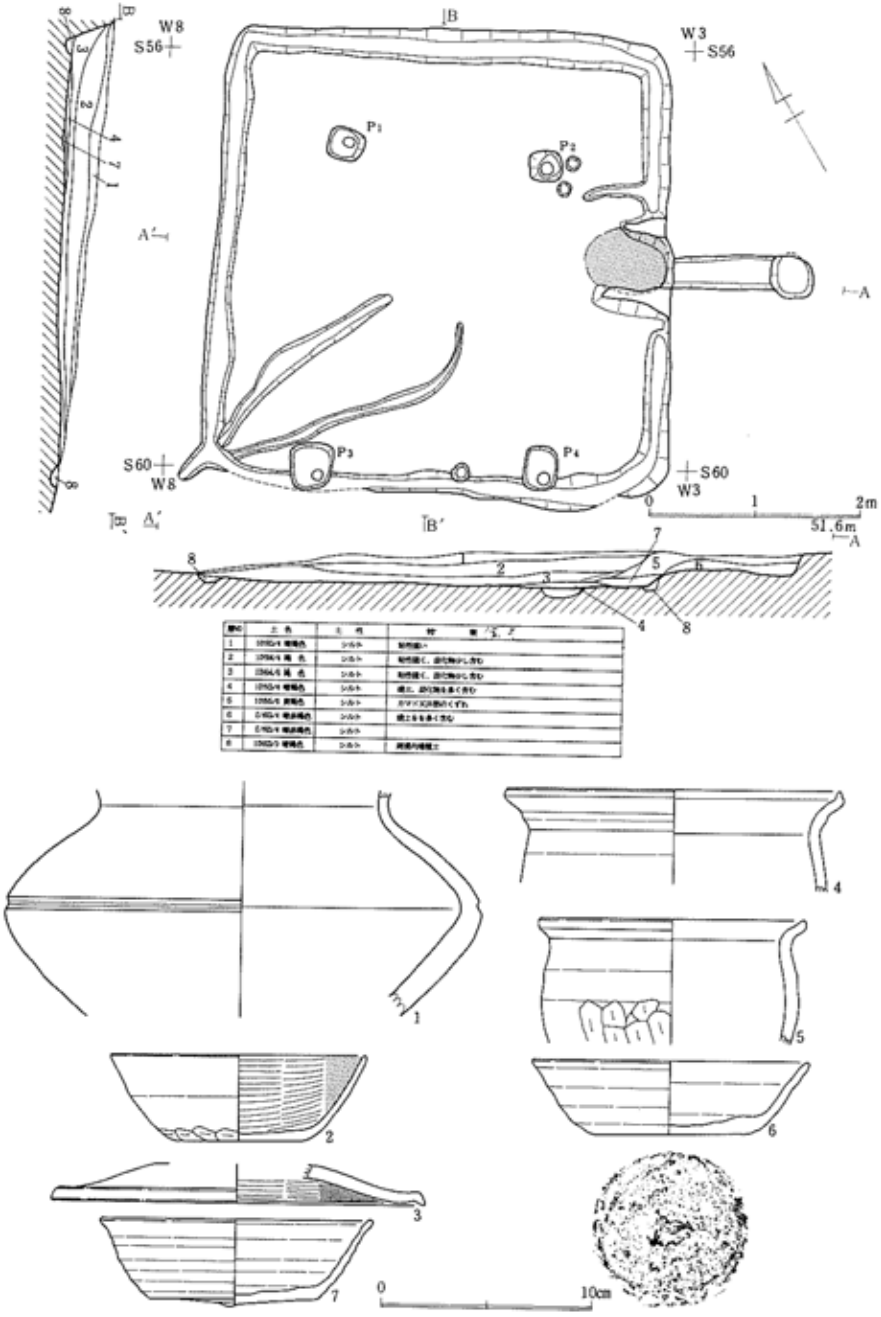
【平面形・規模】正方形を呈し、規模は一辺約4.4mある。

【堆積土】自然流入土で、北側が厚く南側に行くにしたがって薄くなる。1～3は粘土の強い褐色土で全体に厚く堆積している。4は床面を直接覆うように薄く堆積しており、焼土や炭化物を多く含む5～7はカマド内の、8は周溝の堆積土で、5はカマド天井部の崩壊土である。

【床面・壁】地山面を床とし、ほぼ平坦である。壁は周溝底面からほぼ垂直に立ち上がり、保存のよい北壁では床面から約50㎝もある。

【溝】垂直下を全周する周溝とカマド側壁の左側、住居の中央から南西隅を経て戸外に続く2条の溝が検出された。これらの溝で後2者は本来、1本のものであった可能性もある。カマド下の部分は床面を外した段階で、その他の部分は床面を精査する段階で認められた。断面形は逆台形を呈し、幅20～40㎝、深さは深い所で約10㎝ある。

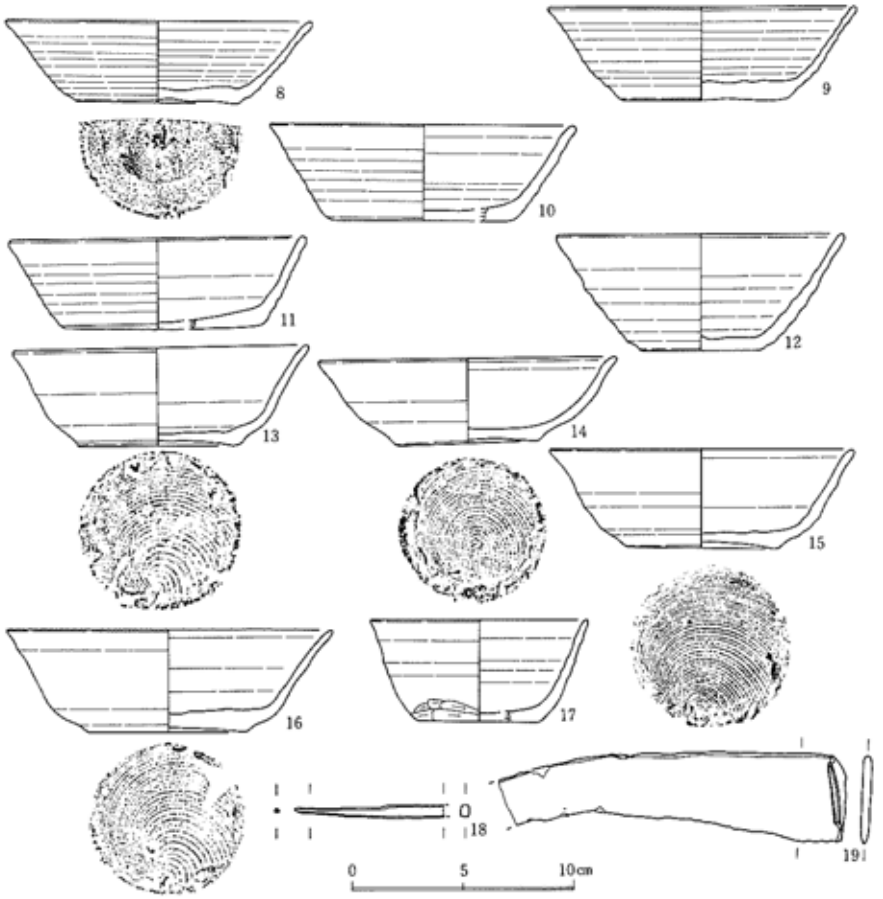
【カマド】東壁中央部から検出された。燃焼部と煙道部からなり、燃焼部の側壁は粘土を積み上げて構築している。底面はほぼ平坦で奥壁直下に湿気を除く施設として暗渠が作られている。煙道部は地下式で長さ約1mあり、先端に直径約35㎝の煙出しのピットが掘られている。



第90図　第104号住居跡と出土遺物（1）

【柱穴】床面から2つのピット(P1～P4)がある。いずれからも柱痕跡が検出されており、主柱であったと考えられる。これらの中で南側の柱穴は周溝に接しており、全体的に南に偏った配置になっている。

【出土遺物】土師器（坏・蓋）、須恵器(坏・壷)が数多く出土している。これらは床面から出土した1を除きすべて堆積土中から出土したもので密接遺構に伴うものではない。18は鉄鏃で箆被の一部から茎にかけての破片である。箆被や茎の断面形は長方形を呈している。19は鎌で直刃と思われる。基端部を折り曲げて柄に取り付けている。



No	層	位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	調整
1		床	須恵器・壷					内外：ロクロ
2	1		土師器・坏	B類b	12.2	6.6	4.1	外：ロクロ→ヘラケズリ 内：ミガキ+黒
3	1		土師器・蓋		15.6			外：ロクロ 内：ミガキ+黒
4	1		土師器・蓋	B類b	16.0			内外：ロクロ
5	1		土師器・蓋	B類b	12.7			外：ロクロ→ヘラケズリ 内：ロクロ
6	1		須恵器・坏	B1c	13.1	7.4	3.5	内外：ロクロ 底：ヘラ切り
7	1		須恵器・坏	B1a	13.0	8.0	4.2	内外：ロクロ 底：ヘラ切り
8	1		須恵器・坏	B1a	13.8	7.2	3.7	内外：ロクロ 底：ヘラ切り
9	1		須恵器・坏	B1a	14.0	7.6	4.2	内外：ロクロ 底：ヘラ切り

No	層	位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	調整
10	1		須恵器・坏	B1a	13.7	8.1	4.3	内外：ロクロ 底：ヘラ切り
11	1		須恵器・坏	B1a	13.3	8.1	4.1	内外：ロクロ 底：ヘラ切り
12	1		須恵器・坏	B1b	13.0	8.6	5.3	内外：ロクロ 底：ヘラ切り
13	1		須恵器・坏	A1c	13.4	7.2	4.4	内外：ロクロ 底：回転糸切り
14	1		須恵器・坏	A1c	13.3	6.5	3.8	内外：ロクロ 底：回転糸切り
15	1		須恵器・坏	A1c	13.7	6.8	4.3	内外：ロクロ 底：回転糸切り
16	1		須恵器・坏	A1c	14.8	7.2	4.6	内外：ロクロ 底：回転糸切り
17	1		須恵器・坏	D類	13.0	5.5	4.6	外：ロクロ→ヘラケズリ 内：ロクロ 底：不明→切出

第91図　第104号住居跡と出土遺物（2）

第105Ａ号住居跡(第92図)

【遺構の確認】北区中央東寄りのＥ18～25・S7～15付近に位置する。地山面の岩盤で確認された。

【重複】精査している段階では確認できなかったが、西壁面の乱れや焼面を持つ石組み(カマド?)、床面のピット、時期差のある遺物などから新しい時期の住居(105Ｂ号住居跡)によって切られていると考えられる。また、カマドの改築や柱穴などの状況から立て替えが行われていたと考えられる。

【平面形・規模】正方形を呈し、規模は一辺約5.7mである。

【堆積土】自然流入土で、全体に厚く堆積している。1・2はしまりのない暗褐色土で床面に近づくにつれて地山の石が多くなる。6は住居の掘り方を埋めた貼り床の土である。

【床面・壁】北壁以外の壁に近い部分に貼り床がみられる。床面はほぼ平坦である。壁は周溝底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は保存のよい北壁で約50㎝ある。

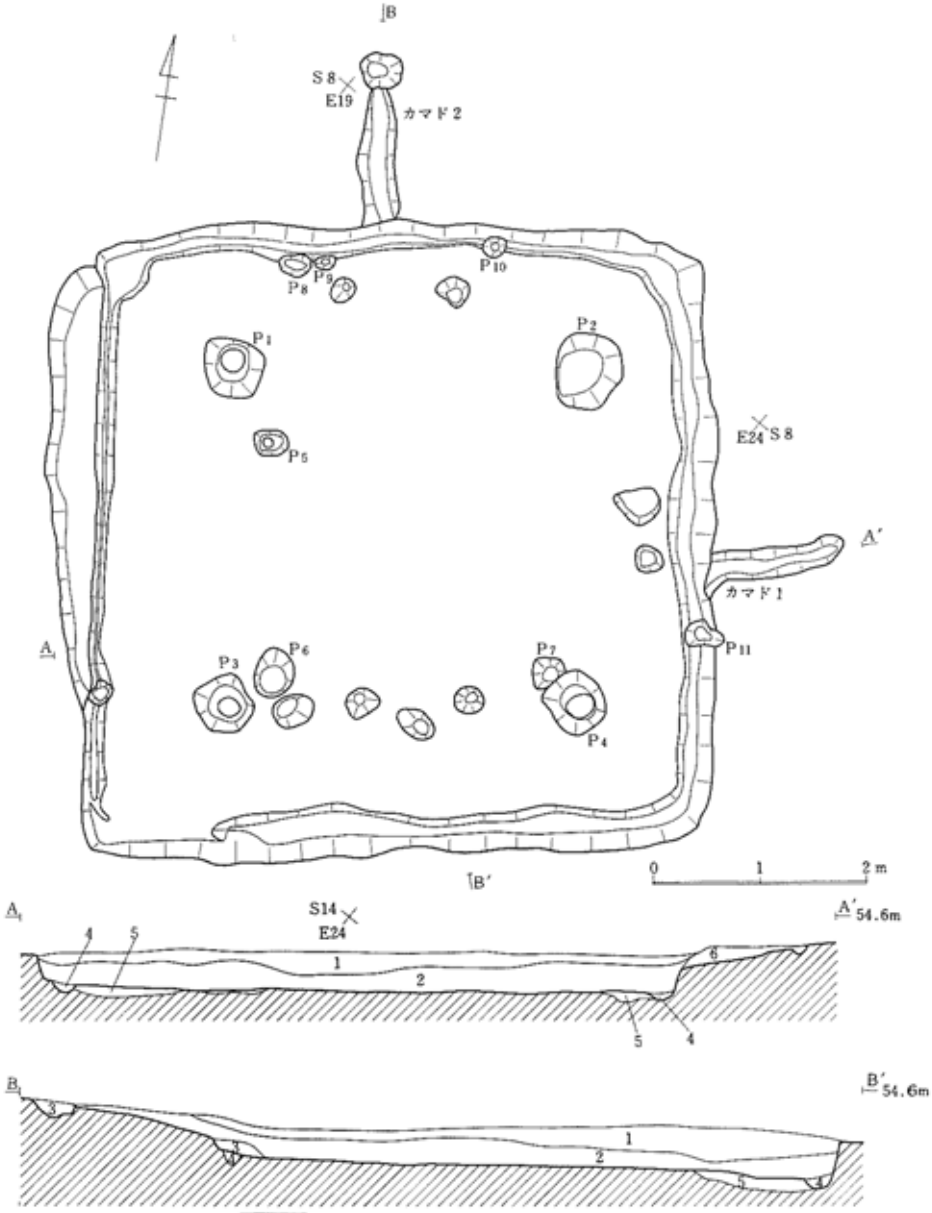
【溝】南壁の一部を除き垂直下をほぼ全周する周溝が検出された。かまどの部分は底面を外した段階で、その他の部分については床面を精査している段階で確認された。断面形はU字形を呈し、幅20～40㎝、深さ約10㎝ある。

【カマド】東壁中央部(カマド1)と北壁中央部(カマド2)から新旧2つのカマドが検出された。焼面の残存状況から住居の廃棄時に機能していたのはカマド2と考えられ、カマド1はこれよりも古い時期のものである。燃焼部はどちらのカマドからも焚き口部分に、さらにカマド1からは中央部にも窪みが認められ、それぞれ側壁構築の際の掘り込みと支脚の据え方と考えられる。また、奥壁直下からは湿気防止の施設として暗渠が検出された。煙道部はいずれも長さが約120㎝あり、先端に向かって緩やかに上がる。カマド2にはその部分に直径約35㎝の煙出しのピットが掘られている。

【柱穴】床面から16個のピットが検出され、柱痕跡の有無や配置からＰ1～4は拡張後の、Ｐ5～7は拡張後の主柱と考えられる。また2つのカマドの燃焼部の左右からは壁柱穴(Ｐ8～11)がそれぞれ検出された。

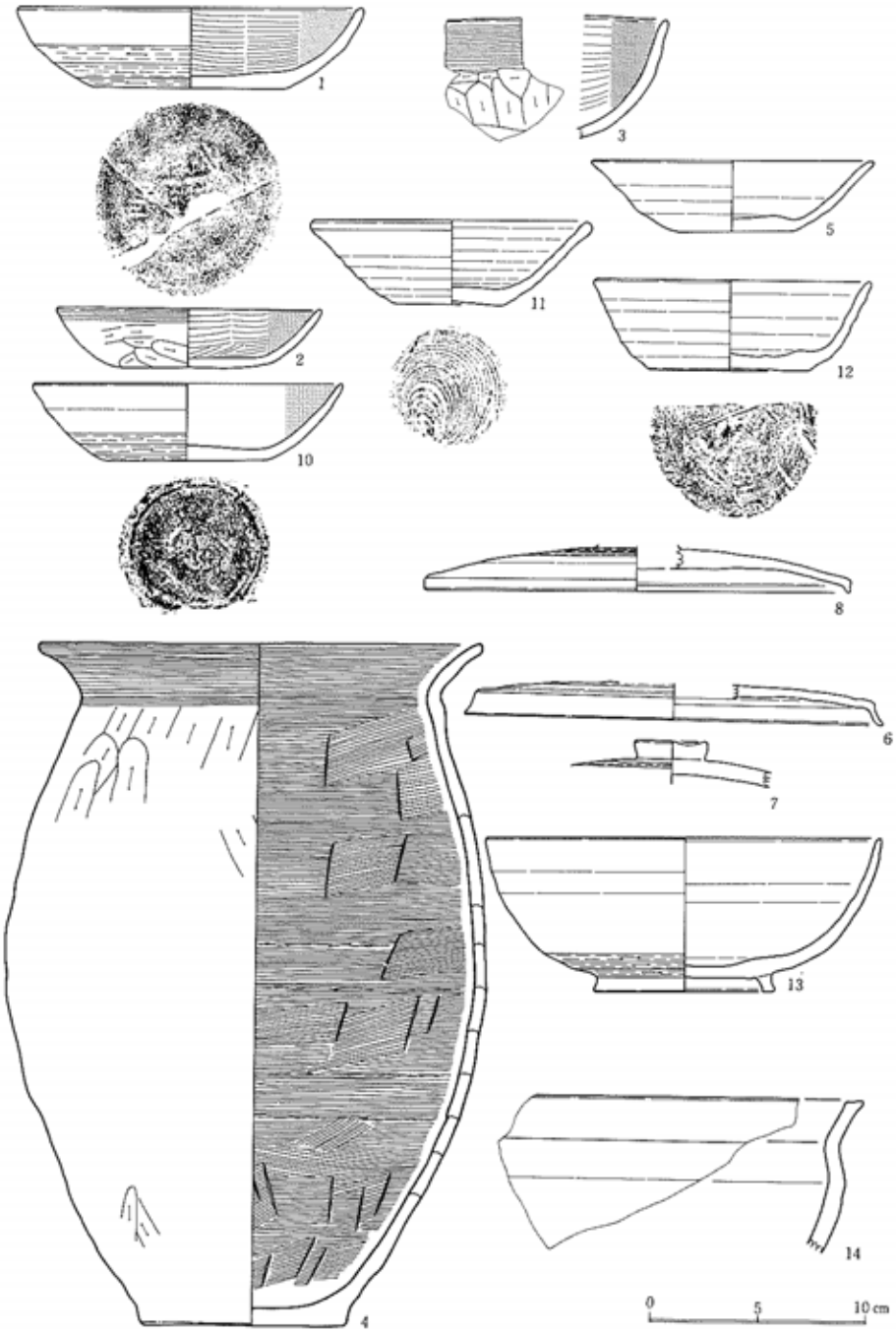
【出土遺物】土師器(坏・甕)、須恵器(坏・高台坏・甕・鉢)等数多く出土しているが遺物取り上げの際第105Ｂ号住居と十分に分離しておらず、遺構への帰属は不明なものもある。15は刀で刀身の破片である。周溝から出土した。平棟・平造りで、先端はフクラ錆である。16は鎌で刃部の破損が著しい。基端部を折り曲げて、柄に取り付けている。17は鎌の茎の部分で2層から出土した。断面形は円形を呈する。19は刀子で刃部から茎の破片で、床面から出土した。

両関である。

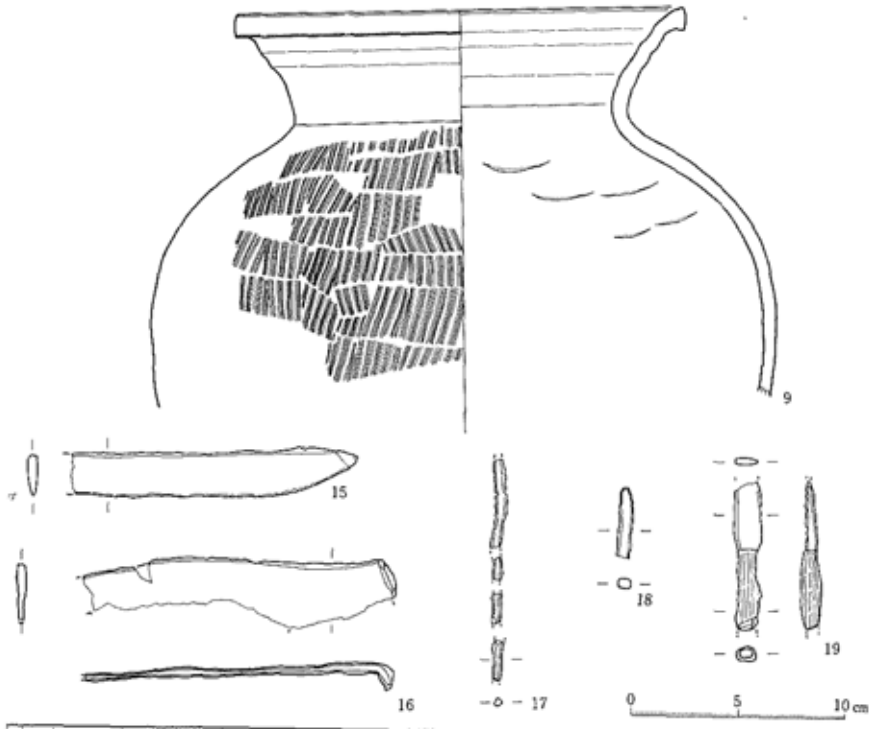


層No	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	しまりなし
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	地山の石を多く、炭化物を少し含む
3	10YR3/3 暗褐色	シルト	焼土、炭化物多く含む、新カマド埋積土
4	10YR3/3 暗褐色	シルト	地山の石を多く含む、周溝内埋積土
5	10YR3/3 暗褐色	シルト	掘り方埋め土
6	7.5YR4/3 褐色	シルト	炭化物を少し含む、旧カマド埋積土

第92図　第105A号住居跡



第93図　第105Ａ号住居跡出土遺物（１）



第94図　第105Ａ号住居跡出土遺物（２）

105Ｂ号住居跡（第95図）

【遺構の確認】北区中央東寄りのＥ18～26・S7～15付近に位置する。前述したとおり精査の段階では確認されなかったが後の検討で確認された。

【重複】第105Ａ号住居跡を切っており、これよりも新しい。

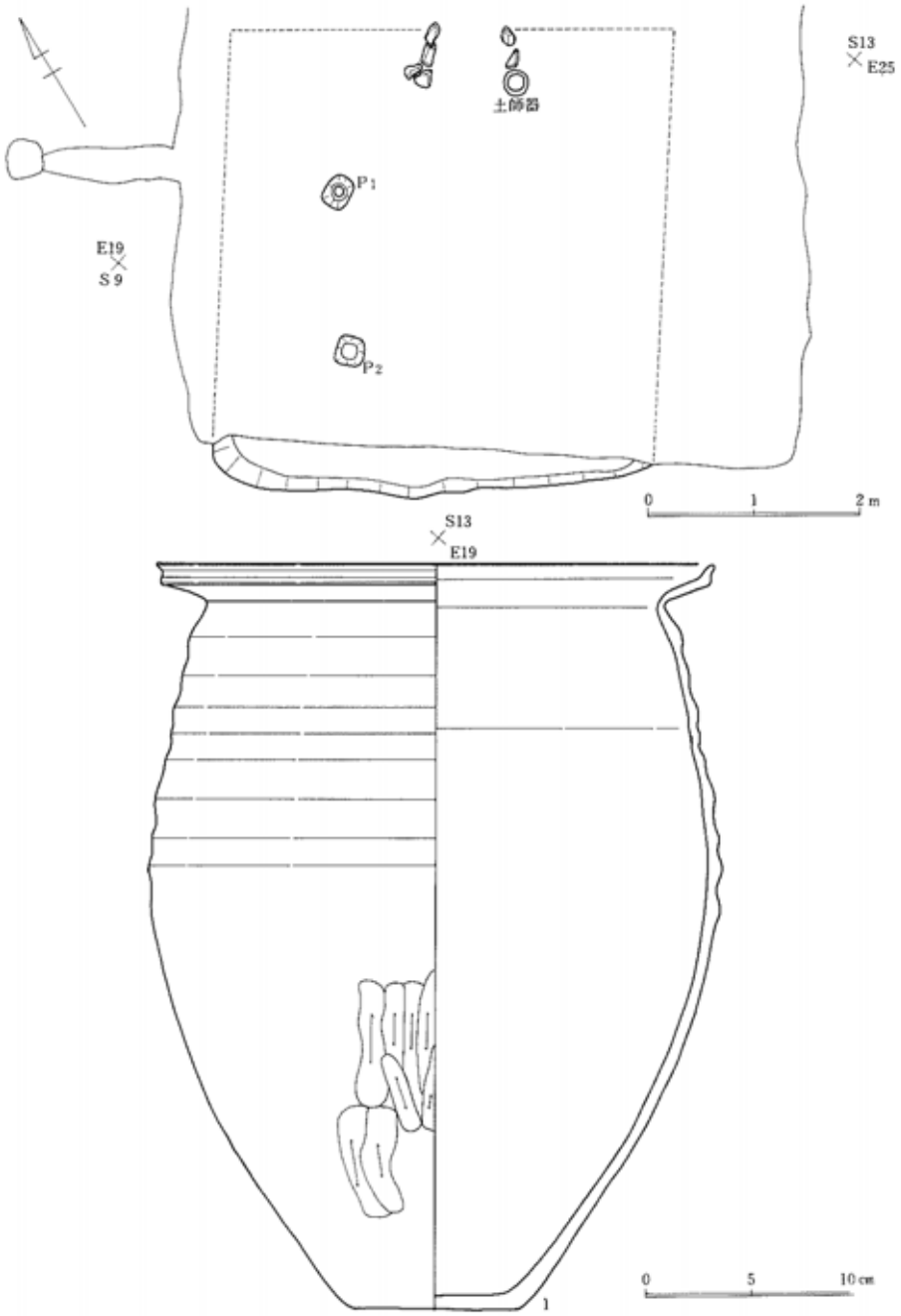
【平面形・規模】西壁が残存するのみで全体的形状については不明であるが，かまどの位置などから考えて一辺4m前後の方形であった可能性がある。

【堆積土】第105Ａ号住居の堆積土との識別ができなかったため堆積土については不明である。

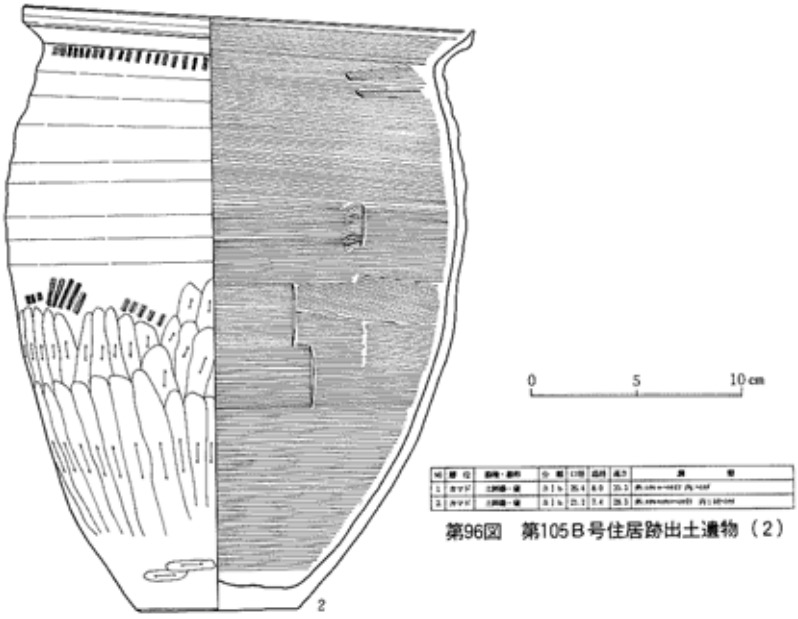
【壁】壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、西壁で床面から約30㎝ある。

【カマド】東壁にあたると思われる部分から焼面を伴う石組みが検出されており、カマドと考えられる。側壁は焚き口部に土師器甕を倒位に掘え(右側からのみ検出)、石組みをし、それに粘土を貼り付けて作られている。煙道部などは検出されなかった。

【柱穴】第105Ａ号住居跡の床面から検出されたピットの中でＰ1とＰ2は位置的に第105B号住居の柱穴であったと考えられる。



第95図　第105Ｂ号住居跡と出土遺物（１）



第96図　第105Ｂ号住居跡出土遺物（２）

【出土遺物】住居層に伴う遺物として、カマド燃焼部から出土したものと側壁の構築に用いられた土師器甕がある。

第106号住居跡(第97図)

【遺構の確認】北区中央東寄りのＥ15～20・S14～19付近に位置する。地山面の岩盤で確認された。

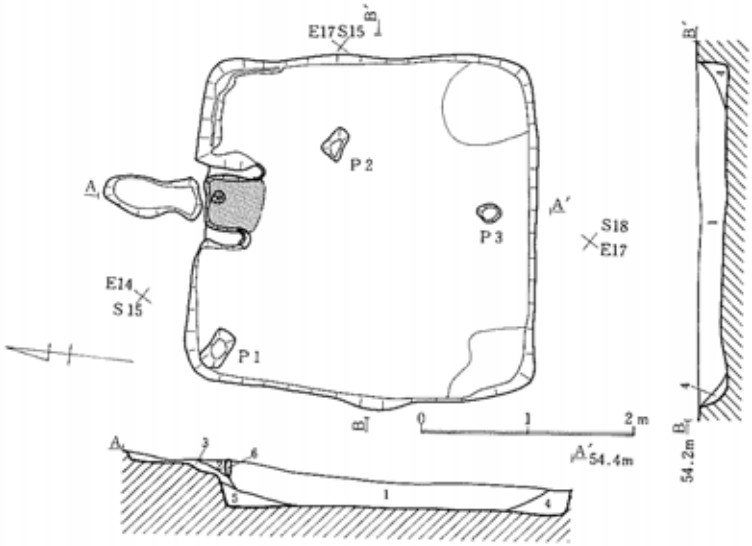
【平面形・規模】正方形を呈し、規模は一辺約3.2mある。

【堆積土】自然流入土で、全体的に厚く堆積している。地山の石を多く含み、とくに壁ぎわでは著しい。

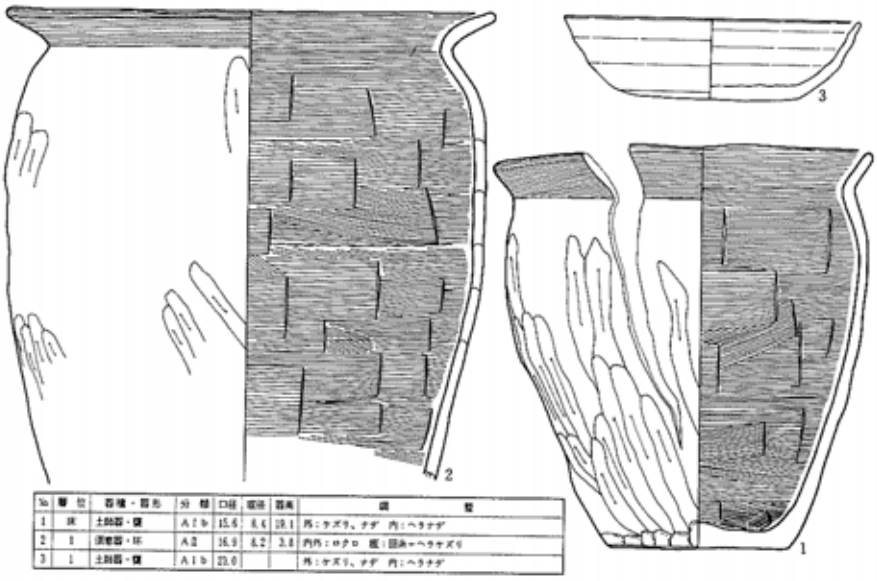
【床面・壁】地山面を床とし、ほぼ平坦である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は20～40㎝ある。

【溝】住居北東隅の部分にのみ検出された。断面形はU字状を呈し、幅約10㎝、深さ約5㎝である。

【カマド】北壁中央部から検出された。燃焼部と煙道部からなり、燃焼部奥壁付近の天井の一部が崩れずに残っていた。側壁は床面を若干掘り窪め、そこに丸瓦を立てて焚き口とし、他の部分は粘土を積み上げて作られている。また、底面中央部の奥壁寄りには直径15㎝ほどの小ピットがあり、ここに支脚が据えられていた可能性がある。煙道部は削平を受けており、保存状態はよくないが残存する部分の長さは約80㎝あり、底面は先端に向かって緩やかに登っていく。



層位	土色	土性	特徴
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山の白色を多く含む、粘性、しまりなし
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山の白色含む、粘性、しまりなし
3	10YR3/3 暗褐色	シルト	地山の白、黄白色、焼土含む、粘質強土
4	10YR3/3 暗褐色	シルト	地山の白色含む炉・暗褐色くない
5	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	焼土、黄白色、地山の土含む、しまり強し、カマド焼土
6	1.5YR4/4 黒色	シルト	カまど焼焼土、粘質土



No	層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	調整
1	床	土師器・鍋	A1b	15.6	8.4	19.1	外：ケズリ、ナデ　内：ヘラナデ
2	1	須恵器・坏	A2	16.9	8.2	3.8	内外：ロクロ　底：回転ヘラケズリ
3	1	土師器・鍋	A1b	23.0			外：ケズリ、ナデ　内：ヘラナデ

第97図　第106号住居跡と出土遺物（1）

0　5　10cm

【柱穴】床面から3つのピットが検出された。P･はカマドの軸線上にあり計画的に配置されたと考えられ柱穴であった可能性もあるが、他の2つについては断定できない。

【床面の施設】南東と南西の隅から浅い落ち込みが検出された。この部分は貼り出されており、、住居の掘り方であると考えられる。

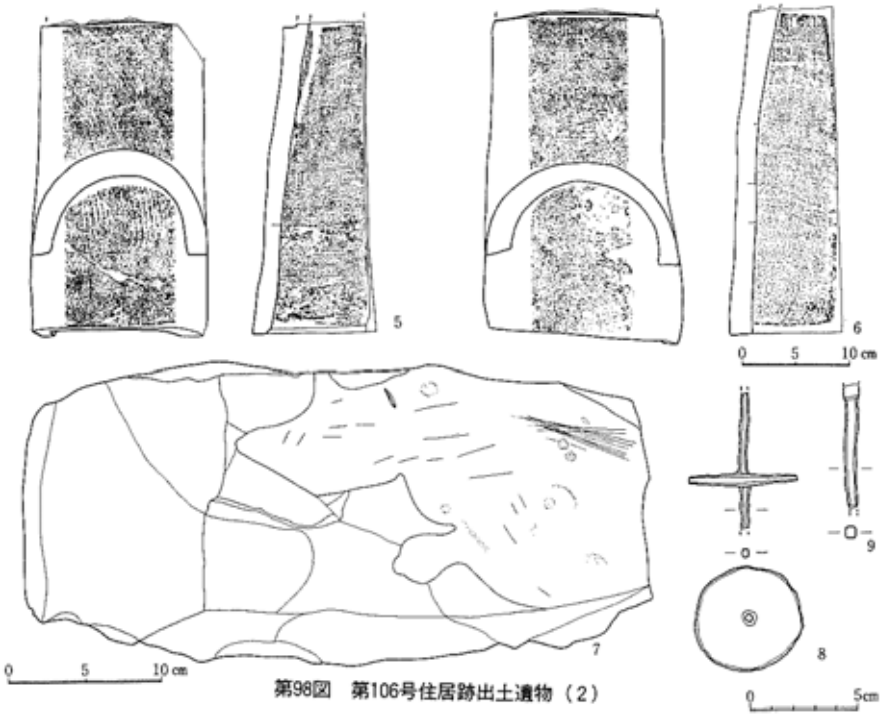
【出土遺物】比較的遺物の量は少ない。

1は床面から傾いた状態で出土した。

7は砥石で床面から出土した。大形のもので床面に携えた状態で使用されたものと考えられる。使用面は2面認められた。

8は紡錘車で、1層から出土した。軸部を円盤に差し込んで作られている。

9は鏃で茎の破片である。1層から出土した。関状の段を有し、断面形は方形を呈する。



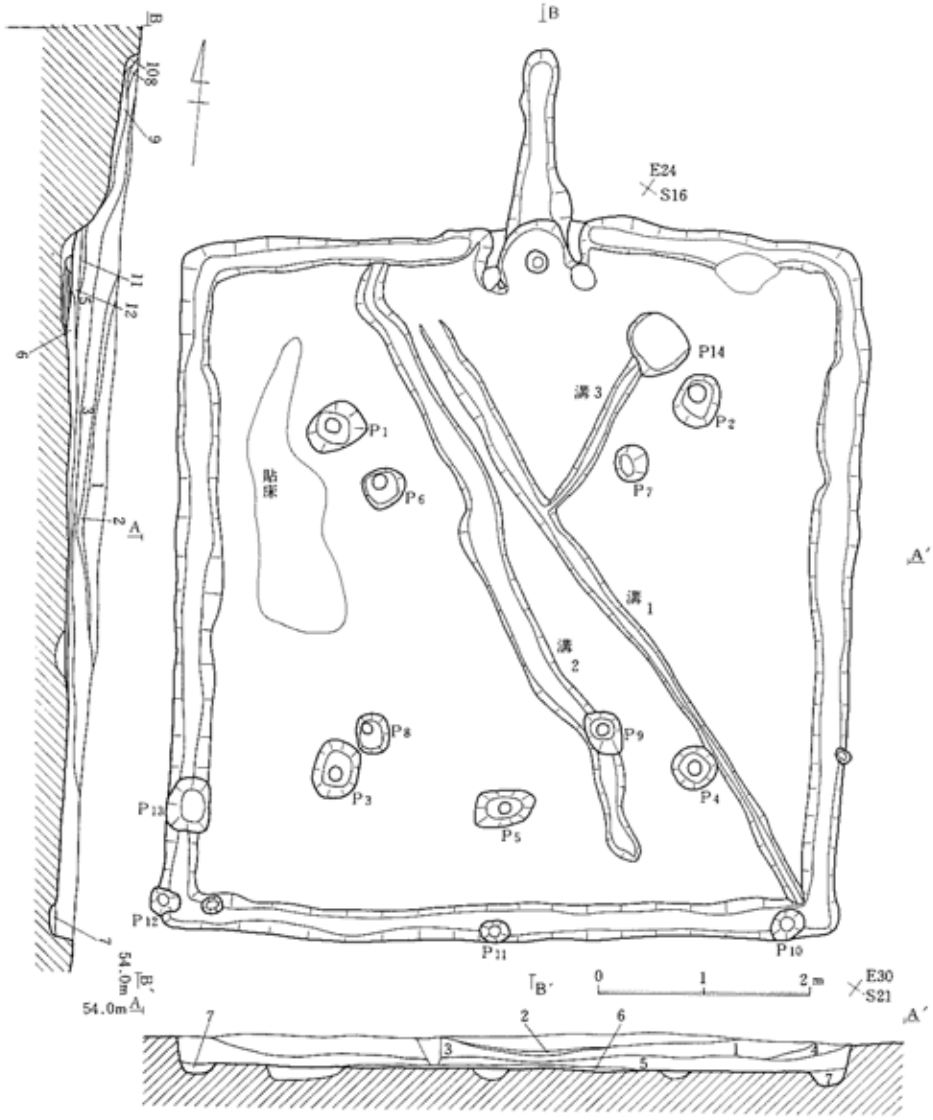
第98図　第106号住居跡出土遺物（2）

第107号住居跡（第99図）

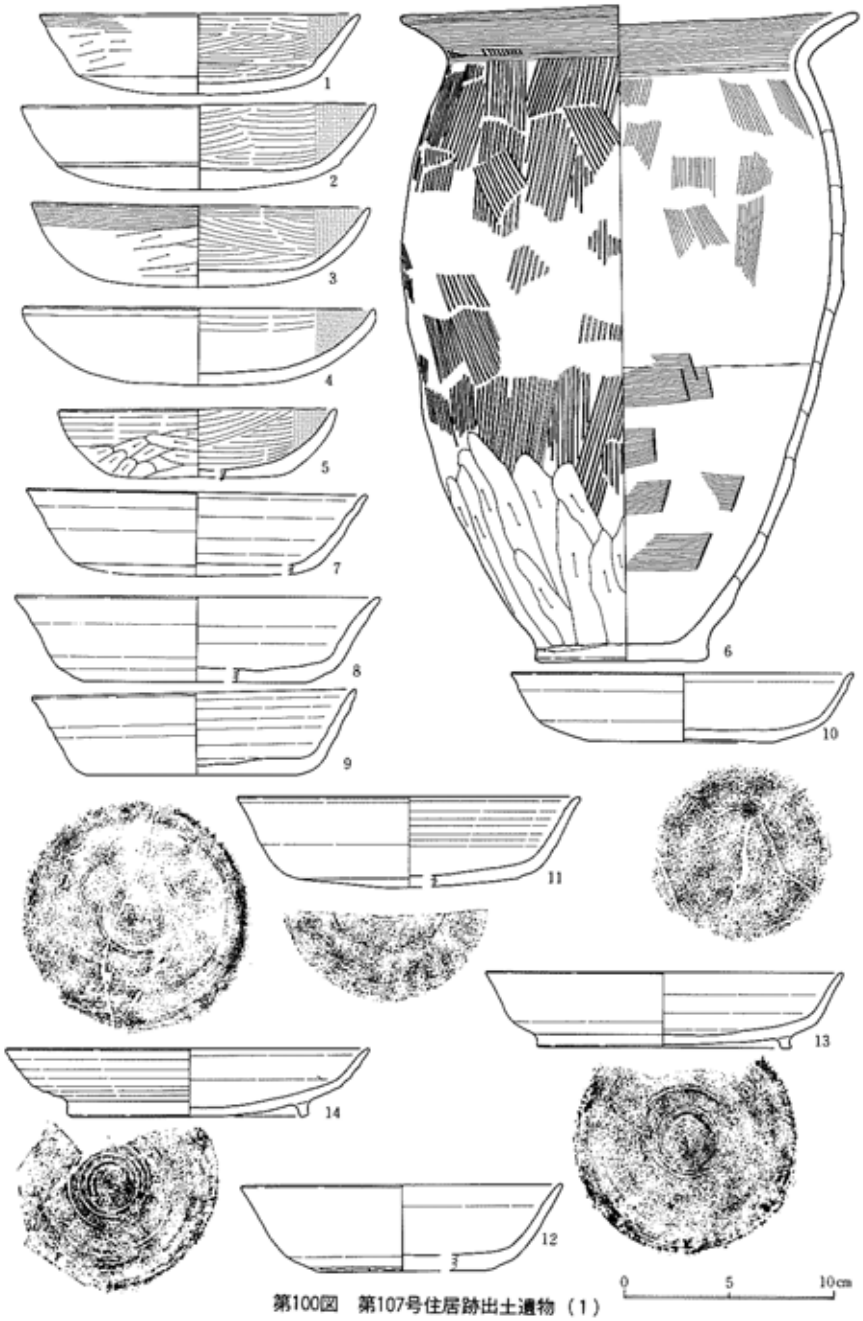
【遺構の確認】北区中央東寄りのE20～30・S15～25付近に位置する。住居北半は地山面の岩盤で、南半はその上の暗褐色土層で検出された。

【重複】重複は認められないが、カマドの改築や柱穴から立て替えが行われたと考えられる。

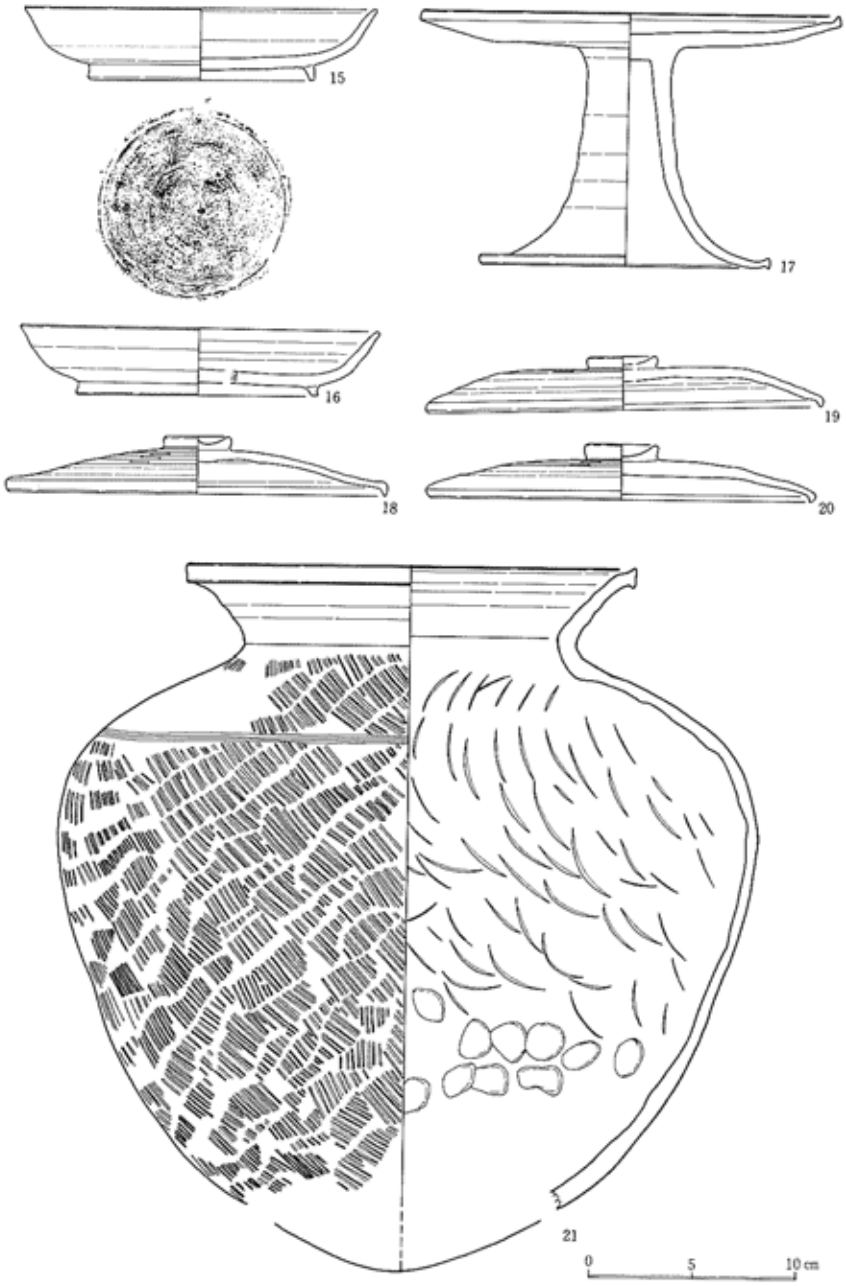
【平面形・規模】正方形を呈し、規模は一辺約6.5mである。



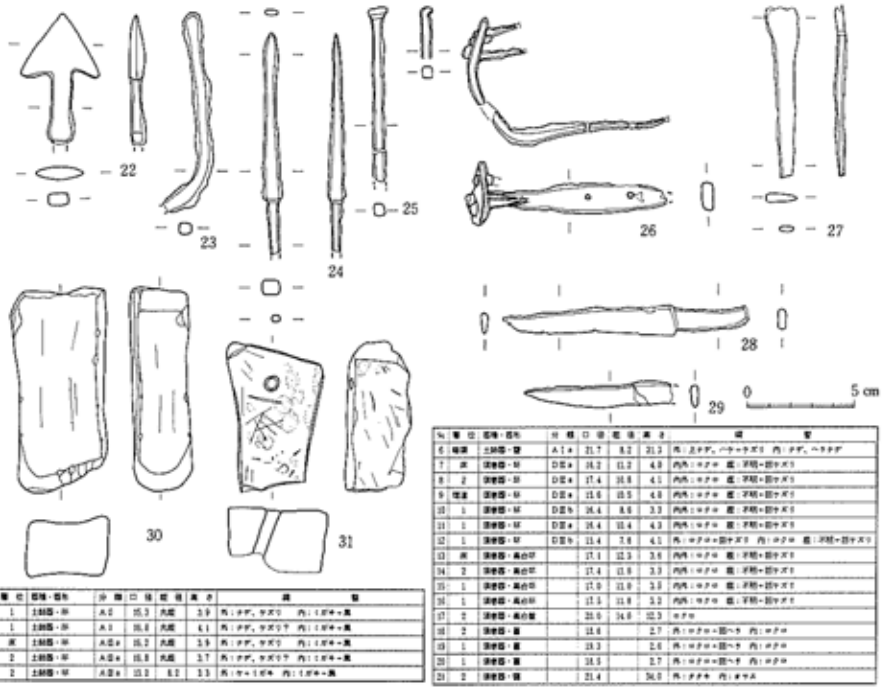
第99図　第109号住居跡



第100図　第107号住居跡出土遺物（1）



第101図　第107号住居跡出土遺物（2）



第102図　第107号住居跡出土遺物（3）

【堆積土】北側からの自然流入土でレンズ状に堆積している。1は住居の中央に、3・5は全体に分布する堆積土で、3には非常に多くの地山の石が含まれていた。6は床面を直接覆う薄い層で炭化物や焼土を多く含む。7以下の層は周溝および床面下の溝の堆積土である。

【床面・壁】地山面を床としている。ほぼ平坦で北から南に向かって緩やかに傾斜している。壁は周溝底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は保存のよい北壁では約50㎝にも達する。

【溝】カマド燃焼部を除く壁直下を全周する周溝を、床面に溝3条(溝1.2.3)とがある。周溝は床面を精査する段階で、溝1．2．3は床を外していく段階で検出された。周溝は底面がほぼ平らで南西隅に向かって緩やかに傾斜する。断面形は逆台形で幅30～40㎝、深さは約10㎝ある。溝1はカマド側壁の左側から南東隅に向かって対角上に延び、住居中央部でＰ14横の窪みから延びる溝3と接続する。断面形はU字形で幅20～30㎝、深さ5～10㎝である。溝2は溝1と平行に走る溝で南壁近くで消滅する。断面形はU字形で幅30～40㎝、深さ5～10㎝である。

【カマド】北壁中央部から検出され、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部の側壁は焚き口の部分から抜き取り痕と思われるピットが認められることから第106号住居にみられるように焚き

口に丸瓦を据え、粘土を積み上げて作られたと考えられる。底面には中央部に直径約15㎝支脚痕のピットがある。また湿気を除く構築法として、燃焼部を掘り窪め、土器片を敷きつめ、粘土を貼って底面とする方法がとられている。さらに土器片を除去したのち精査した結果、下層からもう1面焼面が認められ、改築前のカマド底面と考えられる。

【柱穴】床面から5個(Ｐ1～5)、床面下から4個(Ｐ6～9)のピットが検出され、Ｐ1～4は拡張後の、Ｐ6～9は拡張前の主柱穴であったと考えられる。また、Ｐ5も柱痕跡をもつこととカマドの軸線上に位置することから何らかの柱であったと思われる。壁からは壁柱穴（Ｐ10～13）が検出された。

【出土遺物】床面、カマド下、堆積土から土師器・須恵器が多量に出土している。22は鉄鏃で2層ら出土している。鉄鏃身は三角形で、逆刺を有する。23・24は鉄鏃で2層から出土した。鏃身は細い三角形で長い箆被部を有し、関状の穀がある。25は鉄釘で1層から出土した。断面が方形の角釘で、頭部が打たれ、やや幅広になっている。26は馬具の鎧の一部であると考えられ、名取市宮下遺跡1号住居跡から類似するものが出土している。27～29は刀子で29は床面下の溝から、29は1層から出土した。30・31は砥石で、30は1層から、31は周溝から出土した。使用面はいずれも4面あり、31には貫通孔が認められる。

第108号住居跡(第103図)

【遺構の確認】北区ほぼ中央のW10～15・Ｓ16～23付近に位置し、地山ローム面で確認された。

【重複】東壁の一部に撹乱を受けているのみで重複は認められないが、柱穴の立て替えの様子から改築が行われていたと考えられる。

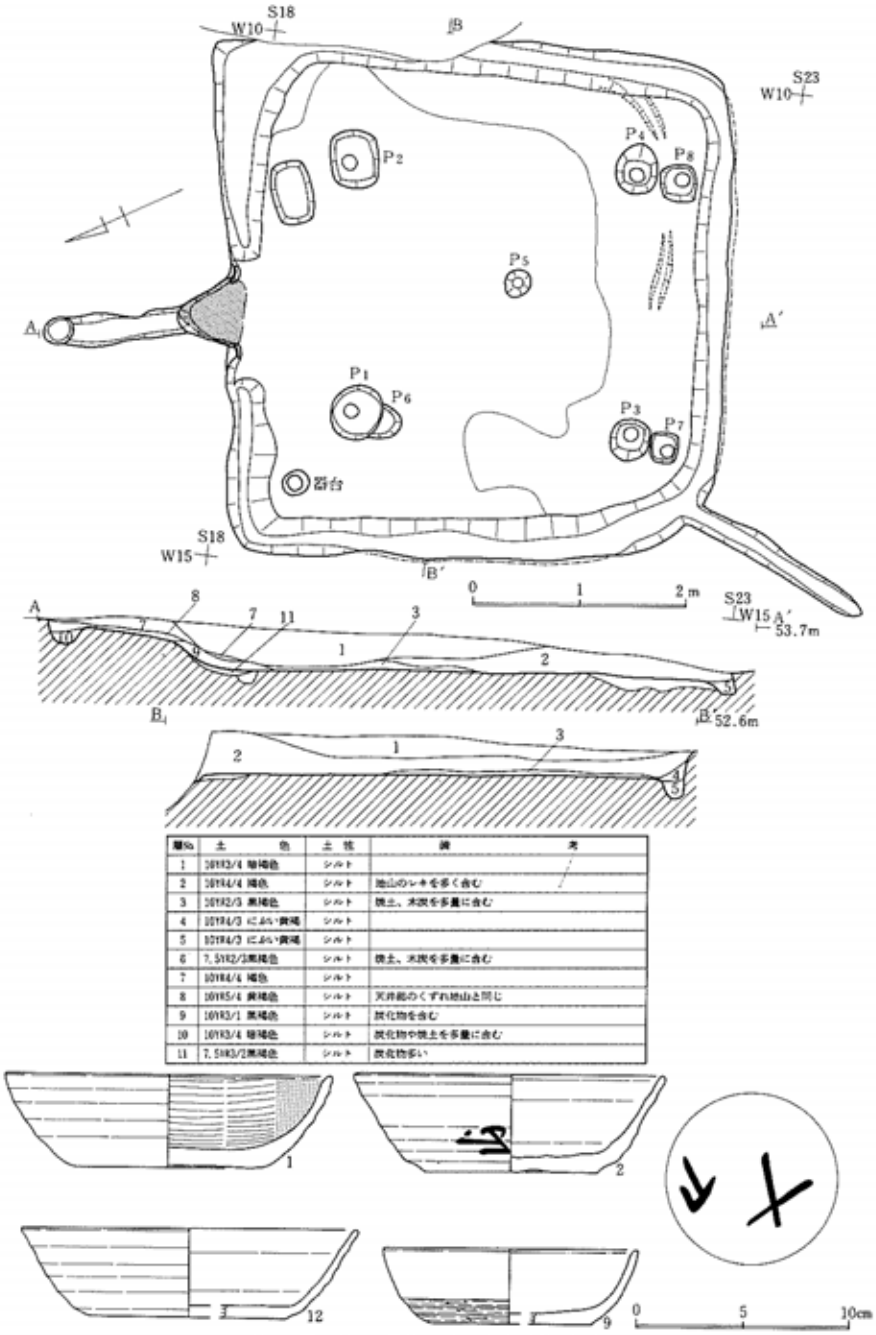
【平面形・規模】隅の丸い正方形を停止，規模は南北軸約4.6m、東西軸約5.0mである。

【堆積土】自然流入土で、全体に厚く堆積している。1・2は暗褐色～褐色のシルトで、2には地山の石が多く含まれる。3は床面を直接覆う薄い層で炭化物や焼土を多く含む。5・6は周溝内の7以下はカマド内の堆積土である。

【床面・壁】地山面をそのまま床としている部分と、掘り方面に土を貼っている部分とがあり、貼床は厚い所で約15㎝ある。床面はほぼ平坦である。壁は周溝底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は保存のよい北壁で床面から約50㎝にも達する所がある。

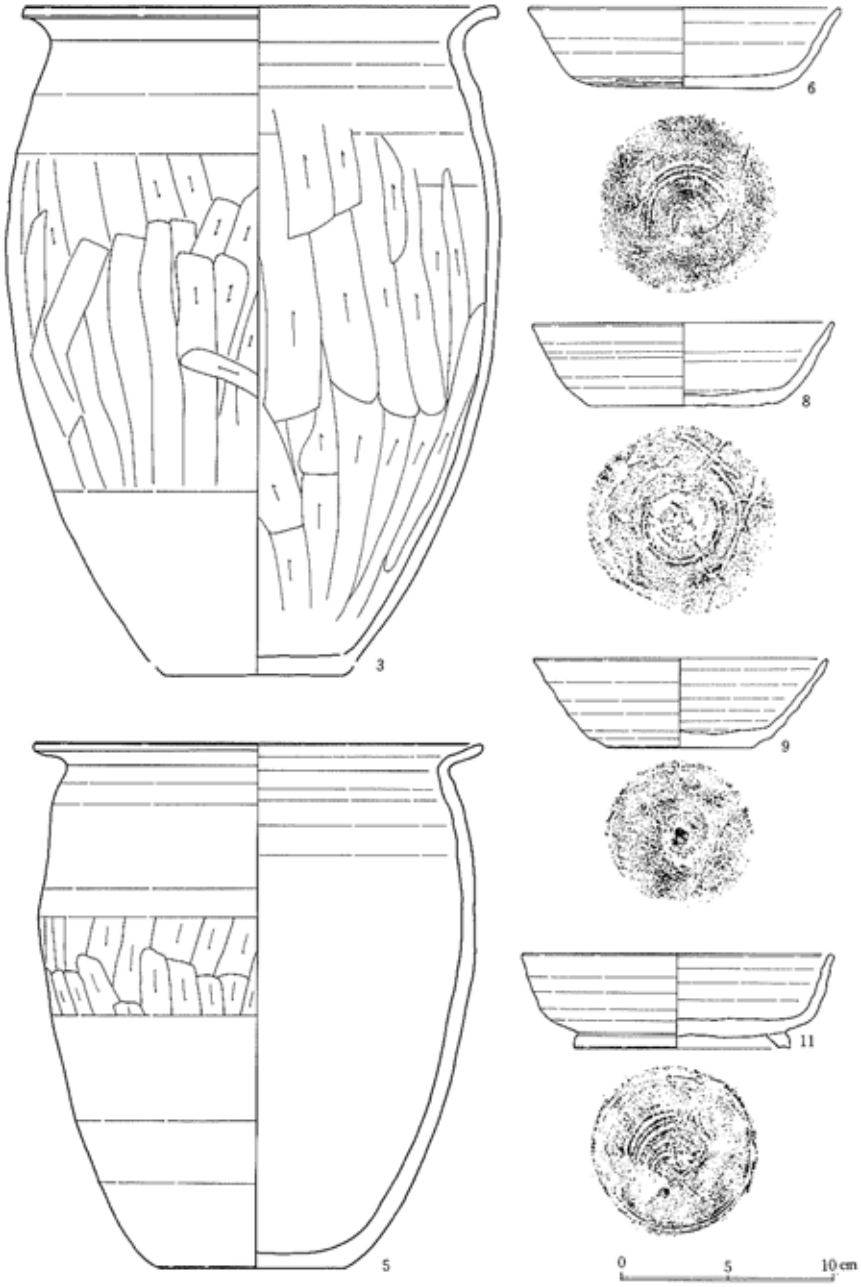
【溝】垂直下を全周する層溝と南面隅から延びる外延溝とがあり、カマドの部分は床面を外した段階で、その他の部分は床面を精査する段階で検出された。断面形はU字状で西壁から南壁にかけてはオーバーハングする部分もある。幅40～50㎝、深さは約10㎝ある。

【カマド】北壁中央部から検出され、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は住居北壁を掘り込

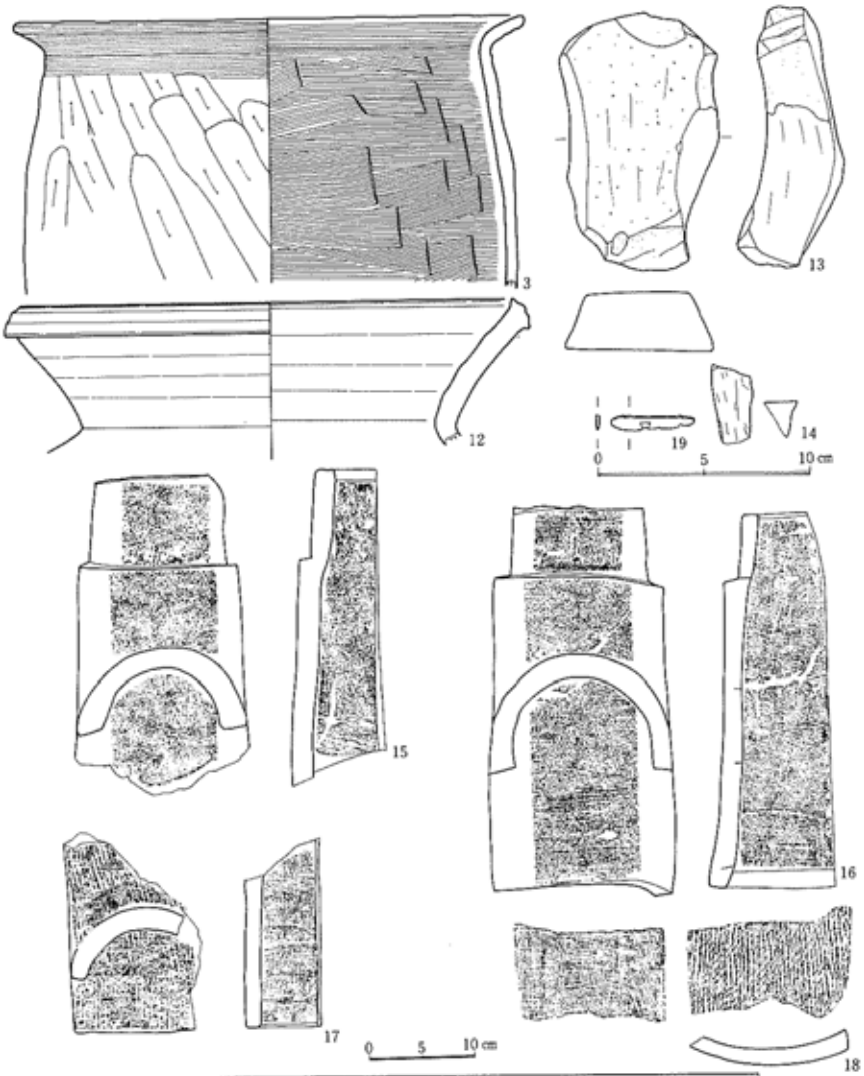


層No	土　　色	土 性	備　　考
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	
2	10YR4/4 褐色	シルト	地山のレキを多く含む
3	10YR2/3 黒褐色	シルト	焼土、木炭を多量に含む
4	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	
5	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	
6	7.5YR2/3黒褐色	シルト	焼土、木炭を多量に含む
7	10YR4/4 褐色	シルト	
8	10YR5/4 黄褐色	シルト	天井部のくずれ地山と同じ
9	10YR3/1 黒褐色	シルト	炭化物を含む
10	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物や焼土を多量に含む
11	7.5YR3/2黒褐色	シルト	炭化物多い

第103図　第108号住居跡と出土遺物（1）



第104図　第108号住居跡出土遺物（2）



No.	層位	器種・器形	分類	口径	底径	高さ	調整
1	床	土師器・坏	BⅡc	15.4	9.0	4.4	外：ロクロ＋回ケズリ？　内：ミガキ＋黒　底：不明＋回ケズリ
2	カマド	土師器・甕	BⅠa	22.3	8.5	31.7	外：ケズリ後ロクロ　内：ロクロ後ケズリ
3	2	土師器・甕	AⅠb	24.2			外：ヘラケズリ　内：ヘラナデ
4	カマド	土師器・甕	BⅠa	21.3	9.0	24.9	外：ケズリ後ロクロ　内：ロクロ
5	床	須恵器・坏	AⅡ	14.9	8.5	3.9	外：ロクロ＋回ケズリ　内：ロクロ　底：回糸＋回ケズリ
6	床	須恵器・坏	DⅡa	12.0	7.6	3.5	外：ロクロ＋回ケズリ　内：ロクロ　底：不明＋回ケズリ
7	カマド	須恵器・坏	BⅠb	16.3	8.7	3.9	内外：ロクロ　底：ヘラ切り
8	床	須恵器・坏	BⅠb	13.9	6.9	4.2	内外：ロクロ　底：ヘラ切り
9	床	須恵器・坏	BⅠb	14.6	8.0	4.6	内外：ロクロ　底：ヘラ切り　墨書あり
10	周溝	須恵器・高台坏		14.8	10.3	4.5	内外：ロクロ　底：回糸＋回ケズリ
11	2	須恵器・坏	BⅠb	15.8	9.2	4.2	内外：ロクロ　底：ヘラ切り
12	床	須恵器・甕		23.3			内外：ロクロ　器台として利用されていた

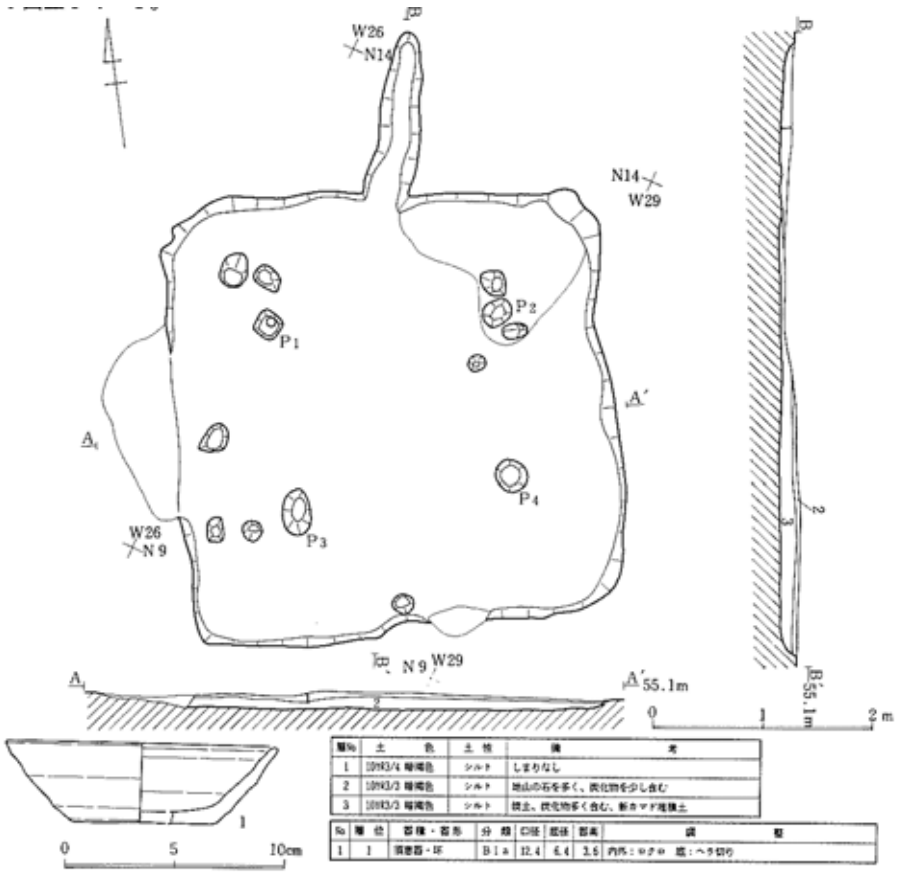
第105図　第108号住居跡出土遺物（3）

んでおり、側壁は地山を削り出し焚き口部に丸瓦を据え、それに粘土を貼り付けたと考えられる。底面からはカマドの湿気を除く施設として、焚き口部分に暗渠を設け、さらに燃焼部底面を掘り窪めて土器片を敷き詰め、その上に粘土を貼るという工夫が施されている。煙道部は長さ約1mあり、先端に直径約30㎝の煙出しピットが掘られている。

【柱穴】床面から5個(P1～5)、床面下から3個(P6～8)のピットが検出されP6～4は拡張後の、P6～8は拡張前の主柱穴であったと考えられる。

【床面の施設】カマド燃焼部右側から皿状に窪む落ち込みが検出され、位置的に貯蔵穴であった可能性もある。また北西隅からは須恵器甕の口縁部片が伏せた状態で置かれており、器台として利用されていたと考えられる。

【出土遺物】遺物には土師器(坏・甕)須恵器(坏・高台坏・甕)があり、住居床面やカマド底面下などから遺構に伴う遺物がまとまって出土している。13・14は砥石で前者は周溝から、後者は床面から出土している。13は4面の使用面が認められた。19は刀子状の鉄製品で1層から出土している。



層No	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	しまりなし
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	地山の石を多く、炭化物を少し含む
3	10YR3/3 暗褐色	シルト	焼土、炭化物多く含む、新カマド埋積土

No	層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	調整
1	1	須恵器・坏	B1a	12.4	6.4	3.5	内外：ロクロ　底：ヘラ切り

第106図　第109号住居跡と出土遺物

第109号住居跡（第106図）

【遺構の確認】北区北東隅のE25～31・N8～15付近に位置する。地山の岩盤上で確認された。

【平面形・規模】隅の丸い正方形を呈し、規模は一辺約3.9mである。

【堆積土】自然流入土で、全体に薄く堆積している。1・2は暗褐色のシルトで、2には地山の石が多く含まれる。3はカマド内の堆積土である。

【床面・壁】北東隅の部分は掘り方面に土を貼って、それ以外は地山面をそのまま床面としている。床面はほぼ平坦である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は保存のよい南壁で床面から約20㎝である。

【カマド】北壁中央部にあり、燃焼部の痕跡と考えられる焼面と煙道部が検出された。煙道部は長さ約1.6mあり、先端に向かって緩やかに上がる。

【柱穴】床面から15個のピットが検出され、柱痕跡の有無や位置からP1～4は主柱であったと考えられる。

【出土遺物】遺物は堆積土や床面から若干出土しているにすぎない。図示したものの他には土師器(坏・甕)須恵器(坏)があり、土師器坏には体部に手持ちヘラ削りの調整を持つものも含まれる。

第110号住居跡(第107図)

【遺構の確認】北区南東寄りのE11～17・S37～43付近に位置し、地山面の岩盤で確認された。

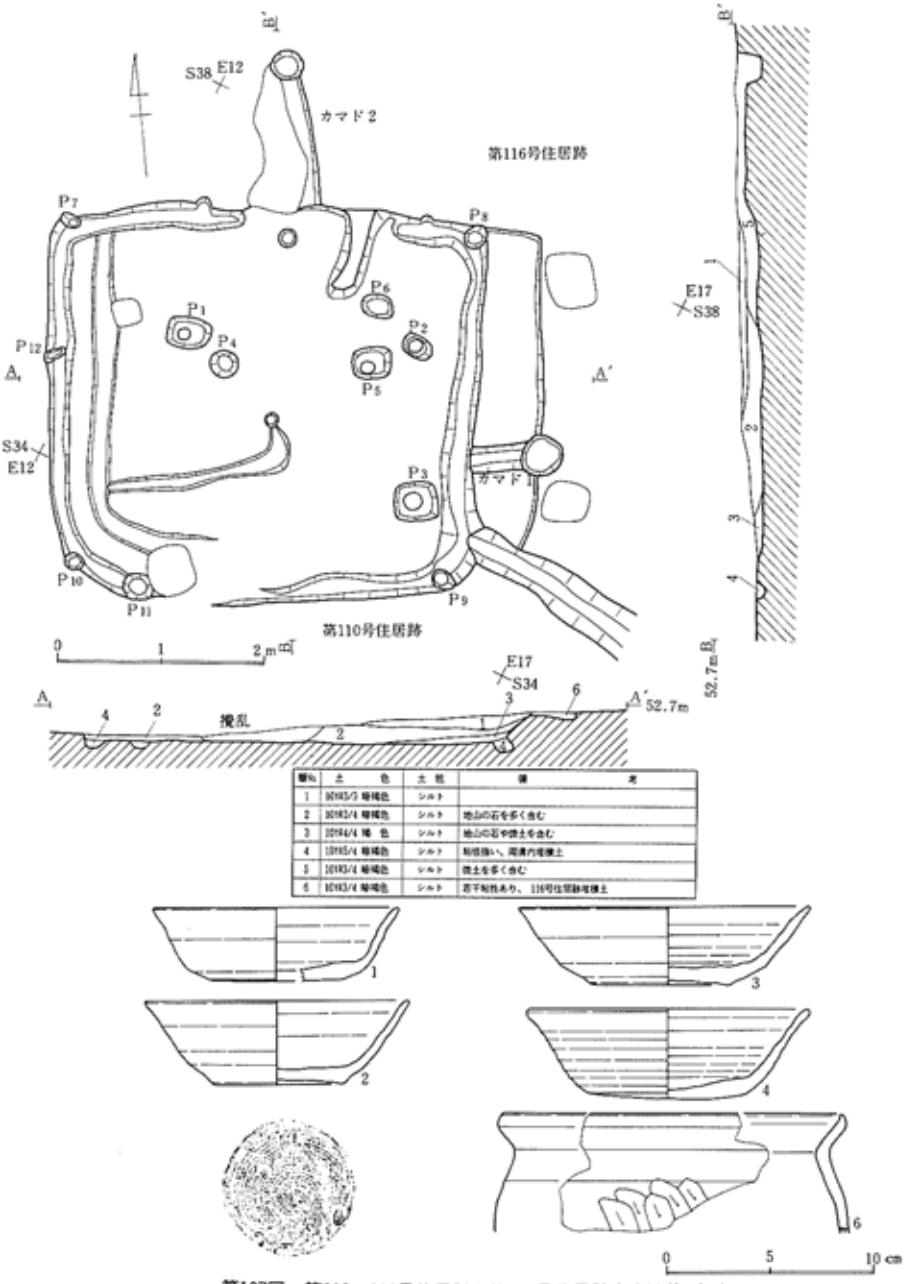
【重複】第116号住居跡を切り、第111号掘立柱建物跡に切られており、新旧関係は第116号住居跡→第110号住居跡→第111号となる。また、カマド、周溝の状況から改築が行われたと考えられる。

【平面形・規模】長方形を基調とし、南東隅と南西隅は丸味を帯びている。規模は南北軸約3.8m、東北軸約4.4mである。

【堆積土】自然流入土で、北東側が厚く南東に向かって薄くなっていく。1・2は暗褐色のシルトでともに粘土が強く、2には地山の石が多く含まれる。3は床面を直接覆う薄い層で炭化物や焼土を多く含む。

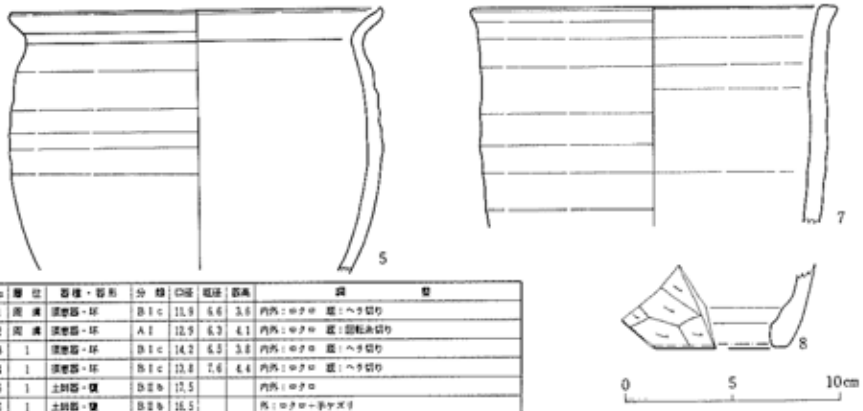
【床面・壁】地山面をそのまま床としている。床面はかなり凹凸があり、特に南東側は著しい。壁は周溝底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は保存のよい北壁で床面から15～30㎝ある。

【溝】壁直下を全周する周溝と外延溝とがある。さらに西壁側の部分では内側に巡る周溝が床面下から検出された。拡張前と拡張後の周溝と考えられる。規模は幅20～30㎝、深さ5～10㎝である。外延構は住居南東隅から南東に延びるもので長さは約11mもあり、底面は先端に向かって傾斜している。



層No.	土色	土質	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山の石を多く含む
3	10YR4/4 褐色	シルト	地山の石や焼土を含む
4	10YR3/4 暗褐色	シルト	粘性強い、周溝内埋積土
5	10YR3/4 暗褐色	シルト	焼土を多く含む
6	10YR3/4 暗褐色	シルト	若干粘性あり、116号住居跡埋積土

第107図　第110・116号住居跡と第110号住居跡出土遺物（1）



No	層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	調整
1	周溝	須恵器・坏	B I c	11.9	6.6	3.6	内外：ロクロ　底：ヘラ切り
2	周溝	須恵器・坏	A I	12.9	6.3	4.1	内外：ロクロ　底：回転糸切り
3	1	須恵器・坏	B I c	14.2	6.3	3.8	内外：ロクロ　底：ヘラ切り
4	1	須恵器・坏	B I c	13.8	7.6	4.4	内外：ロクロ　底：ヘラ切り
5	1	土師器・甕	B II b	17.5			内外：ロクロ
6	1	土師器・甕	B II b	16.5			外：ロクロ→手ケズリ
7	1	須恵器・甕		17.0			外：ロクロ→ケズリ　無釉

第108図　第110号住居跡出土遺物（２）

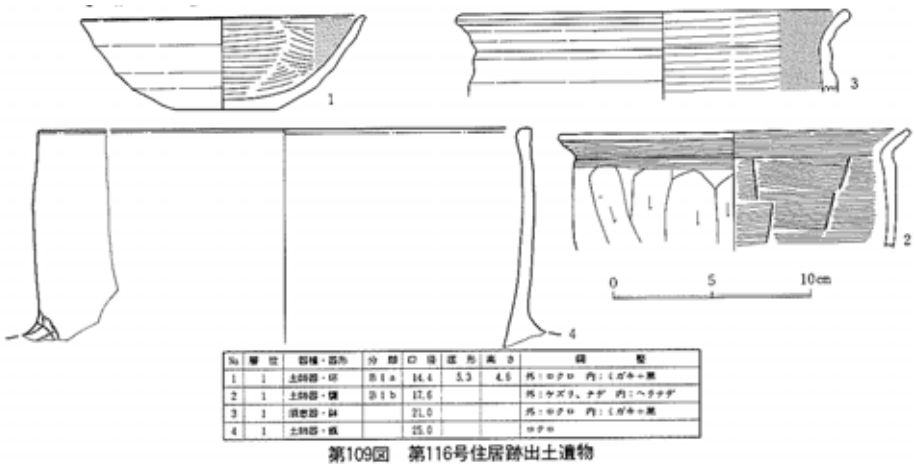
【カマド】東壁南寄り（カマド1）と北壁中央(カマド2)の2つが検出された。カマド1は煙道と煙出しピットのみ残存し、燃焼部は破壊されている。カマド2は燃焼部と煙道部からなるが、左側の部分は撹乱を受けている。燃焼部の側壁は粘土を積み上げて作られている。また、底面からはカマドの湿気を除く施設として、燃焼部底面に暗渠が設けられている。煙道部は長さ約1.2mあり、先端に直径約30cmの煙出しピットが掘られている。

【柱穴】床面から6個のピットが検出され、 P1～3は柱痕跡の有無や配置からの主柱であったと考えられる。また、住居の四隅(P7～ P10)と東壁以外の壁から壁柱穴(P11,12)が検出された。また、 P5・6は拡張前の柱穴と考えられる。

【出土遺物】堆積土、周溝、外延構から土師器(甕)須恵器(坏・蓋・甕)が出土している。しかし当初の段階では第116号住居跡との重複が確認出来なかったため、堆積土出土の遺物は遺構への帰属が不明なものもある。

第116号住居跡(第107図)

【遺構の確認】北区南東寄りのE15～17・S38～41付近に位置し、地山面の岩盤で確認された。



No	層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	調整
1	1	土師器・坏	B I a	14.4	5.3	4.6	外：ロクロ　内：くガキ→黒
2	1	土師器・甕	B I b	17.6			外：ケズリ、ナデ　内：ヘラナデ
3	1	須恵器・鉢		21.0			外：ロクロ　内：くガキ→黒
4	1	土師器・甕		25.0			ロクロ

第109図　第116号住居跡出土遺物

【重複】住居の大部分が第110号住居跡に切られており、これよりも古い。

【平面形・規模】北壁から東壁にかけての一部が検出されたのみであるが、残存する部分から方形を基調とすると考えられる。現存する部分は北壁50㎝東壁30㎝ある。

【堆積土】暗褐色のシルトが一層認められた。

【床面・壁】地山面をそのまま床としており、ほぼ平坦である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約10㎝ある。カマド、柱穴、他の施設などはいずれも検出されなかった。

【出土遺物】当初の段階では第110号住居跡との重複が確認できなかったため、第116号住居と110号住居との分離がされずに取り上げられたものもある。

第111号住居跡(第110図)

【遺構の確認】北区ほぼ中央のW10～14・S12～15付近に位置する。地山のローム面で検出された。

【平面形・規模】北壁から東壁にかけての一部が検出されたのみであるが、残存する部分から方形を基調とすると考えられる。現存する部分は北壁3.2m東壁2.1mある。

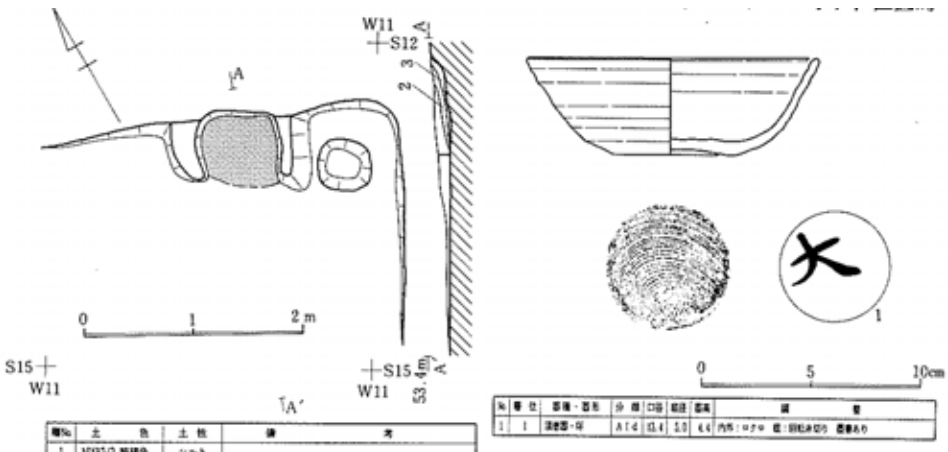
【堆積土】全体的に保存が悪く、暗褐色のシルトが一層認められたのみである。

【床面・壁】地山面をそのまま床としており、ほぼ平坦である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は保存のよい北東隅で床面から約15㎝ある。

【カマド】北壁から検出された。燃焼部のみ残存する。側壁は粘土を積み上げて構築している。底面には立石があり支脚として使われたと考えられる。

【柱穴】床面からはピット等は検出されず、柱穴については不明である。

【床面の施設】カマドの右側には直径約45㎝、深さ約15㎝の円形のピットがあり、位置的



No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山ブロックを多量に含む、カマド内堆積土
3	10YR2/3 黒褐色	シルト	木炭、焼土を多量に含む、カマド内堆積土

No.	層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	調整
1	1	深鉄器・坪	A I d	13.4	5.0	4.4	内形：ロクロ 底：回転糸切り 墨書あり

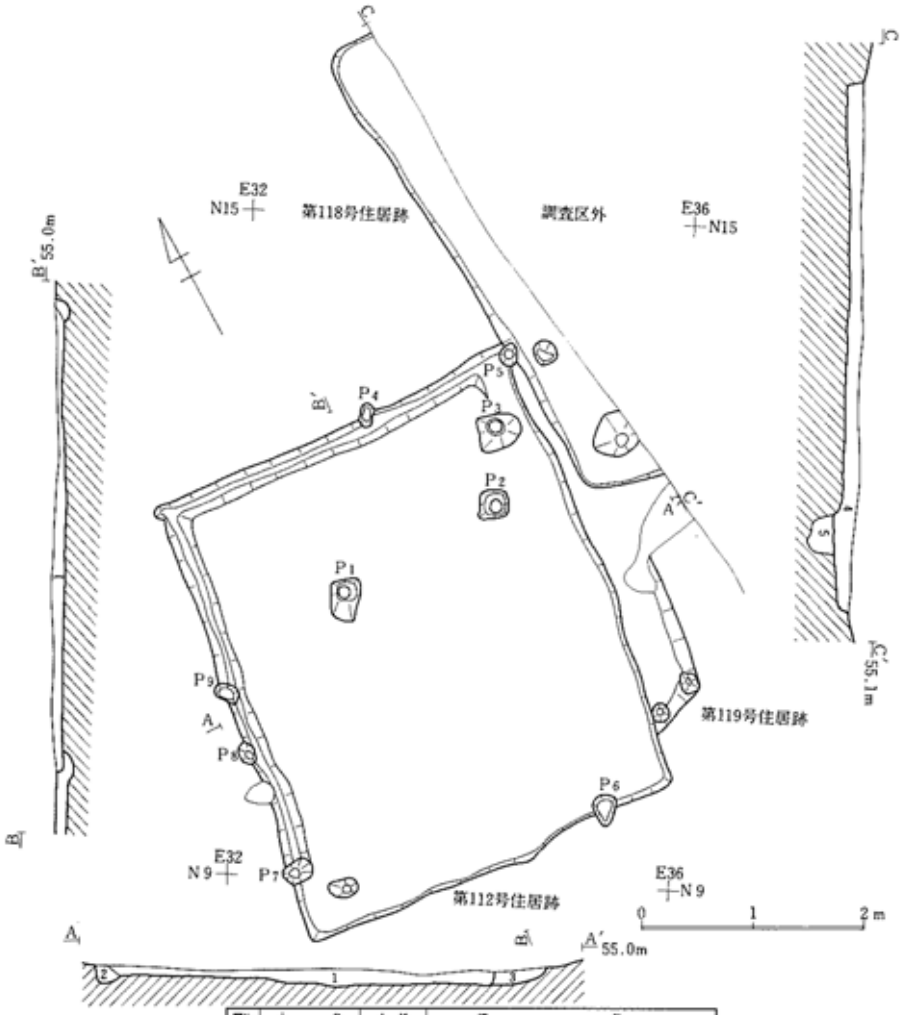
第110図　第111号住居跡出土遺物

に貯蔵穴であると考えられる。

【出土遺物】堆積土中から若干出土しているにすぎない。図示したものの他には回転糸切りで無調整の土師器坏の低部やロクロを使用した甕の小片がある。

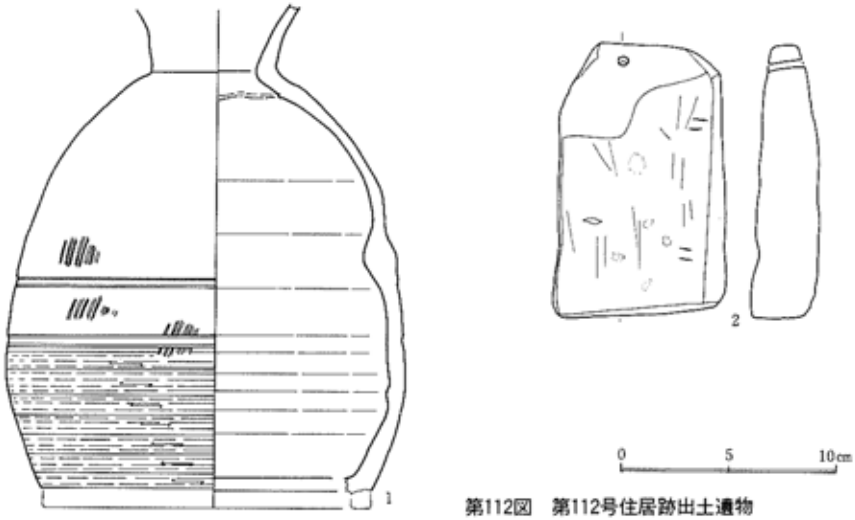
第112号住居跡(第111図)

【遺構の確認】北区北東隅のE31～35・N8～14付近に位置し、地山面の岩盤で確認された。



層No	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	灰白色火山灰を含む、112号住居跡堆積土
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	112号住居跡周溝内堆積土
3	10YR2/3 黒褐色	シルト	119号住居跡堆積土
4	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山粒多く混入　118号住居堆積土
5	10YR2/3 黒褐色	シルト	118号住居ピット堆積土

第111図　第112・118・119号住居跡出土遺物



第112図　第112号住居跡出土遺物

【重複】第113・117・119号住居跡をそれぞれ切っており、これも新しい。

【平面形・規模】長正方形を呈し、規模は南北軸約4.2m、東西軸約3.6mである。

【堆積土】暗褐色のシルトが一層認められたのみである。灰白色火山灰をブロック状に含む。

【床面・壁】地山面をそのまま床としており、凹凸がある。壁は床面や周溝底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は保存のよい東壁で床面から約15㎝ある。

【溝】西壁と北壁の壁直下から周溝が検出された。規模は幅20～30㎝、深さ5～10㎝である。

【カマド】床面からカマドに使用したと考えられる焼石が出土している他、焼面などの痕跡は認められなかったが、東壁南東隅近くから比較的多く炭化物の分布がみられたことから、本来この付近にあったと考えられる。

【柱穴】床面から3個(Ｐ1～3)のピットが検出されＰ1・2は柱痕跡や配置から主柱であったと考えられる。また、北東隅･北西隅や各壁からは壁柱穴(Ｐ4～Ｐ9)が検出されている。

【出土遺物】遺物は堆積土や床面から少量出土している。図示したものの他に須恵器坪、土師器(坏･甕)があり、特に須恵器坏の底部はすべて回転糸切りによるものである。2は砥石で床面から出土した、使用面は6面認められた。

第118図第112号（第111図）

【遺構の概要】北区北東隅のＥ32～36・N12～17付近の地山ローム面で確認されたのは西壁から南・北壁にかけての一部のみで、住居の大部分は調査区外へと続く。平面形は残存する部分から方形を基調とすると考えられ、西壁の長さは4.6mある。壁は床面からほ

ぼ垂直に立ち上がり、壁高は約10㎝ある。床面からは2つのピットが検出された他にはカマド、柱穴、他の施設などはいずれも認められなかった。遺物は立師器甕の小片が出土しているのみで図示できるものはない。

第119号住居跡（第111図）

【遺構の概要】北区北東隅のE35～36・N10～13付近の地山ローム面で確認された。第112号住居跡に大部分が切られており、検出されたのは南東隅の一部のみである。平面形は残存する部分から方形を基調とすると考えられるが、規模等については不明である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約15㎝ある。床面からはカマド、柱穴、他の施設などはいずれも認められなかった。遺物は出土していない。

第113号住居跡（第113図）

【遺構の確認】北区北東隅のE32～36・N5～10付近に位置し、地山面の岩盤で確認された。

【重複】第117号住居跡を切り、かつ、第112号住居跡に切られている。したがって新旧関係は第117号住居跡→第112号住居跡→第112号住居跡となる。

【平面形・規模】ほぼ長正方形を呈し、規模は南北軸約3.0m、東西軸約3.2mである。

【堆積上】暗褐色のシルトが住居全体に堆積している。

【床面･壁】住居の南東側は地山面をそのまま床とし、それ以外の部分は掘り方面に土を貼って床面としている。ほぼ平坦で、中央部は若干高くなっている。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる部分(東～北壁)と緩やかに立ち上がる部分(西～南壁)とがある。壁高は保存のよい南西隅付近で約20㎝ある。

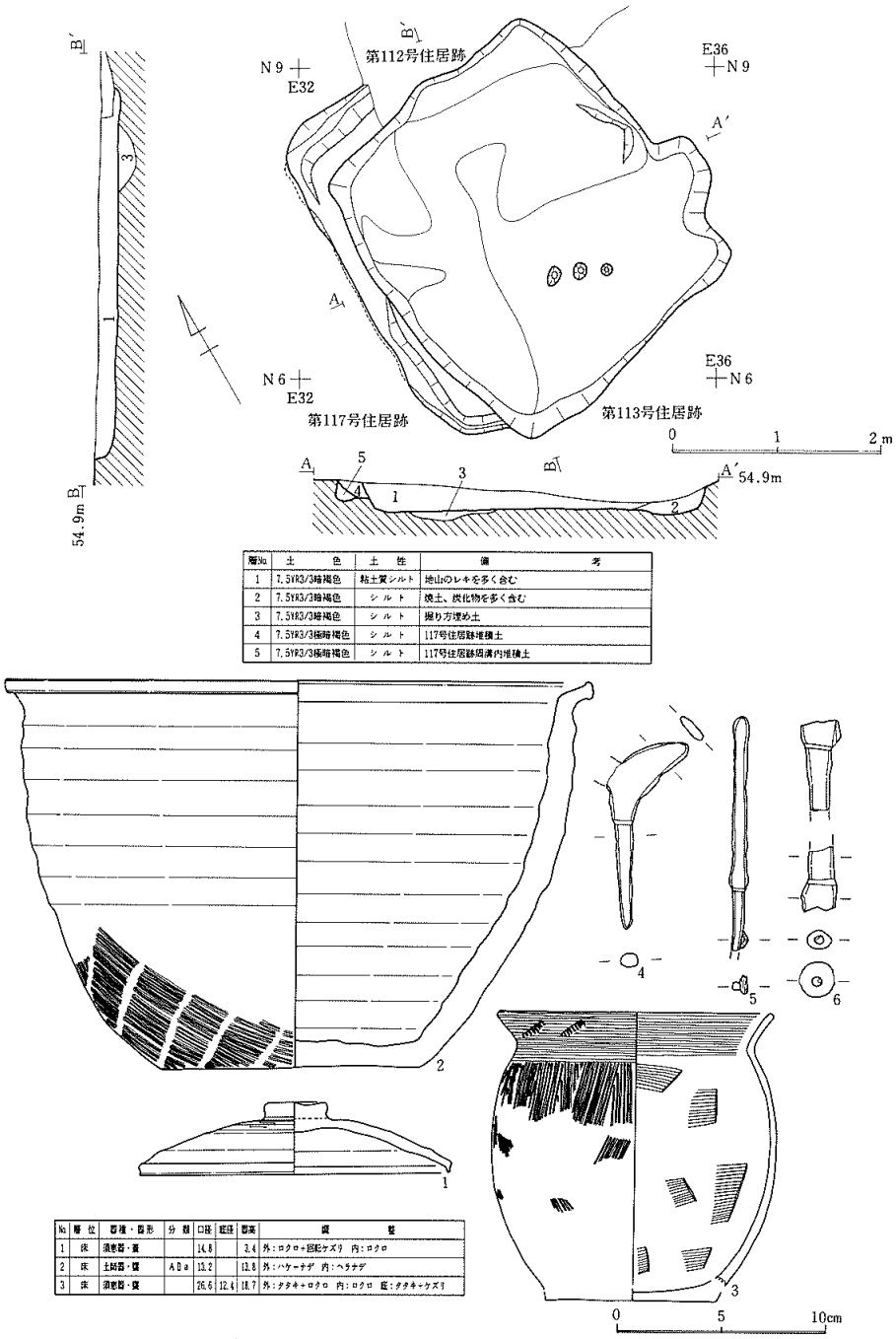
【カマド】東壁南よりの位置にあり、燃焼部のみ検出された。燃焼部は住居東壁を掘り込んでおり、側壁は地山を削り出しそれに粘土を貼り付けて作っている。

【柱穴】床面から3個のピット等が検出されたが、どれからも柱痕跡等は認められず柱穴は不明である。

【出土遺物】床面から須恵器(蓋・甕)、土師器甕などが出土しており、2は床面に伏せた状態で出土した。また、図示したものの他に須恵器坏、土師器(坏、甕)があり、須恵器坏には回転糸切り、土師器坏には回転ヘラ削りを施した底部破片が認められる。4は雁又式の鉄鏃で鏃身の半分を欠く。5は鉄鏃、6は管状の鉄製品である。

第117号住居跡(第113図)

【遺構の確認】北区北東隅のE32～34・N5～9付近に位置し、地山面の岩盤で確認された。



層No.	土色	土性	備考
1	7.5YR3/3暗褐色	粘土質シルト	地山のレキを多く含む
2	7.5YR3/3暗褐色	シルト	焼土、炭化物を多く含む
3	7.5YR3/3暗褐色	シルト	掘り方埋め土
4	7.5YR3/3極暗褐色	シルト	117号住居跡堆積土
5	7.5YR3/3極暗褐色	シルト	117号住居跡周溝内堆積土

No.	層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	備整
1	床	須恵器・蓋		14.8		2.4	外：ロクロ＋回転ケズリ　内：ロクロ
2	床	土師器・甕	A D a	13.2		13.8	外：ハケーナデ　内：ヘラナデ
3	床	須恵器・甕		26.6	12.4	18.7	外：タタキ＋ロクロ　内：ロクロ　底：タタキ＋ケズリ

第113図　第113・117号住居跡と第113号住居跡出土遺物

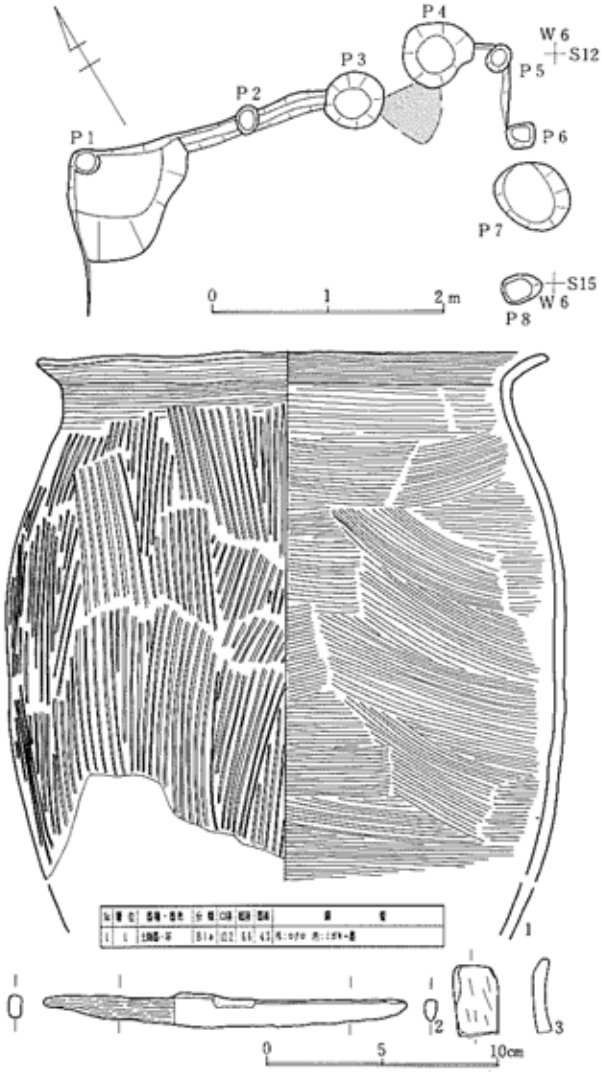
【重複】第112号住居跡、第113号住居跡に切られており、これらよりも古い。

【平面形・規模】西壁と南壁・北壁の一部が検出されたのみであるが、平面形は残存する部分から南北約3.5mある。

【堆積土】暗褐色のシルトが床面や周溝内に堆積している。

【床面・壁】壁は周溝底面かほぼ垂直に立ち上がり、西側の一部ではオーバーハングする部分も認められる。壁高は約10～20㎝ある。床面はわずかに残存するのみで不明な点が多く、カマド、柱穴、他の施設などはいずれも検出されなかった。

【溝】壁直下に周溝が巡る。幅20～30㎝、深さ5～10㎝である。



第114図　第114号住居跡と出土遺物

【出土遺物】堆積土から土師器甕の小片がわずかに出土しているのみで図示できるものはない。

第114号住居跡（第114図）

【遺構の確認】北区のほぼ中央W6～10・S12～15付近に位置し、地山ローム面で確認された。

【平面形・規模】南側の大部分は削平され北壁と西壁・東壁の一部が検出されたのみであるが、平面形は残存する部分から方形を基調とすると考えられる。現存する部分は東西約4.0mある。

【堆積土】暗褐色のシルトが床面や周溝内にわずかに堆積している。

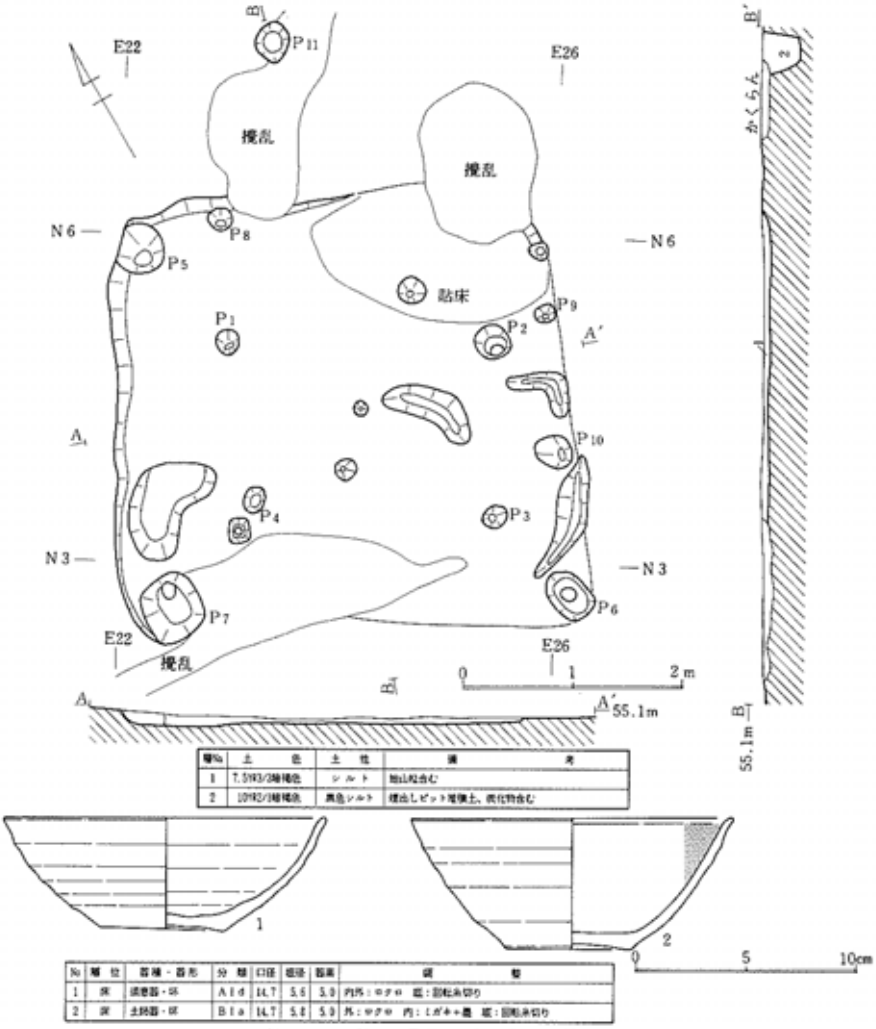
【床面・壁】地山面を床としている。床面は比較的凹凸がみられその高低差は約10㎝ほどある。壁は床面や周溝底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約5㎝である。

【溝】北壁直下の一部に周溝が認められた。幅約20㎝、深さ5～10㎝ある。

【カマド】北東隅近くの床面から焼け面が検出されており、燃焼部の痕跡と考えられる。

【柱穴】北東隅・北西隅と北壁・東壁からピットが検出され、P6・8は壁柱であった可能性がある。

【出土遺物】図示したものの他に土師器(坏・甕)、須恵器(坏・甕)があり、土師器坏には手持ヘラ削りや回転ヘラ削りの調整をもつ底部破片が、須恵器坏には回転糸切りの底部破片が



層No	土色	土性	備考
1	7.5YR3/3暗褐色	シルト	地山粒含む
2	10YR2/3暗褐色	黒色シルト	焼出しピット堆積土、炭化物含む

No	層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	調整
1	床	須恵器・坏	A I d	14.7	5.6	5.0	内外：ロクロ 底：回転糸切り
2	床	土師器・坏	B I a	14.7	5.8	5.0	外：ロクロ 内：ミガキ+墨 底：回転糸切り

第115図　第120号住居跡と出土遺物

それぞれ認められる。2は刀子で1層から出土した。ほぼ完形で、棟関である。茎には木質が付着している。3は砥石で1層から出土した、使用面は4面認められる。

第120号住居跡(第115図)

【遺構の確認】北区の北東隅E22～26・N2～7付近に位置し、地山面の岩盤で確認された。

【平面形・規模】住居の北東隅や南壁に撹乱を受けているが、平面形は残存する部分から隅の丸い正方形を基調とすると考えられる。規模は一辺約4.2mある。

【堆積上】残存状況が悪く地山の石を多く含む暗褐色シルトが薄く堆積しているのみである。

【床面・壁】住居の北東側は掘り方面に土を貼って、それ以外の部分は床面をそのまま床としている。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は保存のよい部分でも約10cmである。

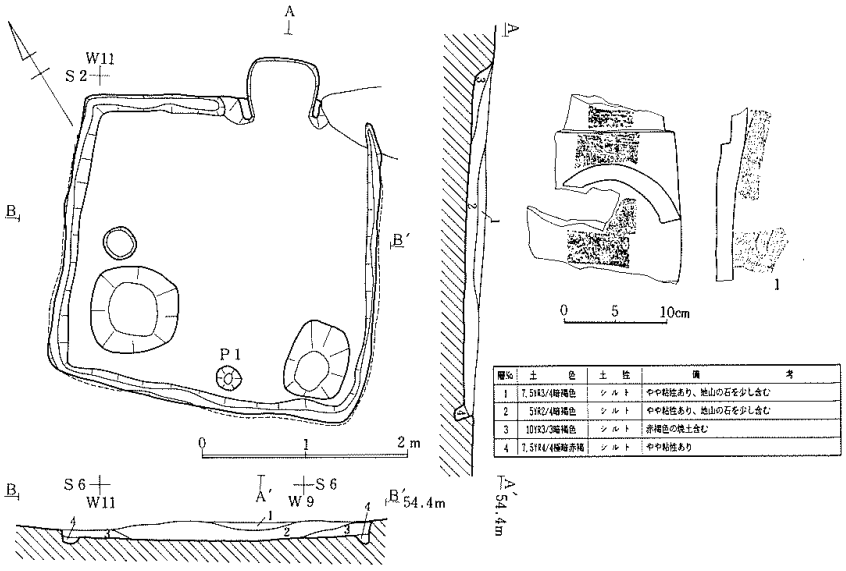
【溝】東壁の壁際や床面の中央に溝状の落ち込みが認められた。幅約20cm、深さ約15cmある。

【カマド】北壁の中央部の床面から炭化物が多く検出され、またここから約1.4m離れた位置には直径約30cmの炭化物が多く入った煙出しと考えられるピット(P11)が検出され、本来はこの部分にカマドがあったと考えられる。

【柱穴】床面から多数のピットが検出され、これらの中でP1～4は柱痕跡の有無や配置から主柱であったと考えられる。また、住居の四隅付近と東壁・北壁から壁柱穴が検出されている。

【出土遺物】図示したものの他に堆積土から土師器(坏・甕)、須恵器(坏・甕)が出土している。

第122号住居跡（第116図）



層No	土色	土性	備考
1	7.5YR3/4暗褐色	シルト	やや粘性あり、地山の石を少し含む
2	5YR2/4暗褐色	シルト	やや粘性あり、地山の石を少し含む
3	10YR3/3暗褐色	シルト	赤褐色の焼土含む
4	7.5YR4/4暗赤褐	シルト	やや粘性あり

第116図　第122号住居跡と出土遺物

【遺構の確認】北区の北西寄りW8～12・S2～6付近に位置し、地山ローム面で確認された。

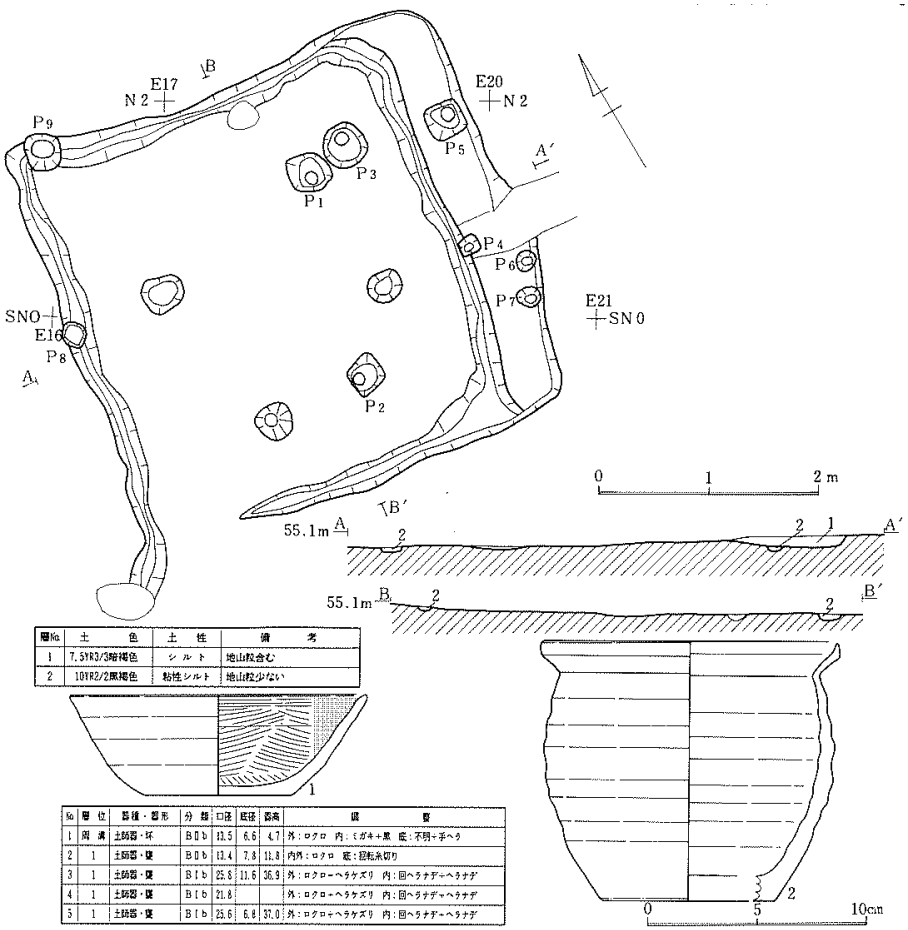
【平面形・規模】正方形を呈し、規模は一辺約3.0mある。

【堆積土】自然流入土でレンズ状に堆積する。

【床面・壁】床面をそのまま床としている。ほぼ平坦で南西隅に向かって緩やかに傾斜する。壁は周溝底面からほぼ垂直に立ち上がり、北壁以外はオーバーハングする部分もみられる。壁高は保存のよい西壁で床面から約20cmある。

【溝】垂直下を全周する周溝が検出された。断面形は状を呈し、規模は幅約20cm、深さ約15cmある。

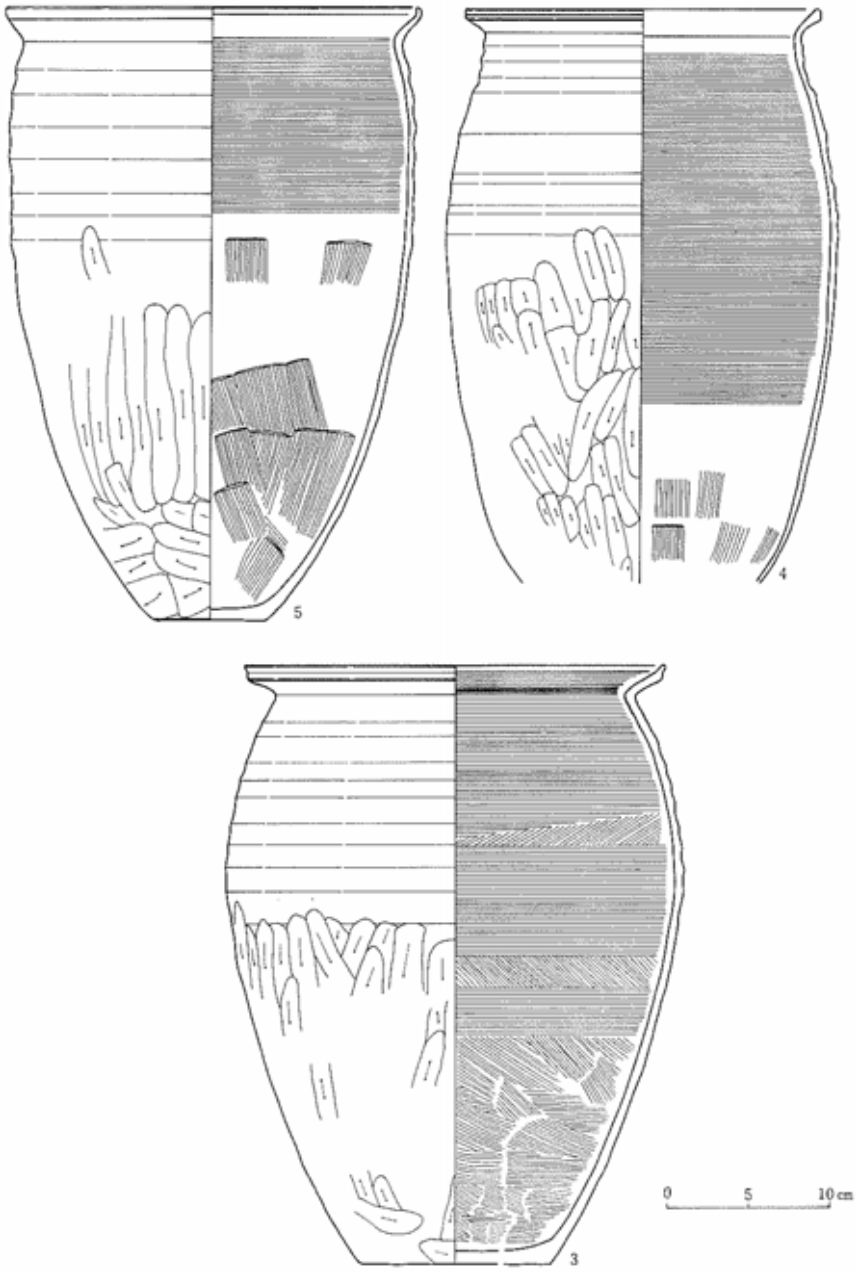
【カマド】北壁東寄りにあり、燃焼部は住居北壁を掘り込んで作られている。側壁は地山を削り出し、焚き口の部分は粘土を積み上げて構築している。また床面や堆積中からは瓦の破片が出土しており、カマドの部材として使用されたと考えられる。煙道部は検出されなかった。



層No.	土色	土性	備考
1	7.5YR3/3暗褐色	シルト	地山粒含む
2	10YR2/2黒褐色	粘性シルト	地山粒少ない

No	層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	調整
1	周溝	土師器・坏	BⅡb	12.5	6.6	4.7	外：ロクロ 内：ミガキ＋黒 底：不明＋手ヘラ
2	1	土師器・甕	BⅡb	12.4	7.8	11.8	内外：ロクロ 底：糸切り
3	1	土師器・甕	BⅠb	25.8	11.6	36.9	外：ロクロ＋ヘラケズリ 内：回ヘラナデ＋ヘラナデ
4	1	土師器・甕	BⅠb	21.8			外：ロクロ＋ヘラケズリ 内：回ヘラナデ＋ヘラナデ
5	1	土師器・甕	BⅠb	25.6	6.8	37.0	外：ロクロ＋ヘラケズリ 内：回ヘラナデ＋ヘラナデ

第117図　第123号住居跡と出土遺物（1）



第118図　第123号住居跡と出土遺物（2）

【柱穴】床面から2つのピットが、床面下から皿状に窪む落ち込みが検出されたが、柱痕跡等も認められず柱穴と断定できるものはない。しかし、Ｐ・はカマドの軸線上に位置し計画的に配置されたと考えられ,柱穴の可能性がある。

【出土遺物】瓦以外には土師器の小片が数点出土しているにすぎない。

第123号住居跡(第118図)

【遺構の確認】北区の北東寄りＥ15～21・Ｓ3～N3付近に位置する。削平が著しく、地山ローム面で残存する周溝によって確認された。

【重複】他の遺構との重複は認められないが、柱穴や壁の状況から立て替えが行われたと考えられる。

【平面形・規模】改築前はほぼ正方形を呈し、規模は一辺約3.8mある。改築後は東壁を約60㎝奥に作りかえ拡張しているため長方形を呈し、規模は東西軸約4.4m、南北軸約3.8mある。

【堆積土】拡張後の住居に暗褐色のシルトが若干堆積する他は周溝内に黒褐色のシルトが認められるのみである。

【床面・壁】地山面をそのまま床としている。全体的に撹乱を受けているため凹凸が著しい。壁は拡張後の住住居の東壁と北壁・南壁の一部が検出されたのみである。床面から緩やかに立ち上がり、壁高は保存のよい部分で床面から約10㎝ある。

【溝】拡張前の住居から全周する周溝が検出され、南東隅から外延構となり約1m延びる。断面形は逆台形を呈し、幅は20～30㎝深さ約5㎝ある。

【カマド】検出されなかった。

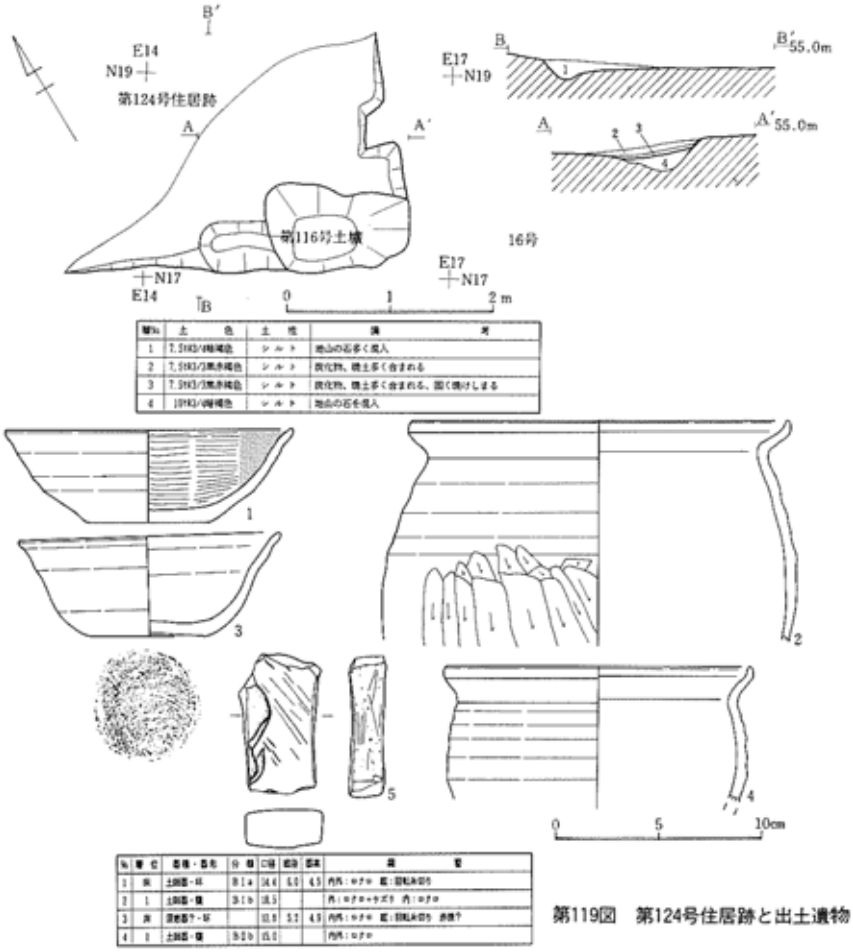
【柱穴】床面から７つのピットが検出され，柱痕跡や配置からＰ1・2には拡張前の、Ｐ3～5は拡張後の主柱穴と考えられる。また、東壁と西壁の際からはピットが検出されており、(Ｐ4は拡張前のＰ5～8は拡張後の壁柱穴であったと考えられる。

【出土遺物】周溝や堆積土中から土土師器(坏・甕)須恵器(坏・甕)が出土している。図示した他には回転糸切りで未調整の土師器坏底部や回転ヘラ切りによる須恵器坏底部などがみられる。

第124号住居跡（第119図）

【遺構の確認】北区の北隅Ｅ13～17・N17～20付近に位置する。地山のローム面で確認された。

【重複】南東隅の部分が第116号土壙によって切られており、これよりも古い。



第119図　第124号住居跡と出土遺物

【平面形・規模】北側の大部分は削平され南壁と東壁の一部が検出されたのみであるが、平面形は残存する部分から方形を基調とすると考えられる。現存する部分は東西約3.3m、南西約2.1mである。

【堆積土】住層の壁際に暗褐色のシルトが若干堆積するのみである。

【床面・壁】地山面をそのまま床としている。壁は床面から緩やかに立ち上がり、壁高は保存のよい部分で床面から約10㎝ある。

【溝】南壁の直下から溝状の落ち込みが検出されたが、残存する部分が少なく性格などは不明である。断面形はU字状を呈し、幅は約40㎝深さ約10㎝ある。

【カマド】東壁近くの床面から焼面があり、それを取り囲むように炭化物の広がりが認めら

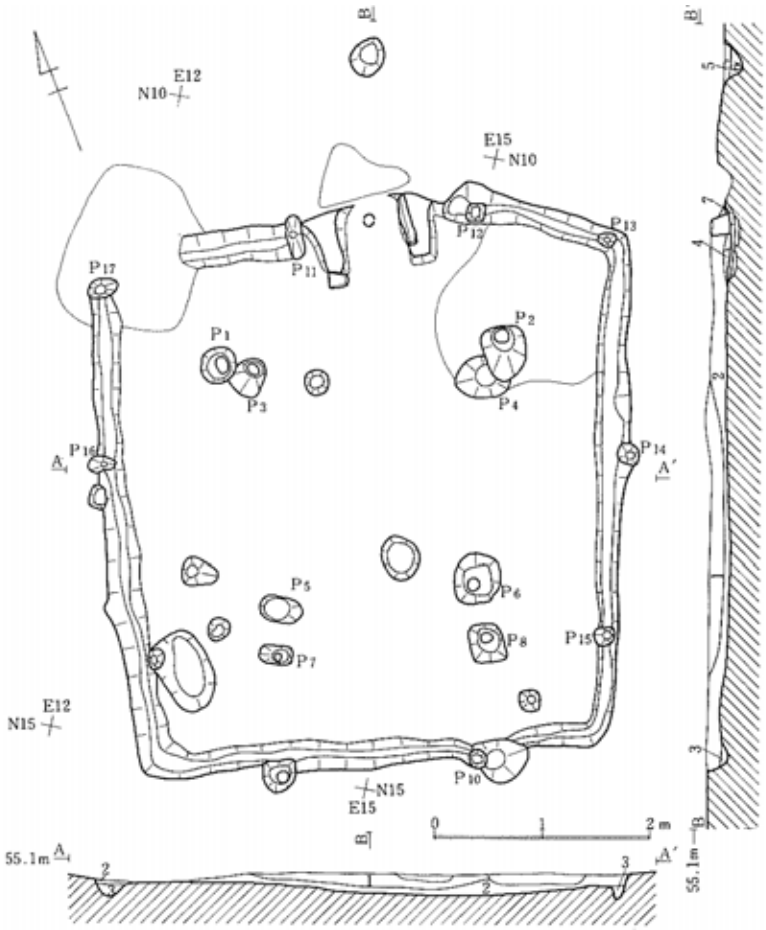
れることからこの位置にカマドがあったと考えられる。また、床面を外した段階で、焼面の下から楕円形の落ち込みが検出された。湿気防止の施設であった可能性がある。

【出土遺物】床面や堆積土中から土師器(坏・甕)須恵器(坏・甕)が出土している。5は砥石で1層から出土した。使用面は4面認められる。

第125号住居跡(第120図)

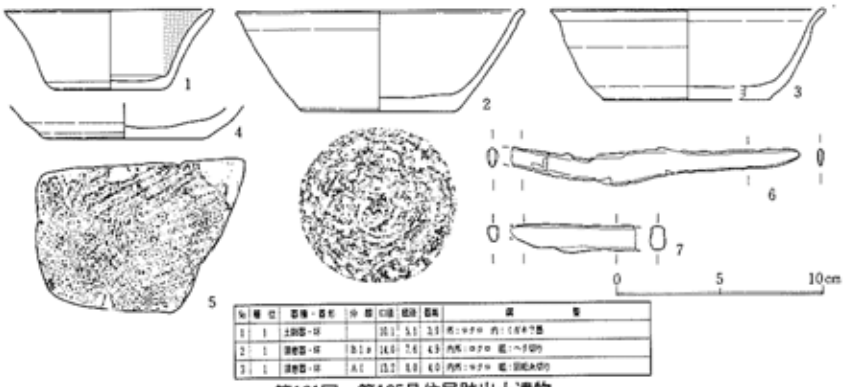
【遺構の確認】北区の北東E11～17・N3～11付近に位置する。地山面の岩盤で検出された。

【重複】北西隅に撹乱を受けているほかは他の遺構との重複は認められないが、カマドや柱穴の状況から立て替えが行われたと考えられる。



層No	土色	土性	備考
1	10YR3/0暗褐色	シルト	
2	10YR3/0暗褐色	シルト	地山の石を少し含む
3	10YR3/0暗褐色	シルト	やや粘性あり、地山の石を少し含む
4	10YR3/4暗赤褐色	シルト	やや粘性あり、炭化物少し含む
5	10YR3/2暗褐色	シルト	やや粘性あり、炭化物多く含む

第120図　第125号住居跡



第121図　第125号住居跡出土遺物

【平面形・規模】北壁の長い等脚台形を呈し、規模は南北軸約5.2m、南壁約4.3m、北壁4.9mある。

【堆積土】自然流入土でレンズ状の堆積状況が認められる。全体的に暗褐色のシルトが堆積している。

【床面・壁】北東隅付近は掘り方面に土を貼って、それ以外の部分は地山面をそのまま床としている。比較的凹凸があり、壁際が高く中央部が低くなっている。壁は周溝底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は保存のよい西壁で床面から約20㎝ある。

【溝】カマドの部分を除き垂直下を全周する周溝が検出された。断面形はU字状を呈し、幅は20～30㎝深さ5～10㎝ある。

【カマド】北壁中央部にあり、燃焼部と煙出しピットが検出された。側壁は床面を若干掘り窪め凝灰岩の切り石を据えて、それに粘土を貼り付けて構築している。底面中央には支脚として土師器の甕が倒位に置かれていた。煙出しピットは奥壁から約1.3m北側にあり、直径約30㎝、深さ約15㎝である。また、床面を外した段階で、左右の側壁から約30㎝西側からそれぞれ小ピットが検出され、位置的のカマドの焚き口部にあたることから、古い段階のカマドの側壁を作るために石を据えたピットであったと考えられる。

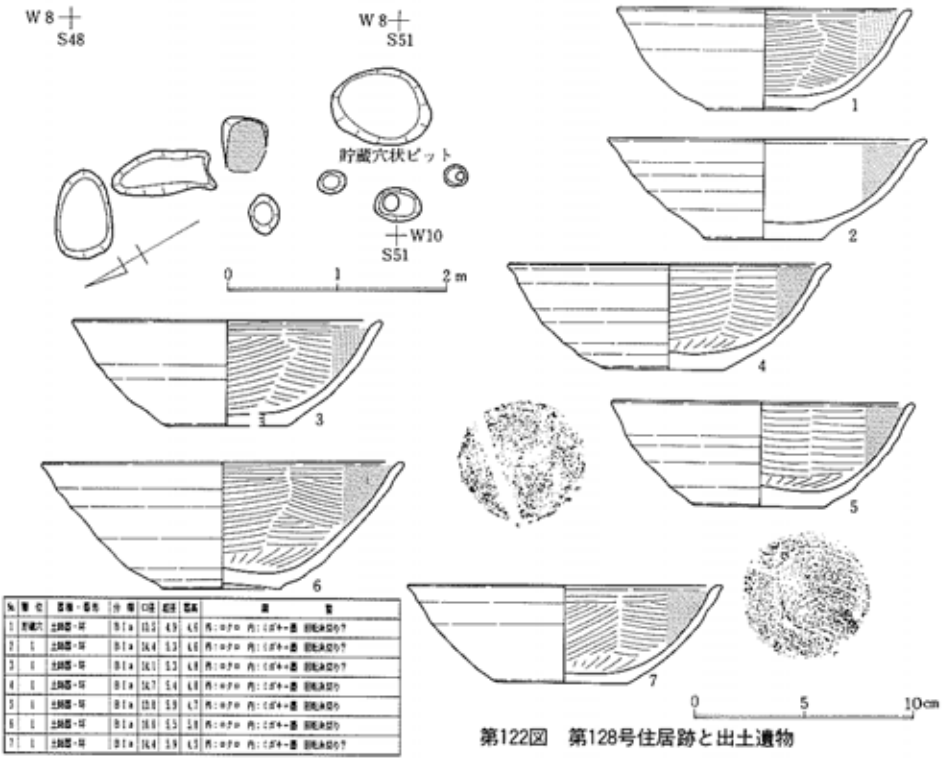
【柱穴】床面から13のピットが検出された。これらの中でP1～8は柱痕跡や配置からは2時期分の主柱穴と考えられる。これらの中でP1・2はP3・4を切っており、改築後の柱穴と思われる。P5～8の新旧関係は切り合いからは不明であるがP1・2・7・8は改築後の、P3・4・5・6・9・10は改築前の主柱穴と考えられる。北東と北西の各隅やすべての壁からは壁柱穴(P11～17)が検出されている。

【出土遺物】床面や堆積土中から土師器（坏・甕）須恵器(坏・高台坏・甕・蓋・壷)が出土しているが図化できるものは少ない。図示したものの他には手持ち削りを持つ土師器坏底部や回転ヘラ切りによる須恵器坏底部などがみられるが、回転糸切りの須恵器坏は出土していな

い。5は須恵器甕の体部破片を利用した砥石である。6は刀子で床面から出土した。茎と関の一部を欠く。7は刀子の破片で周溝から出土した。

第128号住居跡（第122図）

【遺構の概要】北区の中央南よりW8～10・S48～52付近の地山ローム面で焼面とそれに隣接して土師器坏を多く出土した土壙が検出されており、それぞれカマドの痕跡と貯蔵穴と考えられることから、本来的には住居があった可能性がある。残存するのは前述した部分のみで、平面形や規模、床面の状態等については不明である。貯蔵穴は90×70㎝の楕円形を呈し深さは約10㎝で、底面から重なりあった状態で土師器坏が出土した。



No.	番 位	器種・器形	分 類	口径	底径	器高	備	考
1	貯蔵穴	土師器・坏	B1a	13.5	4.9	4.6	内：ロナロ 内：ミガキ+墨	回転糸切り?
2	1	土師器・坏	B1a	14.4	5.3	4.6	内：ロナロ 内：ミガキ+墨	回転糸切り?
3	1	土師器・坏	B1a	14.1	5.3	4.8	内：ロナロ 内：ミガキ+墨	回転糸切り?
4	1	土師器・坏	B1a	14.7	5.4	4.8	内：ロナロ 内：ミガキ+墨	回転糸切り
5	1	土師器・坏	B1a	13.8	5.9	4.7	内：ロナロ 内：ミガキ+墨	回転糸切り
6	1	土師器・坏	B1a	16.6	5.5	5.8	内：ロナロ 内：ミガキ+墨	回転糸切り
7	1	土師器・坏	B1a	14.4	5.9	4.5	内：ロナロ 内：ミガキ+墨	回転糸切り?

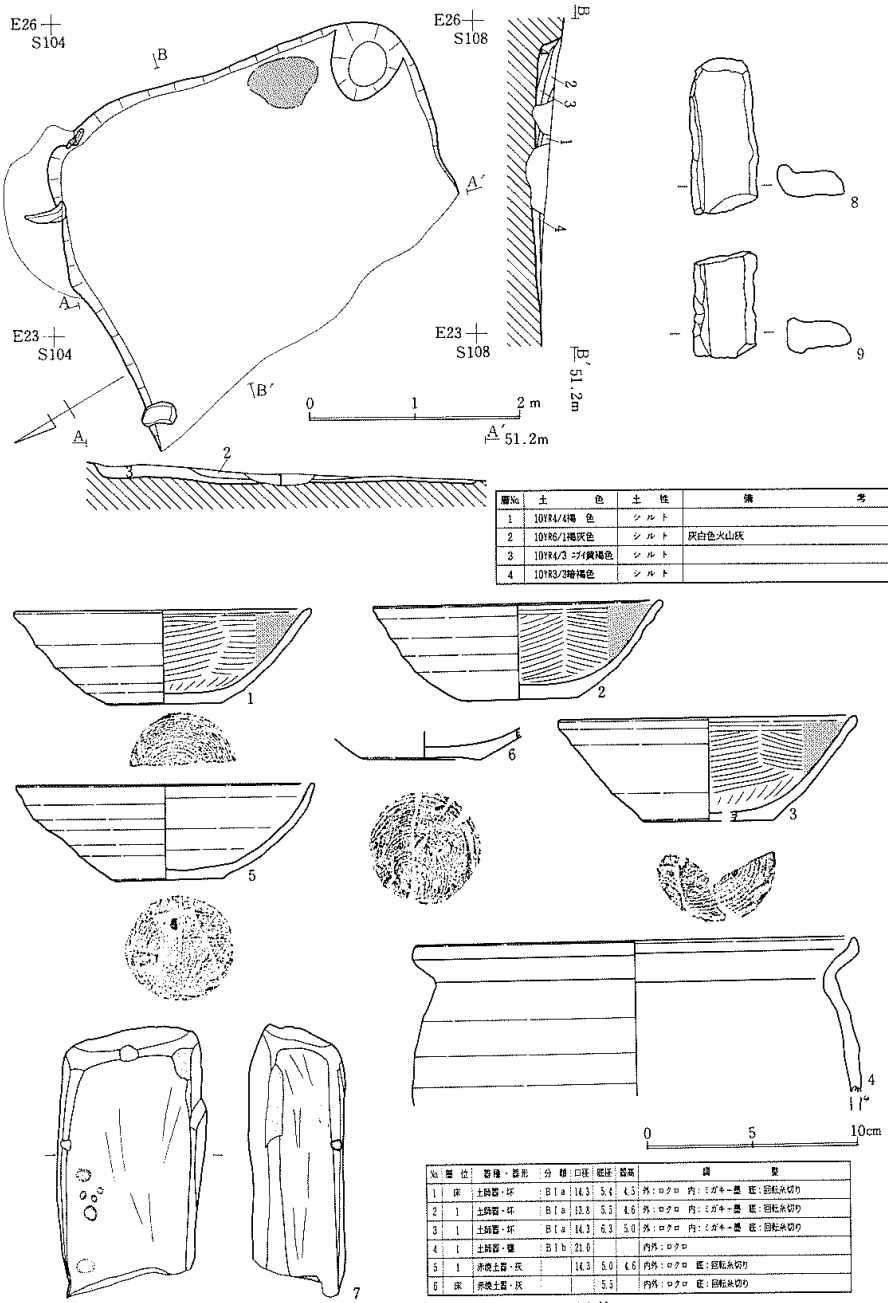
第122図　第128号住居跡と出土遺物

第129号住居跡（第123図）

【遺構の確認】南区のＥ21～26、Ｓ103～108付近に位置し、地山のローム面で検出された。

【平面形・規模】住居の西半分は削平のためすでに失われているが、残存する部分から平面形は隅の丸い方形を基調としていたものと考えられる。規模は現存する西壁で約3.1mある。

【堆積土】東側から流れ込んだ自然流入土である。1は褐色のシルトで住居の中央に、2は



層No.	土　色	土　性	備　考
1	10YR4/4褐　色	シルト	
2	10YR6/1褐灰色	シルト	灰白色火山灰
3	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト	
4	10YR3/3暗褐色	シルト	

No.	層位	器種・器形	分類	口径	底径	器高	調整
1	床	土師器・坏	B1a	14.3	5.4	4.3	外：ロクロ　内：ミガキ→黒　底：回転糸切り
2	1	土師器・坏	B1a	13.8	5.3	4.6	外：ロクロ　内：ミガキ→黒　底：回転糸切り
3	1	土師器・坏	B1a	14.3	6.3	5.0	外：ロクロ　内：ミガキ→黒　底：回転糸切り
4	1	土師器・甕	B1b	21.6			内外：ロクロ
5	1	赤焼土器・坏		14.3	5.0	4.6	内外：ロクロ　底：回転糸切り
6	床	赤焼土器・坏			5.5		内外：ロクロ　底：回転糸切り

第123図　第129号住居跡と出土遺物

灰白色火山灰の層で東側に厚く、3はにぶい黄褐色のシルトで床面を直接覆い全域に分布する。

【床面・壁】地山面をそのまま床としており、比較的凹凸がみられる。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は保存のよい東壁で床面から約20㎝ある。

【カマド】東壁南寄りの壁際の床面から焼面が検出されており、カマドの痕跡と考えられる。

【床面の施設】南東隅から、直径約80㎝深さ約10㎝の落ち込みが認められた。底面から多数の土器が出土しており、貯蔵穴であったと考えられる。

【出土遺物】床面や堆積土中、貯蔵穴から赤焼土器(坏)土師器（坏・甕）須恵器（甕）が出土している。図示したものの他の土師器坏はすべて底部が回転糸切りによるもので、再調整が加えられているものもない。須恵器坏は出土していない。7は砥石で床面から出土した。使用面は2面認められる。8・9は重量感のある板状の鉄器で、半製品の可能性もある。

第130号住居跡(第124図)

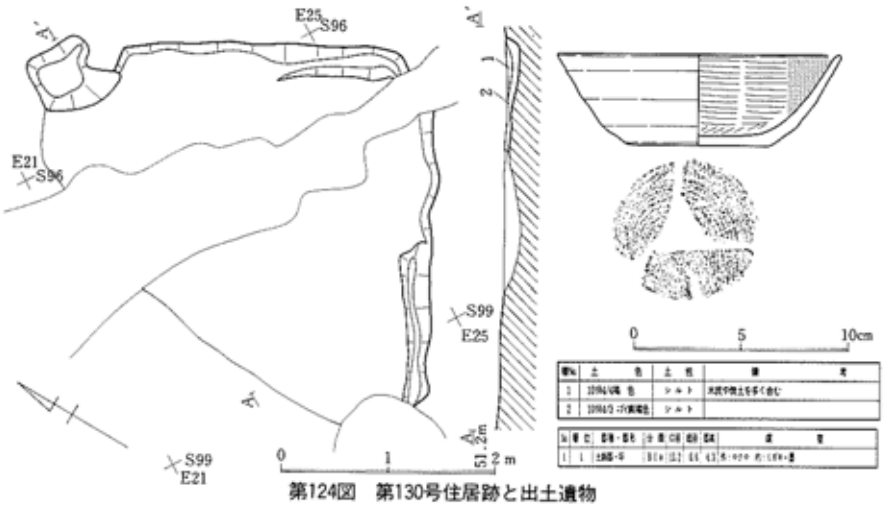
【遺構の確認】南区のＥ21～26、Ｓ95～99付近に位置し、地山のローム面で検出された。

【重複】東から西に延びる近世の磁器を出土する溝によって切られている。

【平面形･規模】住居の南半分は削平のためすでに失われているが、残存する部分から平面形は方形を基調としていたものと考えられる。規模は現存する西壁で約3.4mある。

【堆積土】住居北側に薄くみられるのみである。1は褐色のシルトで炭化物を多く含み、2はにぶい黄褐色のシルトである。

【床面・壁】地山面をそのまま床としており、比較的凹凸がみられる。壁は床面や周溝底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は保存のよい東壁で床面から約10㎝ある。



第124図　第130号住居跡と出土遺物

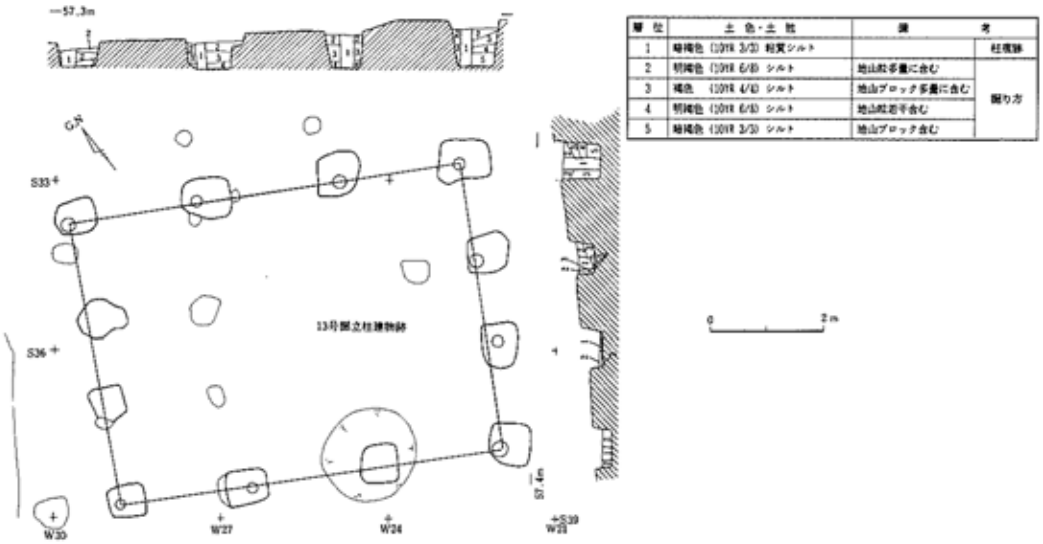
【カマド】北西隅付近に集中して焼土や炭化物の分布がみられることから、この位置にカマドがあった可能性がある。

【溝】東壁・北壁の壁下の一部に周溝が検出された。幅約30㎝、深さ約10㎝ある。

【出土遺物】床面や堆積土中、土師器(坏・甕)須恵器(坏・甕)が出土している。

B　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、1・2次調査において22棟が報告されている。従って、3次調査は23号掘立柱建物跡からの報告となる。ただ、1・2次調査区から延びる13号掘立柱建物跡については(桁行4間×梁行3間の東西棟・第125図)平面図、断面図のみ掲載する。



第125図　第13号掘立柱建物跡

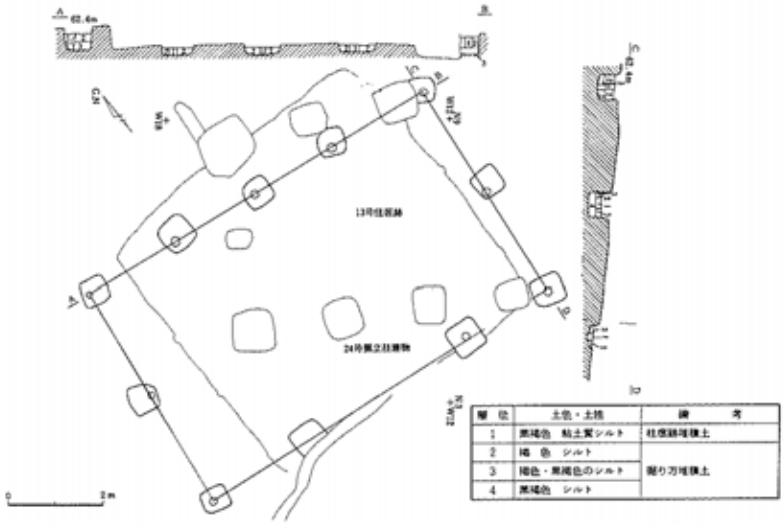
第23号掘立柱建物跡（桁行き4間×梁間2間の東西棟・126図）

【位置・確認面】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。W-5～17、N-1～10区で検出された。

【重複】23号掘立柱建物跡周辺には13号住居跡(竪穴式住居)、24号掘立柱建物跡があり、その切り合い関係から13号住居が最も旧く、次いで23号掘立柱建物跡、24号掘立柱建物跡の順に変遷していたことが捉えられた。

【規模】桁行は北側柱列で総長8.1m、柱間は西から2.0、1.9、1.9、2.3mである。梁行は西側柱列で総長5.1m、東側柱列で総長4.9m、柱間西側柱列で、北から2.5、2.6m東側柱列で、北から2.5、2.4mである。建物の方向は国家座標軸に対して1度東に偏している。

【柱穴】柱穴は一辺が90～60㎝前後の長方形を基調としている。柱痕跡はほとんどに認められ、円形で、径15㎝前後である。確認面からの柱穴の深さは北列で10㎝～20㎝である。柱穴には掘り方底部を基底面として柱を据えるものと、掘り方の途中まで埋め戻し柱を据えるものがあり（中には須恵器甕体部片が柱痕跡下に検出したケースがあり、根固めとしての性格



第126図　第23号掘立柱建物跡

の可能性が考えられる。）、柱を建てる場合に掘り方の深さはさほど吟味はしていないようである。第一義的に規定･制約されていたのは柱の長さではないかと考えられる。

【出土遺物】資料化できるものはないが、土師器須恵器が出土している。

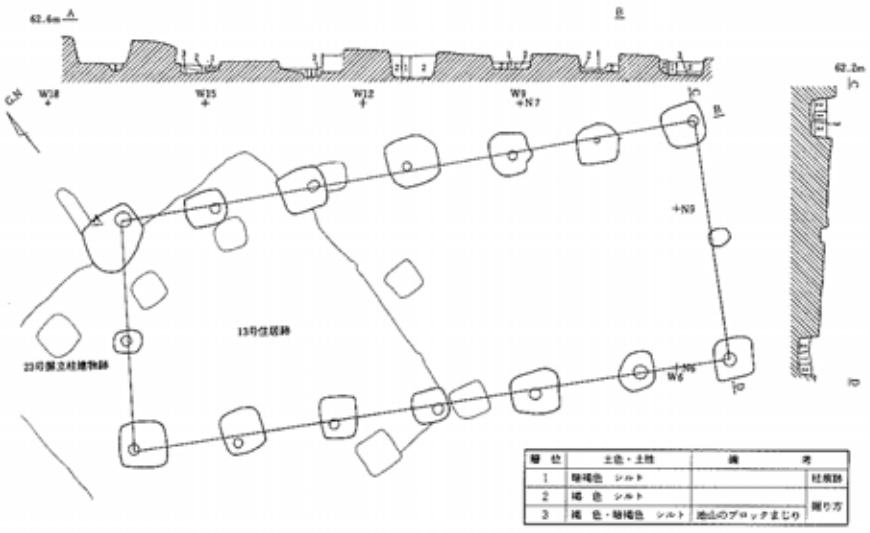
第24号掘立柱建物跡(桁行6間×梁行2間の東西棟・第127図)

【位置・確認面】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。W-21～31、N-5～11区で検出された。

【重複】24号掘立柱建物跡周辺には13号住居跡(竪穴式住居)、23号掘立柱建物跡があり.その切り合い関係から13号住居が最も旧く、次いで23号掘立柱建物跡、24号掘立柱建物跡の順に変遷していたことが捉えられた。

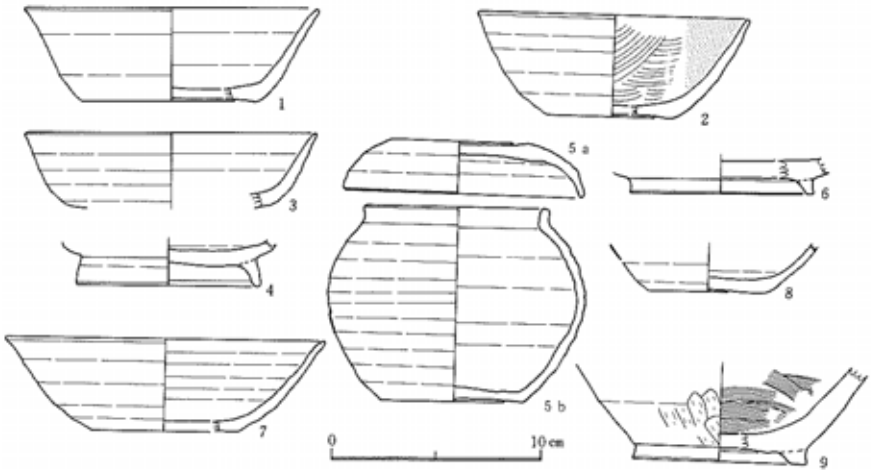
【規模】桁行は北側柱列で総長11.0m、南側柱列で総長11.1m、柱間は北側柱列で、1.7、1.9、1.8、2.0、1.6、2.0m、南側柱列で1.9、1,8、1.9、1.8、2.0、1.7mである。梁行は西側柱列で総長4.6m、東側柱列で総長4.6m、柱間は西側柱列で2.3、2.1m、東側柱列で2.3、2.3mである。建物の方向は国家座標に対して19度東に偏している。

【柱穴】柱穴は一辺が50～60㎝前後の方形を基調としている。柱痕跡はほとんどに認められ、円形で、径10㎝前後である。確認面からの柱穴の深さは北列で25㎝～60㎝である。柱穴には掘り方底部を基底面として柱を据えるものと、掘り方の途中まで埋め戻し柱を据えるものがあ



層位	土色・土性	備考	
1	暗褐色 シルト		柱根跡
2	褐 色 シルト		掘り方
3	褐 色・暗褐色 シルト	地山のブロックまじり	

第127図　第24号掘立柱建物跡



No.	出土地区・遺構	器種・器形	分類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴 (外面・内面・底部)	登録No.
1	24号掘立（P 2）	須恵器・坏	D Ⅱ a	14.2	8.4	4.5	底部：不明＋回転ヘラケズリ	50
2	30号掘立（P 5）	土師器・坏	B Ⅰ	13.0	6.2	4.9	内面：くガキ→黒色処理，底部：不明	67
3	30号掘立	須恵器・坏		14.0		3.6		73
4	30号掘立（P 3）	須恵器・高台付坏			9.0	2.2	底部：回転糸切り	44
5 a	30号掘立	赤焼土器・坏（蓋）		(ツ外) 11.5	6.6	3.5	埋設土器遺構	
5 b	30号掘立	赤焼土器・甕		9.0	6.9	9.3	埋設土器遺構	
6	31号掘立（P 5）	内黒土師器・高台付坏					底部：不明	76
7	31号掘立	須恵器・坏	A Ⅰ C	15.2	7.0	4.5	底部：回転糸切り	45
8	31号掘立	赤焼土器			5.4	(残) 2.3	底部：回転糸切り	72
9	31号掘立（P 4）	土師器・坏						46

第128図　掘立柱建物跡出土遺物

る(中には須恵器甕体部片が柱痕跡下に検出したケースがあり、根固めとしての性格の可能性が考えられる)。

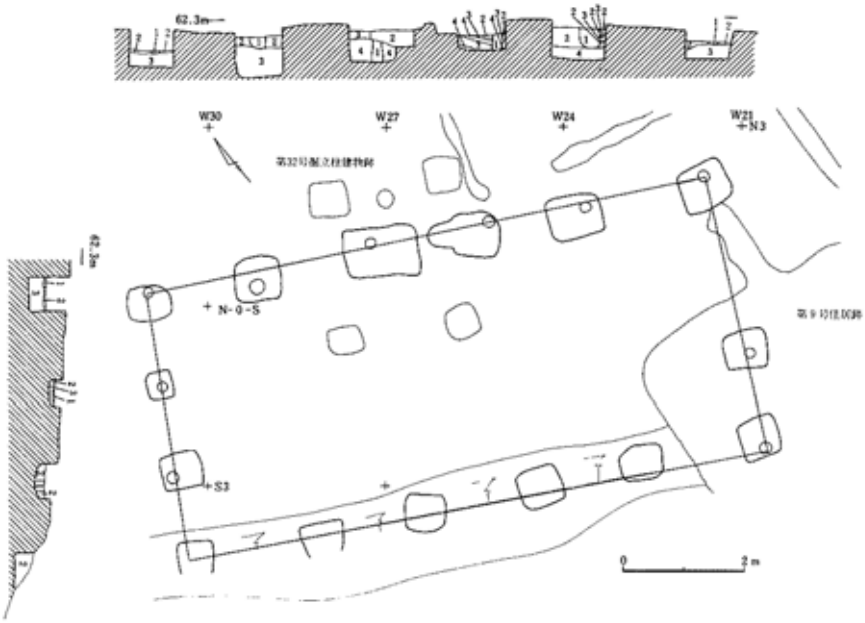
【出土遺物】資料化できたもので、須恵器坏がある（第128図）

第25号掘立柱建物跡(桁行5間×梁行3間の東西棟・第129図)

【位置・確認面】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。W―21～31、N―2～S―3区で検出された。

【重複】25号掘立柱建物跡周辺には8・9号竪穴住居跡、第36号掘立柱建物跡がある。明確な切り合い関係が捉えられたのは9号住居跡との間で、9号住居跡を25号掘立柱建物跡が切って構築しており、9号住居跡⇒25号掘立柱建物跡の順に変遷していたことが捉えられた。

【規模】桁行は北側柱列で総長9.4m、南側柱列で総長9.8m、柱間は北側柱列で、1、8、2.0、2.0、1.6、2.0m、南側柱列で2.2、1.8、2.0、1.8、2.0mである。梁行は西側柱列で総長4.5m、東側柱列で総長4.7m、柱間は西側柱列で1.6、1.5、1.4mである。建物の方向は国家座標に対して19度東に偏している。



層位	土色・土性	備考	
1	暗褐色　粘土質シルト	地山の多い褐色土、黄褐色がブロック状に混入	柱痕跡
2	暗褐色　シルト	黄褐色が多く混入	掘り方
3	暗褐色・黒褐色　シルト	黄褐色が多く混入	
4	暗褐色　シルト	一部グライ化、かたくしまる、黄褐色がブロック状に混入	

第129図　第25号掘立柱建物跡

【柱穴】柱穴は一辺が60～90㎝前後の方形を基調としている。柱痕跡はほとんどに認められ、円形で、径20㎝前後である。確認面からの深さは北列で40㎝～80㎝である。柱穴には掘り方底部を基底面として柱を据えるものと、掘り方の途中まで埋め戻し柱を据えるものがある。なお、柱抜き取り穴が伴うケースがあり、柱掘り方の途中まで掘り下げ、柱を切断している様子が観察された。

【出土遺物】資料化できるものはないが、土師器が出土している。

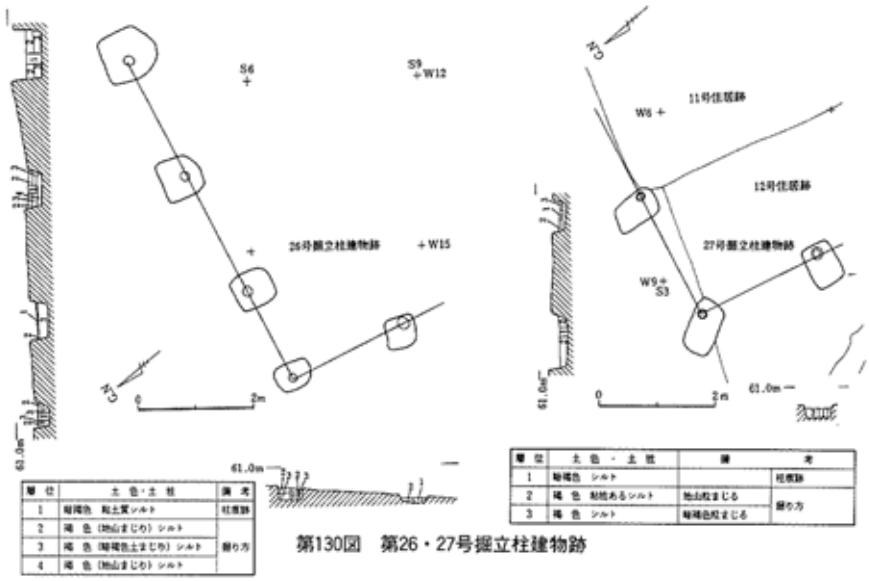
第26号掘立柱建物跡（桁行3間×梁行2間？の東西棟・第130図）

【位置・確認面】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。W-11～7、Ｓ-4～9区で検出された。

【重複】26号掘主柱建物跡周辺には12号住居跡（竪穴式住居）、27号掘立柱建物跡があり、明確な切り合い関係が捉えられたのは12号住居跡との間で、12号住居跡を26号掘立柱建物跡が切って構築しており、12号住居跡⇒26号掘立柱建物跡の順に変遷していたことが捉えられた。

【規模】桁行は北側柱列で総長6.3m、柱間は、1.7、2.3、2.3mである。梁行は明確でない。建物の方向は7度東に偏している。

【柱穴】柱穴は一辺が50～90㎝前後の方形を基調としている。柱痕跡はほとんどに認められ、円形で、径10㎝前後である。確認面からの深さは北列で30㎝～40㎝である。柱穴には掘り方底部を基底面として柱を据えるものと、掘り方の途中まで埋め戻し柱を据えるものがある。



第130図　第26・27号掘立柱建物跡

第27号掘立柱建物跡(桁行不明×梁行不明の東西棟?・第130図)

【位置・確認面】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。W-7～10、Ｓ-2～6区で検出された。

【重複】27号掘立柱建物跡周辺には11・12号住居跡(竪穴式住居)、26号掘立柱建物跡がある。明確な切り合い関係が捉えられたのは12号住居跡との間で、12号住居跡を27号掘立柱建物跡が切って構築しており、12号住居跡⇒26号掘立柱建物跡の順に変遷していたことが捉えられた。

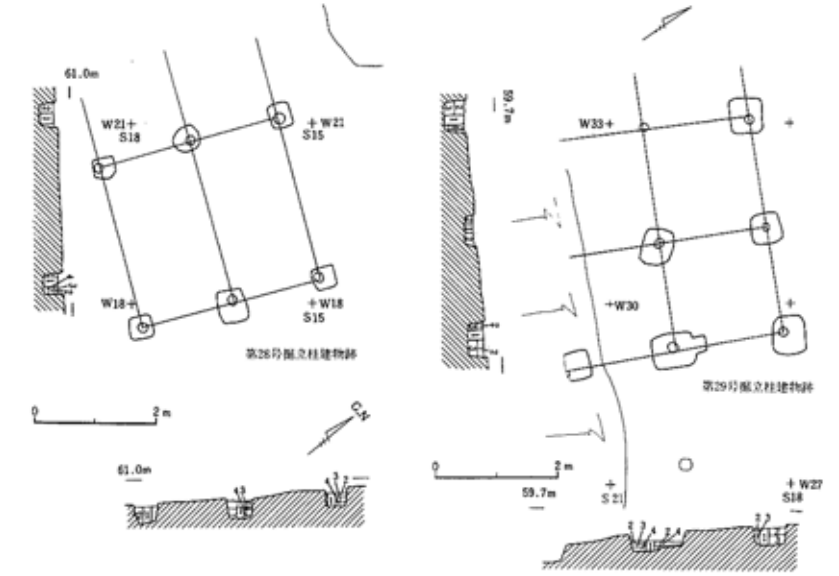
【柱穴】柱穴は一辺が30～80㎝前後の長方形を基調としている。柱痕跡はすべてに認められ、円形で、径15㎝前後である。確認面からの深さは北列で20㎝～40㎝である。

【出土遺物】資料化できるものはないが、土師器出土している。

第28号掘立柱建物跡(桁行不明×梁行2間?の東西棟・第131図)

【位置・確認面】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。W-18～21、Ｓ-14～18区で検出された。なお、柱穴の配置から桁行不明×梁行2間?の倉庫風建物であった可能性が高い。

【規模】桁行の総長は不明だが、柱間は、2.7mである。梁行は東側柱列で総長3.0m、柱間は1.5、1.5mである。建物の方向は17度東に偏している。



層位	土色・土性	備考	
1	黒褐色(10YR2/2) 粘質シルト		柱痕跡
2	褐色(10YR4/4) シルト		掘り方
3	明褐色(7.5YR5/6) シルト		
4	褐色(10YR2/2) シルト	焼土粒少量を含む	

層位	土色・土性	備考	
1	暗褐色(10YR3/3) 粘質シルト		柱痕跡
2	褐色(10YR4/6) 粘質シルト		掘り方
3	黄褐色(10YR5/8) 粘質シルト	地山ブロック多量に含む	
4	暗褐色(10YR3/4) シルト		

第131図　第28・29号掘立柱建物跡

【柱穴】柱穴は一辺が30～40㎝前後の長方形を基調としている。柱痕跡はほとんどに認められ、円形で、径15㎝前後である。確認面からの深さは北列で20㎝～30㎝である。

柱穴には掘り方底部を基底面として柱を据えるものと、掘り方の途中まで埋め戻し柱を据えるものがある。

【出土遺物】資料化できるものはないが、土師器坏、須恵器が出土している。

第29号掘立柱建物跡(桁行2間以上×梁行2間?の東西棟・第131図)

【位置・確認面】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。W-7～10、S-2～6区で検出された。なお、桁行の面倒半分は調査区外に延びているため明確でない。桁行2間以上×桁行2間?の倉庫風建物の可能性がある。

【規模】桁行は北側柱列の総長3.6m以上、柱間は、1.8、1.8㎜である。梁行は東側柱列で総長3.7m、柱間は1.9、1.8である。建物の方向は22度東に偏している。

【柱穴】柱穴は一辺が30～40㎝前後の長方形を基調としている。柱痕跡はほとんどに認められ、円形で、径15㎝前後である。確認面からの深さは北列で20㎝～40㎝である。柱穴には掘り方底部を基底面として柱を捉えるものと、掘り方の途中まで埋め戻し柱を据えるものがある。

【出土遺物】資料化できるものはないが、須恵器が出土している。

第30号掘立柱建物跡(桁行3間×梁行2間の東西棟)・7号埋設土器遺構(第132図)

【位置・確認面】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。W-3～10、S-26～31区で検出された。

【重複】30号掘立柱建物跡周辺には31～34号掘立柱建物跡がある。明確な切り合い関係が捉えられたのは32・34掘立柱建物跡で、双方の掘立柱建物跡を30号掘立柱建物跡が切って構築しており、32・34号掘立柱建物跡⇒30号掘立柱建物跡の順に変遷していたことが捉えられた。

【規模】桁行は北側柱列で総長5,7m、南側柱列で総長5.5m、柱間は北側柱列で、1.8、1.9、2.0m、南側柱列で1.9、1.8、1.8mである。梁行は西側柱列で総長4.3m、東側柱列で総長4.0m、柱間は西側柱列で1.9、2.4m、東側柱列で2.1、1.9mである。倉庫風の建物が考えられる。建物の方向は国家座標に対して25度東に偏している。

【柱穴】柱穴は一辺が90～120㎝前後の方形を基調としている。柱痕跡はほとんどに認められるが（円形、径18㎝前後）、栓抜き取り痕跡で途中から切断されていた。確認面からの柱穴の深さは北列で40㎝～60㎝である。

なお、栓抜き取り穴には灰白色火山灰がブロック状に含まれていた。

【その他の施設】本掘立柱建物跡に付属する施設としては、7号埋設土器遺構がある。本掘

立柱建物跡中央部に位置し、柱穴に近接して設けられており、付属するものと見て良いであろう。50㎝×46㎝の楕円形で、深さ66㎝である。掘り方を途中まで埋め戻し、赤焼土器（小型甕に浅目の坏を被せる状態）を埋設している。

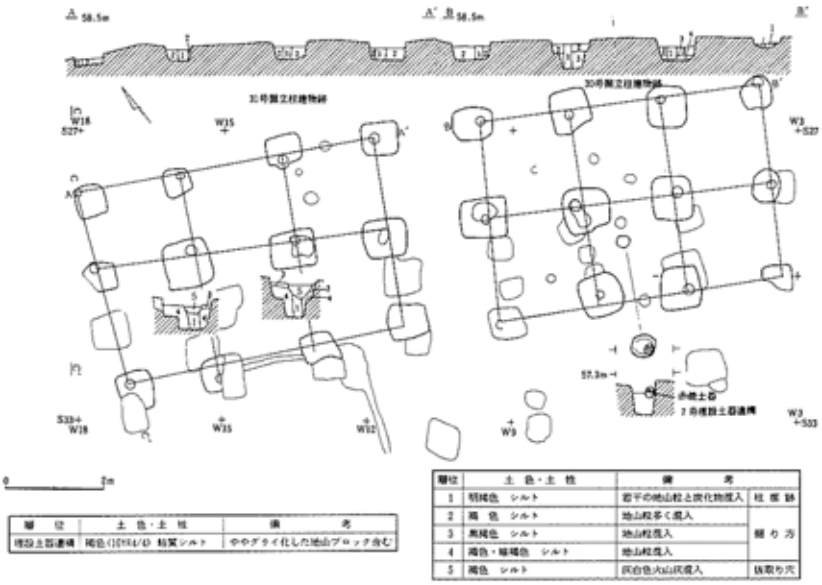
【出土遺物】資料化できたもので、土師器坏、須恵器坏、高台付坏、本掘立柱建物跡に伴うものとみられる7号埋設土器遺構には赤焼土器坏、小型甕がある(第128図)。

第31号掘立柱建物跡(桁行3間×梁行2間の東西棟・第132図)

【位置・確認面】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。W－11～18、Ｓ－27～33区で検出された。

【重複】31号掘立柱建物跡周辺には18号住居跡(竪穴式住居)、30～36号掘立柱建物跡がある。明確な切り合い関係が捉えられたのは18号住居跡、33・36号掘立柱建物跡で、31号掘立柱建物跡は18号住居跡と33号掘主柱建物跡を切り、37号掘立柱建物跡に切られる。なお、18号住居跡、33号掘主柱建物跡の関係は掘立柱建物跡が住居跡を切っており、18号住居跡⇒33掘立柱建物跡⇒31号掘立柱建物跡⇒36号掘立柱建物跡の順に変遷していたことが捉えられた。

【規模】桁行は北側柱列で総長6.2m、南側柱列で総長6.0m、柱間は北側柱列で、2.1、2.2、1.9m.南側柱列で1.9、2.0、2.1mである。梁行は西側柱列で総長4.1m、東側柱列で総長4.1m、東側柱列で総長



第132図　第30・31号掘立柱建物跡

3.8m、柱間は西側柱列で1.6、2.5m、東側柱列で2.0、1.8mである。建物の方向は国家座標に対して22度東に偏している。

【柱穴】柱穴は一辺が90～120㎝前後の方形を基調としている。柱痕跡はほとんどに認められるが(円形、径20㎝前後)、栓抜き取り痕跡で途中から切断されていた。確認面からの深さは北列で50㎝～80㎝である。

なお、柱抜き取り穴には灰白色火山灰がブロック状に含まれていた。このような検出状況から30号掘立柱建物跡と同時期が考えられ、しかも位置的な関係から30号掘立柱建物跡と31号掘立柱建物跡は2棟で一対の構造になっていたものと見られる。

【出土遺物】資料化できたもので、土師器坏、高台付坏、須恵器坏、赤焼土器坏がある(第128図)。

第32号掘立柱建物跡(桁行3間×梁行2間の東西棟・第133図)

【位置･確認面】確認面は基層位Ⅴ層上面である。W－3～10、S－28～33区で検出された。

【重複】32号掘立柱建物跡周辺には、30・34号掘立柱建物跡がある。明確な切り合い関係が捉えられたのは30号掘立柱建物跡で、30号掘立柱建物跡に切られている。32号掘立柱建物跡⇒30号掘立柱建物跡の順に変遷していたことが捉えられた。

【規模】桁行は北側柱列で総長5.9m、柱間は北側柱列で、1.5、2.5、1.9m、梁行は西側柱列で総長3.7m、柱間は西側柱列で、2.1、1.6mである。建物の方向は国家座標に対して19度東に偏している。

【柱穴】柱穴は一辺が50㎝前後の方形を基調としている。柱痕跡は30号掘立柱建物跡に切られているため不明なものが多い。検出されたものでは、円形で、径が15㎝前後のものである。掘り方の深さは北列で40㎝～60㎝である。

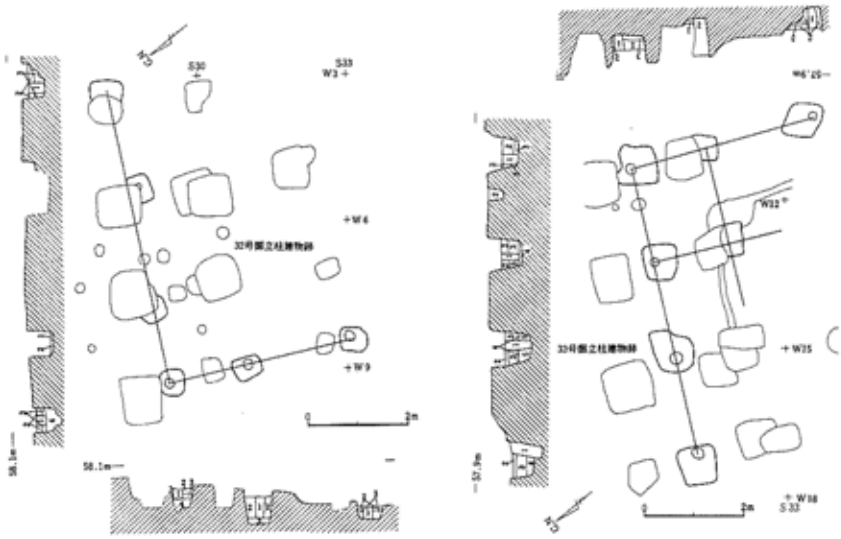
【出土遺物】資料化できるものはないが、土師器坏、須恵器が出土している。

第33号掘立柱建物跡(桁行3間×梁行2間の東西棟・第133図)

【位置・確認面】確認面は基本層位置Ⅴ層上面である。W－10～18、S－30～34区で検出された。

【重複】33号掘立柱建物跡周辺には18号号住居跡（竪穴式住居）、30～36号掘立柱建物跡がある。明確な切り合い関係が捉えられたのは18号住居跡、31号掘立柱建物跡で、33号掘立柱建物跡は18号住居跡を切り、31号掘立柱建物跡に切られる。従って、18号住居跡⇒33掘立柱建物跡⇒33号掘立柱建物跡⇒36号掘立柱建物跡の順に変遷していたことが捉えられた。

【規模】桁行は北側柱列で総長5.9m、柱間は北側柱列で、2.0、2.0、1.9m、梁行は東側柱列で総長3.9m、柱間は東側柱列で、1.6、2.3mである。建物の方向は7度東に偏している。



層位	土色・土性	備考	
1	暗褐色　粘土質シルト	地山粒少量まじる	柱根跡
2	褐　色　シルト	礫（径3～4cm）、地山粒まじる	掘り方
3	褐　色　シルト	黒褐色土や地山粒まじる	
4	黒褐色　シルト	固くしまる	

層位	土色・土性	備考	
1	暗褐色　粘土質シルト	地山粒を若干まじる	柱根跡
2	褐　色　シルト	地山粒がまじる	掘り方
3	暗褐色　シルト	地山粒を若干まじる	
4	褐　色　シルト	地山粒が多量にまじる	
5	褐　色　シルト		

第133図　第32・33号掘立柱建物跡

【柱穴】柱穴は一辺が90㎝前後の方形を基調としている。柱痕跡は31号掘立柱建物跡に切られているため不明なものがあるが、検出されたものでは、円形で、径が18㎝前後のものである。掘り方の深さは北列で60㎝～80㎝である。

【出土遺物】資料化できたものでは須恵器高台付坏がある（135図）。

第34号掘立柱建物跡(桁行2間以上×梁行2間の南北?・第134図)

【位置･確認面】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。W－10～18、S-30～35区で検出された。

【重複】33号掘立柱建物跡周辺には17号住居跡(竪穴式住居)、30・32号掘立柱建物跡がある。明確な切り合い関係が捉えられたのは17号住居跡、30号掘立柱建物跡で、34号掘立柱建物跡は18号住居跡を切り、30号掘主柱建物跡に切られる。従って、18号住居跡⇒34掘立柱建物跡⇒30号掘立柱建物跡の順に変遷していたことが捉えられた。

【柱穴】柱穴は一辺が90㎝前後の方形を基調としている。柱痕跡は31号掘立柱建物跡に切られているため不明なものがあるが、検出されたものでは、円形で、径が10㎝前後のものである。

掘り方の深さは北列で40㎝～60㎝である。

【出土遺物】資料化できたものでは土師器坏、須恵器坏がある(第135図)。

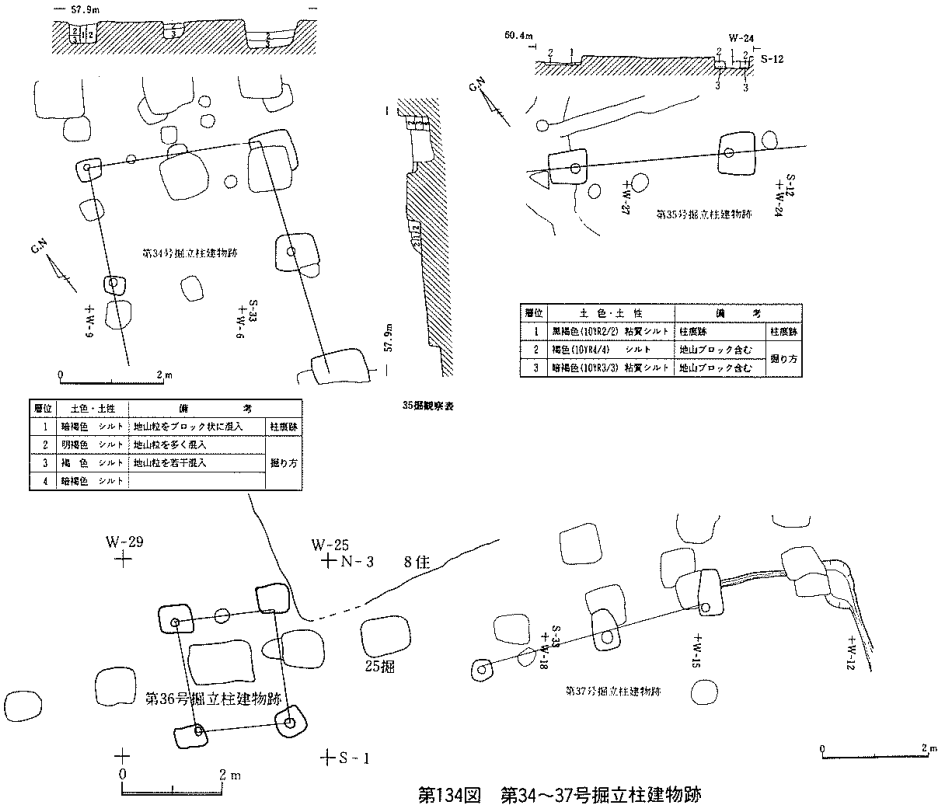
第35号掘立柱建物跡(第134図)

【位置・確認面】確認面は10号住居跡床面である。W－25～28、S－11～13区で検出された。ただし、住居跡は削平をうけており、確認面は不明といわざろう得ない。

【重複】35号掘立柱建物跡周辺には10号住居跡(竪穴式住居)がある。切り合い関係については不明である。

【柱穴】柱穴は一辺が90㎝前方の方形を基調としている。柱痕跡は後世の削平を受けており、明確ではない。検出されたものでは、円形で、径が10㎝前後のものである。掘り方の深さは北列?で10㎝～15㎝である。

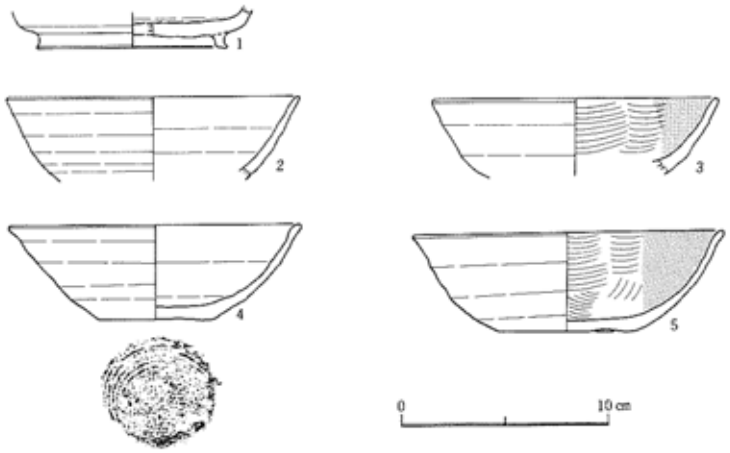
【出土遺物】資料化できなかったが、土師器が出土している。



層位	土色・土性	備考	
1	黒褐色(10YR2/2) 粘質シルト	柱痕跡	柱痕跡
2	褐色(10YR4/4) シルト	地山ブロック含む	掘り方
3	暗褐色(10YR3/3) 粘質シルト	地山ブロック含む	

層位	土色・土性	備考	
1	暗褐色 シルト	地山粒をブロック状に混入	柱痕跡
2	明褐色 シルト	地山粒を多く混入	掘り方
3	褐色 シルト	地山粒を若干混入	
4	暗褐色 シルト		

第134図　第34～37号掘立柱建物跡



No	出土地区・遺構	器種・器形	分類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴（外面・内面・底部）	登録No
1	33号掘立柱	須恵器・高台付坏				(現) 1.8	底部：回転ヘラケズり、後に脚部を取りつけ	75
2	34号掘立（P₁）	須恵器・坏		14.2		(現) 4.1		74
3	34号掘立	土師器・坏		13.8		(現) 3.8	内面：くガキ→黒色処理	71
4	37号掘立	赤焼土器・坏	A	14.2	5.4	4.8	底部：回転糸切り、無調整 「一」のヘラ書きあり	19
5	37号掘立（P₁）	土師器・坏	B1b	15.2	6.5	4.8	内面：くガキ→黒色処理、底部：手持ちヘラ切り	4

第135図　第33・34・37号掘立柱建物跡出土遺物

第36号掘立柱建物跡(1間以上×1間以上・第134図)

【位置･確認面】確認面は基本層位Ⅴ層上面である。W26～N2～S1で検出された。

【重複】第25号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

【規模】柱穴が4個確認されているのみである。柱間は東辺･西辺が2.3m、西辺･北辺が1.8mである。建物の南北方向は、国家座標北に対し、20度東に偏している。

【柱穴】柱穴は一辺が40～60㎝の方形を基軸としている。柱痕跡は円形で、直径20㎝前後である。

第37号掘立柱建物跡(第134図)

【位置・確認面】確認面は、基本層位Ⅴ層上面である。W14～19、S－32－34で検出された。

【重複】第18号住居跡、第31・33号掘立柱建物跡と重複し、遺構の切り合いから前二者よりも新しいことがうかがわれる。

【規模】柱穴3個からなり、柱間は西から2.5m・21mである。

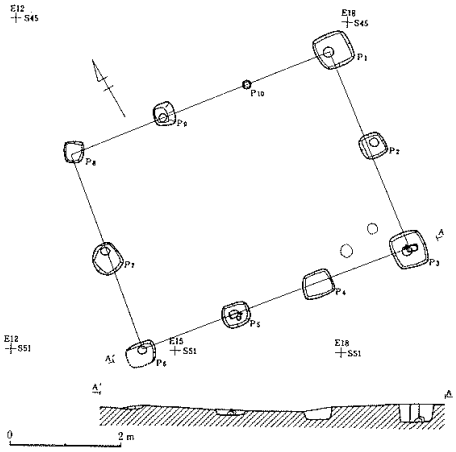
【柱穴】掘り方の平面形は一様ではないがいずれも直径15～20㎝の円形の柱痕跡が検出された。

【出土遺物】土師器坏、赤焼土器坏がある(第135図)。

101号掘立柱建物跡(第136図)

【位置・確認面】E13～19、S45～49付近の地山ローム層で検出された桁行3間・梁行2間の東西棟物跡である。

【柱間寸法・方向】柱痕跡を基にした柱間寸法は桁行が南側柱列で東から1.7m、1.6m・1.8m総長5.1m、梁行が東妻で北から1.9m・2.0m総長3.9mで、柱間寸法の平均は桁行が1.7m、梁行が1.7mで梁行が約20㎝長い。建物の方向は南側柱列で座標より西へ89°振れている。



第136図　第101号掘立柱建物跡

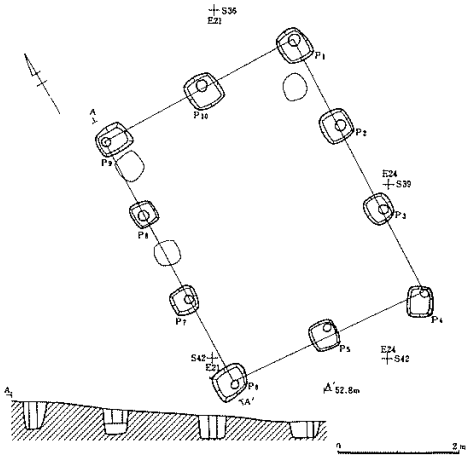
【柱穴】柱穴の平面形は一辺が30～60㎝の方形をし、深さは5～25㎝である。壁はほぼ垂直に掘られ、埋土は粘性・しまりのある褐色土である。P5・8・10以外の柱穴から、直径15～20㎝ほどの円形の柱痕跡が確認された。またP3・5では底面の柱基部分からこぶし大の礫を2、3個が認められ、根固めに用いたと思われる。

【出土遺物】P3柱穴埋土よりロクロ使用の土師器甕・須恵器坏、P2より須恵器坏、土師器甕が出土しているが、いずれも小片である。

第102号掘立柱建物跡(第137図)

【位置・確認面】E19～25、S36～43付近の地山ローム面で検出された桁行3間・行2間の南北棟建物跡である。

【柱間寸法・方向】柱痕跡を基にした柱間寸法は桁行が西側柱列で北から1.5m・1.7m・1.7mで総長4.9m、梁行が南妻で東から1.9m・1.8mで総長3.8mで、柱間寸法の平均は桁行が約1.6m、梁行が約1.8mで、6尺等間と推定できる。建物の方向は西側柱列で座標北より東へ3°振れている。



第137図　第102号掘立柱建物跡

【柱穴】柱穴の平面形は40～60㎝の方形を呈し、深さは30～50㎝で、壁はほぼ垂直に掘られている。埋土は粘性・しまりのある褐色土で、黄褐色土が混じる。すべての柱穴から直径10～20㎝の円形の柱痕跡が確認されている。またP8では天端合わせのため、柱穴を約20㎝の厚さに土を埋めたのち、柱を据えている。

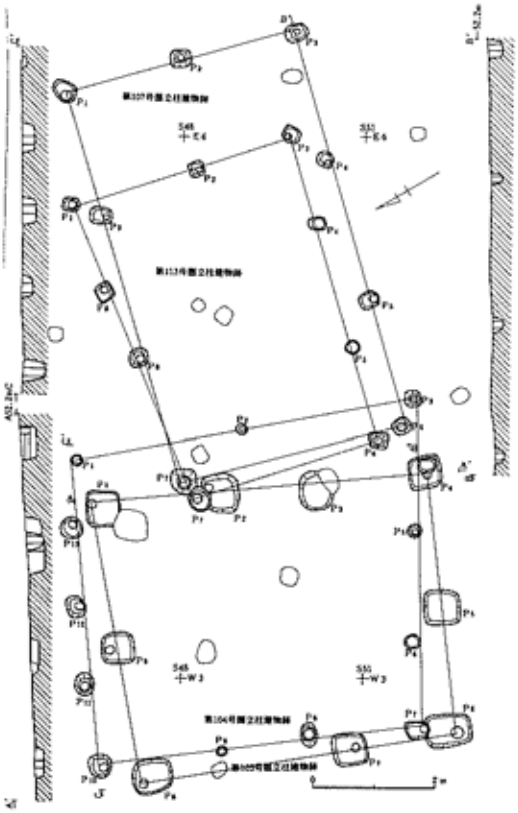
【出土遺物】P6埋土よりロクロ使用の土師器甕の小片が出土している。

第103号掘立柱建物跡（第138）

【位置・確認面】E2～4、S46～52付近の地山ローム面で検出された桁行3間・梁行2間の南棟建物跡である。

【重複】第104号掘主柱建物跡(以下第104号掘立柱建物跡を第104建物跡のように略す)と第113号建物跡と重複し、これらに切られている。

【柱間寸法・方向】柱痕跡を基にした柱間は桁行が東側柱列で北から1.8m・1.7m・1.8m総長5.3m、梁行が北妻で東から2.3m・2.4m総長4.7mで、柱間寸法の平均は桁行が約1.8m、梁行が約2.3mであり、桁行が6尺等間・梁行が8尺等間と推定できる。建物の方向は東側柱列で座標北より東へ26°振れている。



第138図　第103・104・107・113号掘立柱建物跡

【柱穴】柱穴の平面形は一辺50～70㎝の方形を呈し、深さは10～35㎝である。壁はほぼ垂直に掘られ、埋土は粘性のある黄褐色土である。すべての柱穴から直径10～20㎝の円形の柱痕跡が確認された。P1では天端合わせのため、柱穴を約10㎝の厚さに土を埋めたのち、柱を据えている。

【出土遺物】P10埋土よりロクロ使用の土師器坏の小片が出土している。

第104号掘立柱建跡（第138図）

【位置・確認面】E2～4、S46～52付近の地山ローム面で検出された桁行4間・梁行3間の東西棟建物跡である。

【重複】第103・107・113号建物跡と重複している。第103号建物跡を切っており、これにより新しい。第107号建物跡と第113号建物跡とは柱穴の切り合いがないので、新旧関係は不明である。

【柱間寸法・方向】柱痕跡を基にした柱間寸法は桁行が南側柱列で東から1.0m・1.1m・1.8・1.5mで総長5.4m、梁行が西妻で北から2.0m、1.4m・1.9mで総長5.3mであり建物の方向は北側柱列で座標北より西へ64°振れている。

【柱穴】柱穴の平面形は直径30㎝円形、または20～40㎝の方形を呈している。深さ5～40㎝である。埋土は褐色土で、地山の礫の混じる柱穴もある。P4・5・6以外の柱穴から直径10㎝～15㎝の円形の柱痕跡が確認された。

【出土遺物】P13埋土よりロクロ使用の土師器甕の小片が出土している。

第107号掘立柱建物跡(第138図)

【位置・確認面】WE0～E7、S46～52付近の地山ローム面で検出された桁行3間・行2間の東西棟建物跡である。

【重複】第113号建物跡と第104号建物跡と重複し、第113号建物跡より古い。第104号建物跡と重なり合うが、柱穴の切り合いがないため、新旧関係は不明である。

【柱間寸法・方向】柱痕跡を基にした柱間寸法は桁行が南側柱列で東から2.2m、2.4m・2.2mで総長6.8m、梁行が東妻で北から1.8m・1.9mで総長3.7mであり、柱間寸法は桁行では7尺＋8尺＋7尺が規準となり、梁行では6尺等間と推定される。建物の方向は南側柱列で座標北より西へ73°振れている。

【柱穴】柱穴の平面形は一辺約20～40㎝の隅丸正方形を呈している。深さは柱穴は10～30㎝であり、斜めに掘りこまれ、断面形が逆台形を呈する柱穴(P4・5・6)もある。埋土は地山の礫を含む暗褐色土である。すべての柱穴から直径10～20㎝の円形の柱痕跡が確認された。

【出土遺物】P3・6埋土よりロクロ使用の土師器甕の破片が出土している。

第113号掘立ち柱建物跡(第138図)

【位置・確認面】WE0～E6、S46～51付近の地山ローム面で検出された桁行3間・行2間の東西棟建物跡である。

【重複】第103号建物跡と第104号建物跡と第107号建物跡と重複しており、第103・107号建物跡より新しい。第104号建物跡とは柱穴の切り合いがないので、新旧関係は不明である。

【柱間寸法・方向】柱痕跡を基にした柱間寸法は桁行が南側柱列で東から1.5m、1.6m・2.1mで総長5.2m、梁行が棟妻で北から2.0m・1.6mで総長3.6mであり柱間寸法には著しいばらつきがみられる。建物の方向は南側柱列で座標北より西へ75°振れている。

【柱穴】柱穴に平面形は方形や円形を呈し、大きさは20～40㎝である。深さは10～30㎝である。埋土は地山の礫を含む暗褐色土である。すべての柱穴から直径10～20㎝の円形の柱の痕跡が確認された。

第105号掘立柱建物跡(第139図)

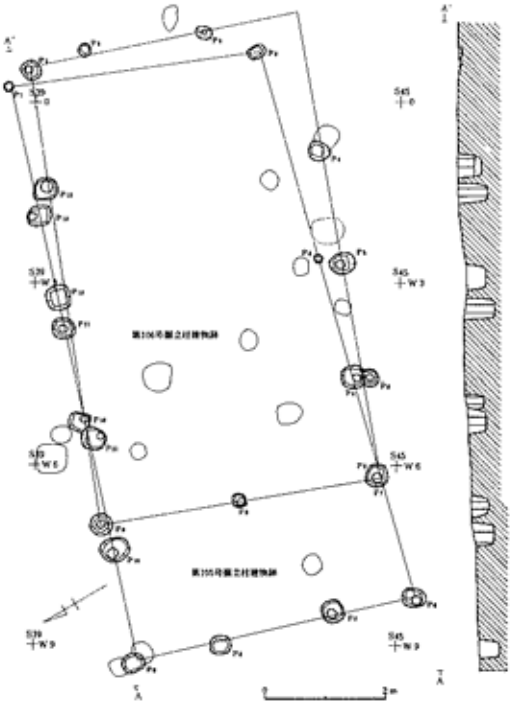
【位置・確認面】E1・W7、S47～53付近の地山ローム層で検出された桁行5間・梁3間の東西棟建物跡である。

【重複】第106号建物跡と重複し、それより新しい。

【柱間寸法・方向】柱痕跡を基にした柱間寸法は桁行が北側柱列で東から2.2m・1.4m・2.4m・1.9m・1.8で総長9.7m、梁行が西妻で北から1.4m・1.9m・1.4m総長4.7mで、柱間寸法には著しいばらつきがあることがわかる。建物の方向は北側柱列で座標北より西へ69°振れている。

【柱穴】柱穴の平面形は一辺約20～40㎝の隅丸方形が多く、短軸30×長軸40㎝の楕円形のものもある。深さは5～30㎝であり、埋土は暗褐色土である。P4・5・6・7・10・11・13で直径10～15㎝の円形の柱痕跡が確認された。

【出土遺物】P12埋土よりロクロ使用の土師器甕の口縁部・体部の小片が出土している。



第139図　第105・106号掘立柱建物跡

第106号掘立柱建物跡（第139図）

【位置・確認面】E1～W7、S39～45付近の地山ローム面で検出された桁行4間・梁間3間の西棟建物である。

【重複】第105号建物跡と重複しており、それより古い。

【柱間寸法・方向】柱痕跡を基にした柱間寸法はは桁行が北側柱列で東から1.9m・2.4m・1.5m・1.7mで総長7.5m、梁行が西妻で北から2.3m・2.2m総長4.5mであり、同じく東妻で北から1.0m・2.3m・(1.4m)で総長（4.7m）と柱間寸法には著しいばらつきがあることがわかる。建物の方向は北側柱列で座標北よりに西へ67°振れている。

【柱穴】柱穴の平面形は20～40㎝の円形もしくは、隅丸方形を呈している。深さは10～40㎝であり、埋土は暗褐色土である。P1・5・6・8・9・10・11・12で直径10～20㎝の円形の柱痕跡が確認された。またP12では天端合わせのため、柱穴を約10㎝の厚さに土を埋めたのち、柱を据えている。

【出土遺物】P11焼土よりロクロ使用の土師器甕の口縁部小片が出土している。

第108号掘立柱建物跡(第140図)

【位置・確認面】W12～18、S30～33付近の地山ローム面で検出された桁行3間・梁行3間の東西棟である。

【重複】109号建物跡と第110号建物跡と重複しているが、柱穴の切り合いがないため、新

旧関係は不明である。

【柱間寸法・方向】柱痕跡を基にした柱間寸法は桁行が南側柱列で東から1.6m、1.4m・2.0mで総長5.0m、梁行が西妻で北から1.5m・1.2m・1.5mで総長4.2mで、柱間寸法には著しいばらつきがある建物の方向は北側柱列で座標北より西へ59°振れている。

【柱穴】横穴の平面形は円形から方形と不規整で、30～60㎝である。深さは10～30㎝で、斜めに掘りこまれ、断面形が逆台形を呈する柱穴(P11)もある。埋土は地山の礫を褐色土である。P4・5・6・7・9・10・11から直径10～20㎝の円形の柱痕跡が確認された。

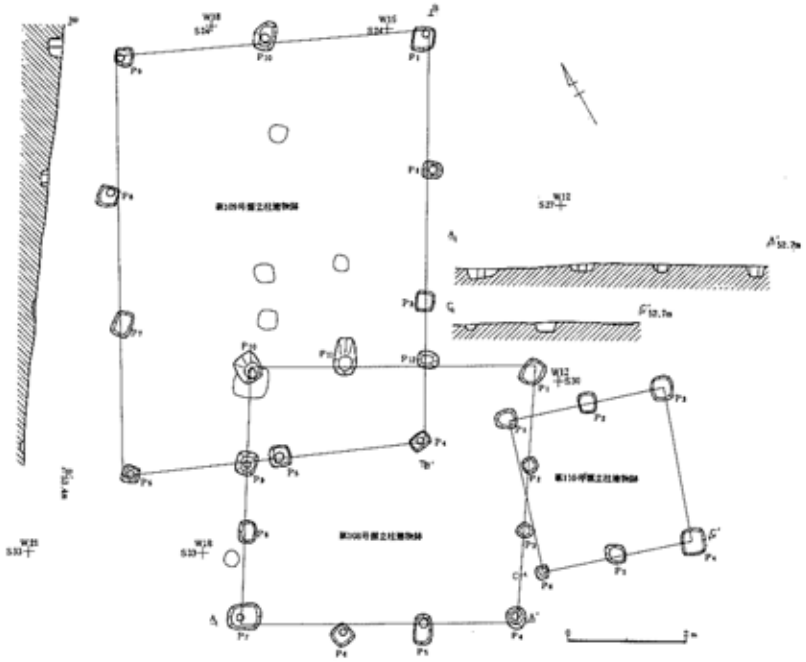
【出土遺物】P10埋土よりロクロ使用の土師器甕の小片が出土している。

第109号掘立柱建物跡(第140図)

【位置・確認面】W14～20、S24～32付近の地山岩盤面で検出された桁行は3間・梁行2間の南棟建物跡である。

【重複】第108号建物跡と重複するが、柱穴の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

【柱間寸法・方向】柱痕跡を基にした柱間寸法は東側柱列で北から2.3m・26.m・2.4mで総長7.3m、梁行が南妻で東から2.4m、2.6mで総長5.0mである。建物の方向は東側柱列で座標北より東へ31°振れている。



第140図　第108～110号掘立柱建物跡

【柱穴】柱穴の平面形は一辺30～50㎝の方形を呈している。深さは5～40㎝である。埋土は地山の礫を含む暗褐色土である。P1・2・4・5・6・8・9・10から直径10～15㎝の円形の柱痕跡が確認された。

【出土遺物】P8埋土より須恵器坏の小片が出土している。

第110号掘立柱建物跡(第140図)

【位置・確認面】W9～13、S30～33付近の地山岩盤面で検出された桁行2間・梁行1間の東西棟建物跡がある。

【重複】第108号建物跡と重複するが、柱穴の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

【柱間寸法・方向】柱穴の中心を基にした柱間寸法は桁行が南側柱列で東から1.3m・1.3mで総長2.6m、梁行が東妻で総長2.7mである。建物の方向は北側柱列で座標より西へ71°振れている。

【柱穴】柱穴の平面形は一辺20～40㎝の正方形を呈している。深さは5～25㎝である。埋は地山の礫の混じる褐色土である。

第111号掘立柱建物跡(第141図)

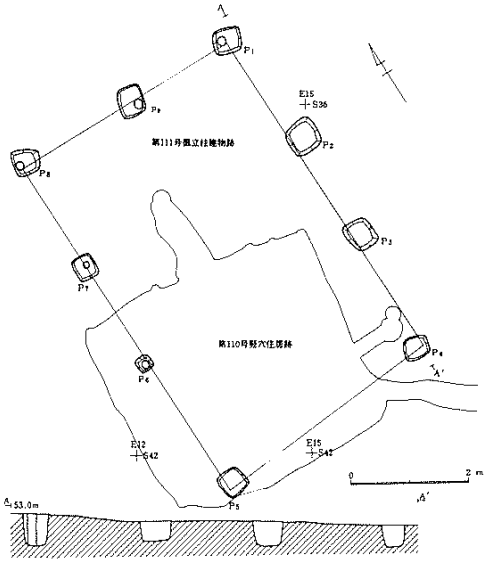
【位置・確認面】E10～17、S35～43面付近の地山ローム面で検出された桁行3間・行2間の南北棟建物跡である。

【重複】第110号竪穴住居跡と重複しており、それより新しい。

【柱間寸法・方向】柱痕跡を基本にした柱間寸法は桁行が東側柱列で北から2.1m・1.9m・2.2mで総長6.2m、梁行が北妻で東から1.7m・2.2mで総長3.9mで、桁行は7尺+6尺・7尺。梁行は6尺+7尺と推定できる。建物の方向は東側柱列で座標より西へ1°振れている。

【柱穴】柱穴の平面形は一辺30～60㎝の方形を呈している。深さは10～50㎝である。埋土は粘性・しまりのある暗褐色土である。P1・6・7・8・9・から直径10～15㎝の円形の柱痕跡が確認された。

【出土遺物】P8埋土よりロクロ使用の土師器甕の小片が出土している。

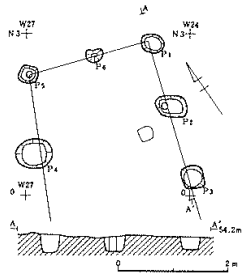


第141図　第111号掘立柱建物跡

第112号掘立柱建物跡(第142図)

【位置・確認図】W24～27、NS0～N3付近の地山ローム面で建物の一部が確認され桁行2間以上梁行2間の南北棟建物跡である。

【柱間寸法・方向】柱痕跡を基にした柱間寸法は桁行が東側柱列で北から1.0m、1.2mで総長2.2m以上、梁行が北妻で東から0.9m･1.0mで総長1.9mであり、建物の方向は東側柱列で座標北より東へ15°振れている。



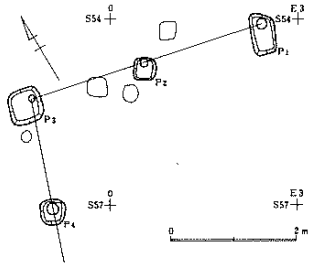
第142図　第112号掘立柱建物跡

【柱穴】柱穴の平面形は楕円形から隅丸方形で大きさは20～50㎝である。深さは30～40㎝で、埋土は暗褐色土である。P2・5から直径10㎝の円形の柱痕跡が確認された。

【出土遺物】P2より埋土より須恵器甕の小片が出土している。

第114号掘立柱建物跡（第143図）

【位置・確認面】W2～3、S54～56付近の地山ローム面で確認された2間の以上の1間以内建物跡である。削平のため北西の一部が検出されたのみである。



第143図　第114号掘立柱建物跡

【柱間寸法・方向】柱痕跡を基にした柱間寸法は桁行が東側柱列で東から2.0m、1.9mで総長3.9m、南北柱列が北から1.8mである。

【柱間】柱間の平面形は一辺30～50㎝の隅丸正方形を呈している。柱間の深さは10～20㎝で、埋土は粘性のある、にぶい黄褐色土である。P1～4から直径10～20㎝の円形の柱痕跡が確認された。

【出土遺物】P2埋土より須恵器坏の小片が出土している。

C　焼土遺構

第9号焼土遺構

【位置・確認面】W-2～5、S-4～6区で検出された。

【重複】11号住居跡堆積土を切って構築しており、11号住居跡⇒9号焼土遺構の変遷が捉えられる。

【平面形・規模】長方形である。規模は長軸232㎝×108m、深さ17㎝である。

【壁・その他】東側壁は緩やかに立ち上がる。その他の壁は垂直ぎみ立ち上がりを示す。

東

側壁以外酸化面を形成している。

【堆積土】2枚あり、焼土や炭化物を多量に含む。

【出土遺物】土師器甕がある。

第10号焼土遺構

【位置・確認面】W-5～6、Ｓ-4～5区で検出された。

【重複】11号住居跡堆積土を切って構築しており、11号住居跡⇒10号焼土遺構の変遷が捉えられる。

【平面形・規模】長方形である。規模は長軸128㎝×110㎝、深さ15㎝である。

【壁・その他】壁は急激な立ち上がりを示し、酸化面を形成している。

【堆積土】焼土や炭化物を多量に含む。

第11号焼土遺構

【配置・確認面】W-1、N-50区で検出された。確認面は基本層位Ⅴ層上面である。

【平面形・規模】長方形である。規模は長軸124㎝×72㎝、深さ28㎝である。

【壁・その他】壁は急激な立ち上がりを示し、酸化面及び還元面を形成している。

【堆積土】2枚あり、焼土や炭化物を多量に含む。

第12号焼土遺構

【位置・確認面】Ｅ-15、N-50区で検出された。確認面は基本層位Ⅴ層上面である。

【平面形・規模】長方形である。規模は長軸146㎝×78㎝、深さ12㎝である。

【壁・その他】壁は急激な立ち上がりを示し、焼け面及び還元面を形成している。

【堆積土】4枚あり、焼土や炭化物を多量に含む。

Ｄ　溝　跡

第16号溝跡

【位置・確認面】Ｅ－15～16、N－8～15区で検出された。確認面は基本層位Ⅴ層上面で検出された。

【規模】幅約0.3m、深さ0.15㎝の断面「U」字形を呈する。

【堆積土】大きく、2層に大別される。上層下部には灰白色火山灰が多く認められる。

【出土遺物】土師器坏、須恵器坏、甕がある。

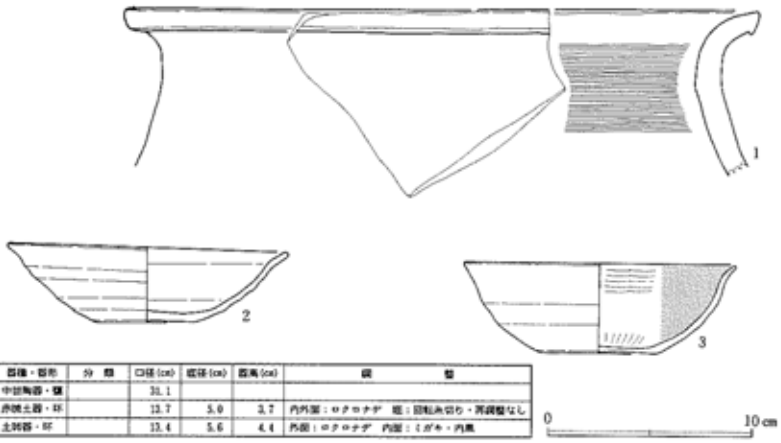
【その他】本遺跡は古代の集落跡が立地する斜面とは異なり、尾根上に立地していること、尾根上では古墳が検出されていること、すべての古墳周溝において灰白色火山灰が堆積していたこと、本溝跡に近接した梨畑内において鉄剣が表採されていること等遺構内からは古墳に係わる遺物の出土が認められなかったが、古墳の周溝の特徴と類似しており、古墳周溝の可能性がある。

第17号溝跡

【位置・確認面】W－3～E－3、N－12～S-5区で検出された。確認面は基本層位Ⅴ層上面である。

【規模】幅1.1m、深さ0.6mの断面「U」字形を呈する。

【堆積土】2枚ある。



No.	器種・器形	分類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整
1	中世陶器・甕		31.1			
2	赤焼土器・坏		13.7	5.0	3.7	内外面：ロクロナデ　底：回転糸切り・再調整なし
3	土師器・坏		13.4	5.6	4.4	外面：ロクロナデ　内面：ミガキ・内黒

第145図　表土およびその他の遺構出土遺物

Ⅵ　考　　察

(1)縄文時代早期の遺構と出土遺物

A　縄文土器

遺物集中地点・第3・4号土壙および遺物包含層出土土器は、宮城県船入島貝塚貝層下黒土層（林　1965）、吉田浜貝塚上層(後藤　1968)、田柄貝塚貝層下土層(相原　1986)などに認められ,縄文時代早期末葉のいわゆる「船入島下層式」(林1965)の一部と考えられるものである。

船入島貝塚の層位についてはすでに山内清男(1930)の指摘もあるように、地点によって包含される土器が異なり、「私の観察したところでは、船入島貝塚の例は、かなり複雑な問題を伴う」(林　1960)ものとされており、伊東信雄（1981）は口頸部に撚糸圧痕を有し、その下に単斜行縄文を有し、裏面には条痕を有する尖底の土器」をもって「船人島下層式」とすることを提唱している。伊東の定義に従うと、本遺跡の縄文土器は「船入島下層式」と呼称することはできなくなり、一応吉田浜貝塚の分層発掘の成果に基づき、「吉田浜上層」土器（相原　1989）と呼称しておきたい

B　石　器

遺構・遺物包含層およびその周辺の表土から出土し、前述の土器と共伴すると考えられる石器群の組成は以下の通りである。

・石鏃	19点	・磨凹石	1点
・石錐	8点	・磨　石	4点
・石匙	7点	・敲　石	1点
・彫刻刀面のある石器	1点	・石　皿	1点
・箆状石器	2点	小　計	7点
・スクレイパー	4点	総　計	61点
・両面加工石器	3点		
・ノッチ	2点		
・両極剥離のある石器	1点		
・不定形石器	7点		
小　計	54点		

剥片石器の石材としては珪質頁岩が全体の半数を占め、ついで頁岩が多い。

なお、出土点数が少なく、今回の資料をもって当該期における石器群を概観することはできない。よって、ここでは特徴的な器種にみられる形態および製作技法について指摘するにとどめる。

①石鏃は、基部形態によって平基（Ⅰ類）、凹基（Ⅱ類）、凸基（Ⅲ類）に分類される。平面形態は長幅にばらつきが認められるもののいずれも三角形状を呈し、全周に背面両面加工が施されるものが多い。量的には平基が多く、大倉遺跡、大梁川遺跡、小梁川遺跡、今熊野遺跡、三神峯遺跡など早期後葉～前期初頭の他遺跡において凹基が多いという点で、異なる様相を示している。ただし、第7図1のようにバルブの薄い剥片を素材に打面を先端部側に磨いて加工を施している例もあり、製作技法という点においては当該期における特徴を示している(小川・村田1986)。

②石錐には、全体形が棒状を呈するもの(Ⅰ類)と一部に先端部を有するもの(Ⅱ類)がある。いわゆる定形的な石錐は前者の1点(第7図4)のみで、これ以外は明確なつまみ部を持たず部分的な尖端部のみを作出されたものからなる。なお、この尖端部作出にあたってはかなりの比率で折断技術が関与しており、８点中4点において認められる。ただし、このような例はこの時期に限らず縄文時代全般を通じて巨視的には普遍的で、特定期期に顕著に増減する傾向はないと推定されており（佐藤・赤澤　1989）、時期を問わず尖端部の粗形となる細長い部位を作出するにあたって有効性を発揮していたと考えられる。また、この折断技術は尖端部作出のみならず不定形石器においても認められ、7点中４点が何らかかの形で関与している。ただし、これらについてはいずれも不定形の剥離を素材とし、しかも素材に対する折断の位置や方向、調整の程度に規則性は認められない。よって、結果として得られる「折れ面」が意図的にものなのか、これらはいずれも折断後における4点において認められる。ただし、このような例はこの時期に限らず縄文時代全般を通じて巨視的には普遍的で、特定時期に顕著に増減する傾向はないと推定されており(佐藤・赤澤1989)、時期を問わず尖端部の糧形となる細長い部位を作出するにあたって有効性を発揮していたと考えられる。また、この折断技術は尖端部作出のみならず不定形石器においても認められ、7点中4点が何らかの形で関与している。ただし、これらについてはいずれも不定形の剥片を素材とし、しかも素材に対する折断の位置や方向、調整の程度に規則性は認められない。よって、結果として得られる「折れ面」が意図的なものなのか、製作時あるいは機能時における破損によるものなのか厳密には判別することはできないが、これらはいずれも折断後に折断面あるいは折断面を打面にして二次加工が施されているという特徴を有する。また、第7図3のように石匙破損部を再利用し、石錐を作出するにも折断技術が利用されていることから、素材の形態を大きく変えて目的とする石器の粗形を作るにあたって、かなり有効的な技法であったと思われる。

③石匙は、破損後他の器種に転用されたものを含めると7点出土しているが、形態的につまみ部を上にした場合に刃部となる縁辺(身部)が縦長になるもの(Ⅰ類)と横長になるもの(Ⅱ類)に分類される。5点中4点がⅠ類に属し、それはさらに縁辺の交差により先端部が形成されるもの(A類)と形成されないもの(B類)に細分される。一方、製作技法という点においては、7点中5点に以下に述べる特徴が認められた。すなわち、腹面右側辺にやや急角度の連続的な調整剥離を施し、この面を打面にして、背面側に平坦で奥深く入る調整剥離がなされるという特徴を有する。腹面側の調整加工は、背面側の調整剥離がより平坦で奥深く届くための

打面形成と考えられており(相原・須田他　1987)、山形県松原遺跡(泰　1977)をはじめ、県内でも七ヶ宿町大倉遺跡(笠原1985)、同大梁川遺跡(佐藤・赤澤1988)、同小梁川遺跡（佐藤1988）、川崎町前田遺跡（相原・須田他1987）などで出土例がみられる。これらはいずれも早期後葉から前期前葉にかけての時期に位置付けられており、当該期における特徴的な製作技法と言える。ただし、大木1式に比定される名取市今熊野遺跡（小川・村田　1986）や大木1・2A式を中心とする仙台市三神峯遺跡(佐藤　1980)では、形態的には「三縁辺構成で、末端と側方に尖端部を持つ」という点において共通するが、上述の特徴は認められないことから、この製作技法はこの頃に消滅すると考えられている(佐藤・赤澤1988)。

以上、当遺跡石器群について、部分的にではあるが若干の考察を行った。その結果、製作技法という点においてとくに、当該期における他遺跡の石器群と共通する特徴が認められた。

ただし、石器組成という点においては、出土点数が少なく全体を反映しているかどうかの疑問は残るものの、当遺跡の場合石鏃と石錐が多く出土しており、この時期他遺跡において石匙や箆状石器の占める割合が高いこととは様相を異にしている。

<引用文献>

相原淳一1986　「第Ⅰ群土器」『田柄貝塚』宮城県文化財調査報告書第111集

相原淳一1989　「宮城県・山形県における早期から前期初頭にかけての土器編年について」『東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』第4回縄文文化検討会シンポジウム

相原淳一・須田良平他　1987「前田遺跡」『東北横断自動車道三遺跡調査報告書』Ⅱ宮城県文化財調査報告書121集

伊東信雄1981　「資料集」　Ⅴ・考古資料『宮城県史』　34

小川出・村田晃一　1986『今熊野遺跡』Ⅱ　宮城県文化財調査報告書第114集

笠原信男1980　「大倉遺跡」『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ宮城県文化財調査報告書第114集

後藤勝彦1968　「宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚[Ⅰ]」『仙台湾周辺の考古学的研究』

佐藤則之1980　「遺物の考察」『三神峰遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第25集

佐藤広史1988　「小梁川遺跡ー縄文時代遺構編2ー」『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書』Ⅳ　宮城県文化財調査報告書第126集

佐藤広史・赤沢靖章　1988「大梁川遺跡」『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書』Ⅳ宮城県文化財調査報告書第126集

佐藤広史・赤沢靖章　1989「縄文時代の石器に見られる折断技術の性格について」『福島考古』第30号

泰　昭繁1977　『松原』置賜考古学会

林　謙作1960　「宮城県桂島貝塚出土の前期縄文式土器群」『考古学雑誌』46ー3

林　謙作1965　「縄文文化の発展と地域性ー東北」『日本の考古学』Ⅱ

山内清男1930　「繊維土器に就いて　追加第二」『史前学雑誌』2ー1

(2)縄文時代中期の遺構と出土遺物

A　土器の特徴と年代

出土した縄文土器は摩滅が著しく、接合にも困難をしいられた。したがって、器形･文様構成全体が知られる固体は数が限られている。

(器形と文様構成)出土した土器のうち、鉢と見られる破片資料1点以外はほとんどが深鉢形であるものと思われる。深鉢には、第20図2･第24図1･第25図3･第37図1に見られるような、口縁部が外反し、胴央部が膨らみ、底部までは直線的にすぼまる器形のものが多くみられる(A類)。加えて第20図1・第24図2・第25図2・第30図1・第35図2・第43図1などもA類の器形の範疇でとらえられるものと考えられるが、口縁部の外反の度合いや胴部の膨らみの程度には差位が認められる。さらに深鉢A類は文様をもつものと地文だけのものに分類される。

文様の種類については、

1　連結「S」字状文(第24図1)

2　「〜」状を呈する分節波濤文(第30図1・第37図1)

3　連結波濤文(第24図2・第35図1)

4　横位波濤文＋刺突文(第43図1)

5　方形区画文（第20図2）

が認められ、地文だけのものについては、

6　胴位部に横位区画線(稜線)が巡り、その下に地文が施されるもの(第25図2)

7　区画線が巡らず、地文のみが施されるもの(第25図3)

がある。

ほかには胴部から口縁部まで直立する器形の深鉢(B類)が1点ある。胴上部に稜線が巡り、その下に地文が施されるものである(策38図1)。

鉢とみられる破片資料は第38図2で、口縁部が内弯し、胴上部から底部にむかってすぼまる器形である。櫛目状条線文が施されている。

このほか破片資料ではあるが、胴部が強く内弯する器形のもの(第38図6・第47図1)、横位波濤文が施されているもの(第20図3・第25図1・第40図1・第46図3、口縁部に粘土帯を付着し波頂部下に円窓が設けられているもの(第41図1)、楕円形区画文と思われる文様が施されるもの(第30図5・第37図2・第47図2)、隆帯文が施されるもの(第41図2・第42図1・第41図2・同図3)が認められる。文様が施されていない破片の口縁部資料では、深鉢A類同様、胴上部に横位区画線を巡らして地文が施されるものと、区画線を巡らさずに地文だけが施されるものがある。後者で

は地文が口縁部分には施されず、胴上部から施されるものが多い。
文様を描く線や、地文部と無文部を区画する線には稜線、沈線、稜沈線がある。稜線は高さに比して下幅が広く、断面は三角形状を呈し、大変よくミガキがかけられている。本遺跡では隆起線がみな稜線状となるので、土器の説明には稜線、稜沈線という言葉を用いている。沈線は深さに比して上幅が広く、内面はミガキがかけられている。
地文には、単節縄文・無節縄文・複節縄文・0段多条縄文ほか、撚糸文がある。
(出土状況)下表に各遺構からの遺物の出土状況をまとめている。
共伴関係については、第121号住居跡で深鉢A3類に無文の深鉢A6・A7類が、第101号土壙では深鉢A2類に深鉢B類・鉢が伴って出土している。
遺構間にも新旧・切り合い関係はないが、第121号住居跡で炉の作り替えに伴い、炉埋設土器がA3類からA1類にかわっている。それぞれの遺構が堆積土出土土器と床面・底面出土土器の内容は比較できるほどのまとまりのある資料はないが、互いに類似するものであり、差異は認められない。
(土器年代)第4次調査で出土した縄文時代中期の各土器は、岩出山町玉造遺跡(千葉：1980)、仙台市観音堂遺跡(今野:1987)、蔵王町二屋敷遺跡(加藤・阿部他:1987)、白石市菅生田遺跡(丹羽・阿部・小野寺：1982)、七ヶ宿町大梁川遺跡(相原・加藤:1988)などいずれも縄文時代中期末葉の大木10式(山内:1937)期の年代が与えられている遺跡に出土例が見られるものばかりである。したがって、本遺跡出土の縄文時代中期の土器は明瞭な共伴関係をつかみにくい状況ではあったが、時期的にまとまる資料であることが窺われる。それは、前述の通り横位波濤類の文様が描かれるAを中心とする内容であるが、近年の細分研究(丹羽：1981)では大木10式の中でも第Ⅱ段階に位置付けられるものであった。最近、七ヶ宿町大梁川遺跡の発掘調査で新しい資料が加わったことにより再度編年が検討され、改めて大木10式期の3段階にわたる変遷が呈示されている(相原・加藤：前掲)。それによれば,玉造遺跡などに出土例

遺物の出土状況

分類 / 遺構	深鉢A 1	2	3	4	5	6	7	他	深鉢B	鉢	横位波濤文類	楕円形区画文	刺突文	隆帯文	撚糸文
第115号住居跡					○			炉					○		○
第121号住居跡	炉		炉			○	埋				○			○	○
第126号住居跡		炉										○	○		
第127号住居跡															
第133号住居跡			埋?												
第101号土壙		○							○	○		○			○
第102号土壙											○				○
第103号土壙													○	○	○
第104号土壙														○	
第105号土壙				○									○	○	
第106号土壙															○
第108号土壙															
第109号土壙															
第110号土壙											○				

註　炉は炉埋設土器、埋は床面埋設土器

がある深鉢A1～4類は大木10式期前半の新しい時期(大梁川第ⅡA～b層土器)に位置つけられた。その大梁川第ⅡA～b層土器とは深鉢に連結波濤文や分節波濤文といわれる横位波藩文類の文様が施されているもので、波濤部分は渦巻き状に巻きこまれないのが特徴とされており、本遺跡出土土器の内容をほぼ包括するものと考えられる。ただし、菅生田遺跡･観音堂遺跡などに出土例がある深鉢A5類や楕円形区画文の施された土器は大木10式後半期(大梁川第Ⅰ層土器)に位置付けられ、文様として新しい要素とされるものが、少量だが交じっていることを指摘したい。

なお、大梁川第Ⅰ層土器とは「多くは隆帯をもち、地文に縦走撚糸文が用いられる頻度が高いもの」で「横位波濤文、方形区画文、楕円形区画文のいずれかの範疇で捉えられる文様が施されて」いるものと説明される。本遺跡と距離的に近い鳴瀬町梨木囲貝塚(芳賀：1968)、七ヶ浜町大木貝塚(小岩：1961、原・馬目：1968)、仙台市下ノ内遺跡(篠原：1983)などの仙台湾周辺にみられる大木10式期の遺跡では撚糸文が特に多く認められる場合が多く、年代はこの大梁川第Ⅰ層器期に位置付けられている。撚糸文が少ない本遺跡とは興味深い相違点である。

B　遺構の特徴

(遺跡の年代)本遺跡では竪穴住居跡5軒、土壙9基が検出されている。第115・121・126号住居跡については炉埋設土器あるいは炉底出土土器から、土器の年代に沿った大木10式前半の新しい時期(大梁川第ⅡA～b層土器)を中心とする年代を考えることができる。遺物の残存状況がよくない第127・133号竪穴住居跡についても、他の時期の破片資料は認められなかったことや、住居跡の構造が前者と類似することもふまえれば、同様の年代が与えられよう。土壙については、その底面から出土している遺物は少ないが、堆積土から出土しているもの同様、竪穴住居跡から出土している土器と共通の特徴をもつものであることから、土壙も大木10式前半の新しい時期(大梁川第ⅡA～b層土器)を中心とする年代を考えることができる。遺物の残存状況がよくない土壙についても、第4次調査区では別の時期の縄文土器が発見されなかったこともふまえれば、同様の年代が考えられよう。

なお、この時期の住居跡について菅生田遺跡(丹羽他：前掲)や大梁川遺跡(手塚：1988)ではこれまでの調査例をまとめ、詳細に検討しており、参照されたい。

Ⅰ　竪穴住居跡

(平面形･規模)平面形には円形状のもの(第115・121号住居跡)、隅丸方形状のもの(第133号住居跡)、隅丸長方形状のもの(第126・127？号住居跡)がある。県内のこれまでの検出例では円形状のもの、隅丸方形状のものが多く認められるが、隅丸長方形のものはこの時期に限れば県内では初見となろう。

規模は長軸が4.4～5.4m、面積は14～23m^{2の}の範囲におさまるもので、これもこれまでの例と大きな差異はない。

(柱穴の配置)柱穴の柱には炉の位置が大きくかかわっており、炉の長軸線上にあるピットとその線をはさんで対称的な位置にある2基のピットは正三角形の頂点にあたる配置関係にあり、この3基のピットが主柱穴と考えられた（第115・121・127・133号住居跡）。第126号住居跡ではさらに、炉の長軸線をはさんで対称的な位置にある2本のピットも主柱穴と考えられたが、これは住居の平面形に深く関係するもとの見られる。またいずれにも、主柱穴のほかに、炉の長軸線をはさんで対称的な位置にあるピットや周溝内に位置するピットが認められ、これらは主柱穴に対する補助柱穴と考えられた。他遺跡での検出例をみても、後述するような複式炉を持つ住居跡では主柱穴3本＋補助柱穴という配置が典型約である。

(炉)構造上はいずれも、土器埋設石囲部・敷石石組部・掘り込み部で構成される複式炉で、いわゆる「上原型複式炉」(丹羽：1971、1974)に属するものである。

土器埋設部は、炉の長軸線上のピット状の掘り方に底部を欠く深鉢型土器を正位に据え、その周りを比較的扁平な石で一重あるいは二重に囲むものである。炉埋設土器には横位波濤類の文様が施されているものを用いるという大梁川遺跡の事例は本遺跡も同様であるとみられる。

土器埋設部に続く敷石石組部は、平面形が炉長軸線に直交して長軸がある長方形を呈し、断面形は逆台形状である。底面には小ぶりな石を敷き、側面には下段に大きめの石、上段に小さめの石を積んでいる。奥壁には一枚石を用いているものも見られた。敷かれた石やそ側面・底面は加熱が及んでいる。床面からの深さは30～40㎝である。

敷石石組部に続く掘り方を持つ掘り込み部は壁ぎわまで延び、平面形は方形を呈する。床面からの深さは20～30㎝で、敷石石組部底面より10㎝ほど浅い。

炉の全長は1.9～2.4m、面積は1.4～2.3m^{2}の範囲に収まる。炉は住居の大小によらず、住居全面積の約10%を占めている。集落内おいて、炉の長軸方向は一定していない。

これまでの県内の検出例とは構造、規模ともほぼ類似するが、他遺跡では掘り込み部に石囲が見られるものが多いが、本遺跡では岩盤を掘り込んだためか、掘り込み部に石囲いが認められないのが特徴である。

(その他)床面は地山を平坦に削りだして造っているが、第115号住居跡だけには部分的な敷石床面が認められる。周溝はすべての住居跡の壁沿いに認められるが、いずれも炉掘り込み部には巡らないほか全周するものでなく、断続的である。第121・133号住居跡には床面に土器埋設遺構が認められている。

大木10式期の3本柱構造と上原型複式炉が組み合う竪穴住居跡の分布は宮城県南部～福島県中央部・山形県中央部以南がその中心域であり、宮城県北部域はその北限地域とみることが可能であるという指摘がある(手塚前掲)。本遺跡もその分布域内にあたり、また前述の通り竪穴住居跡は他遺跡の事例と共通する特徴を備えたものであった。住居の構造に強い斉一性があることが窺われる。

2 土 壙

(形態・規模)平面形には円形を基調とするもの(第101～106号土壙)、不整円形あるいは楕円状のもの(第108～110号土壙)がある。前者の規模は直径0.9～1.5㎝で、深さは第105号土壙が浅いほかは0.8～1mである。断面形態を見ると、底面に向かって内部が広がるいわゆるフラスコ状土壙(第101～104土壙)と、側壁が直立する円筒状の土壙(第106号土壙)がある。後者は遺存状況がよくない。

また、底面には、ピットが認められるもの(第102・104号ほか第108・109号土壙)や、ピットのほかに、溝が壁ぎわに周溝状に巡りさらにピットから周溝まで放射状に延びるもの(第101・106号土壙)がある。底面にピットがあるフラスコ状土壙は本遺跡とほぼ同じ年代の仙台市山田上ノ台遺跡(渡部・主浜ほか1981)、ほか縄文時代中期前葉～中期の七ヶ浜宿町小梁川遺跡(村田：1987)で検出されているが、溝があるものについては県内では初見である。ただし、時期は縄文時代前期末葉であるが、山形県遊佐町吹浦遺跡(渋谷・黒坂：1988)では、フラスコ状土壙の底面にピットがあるもののほか、ピットから溝が放射状に延びるものがある。その機能については堆積土の状況等からは不明であった。

(堆積土の状況・機能)フラスコ状土壙についてみると、底面付近の堆積土は地山の崩落土を中心とする流入土でほぼ水平に層が重なっているが、上部の堆積土は地山の崩落土のほか炭化物・焼土を多量に含み、特に第101号土壙には一括の出土遺物が認められている。フラスコ状土壙の本来の機能は植物質食料の貯蔵施設と考えられている(永瀬：1982、村田：1987)が、本遺跡ではそのような状況はうかがうことができなかったが、水平な堆積層が土壙本来の機能を有していた時のものと思われる。さらに、使用目的を果たし、壁面の崩落等で浅くかつ狭くなった段落で廃棄穴(ゴミ捨て穴)に転用したものと考えられる。七ヶ浜町小梁川遺跡のフラスコ状土壙でも同様の状況が窺われものがある(村田：前掲)。底面のピットや溝等の機能については堆積土からは不明であった。

3 遺構の構成

本遺跡の縄文時代中期末葉の遺構には複式炉を持つ竪穴住居跡5軒・フラスコ状土壙4基を

含む土壙9基があり、いずれも第4次調査区の北側、標高53～54mのところに位置し、ほぼ同時期に機能していたことが考えられた。特に調査区北西端の第115・121・133号住居跡、第101～106号土壙は適当な間隔をおいて分布し、意図的な配置を窺わせるものである。

大木10式期の集落では、竪穴住居跡にフラスコ状土壙が伴って検出されている遺跡は県内ではこれまで仙台市山田上ノ台遺跡（主浜：前掲）のみであり、本遺跡は2例目となる。

引用・参考文献

相原惇一・加藤明弘（1988）；大梁川遺跡（土器編）宮城県文化財調査報告書126集
阿部恵(1988)；鰻沢遺跡　宮城県文化財調査報告書第40集
布川金丸(1979)；東北北部の縄文時代中期の竪穴住居跡　考古学ジャーナル№.170
一条孝夫(1978)；湯坪遺跡発掘調査概報　宮城県文化財調査報告書第54集
伊藤信雄(1969)；縄文文化の変遷(古代史)宮城県史1
伊藤信雄ほか（1969）；長根貝塚　宮城県文化財調査報告書第19集
梅宮茂(1974)；複式炉文化圏　福島考古№.15　福島県考古学会
加藤孝（1968）；西ノ貝塚　宮城県文化財調査報告書第16集
加藤孝・後藤勝彦（1975）；青島貝塚　南方町史　資料編
加藤・阿部・小徳（1984）；二屋敷遺跡　宮城県文化財調査報告書第99集（自動車道Ⅸ）
楠本政助（1973）；仙台湾における先史狩猟文化　矢本町史第1巻
熊谷常正（1982）；岩手の土器－県内出土資料集成－岩手県立博物館
後藤勝彦・斎藤泉治（1967）；西ノ浜貝塚　宮城県文化財調査報告書第13集
後藤勝彦（1968）；南境貝塚　宮城県文化財調査報告書第15集
後藤勝彦（1969）；南境貝塚　宮城県文化財調査報告書第20集
後藤勝彦ほか(1972)；中沢遺跡　川崎町史所収
後藤勝彦ほか（1978）；上深沢遺跡　宮城県文化財調査報告書第52集(自動車道Ⅰ)
今野隆ほか（1986）；観音堂遺跡･新宮前遺跡宮城県文化財調査報告書第118集
佐藤庄吉・片倉信光（1958）；白石市荒井字縄文住居遺跡　仙台郷土研究184
佐藤広史・赤沢靖章(1988)；大梁川遺跡（石器編）宮城県文化財調査報告書第126集
篠原信彦(1982)；下ノ内遺跡　仙台市文化財調査報告書第40集
篠原信彦ほか(1983)；下ノ内遺跡　仙台市文化財調査報告書第56集
渋谷孝雄・黒坂雅人(1988)；吹浦遺跡　山形県埋蔵文化財報告書第120集
須藤隆（1988）；東北地方における縄文集落の研究　東北大学考古学研究報告Ⅰ
千葉宗久（1980）；玉造遺跡　宮城県文化財調査報告書第68集
手塚均(1988)；大梁川遺跡(遺構編)宮城県文化財調査報告書第126集
土岐山武(1975)；宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告書　南方町教育委員会
中橋彰吾ほか（1987）；蔵王町史　資料編
中村光一編(1976)；沼津貝塚保存管理計画策定事業報告書　石巻市教育委員会
中村良幸(1982)；“複式炉“について－岩手県を中心として－考古風土記7

丹羽茂(1974)；福島県における縄文時代中期の住居集落跡研究の現状と問題点　福島考古15
丹羽茂(1981)；大木式土器縄文文化の研究4　雄山閣
丹羽・阿部・小野寺(1982)；菅生田遺跡　宮城県文化財調査報告書第92集
芳賀寿幸（1974）；向畑遺跡調査報告概報　柴田町郷土研究会報告会7
芳賀寿幸（1983）；向畑道跡考古資料　柴田町誌　資料編Ⅰ
芳賀良光(1968)；宮城県宮古島貝塚梨木囲遺跡の研究 「仙台湾周辺の考古学的研究」
林謙作（1965）；縄文文化の発展と地域性－東北－日本の考古学Ⅱ
原・馬目（1968）；宮城県大木囲貝塚発見の遺物について　古代51
藤沼邦彦(1986)；里浜貝塚　宮城県文化財調査報告書第119集
邊見軜高（1973～74）；女川町出島山下貝塚第2～4次調査報告書
邊見軜高（1976）；天雄寺貝塚　南三陸先史文化研究会
松島町教育委員会(1976)；西ノ浜貝塚史跡保存管理計画策定事業報告書
真山・村田ほか(1987)；小梁川遺跡　宮城県文化財調査報告書第122集（七ヶ宿ダムⅢ）
目黒吉明ほか(1969)；上原遺跡概報　二本松市文化財調査報告
目黒吉明・丹羽茂(1970)；本宮町上原遺跡概報　本宮町教育委員会
目黒吉明・森貢喜ほか(1975)；塩沢上原A遺跡　福島県文化財調査報告書第47集（自動車道Ⅰ）
目黒吉明(1982)；住居の炉 「縄文文化の研究8」 雄山閣
茂木好光(1984)；大谷地遺跡　宮城県文化財調査報告書第100集
柳沢清一(1980)；大木10式土器論「古代探叢」
山内清男(1937)；縄文土器型式の細別と大別　先史考古学1―1
山内清男（1964）；縄文土器総論　日本原始美術1―1
渡部・主浜ほか(1981)；山田上ノ台遺跡調査概報　仙台市文化財調査報告書30集

(3)弥生時代の遺構と出土遺物

竪穴式住居跡から出土した遺物は弥生土器、石器がある。

弥生土器は摩滅が著しく、資料化できたものは12点である。出土土器の特徴は①複合口縁、②口縁下端の刺突文、③口唇上面に刻み目、⑤口縁部の縄文、⑥口縁部縄文のものが含まれるなどである。

宮城県において、このような特徴を持つ土器は、名取市清水遺跡(丹羽：1981)、瀬峰町大境山遺跡(阿部、赤沢：1983)、仙台市富沢遺跡(太田：1988)等の出土例に類似しており、大きくは天王山式土器とすることができる。

一方、福島県における弥生後期の土器編年では、天王山式土器に続く型式は踏瀬大山式が設定されている。中村五郎氏(1976)によれば、天王山式土器の特徴は、①口縁突起の発達、②交互刺突文、③条の縦走する縄文、④連弧文が指摘されている。また、踏瀬大山式は、①複合口縁、②複合口縁下端の棒、竹箸、指頭圧痕等による列点文、③口唇部土面の縄文の圧痕、刻み目文④複合口縁外面に縄文のみを施すもの、⑤文様は沈様文(直線、連弧文、鋸歯文、波状文)を体上半に施文、⑥天三Ｅ山式土器ほど明確な交互刺突文から認められない等が示されている。

本例の場合、土器セット(組合わせ)や形態、文様構成等を十分に把握できないものであり、良好な出土例を待ち吟味しなければないないものと考えられるが、以上の指摘を踏まえるならば、天王山式より踏瀬戸大山式により近い特徴を有していることが指摘できる。

(4)古墳時代の遺構と出土遺物

A　1号墳周溝底面出土遺物と年代

① 土師器

土師器坏は坏部及び脚部破片資料である。坏部はこぶりで浅目のものである。口縁部下端に稜を有する。外面ヘラケズリ、ヘラナデ、内面ヘラミガキであり、後に横ナデが施されている。脚部は残存部位は少ないがヘラケズリが施されている。坏部と脚部の接点の観察から、脚部は空胴と見られる。

② 埴　輪

埴輪には形態上、朝顔形埴輪(Ａ類とする)、円筒埴輪(Ｂ類とする)に分類できる。

朝顔形埴輪

朝顔形埴輪は資料化できたもので4点ある。形態から分類が可能である。

A1類(第53図1、2)

形態的には底部からわずかながら直線的に外反し、丸い肩部を有するもので、口縁部が大きく開く。頸部凸帯は断面「三角形」を呈している。円筒部凸帯は高く、3段認められる。断面形は「側面が窪む台形」である。段の間隔は第1段14㎝、第2段12㎝、肩部10㎝を平均としている。屈曲部凸帯は断面「側面が窪む台形」を呈し、調整工具の圧痕が認められるものがある。

外面調整はすべて縦位のハケメ、凸帯部に横位のナデを施す。

内面調整は口縁部横位のハケメ、円筒部に縦位のナデである。

スカシ孔は4つあり(第2・3段)円形で第2段のものは小さく(径約4㎝)、第3段のものはおおきいもので(径約7㎝)ある。

なお、肩部に双方ともヘラ記号を有する。

A2類（第53図4）

形態的には底部が小さく、体部が太い胴張りの形態であり、円い肩部を有する。頸部から口縁部は欠損している。頸部凸帯は断面「側面が窪む台形」を呈している。円筒部凸帯は高く、3段認められる。断面形は「側面が窪む台形」である。段の間隔は第1段8㎝、第2段10㎝、肩部11㎝を平均としている。

外面調整はすべて縦位のハケメ、凸帯部に横位のナデを施す。

内面調整は口縁部横位のハケメ、円筒部縦位のナデである。スカシ孔は4つあり(第2・3段)、円形で径約7㎝ある。

なお、肩部にヘラ書きを有する。

円筒埴輪

円筒は庭は資料化できたもので9点ある。

形態的には底部から緩やかに外反し、口縁部で強く開く形態である。凸帯は高く、2段認められ、断面形は「台形」、「側面が窪む台形」、「三角形」がある。段の間隔は第1段12～16㎝、第2段12～16㎝、第3段(最上段)10～18㎝を計る。

凸帯部にはすべて横位のナデが施されている。基部内面にヘラケズリを施すものがある。

これらは、調整の違いから細分が可能である。

B1類(第53図5・第54図1～4・7・8)

外面に縦位ハケメが施されるほか横位のハケメ調整が認められるもの。

外面調整は縦位のハケメ→最上段の一部に断続的な横位のハケメを施しているものである。内面調整は横位のハケメ、ナデである。スカシ孔は2つあり（第2段）円形で径約7～10㎝である。

B2類(第54図5・6)

外面調整は縦位のハケメのみで構成される。

内面調整は横位のハケメ、ナデ、基部内面にはヘラケズリが認められるものが約半数認められる。スカシ孔は2つあり(第2段)、「円形」のものと「半円形」のものがある。

以上のすべての埴輪は、製作に当たって、いわゆる「小作程を繰り返す」製作技法を用いているものすべてで占められている。また、黒斑現象が認められないことから、窯を用いて焼成しているものと見られる。

③遺物および遺構の年代

円筒埴輪についての編年は川西宏幸氏の「円筒埴輪総論(1978)」が基本的に活用されている。本地方においても、これに基づき、地域的な各種の色彩や細部の違いについて新しい観点を導入した埴輪編年が行われている(辻：1986、藤沢：1987)。

本古墳出土の主体となる朝顔形埴輪A1類と円筒埴輪B2類の特徴は、大きく川西編年のⅤ期段階(5世紀末以降)に相当するものと見られる。また、従の関係で見られる円筒埴輪B1類が混在することは大きな特徴である。

川西編年におけるⅣ期末～Ⅴ期段階の特徴を有する本地方の埴輪出土例には仙台市裏町古墳(伊東信雄：1974)、同市富沢窯跡(渡辺泰伸：1974)、同市大野田古墳群(藤沢：1987)、大郷町諏訪古墳(加藤孝：1980)等があり、辻秀人氏がつとに指摘している「第2の波」のごとく以外に多い。

裏町古墳例は、全長約45㎝の前方後円墳で竪穴式石室を有する。出土遺物には朝顔形埴輪、円筒埴輪の他のＴＫ-208型式の須恵器、乳文鏡(藤沢：1987)等が出土している。

埴輪は横位のハケメを有するものと縦位のハケメのみのものとで構成される。比率では後者が多い。作技法はすべて小行程を繰り返す技法を用いている。5世紀後葉に位置付けられている。

富沢窯跡は本地方で数少ない埴輪窯跡調査例である。窯跡の構造は無階無段の登窯である。朝顔形埴輪、円筒埴輪の他引田式土師器が伴出した。

埴輪は、連続するヨコハケを有するものと縦位のハケメのみのものとで構成される。比率では後者が多い。製作技法はすべて小行程を用いている。5世紀末葉に位置付けられている。

大野田古墳群例は6基の古墳が確認され、春日社、鳥居塚、大野田1・2号墳から埴輪が出土している。朝顔形埴輪、円筒埴輪があり、すべて縦位のハケメを施すもので占められている。春日社古墳からは形象埴輪(馬形埴輪)がある。5世紀末～5世紀初頭に位置付けられている。

大郷町諏訪古墳は、直径が25mの円墳の調査例で、6点の円筒埴輪が図示されている。すべて縦位のハケメのみで構成されている。また、最上段にはヘラ記号が見られる。6世紀中葉頃に位置付けられるものと見られ、本地方の埴輪の中で、最も新しい時期の一つと考えられている。

以上の県内既存調査例をまとめると、①外面調整は横位のハケメが除々に少なくなり、縦位のハケメのみとなる。②川西編年のⅤ期段階に該当する埴輪は、製作にあたってはすべて小行程を繰り返す技法を用いている。③形象埴輪も同様に減少する等である。

このような類例から見てみると、本例の特徴である横位のハケメを縦位のハケメの混在する現象は、仙台市裏町古墳例、富沢窯跡例と同様な組成を示しており、同例に近接した時期が考えられる。

埴輪の特徴で裏町例、富沢例と比較すると、主体となる円筒埴輪B2類には凸帯の低いものが含まれること、最上段階の長大化の傾向、スカシ孔の粗雑化、底部径の小型化等新しい要素も見られることから、裏町古墳例、富沢窯跡例より時期的に降るものと見られ、郷楽1号墳の時期については6世紀初頭を中心とした年代を示しておきたい。

また、伴出した土師器高坏は、富沢例で共伴した土師器の組成には存在しないものなので、単純には比較できない。富沢例は調査当初、東北の土師器編年第Ⅲ型式「引田式」とされた(渡辺：1974)。近年、類例の増加に伴い再検討がなされ、土師器編年の南小泉式に次型式引田式を統合し（宮城県教育委員会：1974）、あらためて細分、富沢例は南心泉式の新しい段階南小泉式C段階に位置するものとされた(丹羽：1984)。

示された類例として、大河原町台ノ山遺跡例を上げ、共伴した須恵器ＴＫ-208型式をもって南小泉Ｃ段階を5世紀後葉に位置付けている。

本例は、南小泉Ｃ段階の高坏の類例には合致するものがなく、また、調製技法の点において

も、脚部外面にヘラケズリを施している等新しい要素があり、この段階までは遡らない可能性が高い。次型式とされる住社式型には、現在のところ高坏の類例がなく、本例が住社式期の高坏の一例となるものであろうか。脚部外面にヘラケズリを施している例はさらに新しく栗囲式期になると多く出現する傾向にあるようである。

このように、本例の土師器高坏は5世紀後葉と考えられる南小泉C段階より後出的であり、富沢例より時期が降るものと見られる。

この年代観は共伴した埴輪の年代とも矛盾するものではないかと考えられるのである。

B　1号墳周溝堆積土出土遺物(第55図)

1号墳周溝からは、古墳に直接結び付くと考えられる底面出土の埴輪と土師器高坏の他、それ以後の遺物が出土している。1～3層出土遺物である。

3層からは須恵器坏が2点ある(第55図8・9)。形態は底部から口縁部にかけて直立ぎみに立ち上がるもので、外面に底部及び体部下端に手持ちヘラケズり調整を施している。非常に小振りな坏である。

このような特徴がある類例としては、八幡崎B遺跡(利府町教委：1988)、色麻町色麻古墳群(伊東：1951)、仙台市郡山遺跡（木村：1981）等がある。八幡B遺跡では須恵器坏、かえりの蓋が関東系土師器と共伴して出土している。多賀城創建に係わる窯跡調査例、関東系土師器の年代観とを比較検討した結果、年代は7世紀後半～8世紀初頭が考えられた。色麻古墳例、郡山遺跡例も大きくこの年代観に合致するものと考えられており、本例もこの時期内の所産として大過ないであろう。なお、畿内地方の須恵器編年と比較すると大阪府高蔵46号窯跡例に類似する特徴であり、ＴＫ-46段階は7世紀中・後年代の年代が考えられている(田辺：1981)。

1層出土遺物には土遺器坏4点、土師器甕1点、須恵器坏1点、壷1点がある。

土師器坏は製作に際して、ロクロを使用しており、形態的には底部に対して口径が大きいものである。さらに、底部調整は無調整のもので占められている。東北地方土師器編年ではロクロ使用の土師器は第Ⅶ型式（表杉ノ入式）とされており、その年代はおおむね平安時代の所産とされている(氏家：1957)。また、近年類例の増加とともに再調整の有無と形態、共伴した他遺物との検討により、表杉ノ入式の細分が試みられている(真山：1991、丹羽：1957)。

その結果、再調整の有るものが古く、無いものが新しい位置付けにあることが理解された。本例は底部調整は無調整のものであり、平安時代9世紀後半代以降の所産と考えられる。

須恵器坏、壷、は各々1点のみであり、明確な時期を同定するのはむずかしいが、須恵器坏は形態約に見て、8世紀前半代に位置付けられる県内窯跡出土例に類似するようであり、おおむね奈良時代に位置すると考えられる(東北学院大学：1983、真山：1986)。壷については類例

がなく、所属時期は不明である。

C　4号墳の出土遺物について

4号墳築造時期に最も近い資料としては、墓道底面出土土師器鉢、須恵器無蓋高坏、フラスコ形長頸瓶がある。

土師器鉢は底部丸底であり、体部上端に稜を有し口縁部で外反する鉢形のもので、外面ヘラケズリ、ナデ、内面ミガキ⇒黒色処理が施されている。

形態からみると、体部上端に稜を有する点など角田市住杜遺跡竪穴式住居跡出土遺物の中に認められる鉢形土器が類似している。住社遺跡例は東北地方の土師器編年で第Ⅳ型式「住社式」とされている(氏家印典：1957、志間奏志：1958)。

その後、住社式は資料の追加があり、名取市清水遺跡(丹羽：1981)では共伴した須恵器がＴＫ-10型式に類似することから、住社式の実年代を6世紀中頃を中心とした年代が与えられた。

また、住社式の下限の年代については、次型式の栗囲式の標準遺跡である仙台市粟遺跡調査例で示されている。調査報告書によれば(東北学院大学：1979)、粟囲式は複数の段階に細分され、その中で古く位置付けられるＴＫ-209段階の須恵器が含まれており、7世紀前半が栗図式の上限と考えられている。つまり、住社式の下限の年代は7世紀初頭と見られ、本例の下限とすることができる。

ただ、本例の場合、調整技法の点で、体部にヘラケズリ調整を施すものであり、ハケメ調整を意識している住社式とは相違している。この点を踏まえるならば、住社式の中でも新しく位置付けなければならないものかもしれない。

次に、須恵器無蓋高坏については、坏部に明瞭な段を有し、底部外面に櫛状工具による圧痕を加えるもので、底部から口縁部にかけて垂直ぎみに管立ち上がるものである。

脚部にスカシ孔を持たず、裾の広がる形態を示している。

管見によれば、このような形態・特徴を持つ資料は現在のところでは知られないようである。ただし、細部の特徴では坏部の段、櫛状工具による圧痕を施す例は知られており、大阪府高蔵10号窯跡、高蔵43号窯跡例(田辺：1981)をはじめとして、関東地方の各古墳(三重シンポジウム：1987)、本県清水遺跡からも類例がある。

本例の高坪は高蔵10号窯跡例のような口縁部が開く形態ではなく、底部から口縁部にかけて垂直ぎみに立ち上がるもので、これは高蔵43号窯跡例の方にむしろ近い特徴と言える。

脚部の形態やスカシ孔を持たない点では高蔵43号窯跡例とは直接的には結びつかないものの、このような相違点は類例がない現段階では、高蔵43号窯跡段階に最も近い時期のものと見

られる。しかし、本例無蓋高坏が高蔵43号窯跡段階より先行するということは、脚部のスカシ孔の有無、形態から見てあり得ないものと思われる。

したがって、本例無蓋高坏の所属時期については、6世紀末葉頃を中心とするものと考えられる。

また、フラスコ形長頭壷葉の体部と頸部の接点がなく、全体像を捉えられないのは残念であるが、時期的な問題としてフラスコ形長頸壷は東海地方で主に焼成されたものとされており、その端緒が捉えられている。この形態の出現時期は7世紀初頭とされている(田辺：1981)。

D　4号墳の構造と年代

次に、横穴式石室の構造上で吟味してみたい。

県内において、横穴式石室構造の古墳の中で、本例に近い形態を持つものとしては丸森町台町75号墳(志間：1955)、白石市鷹ノ巣19号墳(志間：1972)が知られている。台町例では門柱施設を持たない竪穴系横穴式石室とされ、古く位置付けられている（氏家：1977）。

4号墳の主体部の構造は、玄室、羨道、墓道からなり、門柱施設がない「バチ」状の平面形を呈し、主体部が墓道より1段高い位置に構築している等竪穴式石室を意識した構造である。構造上、新しい要素は認められないことから、横穴式石室構造の古墳の中でも、古く位置付けられるものと考えられる。

したがって、出土遺物の検討、横穴式石室の構造から、郷楽4号墳の築造年代は6世紀末葉～7世紀初頭を中心とした年代が捉えられ、横穴式石室を採用した初期段階と考えられる。

E　4号墳墓道、周溝堆積土出土遺物

4号周溝底面からは、須恵器甕、土師器ミニュチュア土器がある。

また、周溝堆積土1～3層からは土師器坏が出土している。

墓道3層は炭の層で裏道のみに認められる。層中及び上面からロクロ非使用土師器が3点が出土した。出土位置、層位的に見て同時代、一括性がある。

出土土師器の特徴は、非ロクロ、有段丸底であり、底部が大きく、口縁部にかけて開きながら内弯する形態をとるもので、外面ヘラケズリ、横ナデ、内面ヘラミガキ⇒黒色処理される。

形態及び特徴から、国分寺下層式(氏家：1957)に位置付けられるものと見られる。

3層出土の遺物については、3層位自体の性格を考える必要がある。3層は墓道部分にのみ認められるものであり、4層上面に広がり、古墳築造時期から時期的に降るものである。また、炭化物(炭)を主体とする層位であることから、火を焚いた痕跡をみることができる。古墳築造後時間を経てから墓道で火を焚き、土器を遺棄するという行為は2次的な供献に係わる遺構、

遺物と理解できよう。このような類例としては、色麻町色麻古墳群71号（古川：1985）で認められている。

周溝堆積1層出土遺物には土師器坏がある。製作に際して、ロクロを使用しているもので表杉ノ入式に否定される。無調整のものであり、時期的には平安時代・9世紀以降の所産と考えられる。

F　2・3号古墳の年代

2・3号古墳については周溝底面から遺物がわずかにしか認められなかったので、明確な時期を示されない。3号墳にからは須恵器平瓶、甕、2号墳からは須恵器甕がある。この内時期を示されるものは3号墳から出土した外面に稜がある平瓶である。

平瓶は体部を成形したのちに粘土円板で口をふさぎ、さらに、頸部を接合したものと見られる。体部に稜を有すもので、平瓶の中でも後出的である。平瓶は7世紀初頭に出現するとされており、供膳、儀式用の容器とされている(田辺：1981)。

このことから、3号墳の年代は大きく7世紀代に位置するものと捉えられる。2号墳についても須恵器甕の形態が2・4号出土のものに類似しており、大きくこの時期内におさまるものと考えておきたい。

G　郷楽古墳群の変遷と周辺の古墳

先述のとおり、今回発見された1～4号墳の年代観は、埴輪を有する1号墳（6世紀初頭）⇒竪穴系横穴式石室の4号墳(6世紀末～7世紀初頭)⇒2・3号墳(7世紀代)の築造時期が考えられた。立地的、位置的な関係から継続性があると見られる。

郷楽4号古墳群のうち北約200mの地点(本遺古墳群より標高約30m低い位置)には川袋古墳群がある。3基の古墳のうち川袋1号墳が調査されており、胴張式門柱施設を有することが確認されている。7世紀後半代と考えられている(利府町教委：1978)。

郷楽4号墳と川袋1号墳の主体部を比較してみると、細部では若干異なるものの構造上、および企画性(規模)において、非常に強い類似性、近似値を示している。このことから、郷楽古墳群⇒川袋古墳群への変遷、系統性を指摘できるのではないだろうか。

(5)古代の遺構と出土遺物

古代の遺物には竪穴住居跡から出土した土師器・須恵器・赤焼土器の他に鉄刀子等の鉄製品や瓦、砥石などがある。以下土師器、須恵器、鉄器、瓦について検討し、遺構の年代や集落の変遷を考察していくこととする。

(1) 土師器の特徴と分類

土師器には坏・高台坏・碗・甕・鉢・蓋・甑の7種類の器種がある。ここでは出土量の多い坏・甕について形態面と製作技法から検討を加え分類していくことにする。

＜坏＞

坏には製作にロクロを使用していないものAと使用したものBとがあり、Aについては外面や底部の特徴から、またBについては全体的器形や口縁端部の特徴からさらに細分される。なお、内面の調整はすべてヘラミガキ、黒色処理されている。

Ａ　Ⅰ 類.製作にロクロを使用せず、体部に段をもち丸底の浅い皿状もので、調整はすべて底部から体部にかけてヘラケズリ、口縁部はナデである。

Ａ Ⅱ 類.製作にロクロを使用せず、体部に稜をもち丸底の浅い皿状のもので、調整はすべて底部から体部にかけてヘラケズリ、口縁部はナデである。

Ａ Ⅲａ類.製作にロクロを使用せず、体部に段や稜をもたずしかも丸底の浅い皿状もので、調整は底部から体部にかけてはヘラケズリで、口縁部はナデとミガキのものとがある。

Ａ Ⅲｂ類.製作にロクロを使用せず、体部に段や稜をもたずしかも平底のもので、浅い皿状のものと碗状のものとがある。調整はすべて底部から体細にかけてヘラケズリ、口縁部はナデである。

Ｂ　Ⅰ 類.製作にロクロを使用し、口径に対して底部の小さいもので、底部切り離し後再調整の施されないものＢＩＡ、手持ちのヘラケズリしたものＢＩｂ、回転ヘラケズリしたものＢＩｃに細分される。

Ｂ Ⅱ 類.製作にロクロを使用し、口径に対して底部の大きなもので、底部切り離し後の調整の施されないものＢⅡＡ、手持ちのヘラケズリしたものＢⅡｂ、回転ヘラケズリしたものＢⅡｃに細分される。

＜嚢＞

甕には製作にロクロを使用していないものAと使用したものBとがあり、Aは器形や調整技法から、Bは器形や口縁部の特徴からさらに細分することができる。

ＡＩａ類.製作にロクロを使用しない長胴形を呈する大形のもので、調整は外面がハケ後ヘラ

ケズリ、内面がヘラナデである。

ＡＩｂ類.製作にロクロを使用しない長胴形を呈する大形のもので、調整は外面がヘラケズリ内面がヘラナデである。

ＡⅡＡ類.製作にロクロを使用しない小形のもので、調整は外面がハゲ、内面がヘラナデである。

ＡⅡｂ類.製作にロクロを使用しない小形のもので、調整は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。

ＢＩＡ類.製作にロクロを使用した長胴形を呈する大形のもので、口縁部が丸くおさまるものである。外面の調整はロクロナデ・ケスりで、叩きにより成形された痕跡をもつものもある。内面はロクロナデ・ケズリ・ヘラナデでる。

ＢＩｂ類.製作にロクロを使用した長胴形を呈する大形のもので、口縁端部が上方に突き出すものである。外面の調整はロクロナデ･ケズリで、叩きにより成形された痕跡をもつものもある。内面はロクロナデ・ヘラナデ・回転ヘラナデでる。

ＢⅡＡ類.製作にロクロを使用した小形のもので、口縁部が丸くおさまるものである。調整は外面がロクロナデ・ケズリで、内面はロクロナデである。

ＢⅡｂ類.製作にロクロを使用した小形のもので、口縁端部が上方に突き出すものである。調整は内外面ともロクロナデである

(2) 須恵器の特徴と分類

土師器には坏・高台坏・碗・甕・鉢・蓋・甑・高台付盤・壷の9種類の器種がある。ここでは出土量の多い坏について形態面と製作技法から検討を加え分類していくことにする。

＜坏＞

坏は形態的特徴から、口径に比して底径の大きく体部が直線的に立ち上がるものA、口径に比して底径が大きく体部が丸みをもって立ち上がるものB、口径に比して底径が小さく体部が直線的に立ち上がるものC、口径に比して底径が小さく体部が丸みをもって立ち上がるものDに大別され、さらに底部切り離し技法から回転糸切りによるものＩヘラ切りによるもⅡ、静止糸切りによるものⅢ、再調整により不明なものⅣに分けられ、それぞれ切り離し後の調整により無調整のものA、手持ちヘラケズリの調整をもつものb、回転ヘラケズりの調整をもつものCに細分される。

A類.口径に比して底面の大きく体部が直線的に立ち上がるもので、底部が回転糸切りで無調整のものＡＩA、手持ちヘラケズリの調整をもつものＡⅡb、回転ヘラケズリの調整をもつものＡＩｃ、底部がヘラ切りで無調整のものＡⅡA、手持ちヘラケズリの調整をもつも

のＡⅡb、回転ヘラケズリの調整をもつものＡⅡc、静止糸切りで手持ちヘラケズリの再調整をもつものAⅢb、手持ちヘラケズリで切り離しの不明なものAⅣb、回転ヘラケズリで切り離しの不明なものAⅣcがある。

B類.口径に比して底径の大きく体部が丸みをもって立ち上がるもので、底部が回転糸切りで無調整のものＢＩＡ、手持ちヘラケズリの調整をもつものＢIb、回転ヘラケズリの調整をもつものＢIc、底部がヘラ切りで無調整のものＢⅡＡ、手持ちヘラケズリの調整をもつものＢⅡb、回転ヘラケズリの調整をもつものＢⅡc、手持ちヘラケズで切り離しの不明なものBⅣb、回転ヘラケズリで切り離しの不明なものBⅣcがある。

C類.口径に比して底径が小さく体部が直線約に立ち上がるもので、底部が回転糸切りで無調整のものＣＩＡ、手持ちヘラケズリの調整をもつものＣＩb、底部がヘラ切りで無調整ＣⅡＡ手持ちヘラケズリの調整をもつものＣⅡｂがある。

D類.口径に比して底径が小さく体部が丸みをもって立ち上がるもので、底部が回転糸切りで無調整のものＤＩＡ、手持ちヘラケズリの調整をもつものＤＩb、底部がヘラ切りで無調整のものＤⅡＡ、手持ちヘラケズリの調整をもつものＤⅡbがある。

(3) 出土土器の共伴関係と住居間の比較

前項のように出土土器は分類された。これらの土器はすべて住居内から出土したもので、各住居間には土器の組み合わせに差異が認められ、その結果いくつかの土器群として捉えることができる。この場合遺物間の共伴関係が問題となるが、遺物には住居に伴う状態で出土したものと堆積土中から出土したものとがあり、これらを一括して扱うことは危険である。しかし、堆積土出土の土器には床面出土のものと接合関係が認められ、また遺物間にも型式差をこえるような大きな相違も見られないことから、量的に少ない遺構に伴う遺物を補足する意味でもこれらを一連のものとして扱うこととする。

第1群土器　第11号住居、第I4号住居、第107号住居に代表される土器群で、土師器坏はすべてロクロ不使用の坏A類で、甕はロクロ不使用で外面がハゲ＋ケズリのＡＩＡ類とロクロを使用した長胴形のＢI類とが共に見られる。須恵器坏は口径に比して底径が大きいＡ・Ｂ類のみで、底部は再調整により切り離しが不明なものが量的に多く、切り離しが分かるものについてはヘラ切りか静止糸切りで、いずれも手持ちか回転ヘラケズリが施されており、無調整のものはない。また、これらの他に107号住居では盤状の高台付坏や高台付盤がこれらと共伴している。

第2群土器　第9号住居、第105Ａ号住居、第108号住居跡に代表される土器群で、土師器坏は口

クロ不使用で内外面に稜や段をもたず皿状を呈するAⅢ類と、ロクロを使用し底部全面に手持ちや回転ケズリの再調整がみられるＢⅡc類やＢＩbとが共にみられる。甕はロクロ不使用で外面がケズリのＡⅡＡ類とロクロを使用し長胴形のＢＩ類がある。須恵器坏は口径に比して底径が大きいＡ・Ｂ類のみで、底部は切り離しが分かるものはヘラ切りか回転糸切りで、再調整のあるものとないものはほぼ同数である。また、再調整が底部全面に施され、切り離しの不明なものはわずかに含まれる程度である。

第3群土器　第10号住居、第104号住居に代表される土器群で、土師器坏はロクロ使用で口径に比して底部が比較的大きいもので、切り離し後の再調整をもつものは約半数である。須恵器坏はＡ～Ｄ類まで多様であるが、Ａ・Ｄ類が主体を占める。底部の切り離しはヘラ切りが回転糸りで、その比率はほぼ同数である。切り離し後再調整を施されたものはない。

第4群土器　第128号住居、129号住居跡に代表される土器群で、土師器坏はロクロ使用で口径に比して底部が小さく、切り離し後の再調整をもつものはない。須恵器坏はどちらの住居にも認められず、かわって赤焼土器が出土している。

（4）出土土器の年代と問題点

全項のように出土土器は1～4群に大別された。ここでは、各土器群について他地域の遺跡の類例と比較しながらそれらの年代について検討していくことにする。

①第1群土器

第1群土器の土師器坏は製作にロクロを使用せず外面をミガキやヘラケズリ、内面をミガキ黒色処理したという特徴をもつA類のみで、このような土器は国分寺下層式(氏家：1967)に比定され8世紀以降に位置づけられている。

同様の特徴をもつ土器は多賀城大畑地区ＳＩ1063・1065住居跡や清水遺跡第58、62号住にみられ、国分寺下層式の中でも比較的新しい段階と考えられており、前者は政庁Ⅲ期、後者は8世紀後半に位置付けられていることから、土師器坏A類についても同様な年代と考えられる。

次に須恵器についてみると、第1群土器の須恵器と非常に類似するものが硯沢窯跡から出土している。すなわち107号住居跡出土の坏AⅣb・AⅣc類は硯沢窯跡のＩＦやＩＥ類に類似しB9・B10号窯跡から、高台坏は硯沢ＩＡやＩＢ類に類似しB3・B9号窯跡から、高坏はB16号窯跡、B7号住居跡から、また14号の坏ＡⅡb・ＢⅡb類のものも硯沢ⅡＢ類に類似しB2号窯跡から出土している。さらに、これらの須恵器は形態的特徴以外にも胎土や焼き上りも非常に類似するもので生産の場である硯沢窯から郷楽遺跡に供給されたということも考えられる。

いずれの窯も8世紀年中葉以降とされている。

さらに住居から出土した瓦について考えてみる。第14号住居跡から出土した瓦は床面から出土した軒丸瓦とカマド燃焼部下から出土した丸瓦で、とくに丸瓦はカマド構築にあたり湿気防止の暗渠の覆いとして使用されたもので住居建築の年代を直接示す資料といえる。出土した丸瓦の特徴には「田」「伊」「占」の刻印が認められることで、このような刻印をもつ文字瓦は陸奥国分寺創建の瓦や多賀城政庁期の瓦に限定してみられるものであり、仙台市の台原丘陵で焼かれたものとされている。また、他の刻印をもたない瓦についても形態、製作技法、胎土から刻印瓦と同じⅡ期のものと考えられる。加えて床面から出土した軒丸瓦は重弁蓮華文で多賀城Ⅱ期の221様式に比定できる。

このように本来的には竪穴住居跡の建材に使われるものではない瓦が、大量にしかもⅡ期に限られたものが使われていることから、これらの瓦は多賀城期の造営にあたって台原から度接持ち込まれたものか、伊治公呰麿呂の乱で廃虚と化した多賀城から運び込まれたものと考えられるが、土師器・須恵器の年代からすれば前者である可能性が強い。

以上の3点から第1群土器は多賀城期政庁の造営期に近い年代、すなわち8世紀の中葉～後半にかけてのものと考えられる。

②第2群土器

2群土器の土師器坏にはロクロ使用のＡ類とロクロ不使用のＢ類のものとがあり、とくに105Ａ号住居ではロクロ不使用のＡⅢ類とロクロ使用のＢⅡc類の土師器坏が共に床面から出土している。これらの中でＡⅢ類のような特徴をもつものは国分寺下層式に比定され、またＢⅠ・ＢⅡ類については平安時代の土器である表杉の入式(氏家：1957)と同様の特徴をもつものである。このようにロクロ不使用の土師器坏とロクロ使用の土師器甕、ロクロ不使用の土師器坏、ロクロ使用の土師器坏が共伴して出土している例には多賀城SD492溝跡や伊治城S104・12号住居があり、このような組成を示す土器群は「多賀城B群上器」や「伊治城型組成の土器群」として国分寺下層式と表杉の入式の中間の段階に位置付けられ、8世紀末の所産と考えられている(白鳥：1980)。

ロクロ使用とロクロ不使用の土師器坏が共伴して出土した遺跡はこれらの他にも認められている。硯沢第6号住居では8世紀中葉～後半の須恵器に共伴してロクロ使用の土師器坏が出土しており、このことを須恵器生産に係わる遺跡の特殊性としてとらえている。(真山：1987)しかし、名取市今熊野ＩK43号住居(丹羽：1984)や多賀城五万崎地区SＩ1439号住居からは体部に段や稜をもち外面をヘラケズリやナデで調整した、明からに国分寺下層式の形態的特徴を示す土師器坏の底部にロクロからの切り離しの際に生じる糸切り痕が認められるものがで出土しており、土師器製作におけるロクロ技術の導入が8世紀後半にまで遡る可能性が考えられる。

次に須恵器についてみると、108号住出土の坏ＢⅡＡ類は硯沢ⅡＣ類やⅡＧ類に、ＢＩc類は硯沢ＩH類に類似するものがみられるものの、切り離し後の再調整をもつものはこれらよりも少なく、しかも古い要素である回転ヘラケズリのものがほとんど含まれないことから硯沢のものよりも若干下がる年代が考えられる。

上記のように、土師器と須恵器のいずれの年代にも大きな隔たりがみられないことから、第2群土器の年代は8世紀末頃と考えられる。

③第3群土器

第3群土器の土師器坏はすべて製作にロクロを使用し、器形は口径に比して底部が比較的大きく、その半数に底部切り離し後に手持ちヘラケズリの再調整が認められた。

また、須恵器坏は底部の切り離しが回転糸切りによるものと、ヘラ切りによるものの比率はほぼ同じで、切り離し後に再調整を加えたものは認められなかった。

このような組成を示す土器群の例は大河原町台ノ山遺跡第8号住居(阿部･千葉：1980)や白石市青木遺跡第21号住居(小川：1980)がある。一方、多賀城の土器群と比べると土師器についてはＣ群土器のものとよく類似するが、須恵器は形態的にはＣ群土器に近いものの、底部切り離し技法をみるとＣ群土器は本遺跡第3群土器よりもヘラ切りの占有率が高く、回転糸切りが主体を占めるＤ群土器と中間的な様相を示すものである。

これらのことから第3群土器は表杉の入式の中でも比較的古い段階に位置付けられ、年代は9世紀前半～中葉にかけてのものと考えられる。

④第4群土器

4群土器の特徴は土師器坏の底部が非常に小さく、底部切り離し後に再調整をもたないことと、1～3群には共伴している須恵器坏にかわって赤焼土器の坏が出現することである。

このような土器組成は仙台市鹿島遺跡第1号住居(佐々木：1982)や色麻古墳群第14・36号住居(古川：1983)、多賀城Ｅ群土器にみられ、鹿島遺跡1住は9世紀中葉～10世紀前葉、色麻14・36住では共伴する灰釉陶器から9世紀後半～10世紀初頭、さらに多賀城Ｅ群土器は10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰をはさんで出土していることから10世紀前半～後半の時期が考えられている。

本遺跡では、4群を出土する124・129号住居の床面近くに灰白色火山灰が堆積していることから、これらの土器は10世紀前半までは降らず9世紀後半～10世紀初頭のものと考えられる。

(5) 遺構の年代と構成

古代の土器については、前項のように1～4群の土師器群として分類され、編年的な位置付けが行われた。すなわち第1群土器は8世紀中葉～後半（第1期）、第2群土器は奈良時代末の8世紀末(第2期)、第3群土器は平安時代初頭の9世紀前半～中葉(第3期)、第4群土器は9世紀後半～10世紀初頭(第IV期)である。以下検出された遺構がどの時期に位置付けられるか検討していく。

まず、出土遺物から帰属の判明するものは次のとおりである。

第Ⅰ期　11～14住・107住・103住・114住

第Ⅱ期　9住・101住・105Ａ住・106住・108住・122住・34建

策IV期　10住・15住・16住・102住・104住・105Ｂ住・109～111住・113住・120住・123住・125住・130住

第Ⅴ期　124住・128住・129住

次に切り合い関係や、堆積土の状況から帰属の判明するものは以下のとおりである。

第Ⅱ期　23建・26建・27建

第Ⅱ期　24建・25建・32建・37建・112住・117住・119住

第IV期　30建・31建・111建

また、切り合いや遺物からは不明であるが、建物の構築法や方向などから帰属が推定できるものは次のようになる。

第IV期101～103建

以上のように各点の遺構は各時期に分類された。

しかし、掘立柱建物跡など遺物も少なく時期を特定する要素の少ないものについては若干不明な点を残すものも多い。

県道北側で検出された掘立柱建物については切り合い関係から最も新しいと考えられる30建・31建では柱の抜き取り痕から灰白色火山灰の堆堆積が認められていることからすべての掘立柱建物跡が8世紀中頃から10世紀前半までの間に収まるものと考えられる。

一方、県道南側地区については、多少異なった状況がうかがわれる。すなわち、県道北側ではどの建物も柱穴の平面形や規模、埋土の状況などが類似しているのに対して県道南側で検出された14棟の掘立柱建物跡にはこれらとは別の一群が認められるということである。ここではこれらにっいてさらに考察を加えてみることとする。

まず横穴の特徴をみれば101～103・111建(1群)は平面形が正方形や隅丸正方形を基調とし、規模が50～70㎝程度で壁がすべて垂直に掘り込まれているのに対し、104～110・113・114建

(2群)は平面形が円形や楕円形を基調とし、規模も40㎝前後と小さく、壁が斜めに掘り込まれ断面形が逆台形を呈するものも認められる。また、建物全体についてみても1群の建物はすべて桁行梁行が直行し長方形を呈しているに対して、2群では桁行梁行が直行せず不整な四辺形を呈するものが多くみられる。

これらの掘主柱建物跡の時期については1群の建物は県道北区から検出されたと柱穴などの特徴が類似し、建物周辺から赤焼土器も出土していることからおおむね古代のものと考えられ、さらに111建は第Ⅲ期の竪穴住居である110住を切って建てられていることから第Ⅳ期に位置付けられるものと考えられる。

次に、2群の建物は104建が103建と重複しこれを切っていることから第Ⅳ期以降のものであることは明白で、建物周辺から出土している中世陶器の口縁部の形態が白石市東北窯のものに類似している点や、この中世陶器以外に時代の異なる遺物が全く認められないことから、この遺物が時期を特定できるものと考えられ、その年代は13世紀頃であると考えられる。

なお、28建・29建・33建・34建・35建・112建・118住についてはどの時期に位置付けられるか不明である。

引用参考文献(弥生・古墳・古代関係)

阿部博志ほか（1980）；台ノ山遺跡「東北新幹線関係遺跡調査報告書」 宮城県文化財調査報告書第62集
伊東信雄(1957)；古代史「宮城県史」 第1巻
伊東信雄ほか(1988)；裏町古墳発掘調査報告書 「仙台市文化財調査報告書第7集」
今津節生ほか(1988)；東国の埴輪 「福島県立博物館企画展」
氏家和典(1957)；東北土師器の型式分類とその編年 「歴史14輯」 東北史学会
氏家和典(1957)；日本の考古学Ⅳ
大友　透ほか(1988)；名取市　古墳出土埴輪について　名取市の文化財
加藤　孝（1980）；大郷町史
川西宏幸（1978）；円筒埴輪総論
木村浩二ほか（1981）；郡山遺跡Ⅰ～Ⅶ　仙台市文化財調査報告書
斎藤　忠(1980)；埼玉県稲荷山古墳
斎藤吉弘ほか(1987)；郷楽遺跡発掘調査報告書　宮城県文化財調査報告書第123集
佐藤甲二（1986）；若林城跡　仙台市文化財調査報告書第90集
志間泰治（1958）；宮城県角田町住社発見の竪穴式住居跡とその考察
庄子　敦（1988）；八幡崎B遺跡　利府文化財調査報告書第4集
白鳥良一ほか(1974)；岩切鴻ノ巣遺跡「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ」 宮城県文化財調査書第35集
田辺昭三(1981)；須恵器大成
辻　秀人ほか(1982)；原山1号墳発掘調査概報　福島県立博物館調査報告書第1集
辻　秀人（1986）；福島における埴輪生産の動向 「福島県の研究」 第1巻

中村五郎（1976）；東北地方南部の弥生土器編年 「東北考古学の諸問題」
丹羽　茂ほか（1976）；西野田遺跡 「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ」 宮城県文化財調査報告書35集
丹羽　茂ほか(1981)；清水遺跡 「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」 宮城県文化財調査報告書第77集
丹羽　茂（1983）；宮前遇遺跡　宮城県文化財調査報告書第96集
古川一明（1983）；色麻古古墳群　宮城県文化財調査報告書第95集
藤沢　敦（1987）；大野田古墳春日社古墳・鳥居塚古墳発掘調査書　仙台市文化財調査報告書第108集
真山　悟（1981）；東山遺跡 「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」宮城県文化財調査報告書第81集
真由　悟（1981）；家老内遺跡 「東北自動車調査報告書Ⅴ」宮城県文化財調査報告書第81集
奥山　悟ほか(1986)；硯沢窯跡　宮城県文化財調査報告書
渡辺泰伸(1974)；富沢窯跡 「古窯跡研究会研究報告」
渡辺泰伸ほか（1980）；道安寺横穴古墳群　利府町文化財調査報告書
東北学院大学考古学研究部（1979）；栗遺跡発掘調査報告書「温故11号」
東北学院大学考古学研究部(1983)；次橋窯跡発掘調査報告書「温故13号」
第6回三県シンポジウム埴輪の変遷　普遍性と地域性（1985）
宮城県教育委員会（1980）；川袋古墳　利府町文化財調査報告書第1集

Ⅶ　まとめ－集落の構成と遺構の変遷－

郷楽遺跡は宮城郡利府町加瀬字郷楽・森郷字後山に位置し、松島丘陵から樹枝状に分岐した北にのびる標高50～70mの起伏のある小丘陵の尾根から西・南斜面に立地しており、今回までの調査で縄文時代の竪穴住居跡5軒、弥生時代の竪穴住居跡1軒、古墳4基、古代の竪穴住居跡44軒・掘立柱建物跡45棟・埋設土器遺構7基・焼土遺構11基・竪穴遺構4基・土壙9基、中世掘立柱建物跡9棟が検出され、当遺跡が非常に長い歴史的過程の集積によって形成されたことを示している。

もちろん、これまでの調査は仙塩道路路線敷に限られるもので遺跡全域におよぶものではない。しかし、のべ25000m^{2}にもおよぶ調査で、郷楽遺跡の歴史的過程の一端は把握し得たものと思う。ここでは調査範囲における限界を踏まえながら、遺跡の歴史的な変遷について述べてみたい。

○縄文時代早期

郷楽遺跡から発見された最も古い遺構の遺物は縄文時代早期末まで遡り、県道北側調査区中央部の張り出しの尾根部で遺構群が、尾根の北側で西側から入り込む沢状の斜面からはそれに伴う遺物包含層が検出された。

遺構は焼面、土壙、チップ集中地点、ピット群、遺物包含層などで、直接的な生活の営みを示す住居跡は検出されなかったが、当時の人々が尾根上の平垣面を居住空間として利用し、北側の沢状の斜面を廃棄の場としていたことをうかがい知ることができる。

また、土器は吉田浜貝塚上層から出土したものと類似するもののみで、集落が営まれていた期間も比較的短いものと考えられる。

○縄文時代中期

この時期の遺構や遺物は県道南側調査区北側の西に張り出す丘陵の頂部から斜面の肩口にかけて5軒の竪穴住居跡と6基の貯蔵穴を含む土壙の基が検出された。これらは南北約年45×東西約40mの範囲におさまるが、遺構が西側に偏在することと地形から判断して集落の範囲はさらに西側にのびると考えられる。また遺物包含層は調査区内では確認されず調査区外の北西斜面に形成されていた可能性があるが、貯蔵穴として利用されていた土壙が壁土の崩落などで機能を失った後は廃棄の場とされていた。

住居は5軒あり、すべて大木10式期のもので複式炉を有している。平面形は隅丸の楕円形～円形と各住居間に若干の差異がみられるものの、柱穴の配置や出土土器の特徴には大きな相違が認めれないことからこれらの住居はほぼ同時期に存在していたものと考えられる。

また、121住居では住居の立て替え、炉の作り替えが認められことから1型式時内にはまとま

るものの比較的長い期間集落が形成されていた可能性がある。

○弥生時代

県道北側調査区の中央部の西のびる舌状の張り出しの尾根上で後期の竪穴住居1軒が第1号古墳のマウンドの下から検出された。この部分は縄文時代早期末の遺構が検出された。この部分は縄文時代早期末の西に隣接するところである。

発見された遺構が竪穴住居跡1軒のみで集落の範囲や構成については言及できるものではないが、郷楽遺跡に住む弥生人たちが眼下に広がる沖積地を舞台に農耕を営み、生活をしていたことがうかがえる。

○古墳時代（16世紀初頭～6世紀末）

この時代の遺構には県道北側から検出された古墳4基がある。これらの古墳はすべて円墳で、埴輪のめぐるものとそうでないものや、規模にも直径15～30mと格差がみられるものの、どれも南北にのびる丘陵とそれから派生する舌状の張り出しの頂部に立地し、尾根を周溝によって切断する形で墳丘を作りだしている。

主体部のわかるものは横穴式石室が検出された4号墳のみであるが、痕跡などから3号墳も同様の横穴式石室で、また、1号墳は掘り方や石材の散乱なども認められないことから、粘土郭などの木棺直葬であった可能性がある。

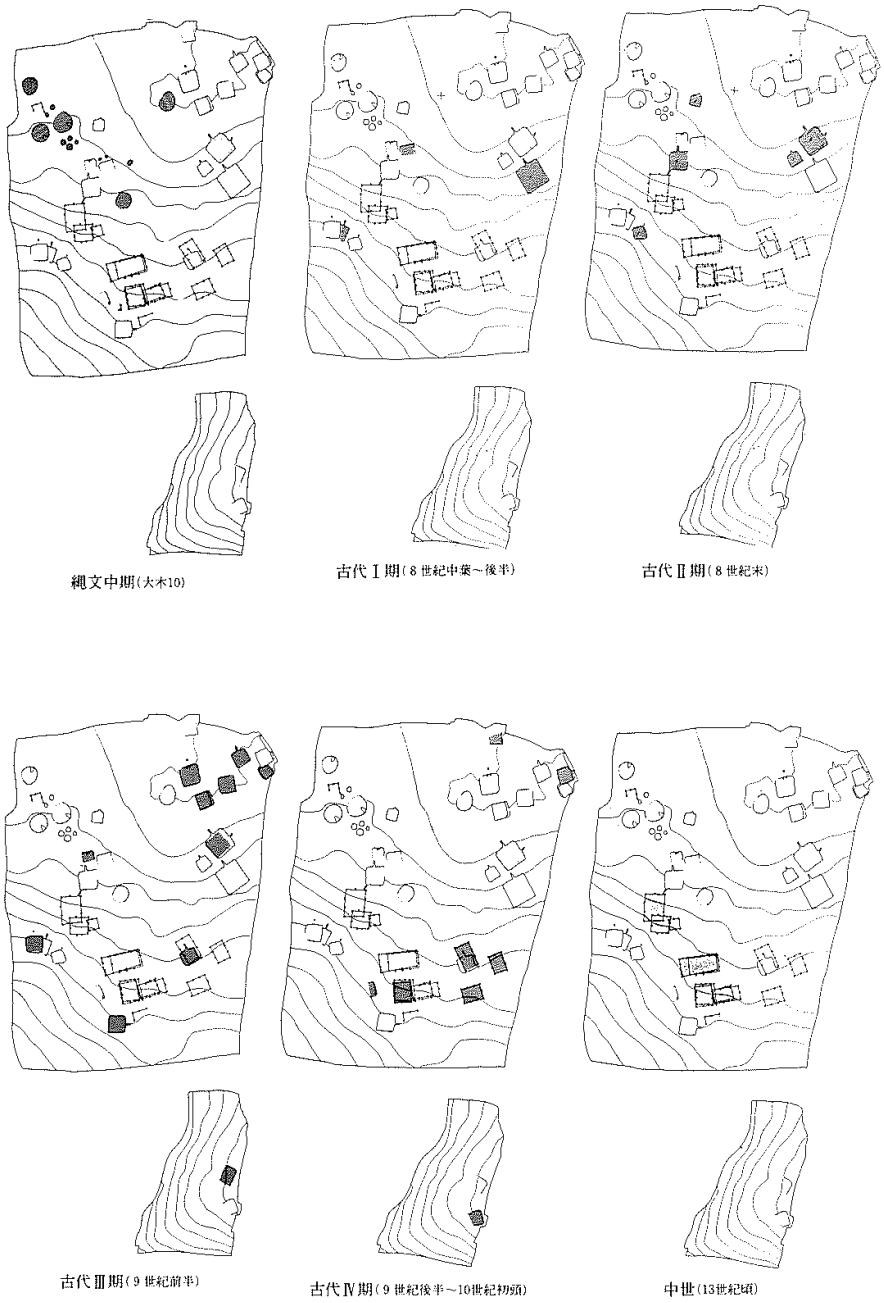
また、出土遺物も各古墳間には相違がみられ、これらが一時期に作られたものではないことを示している。また、この丘陵上の北方200mの地点には円墳3基からなる7世紀の川袋古墳群があり、さらに調査区に隣接する所にも古墳が1基見つかっていることから、当時の集落や生活の場の所在は確認されなかったがこの丘陵が長年にわたり墓域とされていたと考えられる。

○奈良～平安時代

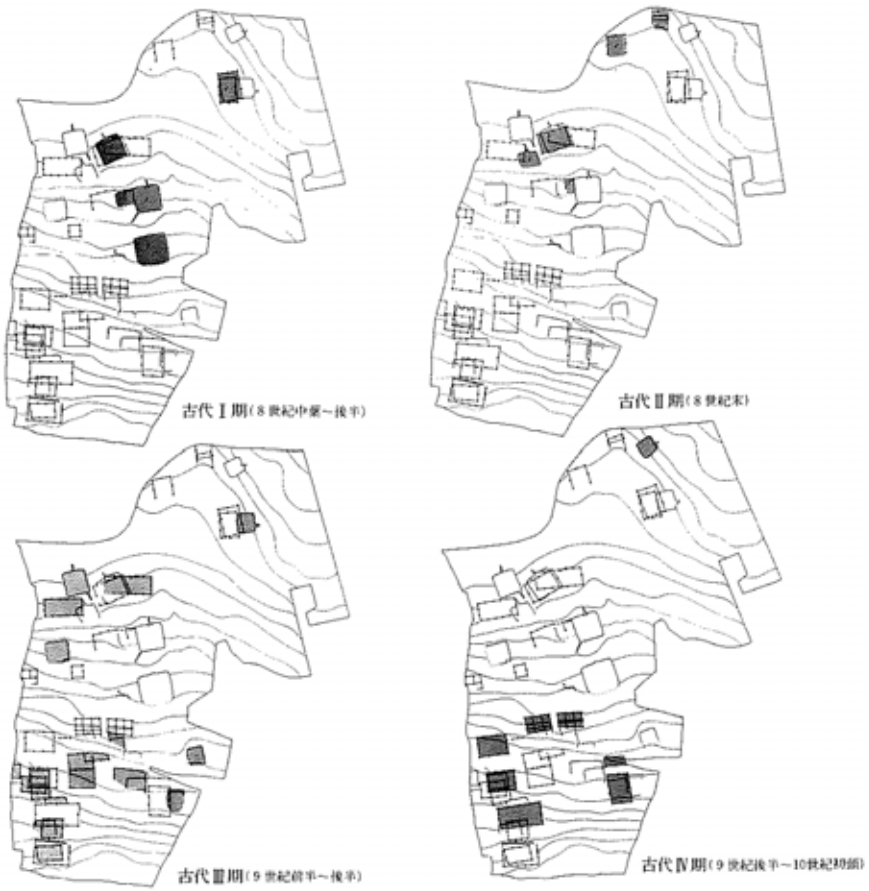
この時代は郷楽遺跡の主体をなす遺構群が形成された時期で、住居跡や掘立柱建物跡が連綿築かられていたと考えられる。

この時代の遺構の分布の特徴は、県道北側の第1号古墳の位置する西にのびる張り出しの南斜面から県道を隔てた縄文時代中期の遺構がある張り出しにかけてのみ遺構がみられるということで、古墳の立地する丘陵の頂部や尾根上からは住居跡や掘立柱建物跡のような生活にかかわる遺構は検出されず、また遺物の分布もほとんど認められなかった。

また、前時代の所産である古墳についてみると、これらの古墳はいずれも周溝底面直上に10世紀前半に降下した灰白色火山脈が厚く堆積していることから、この時代にはまだ墳丘が崩壊せずに残存しており、しかも4号古墳の墓道付近からは奈良時代に墓前供養が行われたとたと考えられる痕跡も認められていることから、当時の人々は古墳の存在する一帯を特別な場所と



第145図　遺構の変遷(1)県道南側



第146図　遺構の変遷(2)県道北側

してとらえ、この地域を外して集落を構成していたと考える。

次に、古代の集落がどのような変遷をたどって、またどのような性格を持つのか、年代ごとにいくつかの段階に分けて検討していくこととする。

①第Ⅰ期(8世紀中葉～後半)

第Ⅰ期の遺構は、県道北側区で竪穴住居跡3軒と掘立柱建物跡4棟が斜面の比較的高い部分から、県道南側では竪穴住居跡4軒が調査区の中央部から検出されており、竪穴住居と掘立柱建物とが組み合った形で集落が形成されている。

この中で、11住・13住・107住から拡張や立て替えの形跡が認められるが、拡張前と拡張後の遺物には差異がほとんど認められないことから、これらの住居は基本的な配置を変えないま

ま比較的短い間に立て替えられたものと考えられる。
いたと考えられる。
　次に、集落の性格について若干ふれてみる。
この時期の集落の特徴は、住居の建材として多賀城期の造営や陸奥国分寺創建の瓦が使用されている点や、出土土器の中には多賀城に給されていたと考えられる硯沢窯で焼かれた須恵器が数多くみられること、鉄製品が豊富なことである。しかも、瓦は土器の年代観からして台原丘陵で焼成されたものが直接運び込まれたものと考えられ、さらに107住からは馬具の他に刀子、鉄鏃なども比較的多く出土しており、これらを出土する住居は一般庶民の集落と考えるより、多賀城などに深いかかわりをもつ人々の集落であった可能性がある。

②第II期（8世紀末）

　この時期の遺構は、県道北側区からは竪穴住居跡1軒と掘立柱建物跡2棟が、県道南側では竪穴住居跡5軒が検出されている。
　これらの中で掘立柱建物と竪穴住居についての関係をみると、Ｉ期の住居である13住は堆積土の状況から人為的に埋められ、同位置に面積も同程度の23建に立て替えられている。
　また、11住についても26建に並て替えられており、このような立て替えは集落を構成する住居の竪穴住居から掘立柱建物への変遷としてとらえることができる。一方、101住や105Ａ住、106住はI期の103住・107住の隣接する位置に新たに建てられたもので、住居形態の変遷も一元的なものではなかったと考えられる。

③第III期(9世紀前半～後半)

　この時期はもっとも遺構の増加する時で、県道北側区からは竪穴住居跡9軒と掘立柱建物跡10棟が、県道南側では竪穴住居跡11軒が検出されている。
　これらの中で掘立柱建物の数は第　期と比べると増加傾向にあり、25建は9住と同位置に建てられ、24建についても23建をより大きな規模に立て替えたものである。また、竪穴住居についても10住・102住・110住・113住・125住は壁柱をもち壁の立つ掘立柱建物に近い構造であったこともあわせれば、集落を構成する住居が竪穴住居から掘立柱建物への推移がさらに進んだものと考えられる。
　次に性格について周辺の遺跡と比較して検討してみる。
　多賀城周辺の遺跡における集落形成の起源についてみれば、多賀城外郭南側に隣接する館前地区では8世紀前半から後半にかけては耕作地として利用されていた地域が、9世紀前半になると掘立柱建物による住居空間となっており、同じく南側に隣接する水入地区においても、地盤

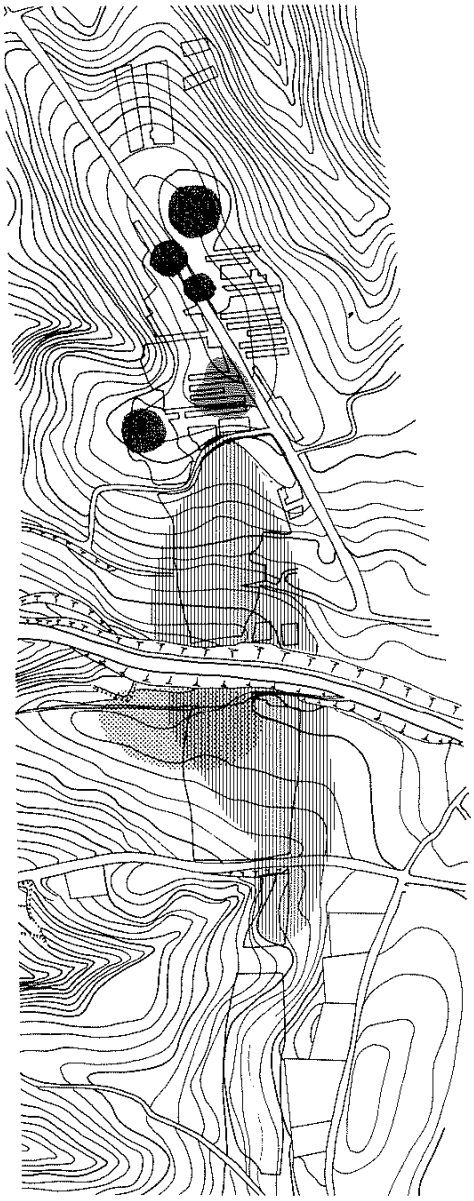
を整地改良して掘立柱建物を建て始めるようになるのも9世紀前半になってからである。さらに、多賀城廃寺北側の浦川橋遺跡高平地区や山王遺跡西町浦地区、新田遺跡南寿福寺地区でも竪穴住居や掘立柱建物の建築が認められるようになるのは9世紀初頭から前半にかけてである。一方、新田遺跡寿福寺地区や後地区では前述した遺跡より若干古い8世紀末から集落の形成が認められる。

また、多賀城城内においても、検出される竪穴住居はⅠ～Ⅱ期のものは稀でⅢ期以降のものが主体を占めていることが知られている。

このように多賀城周辺地区では、集落の形成が8世紀末以降9世紀前半にかけて急速に進展していったことがわかる。この時期はちょうど多賀城政庁のⅡ期からⅢ期への移行期にあたり、Ⅲ期の政庁の造営が行われていた頃と考えれば、これらの集落の住民も造営に何らかの係わりをもつ人々であったと思われる。郷楽遺跡における集落の拡大もこれらの遺跡の動向と一連のものであると考えられる。

④第Ⅳ期(9世紀後半～10世紀初頭)

この時期の遺構は、県道北側区からは竪穴住居1軒と掘立柱建物跡9棟が、県道南側区では竪住居跡4軒と掘立柱建物跡4棟が検出されている。



縄文時代早期末
縄文時代中期
古　墳
古代(奈良～平安)
弥生時代の住居

第147図　郷楽遺跡の変遷

これらの分布をみると、北区ではI期、II期においては調査区のほぼ全域に分散していた住居が丘陵の低い部分に収束してくる傾向がみられ、特に掘立柱建物については2間×3間の総住の建物を上辺として「コ字状」に配置されている。

掘立柱建物は8～10建→11建、14建→7建、15建→16、17建というように規模の小さな建物群から規模の大きな建物群へ移行する傾向がみられ、また前期には認められなかった総柱の建物も出現してきており、用途の多様化が進んだものと考えられる。

集落内の遺構の構成はⅠ期、II期と比べて掘立柱建物の占める割合がさらに高まり、掘立柱建物が集落の主流を占めるようになる。このように掘立柱建物が主体を占める遺構群については官衛的な色彩を指摘する声もあるが、建物全体を区画する塀跡や溝跡などの施設が認められないことや建物の方向に規制がないこと(多くの建物は傾斜に合わせて建てられている)さらに円面硯などの出土が少ないことをみれば、一般の集落と考えたほうが妥当であろう。

同様に竪穴住居から掘立柱建物への変遷を示す遺跡には市川橋遺跡高平地区があり、9世紀後半までは存在していた竪穴住居は10世紀段階では姿を消し、すべて掘立柱建物にうつり変わっており、この時代に住居の形態の変遷がさらに進んだものと考えられる。

また、遺跡内からは10世紀中葉～12世紀にかけての遺構は認められず、集落はこの時代で途絶えたものと考えられる。

○中世(13世紀頃)

この時代の遺構には県道南地区の掘立柱建物跡8棟がある。

しかし、これらの遺構間には106建→105建、107建→113建のように新旧関係のあるものや108～110建のように重複の見られるものもあり、同時期に存在した建物は2～3棟であったと考えられる。これらの建物群の性格について考えれば、建物の分布が30m四方の狭い範囲に限定されることから、集落と考えるよりも屋敷跡であった可能性が高い。

また、建物の構成が長軸が10mを越す105建や一辺4m以下の110建などが混在している様子は、母屋と付属の施設というように建物の性格の違いによるものと考えられ、屋敷であることの1つの要素として捉えることができよう。